聖ムハンマド
その普遍的教え

Vol.1

イブラーヒム・サルチャム
Prof. Dr. İbrahim SARIÇAM

Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

聖ムハンマド
その普遍的教え

Vol.1

イブラーヒム・サルチャム
Prof. Dr. İbrahim SARIÇAM

上のカリグラフィはアラビア語でアル・アミーン（信頼すべき人）と書かれています。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、預言者になる前からアル・アミーンと呼ばれていました。

聖ムハンマド　その普遍的教え

◆――目次

預言者としての活動を始める以前のムハンマド（彼の上に平安あれ）……58

預言者としてのマッカ時代……84

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）、最後の日々とその死……274

前書き

この作品を書くにあたっての意図は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の人物像をその生き方と共に正しく紹介し、読者の理解の一助としてもらうことにある。すなわち生涯にわたる彼の活動を余すところなく解き明かすことである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を正しく、十分に理解することの重要性は言うまでもない。なぜなら彼の生き方とは、イスラームの規範やその重要な事柄が実践され、具現化されたものに他ならないからである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）を正しく知ることは、正しい形で模範とすることにつながるように、誤って理解することはイスラームの教えをゆがめることにつながる。イスラームが意図するところは、預言者を正しく理解し、正しい模範とすることによって実現されるであろう。さらに預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、常にクルアーンの精神に適う振舞いをしたがゆえに、彼を理解することはクルアーンを理解する助けにもなるであろう。人はいつの時代でも、どこの場所であっても、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が伝えた神のメッセージとそれを人生において実践した模範を、すなわちその道を示す人を必要としているのだ、ということもここで明らかにしておきたい。なぜならこのメッセージは、人々が生命や財産、そして名誉や安全を守るといったことをはじめとして、社会における様々な重要なテーマを包括しているからである。

この作品を書くにあたって参考にした文献や用いた手法について、大まかではあるがここでまず紹介しておきたい。参考文献の最大なるものはクルアーンである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生き方はクルアーンを抜きにして語ることはできない。そこには預言者の時代の戦いや協定、ユダヤ教徒やキリスト教徒、偽信徒や遊牧民との関係、ヒジュラ（聖遷）、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生涯、妻たちのこと、人間性、預言者としての資質などに関する多くの知識が含まれている。だから参考文献の第一にクルアーンを挙げるのである。ワーキディーやイブン・ヒシャームのようなかつて預言者伝を著した学者たちも、その点について忘れることはなく、その書物にお

いて多くの出来事をクルアーンから引用している。一つのテーマについて触れるときには、それに関連するクルアーンの章句、あるいは節を数多く引用した。それらの多くは直訳ではなく、そこにこめられている意味を記すように努めた。二番目の参考文献は何冊かのハディース（預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の言行録）である。これらの書では預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生き方や人柄が様々な角度から取り上げられており、そこには一般的な歴史書では触れられていない多くの事実が述べられている。ここで述べておきたいのはハディースを引用する際にも、直訳ではなく、そこにこめられている意味の方を取り上げたことである。

クルアーンとハディース以外にも、各種の歴史書を主たる参考文献とした。ムーサー・ビン・ウクバーの作品を参考文献とし、そこから多く引用しているイブン・アブディルベルやイブン・セイッディンナース、そして出来事を完全な形で描写するマクリージーのような後の世代の作家たちの預言者伝も参考とした。これらの諸文献も貴重なものである。なぜならムーサー・ビン・ウクバーの書は、ここに名前を上げた文筆家たちによって多く引用されているが、のちにその所在が不明となったからである。

さらには、古典的な文献に見られる知識を現在に反映させるため、アリ・イゼットベゴヴィッチやジャービリーのような近代の著名な思想家たちからも多くを学んだ。また近年、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生涯、さらにはその生き方や人間性にまつわる様々な貴重な研究が行われていることもここに付記しておきたい。その代表的なものとしてトルコ宗務庁主催の「聖誕祭シンポジウム」や「永遠なるみ使いシンポジウム」を挙げることができる。さらに、メヴラーナ・シブリやムハンマド・ハミドゥッラーのような熱心な学識者の作品や、異なる見解を反映させるために西洋文学における預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）という視点からの研究も忘れずに取り入れた。またこれらの作品を紹介する際には、必要に応じてその研究に関する解説を注釈として加えた。さらに、いくつかのテーマについては、近年の作家たちの見方も紹介した。また、ここで論争を繰り広げようとの意図はなく、政治的な観点から書かれた作品の中に、私たちから見れば誤りがあっても、それに反論しようとは思っていない。

参考文献についての解説に続いて、この作品の制作上、私たちが用いた手法についてもいくつかの解説を加えたい。私たちの目的は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生涯や活動、そして模範とされるべき人としての特性を明らかにすることである。さらに、クルアーン、ハディースの各巻、そして初期のイスラームの歴史書に見られる預言者の行動と、後世、時間を経た中で人々から支持を得た書物、特に文学的作品における預言者の理解との間には明確な違いがある。後者の例として、アフマド・ムルシド・エフェンディによる『アフマディーヤ』という作品、そしてムハンマド・ビージャンによる『ムハンマディーヤ』という作品などは、人々の預言者に対する愛情を増幅させるという肯定的な側面から語られることが少なくない。しかし、これらの作品やこの種の書物においては、捏造されたハディースの書物にすら存在しない、預言者の真のスンナ（言行）と完全に矛盾する多くの伝承が見受けられる。捏造されたハディースや、それぞれの時代の文化を反映させた文学的な表現が、実生活において模範とされるべきでないことは言うまでもない。ただ、これらの伝承のいくつかは初期の文献においても見られるものであるということも付記しておきたい。

文献の中には、時に預言者にその人間性を超越した特性を与え、彼の性格や生涯を超人的な特質で飾ろうとする伝承がある。これらの伝承は預言者を知るという点から適切ではない上に、歴史の真実との不一致、伝承への忠実さに欠けるという点においても適当とはいえない。私たちの研究では、クルアーンに見られる預言者の生き方や態度の特質を一つの全体像とし、これらに矛盾する伝承は用いないこととした。

捏造された伝承についても、できるだけ正しく言及するように努めた。まず、一般的に承認され、正しいものと見なされている伝承に依拠した。読者が文献を容易に知ることができるよう、参考とした部分については注釈を付け参考文献を示した。注釈には、二十、三十の参考文献を載せることも可能であるが、この私たちの研究を大量の注釈という形で終らせないため、テーマに関連する初期の二、三の文献、あるいは一人、二人の研究者の名前を載せることでよしとした。さらに、私たちが用いたすべての文献を文献目録として記した。さらに、伝承や出来事に関し必要に応じ

て行った分析を逐一記載することは、本書の分量をいたずらに増し読者を疲れさせるだけなので、いくつか選択した事項のみを記すことで十分とした。言い換えるなら、学問的な論争を避け、見解の一致していない件については触れずにおいた。もしこれらの論争についても言及していたら、この作品は二倍の分量になったはずである。

私たちの研究においては、すべての出来事を現在にあてはめる努力は行わなかった。そもそもそれは不可能なことである。ただ、今日の問題として捉えることができるものに関しては、現在と比較したものもある。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の活動については、その一部が語られなかった場合、全体像がわからなくなる恐れがあったため、できるだけ預言者の生涯と活動の全体像を示すべく努力した。そのため、預言者の時代における条件のもと、起きた出来事や歴史上意味のあることも記した。たとえば歴史上の出来事である戦いであっても、その出来事を分析することによって普遍的な法則を見出すことが可能となる。さらに、読者がその戦いについて読むときには、預言者を身近な存在として感じることができるであろう。

本書においては、たとえば「自然現象と自然災害」、「迷信」といったことも、現代の状況にも注意を促すものとなっている。読者は、現在において肯定的、もしくは否定的な形で発展している事柄について、預言者が示し、従うよう教えた重要性と比較することもできる。本書において、あらゆる場面でこうした比較を行っているわけではない。読者の方々が自然な形で比較していくのがより適当だろうとの考えから、示された重要性のみを記すことで十分とした。

私たちが注意を払ったもう一つの点は、預言者の戦争にまつわること以外の活動に関しても材料の揃う限り言及したことである。言い換えるなら、預言者の生涯とその活動を記す本書においては、戦役以外の活動についても触れる必要がある。そうでなければ読者は、預言者について、「ただ五、六回の戦いをするためだけに送られてきた」といった誤った考えを抱きかねないからである。私たちの計算によるなら、預言者が戦いで過ごした期間は、フダイビーヤ遠征と最後の巡礼を除くと合計してもわずか一年を少し超えるに過ぎない。さらには、実際に戦闘が起こった戦役の数は、すべての戦役の三分の一に過ぎない。つまり、預言者がその生涯において、戦役に従事したのはほんのわずか

な月日に過ぎないのである。戦いが行われた戦役に費やされた時間は、預言者としての活動期間、すなわち二十三年間のわずか二パーセントを占めているだけで、マディーナ時代すべてを計算に入れても、それは四パーセントに過ぎない。このことからも、預言者の生涯は決して戦いに明け暮れたものではなく、困難な時代においても多くの模範となる行動を示していたことを明らかにする必要がある。

では戦役に従事したこと以外に、預言者は何をしていたのか。彼の戦役以外の活動については、その公正で平和を愛し、自然を大切にする人柄を明らかにしていく必要がある。私たちは資料を誇張したり、こじつけたりすることなく、彼の戦役以外の活動について正しくこの本に著した。そのことは私たちが初めて行ったと主張するものではない。様々な研究はさておき、最も古い作家の一人であるイブン・サアドは、預言者がヒジュラ（聖遷）の後、最初の活動を終え戦役に入る前に、様々なところへイスラームを伝えるために使者や手紙を送ったこと、マディーナを訪れたいくつもの団体のことについて詳しく述べている。この作家がこの件について述べた事項は、彼の作品において大きな部分を占めている。同様の内容は後世の作家シャーミーの作品においても見ることができる。私たちもその重要性に留意し、預言者のマッカ時代における布教活動や、その生涯を通じての布教者としての人柄にふれるとともに、マディーナ時代における「イスラームの布教活動」についても特別な項目を設けた。そこでは彼の手紙や訪れてきた人々に対して、彼がどうように振舞ったのかが述べられている。

本書は、項目を伝統的な形で「生涯」「人柄」といったように分けるのではなく、お互いにつながりのある項目を順番を追って並べた。ヒジュラまでの時代に関しては、年代記という形で書くのがふさわしいと判断し、そうした形式を採用した。ただマディーナ時代に関しては、項目を体系的に並べた。内容的に年代記として記すのがふさわしい項目、すなわち「預言者と多神教徒」「預言者とキリスト教徒」といった項目に関しては年代記として記した。また項目間の結びつき、自然な流れも大切にし、常に明快で滑らかな文体を心がけた。地理は、歴史の理解を助ける学問の一分野である。研究者の中には地理に基づかない歴史は小説に過ぎないという人々もいる。預言者の生涯、クルアーン、

スンナ（預言者の言行）を理解するためには、彼が生き、活動を行った場所をよく理解することも必要である。たとえばクルアーンには、「預言者の妻たちから何かを求める場合は、覆いの後ろから求めなさい」という記述がある。ここでの覆いとは、預言者の妻たちの部屋の入り口に、扉のかわりに張られていた覆いのことを指している。なぜならこれらの部屋には木製の扉はなく、入り口を覆っていたのはキリムや布製の覆いであったからである。「覆いの後ろから」とは、一つの部屋だけで構成されるプライベートな空間の入り口を開けてはならないことをいい、クルアーンではそのように命じているのである。したがって預言者の妻たちが誰かと会うときには間に覆いを置かなければならない、ということを意味するのではない。だから、預言者が生きた時代の社会的状況をよく知ることが大切なのである。私たちの作品ではテーマがよりよく理解されるよう、その地方を紹介する写真、地図、図などの資料をできる限り用いた。地図の多くはフセイン・ムニスの「イスラーム歴史地図」という作品から転用した。

私たちは預言者の活動、言葉、行動を追跡していく形で記述した。彼の行動を反映している資料に重きを置いた。私たちの目標とするところは、預言者の人柄、その周囲で行われた活動、模範となる振舞いを、今日の世代に最良の形で伝え、それによってイスラームを正しく説き伝えることにある。もちろん本書に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のすべてを記述し尽くしたと主張するものではないが、わが国における預言者に関する研究に、わずかでも貢献できれば幸いである。本書を準備する段階において貴重な助言を下さった先生方、同僚の皆さん、マッカやその周辺の歴史的な場所を把握する上で助けとなってくれたネジャーティ・オズトゥルク博士、そして、その他多くの親友たちに感謝したい。

イブラーヒム・サルチャム教授　Prof. Dr. İbrahim SARIÇAM
アンカラ　２００２

ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者として遣わされた当時の社会状況

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生涯、その人柄、様々な活動を紹介していく前に、彼が生まれ育ち、預言者としての任務が与えられ、イスラームの布教活動を行った地域の地理的、民族的、社会的、文化的、経済的、宗教的状況を明らかにしておく必要がある。この章を書くにあたっては、何よりムハンマド（彼の上に平安あれ）の預言者としての活動をよりよく理解してもらうことに最大の目標を置いた。たとえば、当時のアラビア半島の政治的状況に触れる際は、預言者が活動を行った地域の政治状況を明らかにすることを目指した。

一　地理的状況

アラビア半島、特にヒジャーズ地方は、預言者が生まれ、そして亡くなった場所として、イスラームの歴史において非常に重要な位置を占めている。アラビア半島は、アジア、アフリカ、ヨーロッパが交わる重要な場所にある。東にはバスラ湾、オマーン湾、南にはインド洋、西には紅海がある。南はバーブ・アル＝マンデブ海峡でアフリカと切り離されているが、北はスエズ運河でアフリカ大陸とつながっている。

アラビア半島の西部には、紅海沿岸から幅八十～百キロメートルに及ぶティハーメ平原と呼ばれる一帯がある。ヒジャーズ地方は、ティハーメ平原の西に位置する。ヒジャーズは、シャムからナジュランに至る山脈をところどころで横切る峡谷からなる。マッカ、マディーナ、そしてターイフがヒジャーズの主要都市である。ヒジャーズの東、アラビア半島の中央部分にはナジド台地がある。ナジドの南西にはヤマーマがある。ナジド台地は、北、東、南を砂漠

に囲まれている。ヒジャーズとアラビア半島西部の南側にイエメンがある。イエメンの北部にはナジュラン、中部にはサヌア、南部にはタイズという高原がある。イエメンの東部には山と峡谷からなるハドゥラマウトと呼ばれる地域がある。アラビア半島の最も東部に位置するのがオマーンである。オマーンの北西部にあり、イラクと国境を接する地域はバーレーン、もしくはハッジェルと呼ばれる。半島の北部にはネフード、南部にはルブ・アル＝ハーリーと呼ばれる砂漠がある。この二つの大きな砂漠を結ぶ、帯状の砂漠はダフハーと呼ばれる。

アラビア半島がアジア大陸とつながる北部では、国境を形成する地理的なものは特に存在しない。そのため北方の境界線に関してはいくつか異論がある。シリアとイラクの地域もアラビア半島と見なす人もいる。シリアとイラクは、地理学的にはアラビア半島には含まれないとされているが、民族学的には含まれると見なされる。なぜならイスラームがもたらされる以前にも、この地域にはアラブ人が住んでいたからである。イスラームがもたらされた頃、この地域にはアラブ人によって興された国々があり、多くのアラブ系の部族が住んでいた。預言者の時代と正統四カリフの時代、イスラーム教徒とこの地域の住民の間には親密な交流があった。

イスラームがもたらされる直前のアラビア半島でよく知られていた都市は、マッカ、ターイフ、ヤスリブ、ヤンブー、ジュレシュ、サヌア、ヒジュル、ハイバル、ダバー、ドゥーマ・アル＝ジャンダル、ファダクバーディルクラー、そしてマクナーなどであった。[1]

二　政治的状況

イスラーム以前のアラビア半島に特定の政治制度が存在していたとは認識されていない。半島全体を支配する中央集権政府のようなものも存在していなかった。ただ、半島の北東部にはヒーレ、北西部にはガッサーン、南部イエメンにはサバアとヒムヤールといった国が存在していた。その他の地域には、各部族が独立を保ちながら割拠していた。

ヒムヤール王国は、その最後の時期、マッカと緊密な関係があったため、イエメンで興された国々についてはのちに述べることとし、ここでは北アラビアで興された国々について述べていきたい。

a　北アラビア

ナバーティー　ナバーティー王国は紀元前五世紀ごろから西暦一〇六年まで、パレスティナの北部、アカバ湾からルート湖の間のエドム地域において栄えた。王国の中心は、初期においてはペトラに存在していた。この場所は現在でもその遺跡によって知られている。その後フラト川と紅海の間の広い地域に広まったナバーティー族は、北ヒジャーズまで支配下においた。多神教徒であったナバーティー族は、ローマ帝国と砂漠の間の緩衝の役割を果たしていた。同時に、彼らはアラビア半島の北部と南部の間でキャラバン交易を行い、富を増やしていった。ローマ帝国とナバーティー族の間には様々な政治的・経済的要因により、西暦一世紀半ばから衝突が起こっていた。結局、皇帝トライアヌス（在位西暦九八〜一一七年）が、西暦一〇六年、ナバーティー王国に終焉をもたらした。しかしローマ人たちは、アカバ湾より南下することはできなかった。そのため、ヒジャーズの北部には小規模なナバーティー王国の残党の領土がしばらくの間存続していた。ナバーティー族の商人たちはヤスリブにも定住していた。さらには、預言者の時代のマディーナでナバーティー族の市場があったことが知られている。[2]

テドゥムル　いつごろできた国なのか定かではない。ただ、紀元前一世紀頃には存在していたと見られている。テドゥムル王国は、特にナバーティー王国の滅亡によって発展を遂げた。王国の中枢であるテドゥムルの町は、シャムの二百六十キロ北東、フラト川の百四十キロ西に位置した。テドゥムル族は時としてローマの攻撃にさらされた。時には彼らと共にササン朝を攻撃することもあったが、最後にはローマ帝国によって滅ぼされた。ローマ皇帝オルレインは、西暦二七三年、テドゥムルの市街地に入り略奪を行い、多くの民衆を殺害した。テドゥムル族はこの事件の後、復興することができず、領土内の商業も衰退した。その後キリスト教が勢力を広げ、イスラーム教徒によって制圧さ

れるまで三百年以上、同地域はローマ帝国の支配下にあった。皇帝ユスティニアヌス（在位西暦五二七～五六五年）はこの地をアラブ人に対する防御とし、城壁と教会を造らせた。テドゥムル族は西暦六三四年、イスラーム軍の司令官ハーリド・ビン・ワリードに降伏した。[3]

ガッサーン　三世紀後半からテドゥムル王国が衰退していくとともに、北アラビアでは二つの王国が力を持ち始めた。その二つの王国とは、マアリブ・ダムの崩壊によって南から北へと移動したアラブ人たちによってつくられた、ガッサーン王国とヒーレ王国である。ガッサーニー族はローマ帝国の属国としてシリアを、ヒーレ族はササン朝の属国としてイラクを支配した。その統治はイスラームの登場まで存続した。

西暦二〇〇年から六三六年にかけて存続したガッサーニー族は、三世紀初頭、シリアの近くのガッサーン川沿岸に移り住んだ。住み着いた場所にちなんで、彼らはガッサーニー族と呼ばれた。その長がジャフネであったことから、その子孫たちはアール・ジャフネと呼ばれた。ガッサーニー族はのちにこの地を支配し、その後ローマ人の影響により、キリスト教を受け入れ、ビザンチン文化の影響も受けた。彼らはイスラームが登場するまで、ビザンチン帝国に従属していた。ビザンチン帝国にとって、ローマの南の境界をベドウィンやササン朝から守る上で、ガッサーニー族が助けとなっていた。ガッサーニー族はヒーレ族としばしば戦った。

西暦六一三年から六一四年にかけてシリアとパレスティナがイラン皇帝ホスロー・パルヴィーズに制圧されると同時に、ガッサーニー族はその力を失っていったとみられている。ビザンチン帝国が六二八年にイランを制圧し、シリアやその周辺を再度獲得した後、ガッサーニー族は急速にその影響力を失っていった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代には、ガッサーニー族は政治的な統一を失っていたとされている。預言者がガッサーニー族の長の一人ハーリス・ビン・アブー・シャミルに、イスラームへと呼びかける手紙を送ったことも知られている。さらに預言者は、六二九年、ハーリス・ビン・ウマイリをブスラ族の長への使者として遣わしている。ハーリスがガッサーニー族の長の一人シュラフビル・ビン・アムルによってムータで殺害されると、ムータへの出陣の準備が整えられた。

ガッサーニー族も来たるべき攻撃に備えタブークの戦いを計画した。ガッサーニー族の最後の王はジャバラ・ビン・アイハムである。彼はヤルムークの戦い（六三六年）において、皇帝ヘラクレイオスによって、ビザンチン軍の中の一万二千人のキリスト教徒のアラブ人の司令官として任命されていた。そしてイスラーム教徒と戦った。ヤルムークの戦いでビザンチン軍が敗れたことが、ガッサーニー族に終焉の時をもたらした。ジャバラ・ビン・アイハムはヤムルークで敗北を喫した後、その一族と共に故郷に戻り、キリスト教徒として死んだとも、ウマルのもとを訪れイスラームを受け入れ、その後また改宗しビザンチン領内へ去ったともいわれている。[4]

ヒーレ　クーファのおよそ五キロ南の地点にある首都ヒーレにちなんで、彼らをヒーレ族と呼ぶ。また、彼らは三世紀に南方から移ってきたラフム族に属するため、その名で呼ばれることもある。ササン朝に従属していたヒーレ族は、この王国を遊牧アラブ人の攻撃から守り、ビザンチンに従属していたガッサーニー族としばしば戦った。ヒーレ王国の有名な王の一人ヌーマン・ビン・ムンズィル（在位五八六〜六一三年）は、ササン朝によって投獄され獄死している。ヒーレ王国はその後、ササン朝の中央政府に従属した。国の長にタグリブ族からイヤース・ビン・カビーサ、それに並んで司令官としてイラン人の役人が任命された。その状況に怒りを感じたバキル・ビン・ヴァイルとその一族は、ササン朝とその同盟者であるヒーレ族に対し、有名なズー・カールの戦いを起こした。その戦いではササン朝が敗北している。こののちも、ヒーレはササン朝の属国であり続けた。

歴史家たちは、ヒーレの最後の王はムンズィル・ビン・ヌーマンだと指摘している。ムンズィルの支配は、ハーリド・ビン・ワリードによるイラン征服まで続いた。ヒーレの町は六三三年、ハーリド・ビン・ワリードへ戦いの賠償金を支払い降伏した。そのとき交わされた条約で、彼らの命や財産は保護され宗教も守ることができると認められていた。

マッカに住むクライシュ族は、ヒーレ族と交易上の結びつきがあった。たとえば、マルヴァンの父ハカム・ビン・アブール・アスウは、ヒーレから香料を運んできて売っていたこと、ウマルも改宗以前にはヒーレ族のカアブ・ビン・アディーと共に交易を行っていたことなどが知られている。アラビア半島においては、文字はアンバルからヒーレへともたら

され、その後半島の各地へと広められ、マッカにも同じルートで文字が伝えられたとされている。

ヒーレ族の間には、偶像崇拝、ネストリウス派キリスト教、ユダヤ教、マニ教、マズダク教などが広まっていた。本来ヒーレ族は多神教徒であり、マズダク教を信じる人々はその中で孤立していた。そこにキリスト教が入ってきたのである。ヒーレの王がいつ頃キリスト教を受け入れたかについては諸説ある。この地は四世紀初めにはカトリックの中心的存在であった。また四世紀半ばには、ネストリウス派のキリスト教の集団が存在した。六世紀、その地を統治していたアムル・ビン・ヒンドの母は、ガッサーニー族のキリスト教徒の王女であり、その地に修道院を造らせた。六世紀後半にかけて、ヌーマン・ビン・ムンズィルは公式にキリスト教を受け入れた。それゆえ彼はササン朝によって投獄されたのである。[5]

b　南アラビア

ヒムヤール以前のイエメン　イエメンは、紀元前一四〇〇年から六五〇年頃にかけてマイーン族によって統治されていた。マイーン王国の中心は、サヌアの東にその遺跡が残っているマイーンの町である。マーイン族は商業に重きを置いていた。彼らはインドや中国から来た品物をエジプトやパレスティナ、シリアへと運び大きな利益を得ていた。[6]

イエメンでは、マイーン王国の後、サバ王国が興った。サバの首都は当初はシルヴァーであったが、のちにサヌアから四〇キロ東方のマアリブに移った。農業と商業に従事していたサバ族はダムの建設も行った。マアリブ・ダムは有名である。紀元前七五〇年から一一五年にかけてイエメンを支配していたサバ王国はヒムヤールによって滅亡した。[7]

ヒムヤール　カフターニ系のアラブ人であるヒムヤール族は、当初、のちにザファールという名で知られるライダーンに住んでいた。その後、サバ族に対し勝利をおさめ、彼らの土地も支配するようになった。程無く、ハドゥラマウトも獲得した。マイーン族やサバ族とは異なり、戦闘的民族であったヒムヤール族は、イランやエチオピアとも戦った。ヒムヤールの王の中には、「力を持つ、強い」という意味を持つ「トゥッバ」の称号を与えられている者たちがい

た。ヒムヤール王国は紀元前一一五年から西暦五二五年まで続いた。

ヒムヤール族は、四世紀の半ば頃、エチオピアの支配を認めざるを得ないという状況にあった。しかし三七四年には再び独立した。当時、この地方ではユダヤ教とキリスト教が競い合っていた。キリスト教はこの地域へ、エチオピアが一時的に支配権を確立していた時代にもたらされた。ローマ帝国が三九五年に分裂すると、東ローマ帝国（ビザンチン）は政治上や商業上の影響力を強める目的で、アラビア半島にキリスト教を広めようとしていた。このためアデンやナジュランに神父が派遣され、ナジュランには修道院も建設された。

ユダヤ教は、商人たちが北方へと行った旅行でユダヤ教徒と出会い、イエメンにもたらされた。ヒムヤールの王ズー・ヌワースはユダヤ教を受け入れ、ヨセフという名を与えられた。ズー・ヌワースは、国内のキリスト教徒がエチオピアのキリスト教徒と政治的に結びつこうとしていると見なし、彼らを王国への裏切り者とした。そしてナジュランの住民に、キリスト教からユダヤ教に改宗するよう迫った。それに従わない者を、火が焚かれている穴に落と

し焼き殺した。長たちを殺し財産を略奪した。聖書を燃やし教会を破壊した。火の穴に落とされた者は四千人もしくは二万人にも及んだとされている。この出来事はクルアーンの星座章で触れられていると見られている。もし、この章で言及されているのがこの出来事であるとするならば、火の穴に落とされ焼かれたキリスト教徒たちは、唯一神への信仰を持っていたことがわかる。この章で、彼らは「信徒」と呼ばれ、彼らが迫害されたのは「アッラーを彼らが信仰したために外ならない」と記されている[8]。イスラームが登場した頃には、ヒムヤールの王は、小さな領地の首長として存在していた[9]。

イエメンにおけるエチオピアの支配　ズー・ヌワースの残虐行為から逃れたある人物が、エチオピアの支配者のもとを訪ね、窮状を訴え救いを求めた。エチオピアの支配者はエルヤートという司令官のもと、よく知られているアブラハを含む七万人規模の軍隊をズー・ヌワースに送った。戦いの結果、ズー・ヌワースは敗れ、馬を海の中へと走らせ自ら命を絶った。あるいは、逃げようとして海で溺れ死んだとも言われている（西暦五二五年）。その死により、ヒムヤール王国は終焉を迎えた。そしてエルヤートはイエメンへと侵攻し、その地をエチオピアの属州としたのであった。このようにして、その後五十五年にわたるエチオピアのイエメン支配が始まったのである。イエメンの救済者として登場したエチオピア軍は、侵略者としてそこに居座った。また先に述べたとおり、ヒムヤールの王たちは小さな領土を持つ首長として、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代に至るまでその勢力を保っていた。

その後、エルヤートとアブラハの間に分裂が起こり、民衆の支援を得ていたアブラハは、エルヤートを殺害しイエメンの支配権を手に入れた（西暦五三七年）。エチオピアはイエメンに新たな内戦が勃発することのないよう、アブラハに書簡を送り、彼をイエメンの知事に任命した。アブラハはサヌアにクッライス神殿を造らせ、アラブ人たちにそこを訪問するように命じた。彼のこの行動はアラブ人の反感を買った。キナーナ族の一人の男がその神殿を訪れ、そこで排泄行為を行った。それに怒ったアブラハはカアバ聖殿を破壊するべく、象を先頭に自ら軍を率いてマッカへと向かった。そしてアル＝ムガンマスという地でアブラハとクライシュ族との会見が行われた。アブラハの騎兵たちは

マッカまで進み、クライシュやその他の部族の財産を略奪した。このとき、預言者の祖父であるアブドゥルムッタリブの二百頭のラクダも持ち去られた。クライシュ、フザイル、キナーナなどいくつかの部族は、一致団結してアブラハと戦うことを計画したが、力が及ばないとみて断念した。アブラハはアブドゥルムッタリブとの会見を要求した。彼はアブラハを訪ね、持ち去られたラクダを要求した。この態度にアブラハは驚いた。アブドゥルムッタリブはラクダの持ち主が自分であること、カアバにも守るべきものがあることを告げた。そしてアブラハのもとから立去り、カアバ聖殿に赴き、アッラーにドゥアー（祈り）を行った。

カアバ聖殿を破壊しないようにといった提案のすべてを拒否したアブラハは、軍に攻撃を命じた。しかし、軍の先頭にいた象たちがその場から動くことはなかった。アブラハ軍の大部分は、クルアーン[10]で述べられているように、アバービールという鳥の攻撃やその鳥の投げ落とす石によって壊滅状態となった。アブラハは一命をとりとめたものの重傷を負い、イエメンにたどり着いたのち死亡した（西暦五七一年）。

イエメンの一帯においては、キリスト教もユダヤ教も民衆によって受け入れられることはなかった。その結果、イスラームがもたらされたとき、人々の多くは多神教徒であった。部族によっては固有の偶像を崇拝する部族もいた。ただ、カアバは神聖な場所と見なされ、巡礼の季節には多くの人々が訪れていた。

イエメンにおけるササン朝の支配　アブラハの死後、その後を継いだ息子たちは民衆に圧制をしいた。そこでヒムヤールの王族のセイフ・ビン・ズーヤダンは、ササン朝のアヌーシルヴァーンに援助を求めた。アヌーシルヴァーンがヴァフリーズという司令官のもとに派遣した軍隊は、イエメンにおけるエチオピアの支配に終焉をもたらし、またセイフ・ビン・ズーヤダンがその政権を手にした。そのとき、アブドゥルムッタリブ・ビン・ハーシムを長とするクライシュ族の一団も、セイフ・ビン・ズーヤダンの勝利を祝賀するためマッカからイエメンを訪れている。ササン朝の軍が引き上げるとまもなく、セイフ・ビン・ズーヤダンはエチオピア人によって殺害された。それに対しアヌーシルヴァーンは司令官に命じて再度軍を派遣し、イエメンを完全にエチオピアの手から奪いササン朝の属州とした。サ

サン朝から派遣されたヴァフリーズは知事として、キスラ（王位）の代理人として税を徴収した。ヴァフリーズ以降、サヌアではマルズヴァーン、タイヌジャーン、フッラ・ホスロー、バーザーンといった人々が知事を務めた。このようにして、イエメンにおけるササン朝の支配は五十年ほど続いた。ササン朝の知事としては最後の人物であり、またイスラーム国家の初代の知事でもあるバーザーンは西暦六二九年にイスラームに入信し、その後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の知事の一人としてその地方を統治した。

イエメンの東部に位置するハドゥラマウトは、四世紀以降はヒムヤールの、のちにはイランの支配下にあった。イスラームが登場した頃には、部族長に率いられたいくつかの部族が同地域を支配していた。

C　ヒジャーズ地方

概説　イスラームの歴史上、アラビア半島における最も重要な地域は、ヒジャーズ地方であることに疑念の余地はない。なぜならイスラームの教えは、この地域の重要都市であるマッカで生まれ、マディーナで発展し広められたからである。この地域のもう一つ重要な都市はターイフである。そこで、ヒジャーズについて述べる際はマッカ、マディーナ、そしてターイフを中心に話を進めていきたい。

マッカは宗教と交易の中心であった。この地にあるカアバ聖殿は、イブラーヒーム（アブラハム）の時代からイスラームの誕生まで、宗教的中心であり続けた。さらに、イエメンから始まりアカバ湾に至る交易の道は、マッカやマディーナを経由して地中海とつながっていた。マッカの周辺では、毎年定められた時期に祭りや市が開かれていた。カアバが宗教的中心地であること、ヒジャーズがイエメンとシリアの交易ルートの途中にあったことは、この地域をさらに重要なものとしていた。

ヒジャーズ地方は南北アラビアとは異なり、ビザンチン帝国やササン朝のような強大な国家の、侵略を目的とした攻撃にさらされることはなかった。歴史を通していくつもの勢力がヒジャーズを支配しようとしたが、それらの多く

は成功しなかった。それには、この地が山がちで道が険しく、軍隊を派遣するのが困難であったという要因もある。ヒジャーズは経済的にも外の勢力が侵略してくるほどの豊かさを持っていなかった。この地を征服したときに得られる戦利品や税は、軍隊を派遣する費用にも満たないとみなされていた。しかし、イスラームがもたらされたとき、ヒジャーズとナジドはアラビア半島において最も重要な地位を占めることとなった。この二つの地域を除いた地域はいずれも外国勢力の支配下にあった。結果としてヒジャーズの人々は、何世代にもわたって独立を守り、言語や宗教においても外の影響を受けることなく自らの文化を守ってきていた。

マッカ（クライシュ族以前の統治）　マッカはイスラーム史においても、またイスラーム教徒にとっても、重要な意味を持っている。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの地で生まれ、成長し、そこで預言者としての使命を受け、預言者としての最初の十三年をここで過ごした。カアバ、マスジド・アル＝ハラーム、サファー、マルワといった聖地やイスラームにまつわる有名な土地はこの地に位置している。巡礼の行事が行われるアラファト、ムズダリファ、そしてミナーはマッカの周辺にある。イスラーム教徒はその礼拝を、カアバに向かって行う。イスラームの五つの義務の一つである巡礼は、まさにマッカに行くことによって果たされるのである。

マッカに最初に住んだのはアマーリカ族といわれる。その後、この地には南アラビアに起源を持つジュルフム族が定住した。ジュルフム族は預言者イブラーヒームの妻ハガルと息子イスマーイール（イシュマエル）と共にマッカの谷に来て、ここにカアバ聖殿を建設した。イスマーイールはこの地で成長した。そしてジュルフム族の女性と結婚した。本来はヘブライ人であるイスマーイールはジュルフム族からアラビア語を学んだ。彼の子孫から、「アル＝アラブル・ムスタリベ」、すなわち「アラブ化したアラビア人」と呼ばれる北アラブ人が現れた。イブラーヒームの時代に巡礼は義務とされ、マッカは治安の安定した都市となった。イスマーイールは生涯を通して、カアバ聖殿を管理し、その後、息子ナービトがその任務を引き継いだ。ナービトののちカアバを管理する権利を手にしたジュルフム族は、同時にマッカも支配した。イスマーイールの孫たちは、それに異議を申し立てることなく、ジュルフム族と共に生活していた。マッ

カがイシュマエルの孫たちに窮屈に感じられるようになると、彼らはアラビア半島の各地へと移住していった。
時が過ぎ、ジュルフム族はカアバ聖殿に対し不遜な態度をとるようになった。また外部からマッカに来る訪問者に対しひどい振舞いをするようになった。さらにカアバに捧げられた品物を私物化していた。この頃、イエメンからマッカ周辺に来て、マッル・ズ・ザフランに定住していたフザーア族は、バクル・ビン・アブドゥマナート族と共にジュルフム族をマッカから追放した（西暦二〇七年）。この出来事の後、マッカの支配権はフザーア族のものとなった。彼らのマッカ支配は二百年以上続いた。この時代に非常に重要でかつ悪い兆候となる出来事が起こった。フザーア族の長アムル・ビン・ルハイは、イブラーヒームの唯一神信仰を根本から覆し、偶像崇拝を始め、様々な偶像をカアバ聖殿に設置し始めたのである。シリアのマアブと呼ばれる地方から偶像を運び、マッカのカアバ聖殿に置いた。そしてマッカの周辺に偶像崇拝が広められていった。イブラーヒームから伝えられた信仰や崇拝行為の一部は、偶像崇拝と共に存在し続けているものもあった。

マッカ（クライシュ族の統治）　クライシュ族は、フザーア族がマッカを支配していた当時は、マッカ周辺に住み、同じ血統に属するキナーナ族たちの間に分散して住んでいた。クライシュ族にその名を与えたフィフリ・ビン・マーリクの六代目の子孫であるクサイ・ビン・キラーブが初めてマッカとカアバの管理権を得た。クサイは幼い頃父を亡くし、母がシリアの男性と再婚した。したがって子供時代クサイはシリアの母のもとで過ごした。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の五代前の祖父にあたるクサイはマッカに戻り、フザーアの長であるフライル・ビン・フブシーヤの娘と結婚した。この結婚によりアブドゥッダール、アブドゥルッザー、アブドゥクサイ、そしてアブドゥマナーフという名の子供たちが生まれた。クサイは義父の死後、カアバの管理権を求めた。しかしフザーアの人々はそれに強く反対した。それに対し、シリアにいる兄弟リザーフの援助もあって、巡礼に関する任務を負っていたスーファ族とカアバの任務を行っていたフザーア族に勝利を収めた。これによってフザーア族の支配は終り、クライシュ族によるマッカ支配の時代が始まった。

クサイは、統治権を得るやいなや、マッカ周辺で分散して半遊牧の生活を送っていたクライシュ族をまとめ、ハラーム（聖域）と呼ばれている所に定住させた。クライシュ族はカアバ周辺に建てられた家に住んだ。彼らは一族が団結していたため「ムジャンム」（一体化する者）という称号を得ていた。血縁の近い一族をマッカの内部に、遠い血縁者たちを町の外に定住させた。町の内部に住む者をクライシュ・アル＝ビターフ、外部に住む者をクライシュ・アル＝ザヴァーヒルと呼んだ。これによってクライシュ族は遊牧生活から定住生活へと移行した。イスラームが登場した当時、クライシュ・アル＝ビターフは主に以下の支族から構成されていた。ハーシム、ウマイヤ、ナウファル、ムッタリブ、ズフラ、アブドゥッダール、アサド、タイム、マフズーム、アディー、サフム。

クサイはマッカの統治と巡礼にまつわる奉仕作業についていくつかの変更を加えた。カアバのそばに、ダール・アル＝ナドゥワという重要な問題を話し合う集会所をつくった。クライシュ族は毎年お金を集め、食事を用意し、巡礼の季節には巡礼者に、その他のときには貧しい人たちや食べるものに困っている人々にマッカ、マディーナ、アラファトで食事を提供した。この仕事はのちに、「リファーダ」と呼ばれる組織となった。クサイはカアバの中庭に皮の水だめを作り、ラクダを使って町の外の井戸からきれいな水を運ばせ、巡礼者たちの求めにも応じるようにした。この仕事はのちに「シカーヤ」と呼ばれる組織となった。さらに、マッカの様々な場所で井戸が掘られた。「ヒジャーバ」や「シダーナ」と呼ばれる、カアバの覆いの修理や鍵の保管といった任務についた。またリワーというクライシュの旗を持つ権利も手にした。

クサイは西暦四八九年頃死去したが、死ぬ前に自らの仕事を息子のアブドゥッダールに引き継がせるとの遺言を残した。しかしクサイの孫たちの間でこの仕事を巡って意見の対立が生じた。当時、アブドゥッマナーフの一族であるハーシム、アブドゥッシャムス、ナヴファル、ムフターリブはクライシュの交易を発展させ、国際交易という次元にまで展開させていた。それによって周囲の国家の支配者やアラブ人の中で名声を得ていた。この四兄弟はアブドゥッダールの一族の手中にある、クサイから受け継がれたヒジャーバ、リファーダ、シカーヤ、リワー、ダール・アル＝ナドゥ

ワといった仕事を手に入れることを望んだ。その結果、クライシュ族は二つに分裂した。アサド、ズフラ、ハーリス、そしてタイムの各支族はアブドゥッマナーフの一族を支援した。彼らはお互いから離れないこと、一致団結の誓いとして、マスジド・アル＝ハラームで香りのついた水を満たした鍋に手を入れ、カアバにその手をこすりつけて誓った。そのことから彼らは自らを「ムタッヤブーン（香りを付けた者たち）」と呼んだ。預言者のハーシム家もムタッヤブーンの一員であった。

一方、サフム、ジュマフ、アディー、マフズムの各支族は、アブドゥッダールの一族と同盟を結んだ。彼らもお互いに離れず、団結を壊さないことをカアバの前で誓った。そのことから自らを「アフラーフ（団結した者たち）」と呼んだ。ムタッヤブーンとアフラーフのグループは、お互いを根絶やしにするほどに戦ったが、最後には和平が成立した。その結果、ヒジャーバとリワーとナドゥワは以前のようにアブドゥッダールの一族のものとなった。そしてリファーダとシカーヤがアブドゥッマナーフの一族のものとされた。リファーダとシカーヤは、預言者の曽祖父にあたるハーシム・ビン・アブドゥッマナーフが受け持った。イスラームがもたらされたとき、クサイの残した任務のうちリファーダとシカーヤはハーシムの誕生まで守り続けた。双方とも、このときの和解条件に反することなく、イスラームの誕生まで守り続けた。

※

一族の受け持ちであり、リワーとナドゥワとヒジャーバはアブドゥッダールの一族の、クサイ以来代々受け継がれていた軍の司令官の地位はウマイヤの一族のものであった。

クサイの死後、イスラームの誕生まで、約百五十年の時が流れた。あるとき、マッカの統治において新たな任務が必要となり、クサイの残した任務の他に新たな任務が付け加えられた。イスラームの誕生当時、マッカの支配に関して十二の任務が存在したことは注目に値する。これらの任務とそれを受け持った支族の名前は、以下のとおりである。

リファーダ、すなわちマッカの住民から金銭を集め、貧しい巡礼者に食事を与える業務は、ハーシム族のものであった。シカーヤ、すなわち巡礼者への水の供給は、これもハーシム族が受け持った。最後にその任務を負ったのがアッバース・ビン・アブドゥルムッタリブであった。ナドゥワ、すなわちマッカやクライシュ族に関する重要な事柄を話

し合う集会所の長官職にはアブドゥッダールの一族の者が就き会議を行った。婚礼の儀式や男の子の割礼もここで行われた。軍の司令官は戦いに出陣するとき、ここから旗を持っていった。戦いのないときには、この旗は集会所に保管されていた。ヒジャーバもしくはシダーナ、すなわちカアバの覆いの管理や鍵の保管は、アブドゥッダールの一族であるウスマーン・ビン・タルハの受け持ちであった。リワー、すなわちクライシュの旗を掲げる権利は、アブドゥッダールの一族が有していた。鷲の意味を持つウカブとは、クライシュの軍旗のことであり、これは戦いの際に用意され司令官が携えた。アシュナク、すなわち賠償金の徴収や被害の確定を行う任務は、タイムの一族の受け持ちであった。この任務はイスラームの誕生当時、アブー・バクルが受け持っていた。クッバ、すなわち戦役の際、クライシュ族の天幕を張り、クライシュ族が軍の装備のため運んできた資材や金銭を集める任務とアイナ、すなわち戦いにおいてクライシュ軍の騎兵を統一して司令をもたらす任務は、ともにマフズムの一族であるハーリド・ビン・ワリードが受け持っていた。シファーラト、すなわち他民族に対してクライシュ族を代表する任務は、アディーの一族のウマル・ビン・ハッターブの受け持ちであった。アイサール、すなわち何かを始めるとき、アズラムと呼ばれる弓矢で一種の賭けを行い物事を占う任務は、ジュマフ族のサフヴァン・ビン・ウマイヤの受け持ちであった。メシューラもしくはマシュワラト、すなわちクライシュの支族長たちが何かを決定する前に、その事柄を受け持っている人たちに相談する任務は、アサド族のヤジード・ビン・ザムに与えられていた。フクーマもしくはアンヴァーリ・ムハッジャラ、すなわち偶像に捧げられたものを保管する任務は、サフムの一族のハーリス・ビン・カユスが担当していた。[11]

イスラームがもたらされる直前のマッカでは、ビザンチン帝国に従属する王国を形成しようという試みが失敗に終っていた。ビザンチン皇帝ユスティニアヌスは、アサドの一族でありキリスト教を受け入れていたウスマーン・ビン・フヴァイリスに冠を贈り、彼をマッカの王に任命する書簡を届けていた。皇帝の手紙では、マッカの民がウスマーン・ビン・フヴァイリスを王として認め、彼に税金を支払うことを求めていた。ユスティニアヌスのこの書簡と冠を携えてマッカへやってきたウスマーン・ビン・フヴァイリスは、クライシュ族を集め、そのことを伝えた。しかし、彼

の一族の者から、「マッカで自由を享受している人々が、王によって支配されることを認めることはないだろう」と反対された。結局、皇帝の要求は拒否されたのである。なぜなら、この要求を受け入れた場合、当時ビザンチンと対立していたイランとクライシュ族との交易が危険に陥る可能性があったからである。皇帝の要求が拒否されたことに対し、ビザンチンはシリアに出かけたクライシュ族を妨害したり、彼らを拘束したりし始めた。しかしこうした弾圧も、この決定を覆すには至らなかった。

マッカとクライシュ族の歴史において重要な位置を占めるフィジャールの戦いとヒルフ・アル＝フドゥール条約が結ばれたのは、預言者が二十歳の頃の出来事である。これらについては預言者の青年時代の項目で述べる予定である。

ヤスリブ（マディーナ）　預言者がこの地にヒジュラ（聖遷）を行った後、マディーナという名が与えられたが、その古くからの定住者はアマーリカ族であった。アマーリカ族が四散した後、紀元前六世紀初頭にはバビロンの皇帝がエルサレムを占領し、その地のユダヤ人をバビロンへと連行した。そのとき、難を逃れ救出された一部のユダヤ人がヒジャーズ地方に到り、ヴァーディル・クラー、ファダク、そしてヤスリブに住み着いた。キリスト教がシリアに広まった後、ローマの迫害に悩まされてきたシリアとパレスティナのユダヤ人の一部も、ヒジャーズ地方に移住してきた。ヤスリブに住み着いたのはクライザ、ナディール、カイヌカーといったユダヤの支族たちであった。ヒジャーズに定住したユダヤ人たちは、アラブ人の伝統を取り入れアラビア語の名前を用いた。

彼らは農業、商業、宝石商、鍛冶屋、織物業、武器や農機具の製造などを営んだ。ユダヤ人たちはアラブ人のように特定の地区に居住していた。また、イエメンのマアリブ・ダムの崩壊により、おそらく二世紀もしくは三世紀頃に北アラビアから移住してきたアズド族の二つの支族であるアウス族とハズラジュ族も、ヤスリブに住み着いていた。[12]

ターイフ　マッカから約百二十キロ南東に位置するターイフにはサキーフ族が住んでいた。その地の気候は涼しく、マッカの住民の避暑地となっていた。さらには、アブー・ウハイラ、ウトゥバ、シャイバ・ビン・ラビーア、アッバース・ビン・アブドゥルムッタリブのような多くのクライシュ族の所有するブドウ園などがあった。サキーフ族は農業

や商業を生業としていた。ターイフは干しブドウ、皮細工、ブドウ酒の生産で知られていた。彼らは果樹園を営む傍ら養蜂業も営んでいた。アブー・スフィヤーンなどクライシュ族の商人たちは、この地でつくられたものをアラビア半島の外に輸出していた。

このように、イスラームがもたらされた頃には、アラビア半島には中央集権的な政府は存在していなかった。社会の均衡を保つため、部族や支族の間の力関係においては、血縁関係に基づいた単位構成、伝統や慣習、裁判、部族ごとの議会、町の名士が重要な位置を占めていた。[13]

三　社会的・文化的状況

a　人口構成

ここでは、イスラームが登場してきた当時のアラビア半島におけるアラブ人、ユダヤ人、イラン人、その他の民族の構成について述べたい。

アラビア半島の本来の住民はアラブ人であった。彼らは歴史的観点から二つのグループに分類することができる。一つ目は古い時代に存在し、その後姿を消したアラブ人である。アード、サムード、マドヤン、アマーリカの各部族などがそれにあたる。これらを「アラブ・バーイダ」と呼ぶ。二つ目は、現在にその血筋が引き継がれているアラブ人である。これらを「アラブ・バーキヤ」と呼ぶ。そしてそれも、二つのグループに分類することができる。「アラブ・アーリバ」、これは本来のアラブ人である。カフラーンと呼ばれるこのグループの本来の故郷はイエメンであり、彼らは南アラブ人とも呼ばれる。これも、ジュルフムとヤールブという二つのグループに分けられる。ヤールブに属するカフラーンとヒムヤールの各部族からは、多くの支族が発生した。有名なクダーア族はヒムヤールから、アズド族はカフラーンから派生した支族である。カフラーンと呼ばれるグループの主な部族は以下のとおりである。

クダーア、アズド、マズヒジュ、ハムダーン、キンダ、カルブ、ウズラ、アンス、ムラード、フザーア、ジュザーム、アール・ジャフナ（ガッサーニー）、ラフム、ターイ、アシャル、アウス、ハズラジュ。

カフラーンの各部族は、一部はマアリブ・ダムの崩壊のときに、また一部は様々な要因から様々な時代に、故郷を離れアラビア半島の各地に移住していった。ガッサーニー族はシリアに、ラフム族とジュザム族はヒラーに、フザーア族はマッカに、キンダ族はまずバーレーンに、その後ハドゥラマウトに、最終的にはナジドに移り住んだ。アウス族とハズラジュ族はマディーナに移住したカフラーンの一部であった。

「アラブ・ムスタリバ」は本来アラブ人ではなく、のちにアラブ化した部族を指す。彼らはイスマーイールの子孫であるためイスマーイール族とも、またイスマーイールの孫のアドナンから派生した支族であることからアドナン族とも呼ばれる。イスマーイールは、マッカに来たときには父親のようにシリア語もしくはヘブライ語を話していた。彼はカフラーンの一支族であるジュルフム族の女性と結婚した。彼の血筋はこの結婚によりアラブ化したため、アラブ・ムスタリバとされる。イスマーイールの子孫は、母方からみるならアラブ人である。彼らは北アラブ人とも呼ばれる。アドナンは預言者の二十一代前の祖先にあたる。彼の子孫から起こった主な支族は以下のとおりである。

ラビーア、ムダル、カユス・アイラーン、ガタファーン、キナーナ、クライシュ、そしてそのさらに支族にあたるスライム、ハワージン、タミーム、アサド、フザイル、サキーフ、タイム、ハーシム、ウマイヤ。アドナンの子孫たちは人口増加とともに、アラビア半島各地に分散していった。クライシュ族はマッカに留まった。その他のアドナン族はティハーマ、ヒジャーズ、ナジドで遊牧もしくは半遊牧を生業として暮らしていた。

イスラームの登場以降、多くの国を征服したアラブ軍兵士と、現地の人々との混血によって生まれたアラブ人たちは、「アラブ・ムスタジャマ」と呼ばれる。[14]

アラビア半島では、アラブ人以外の人々も暮らしていた。バーレーンやオマーンをはじめ、アラビア半島のイランに近い部分（東部）、そしてイエメンでは、アラブ人と並んでイラン人も暮らしていた。ササン朝がイエメンを支配し

た半世紀ほどの間に、イラン人たちが地元の女性と結婚したことにより、アブナー（息子たち）と呼ばれる新しい部族が出現した。イエメンで政治的、軍事的実権を握っていたアブナー族は文化的観点からは、次第にアラブ化した。サヌアにおけるササン朝の最後の知事であり、イスラームの初代の知事でもあるバーザーンや、預言者であると主張していたアスヴァド・アル＝アンシーを殺害し、アブー・バクルによってサヌアの知事に任命されたフィールーズ・アル＝ダイラーミは、アブナー族を構成する著名な人物である。[15]

ヒジャーズ地方にも、アラブ人以外の民族が存在していた。マディーナ、ハイバル、ワーディ・アル＝クラー、ファダクにはユダヤ人が住んでいた。アラビア半島の様々な地域に、数は少なかったがエチオピア人やギリシア人、メソポタミア人なども暮らしていた。それぞれ奴隷であったビラール・ハベシー、スヘイバル・ルーミー、ニノワのアッダースと呼ばれた人々は、マッカで暮らす外国人の一例であった。

アラビア半島の諸部族

b 部族社会

アラブ人には、遊牧民、定住民という二種類の生き方があった。砂漠や高原で、ラクダと共にテントで暮らすアラビア人を遊牧民（ベドウィン）と呼び、村や町や都市に定住して生きる者を定住民（ハダリー）と呼ぶ。イスラームの登場した頃には、アラビアの特に中部および北部で暮らしていたアドナン族とカフラーン族は、遊牧民と定住民の二つに分けられていた。遊牧民は牧畜、狩猟、交易、そして略奪などで生計を立てていた。彼らは農業や工芸、水産

業などは好まず、これらの仕事を蔑視していた。基本的な食料はナツメヤシの実、肉、乳、そして乳製品であった。そして、どうしても必要なものを確保しなければならないときには、村やキャラバンを襲い略奪することもあった。彼らは交易も行った。必要なものは、町で物々交換によって確保していた。一部の遊牧民は、収入を得るためキャラバンにラクダを与え、道案内人や護衛を務めた。遊牧民は、アラビア語の最も正確な使い手であった。そのため町に住む人々は、アラビア語を学ばせるため子供たちを砂漠に送ったのであった。

定住生活を送る人々は村や町や都市の固有の土地で、日干しレンガや石でできた家に暮らしていた。イエメンやその周辺、ササン朝やビザンチンとの境界で王国を形成していたアラブの各部族、マッカやマディーナ、ターイフに住んでいた各部族は定住民であった。ターイフやマディーナのように農業に適した土地では農業に従事し、マッカのように農業に適さない土地では商業を営んでいた。遊牧民と定住民の他に半遊牧の生活を送るアラブ人もいた。キャラバンが立ち寄る宿営地のあるオアシスや谷で暮らしていた部族がその代表例である。[16]

生活条件や収入源が異なるにもかかわらず、遊牧民も定住民も、社会構造の基本単位は結束や伝統、そして徳を重んじる「部族」であった。部族は同じ血筋からなる人々によって構成され、お互いに血統、家系によって結びついている集団である。遊牧民であれ定住民であれ、家系は非常に重要なものであり、アラブ人は常にそれに重きを置き、自分の祖先にあたる人々の名前を暗記していた。部族は男系で継承されることが多かったが、外部に対し完全に閉ざされているわけではなかった。ヒルフ（合意）、ジバール（法的保障）、ヴェラ（親友）といった条件で親戚としての結びつきを持つことも可能であった。自分の部族を放棄したり、あるいは部族から追放された場合、他の部族の庇護を受けたり、結びつきを持つことによってその部族に入ることができた。このような者はハリーフと呼ばれた。法的保障を受けている者は、ジャールと呼ばれた。戦いや襲撃の結果捕えられたり、売買された奴隷が解放された場合はヴェラという形で新たな結びつきが生まれた。解放された奴隷は、解放した部族によりメヴラーという名前で呼ばれた。多くの点において、ハリーフ、ジャール、メヴラーは部族の一員のような待遇を受けていた。

サイードやシャーと呼ばれ、時に支配者、導く者、王といったような称号を与えられた部族の長は、同等の権利を持つ部族のメンバーの中から衆議で選ばれた。長になる候補者には、一定の年齢の他、気前のよさ、勇敢さ、忍耐強さ、穏やかさ、あるいは謙遜、影響力のある話し方、といった特質が求められた。長に求められるものは、部族によって異なることもあった。ムダル族は思慮深さ、ラビーア族は気前のよさ、イエメン族は家系を重視した。部族の長は基本的に親から子へ引き継がれるものではなかった。しかし、長の子供に特に能力が認められた場合、長の地位は子供に引き継がれた。世襲制によって長の地位が引き継がれた場合、その地位は父から長男に与えられた。死ぬ前に次の長を指名することもあった。たとえばフスン・ビン・バドルは、息子ウヤイナを後継者に指名した。フスンは生前、息子たちを呼び、ウヤイナに「私の後を継ぐのはお前だ」と言った。のちにこのことを部族に宣言し、彼らにいくつかの提言を行った。部族がいつも一体であること、常に戦争への備えをしておくことを遺言として残した。

部族の長は血統が途絶えたり、後継の子供たちの間でいさかいが起き、部族が分裂してしまうことを恐れた。そのため、死亡した部族の長の子供たちの中から最も適切な者を選んだり、あるいは長に最もふさわしい者を選ぶという方法がとられた。部族の長の後継者の間で争いが起きたときには、最も親しい王に頼み、自分たちの部族の長を選んでもらうこともあった。遊牧民であるマアド族は、この方法を採用していた。イエメンの王に自らの部族の長の任命を任せたのである。時には、その英雄的素質、勇敢さによって部族の長の地位を手に入れる者もいた。アーミル・ビン・トゥファイルは、叔父アブー・バラの死後、その地位を遺言によってではなく、自らの能力と努力で手に入れたと、ある詩の中で述べられている。部族の長の選出でいさかいが起きたとき、占い師によるくじに頼ることもあった。その場合、くじに当たったものがその地位についた。

部族の長の最大の仕事は、仲裁を行うことであった。誰かに仕事を命じたり、誰かに罰を与えたりすることはなかった。他の部族との関係を結ぶときには、自らの部族の代表となり集会を開いた。部族のメンバーの間に生じる問題を解決し、慣習に従ってそれを裁いた。なぜなら慣習というものは、アラビア半島の人々にとって法律のようなものであっ

たからである。法律や規律は、父祖代々伝えられてきたものであり、慣習や伝統に逆らうことは悪しき行為とされていたのである。その他、戦いを宣言すること、戦利品を分配すること、移動の際テントを設営する場所を決めること、客人をもてなすこと、条約を締結すること、捕虜を救出することなどが、部族の長の任務であった。

一般的な集会では、長の発言は他の人々の発言より受け入れられることが多かったが、特別扱いされるというわけではなかった。しかし彼らの任務は重かった。人々は、長たちが皆のために自分を犠牲にすることを求めていた。戦争が起こると彼らは司令官になった。また部族の長を支えるための会議が持たれていた。

定住生活を送る集団のあり方も、遊牧民と同様、部族というものに依存していた。ただ、定住生活に固有の条件から、いくつかの相違点があった。たとえば、マッカに住むクライシュ族では、部族の長の制度が廃止されそうになったことがあった。長を支える会議のあり方も異なっていた。定住民の社会では、この制度はマラと呼ばれていた。マラは、それぞれの支族の有力者が一人もしくは二人ずつ代表として参加する集会であった。この集会の原点は、クライシュ族が遊牧生活から定住生活に移行したとき、クサイによって始められた集会にある。したがってこれは、定住生活がクライシュ族の部族としてのあり方にもたらした変化の一つであった。マラには道徳的観点からの監視という側面が色濃くあった。この組織は政治的な意味での議会ではなく、重要な項目について必要に応じて相談に行ける相談所的な集まりであった。投票によって得られた決定が、有効なものとされた。多くの場合マラでは、長時間に及ぶ監査や考察、議論の末に決定が下された。この会議は、新しい出来事を簡単には容認しない保守的な人々によって構成されていた。時には、出された見解をめぐって、有力な長たちが対立することもあった。クライシュ族には部族全体を統括するような長は存在せず、またマッカに中央集権的な支配勢力も存在しなかった。マラの集合場所はナドゥワの家と呼ばれる集会所であった。マラでは家族の安定に関する問題や町全体に関わる問題などが話し合われた。町の安全や将来に関する決定を下した。また、クライシュ族が派遣するキャラバンの行き先を決定した。キャラバンはナドゥワの家の前から出発し、帰ってくるとそこで旅を終えた。マッカの人々はこの集会のメンバーの選出や任命には関わっ

ていなかった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のマッカ時代、マラのメンバーは預言者にとって最大の対立勢力であった。

ナドゥワの家と並び、クライシュ族の下部支族の有力者による、ナーディーと呼ばれる集会所があった。その役割はナドゥワの家よりも大きかった。一族のキャラバンの見送りや出迎えはこのナーディーで行われた。部族の長をその部族から追放すること、もしくは他者の庇護の下に入ることは、その一族のナーディーで決められた。イスラームがもたらされた当時、クライシュ族の他の支族にも、それぞれ異なる実力者が存在した。公益事業はクライシュ族の十の支族の長たちよって運営されていた。

諸文献によると、マディーナにはマッカにあったナドゥワの家のような集会所は存在しなかった。すなわち、アウス族とハズラジュ族の統一された会議は存在しなかった。二つの部族の間の競い合いは、そういった会議の存在を許さなかった。ターイフでは、マッカにあるようなマラが存在した。戦時、平時を問わず、町の運営はこの会議によって決められていた。[17]

部族の秩序の基盤となっているものは、血のつながりであった。これは、彼らは自分と父系の家系を等しくする者やその一族を、彼が正しいか正しくないかにかかわらず守ろうとすることを意味していた。血のつながりは外部の敵から身を守り、敵を攻撃することが必要な場合はすべてのメンバーを動かす助け合いの精神でもあった。この精神は、部族の人々をお互いに結びつける要素であった。それによるなら、危険が迫った場合には部族の構成員は他の構成員を助ける責任を負っていた。このことはおそらく、砂漠という苛酷な条件のもとで生き続けていく上で、助け合いの精神が部族の中に必要であったことから生じたものであろう。砂漠で生き抜いていくため、そして敵対関係にある部族からの危険を防ぐためには、助け合いが不可欠であった。遊牧民たちは共に生活し、共に防衛し、共に攻撃を行うことが不可欠であった。「残虐な者であれ、虐げられている者であれ、あなたの兄弟を助けなさい」ということわざは、同じ部族の仲間がどのような状況にあろうと彼を助けなければいけない、ということを示すものである。さらには、

その人が正しいか正しくないかということを尋ねる権利すら、与えられてはいなかった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）もイスラーム以前の時代のこのことわざ[18]をよく使っていた。それに対してある者が、「預言者よ、虐げられている人は、助けましょう。しかし、虐げている人を助けるとは、どういうことでしょうか」と尋ねた。それに対し預言者は、「彼をその残虐行為から遠ざけるように」と言った。[19]預言者がここで述べている「助ける」ということは、宗教上の兄弟をそうした不法な行いから遠ざけることを意味していることは言うまでもない。[20]

部族社会の「血による報復」は、治安を保つ中央集権的な権力が存在しなかったため、広く行われていた。血の報復の最も大きな原因は「復讐」の感情にあった。アラブの各部族は、報復ということに敏感であった。誰かが他の部族に属する人を殺した場合、殺された人が属する部族は殺した方の部族の誰かを殺すか、賠償金を手にして和平を結ぶまで、双方の間で不穏な状態が続いた。攻撃を仕掛けてきた者たちに対し同じように仕返しを行うことは、聖なる任務だと見なされていた。攻撃された方は、報復を果たすまでよろいを脱がず、香水を用いたり、ワインを飲んだり、配偶者と交わったりしないことを誓った。イスラーム以前の社会において、自分の部族の誰かが殺された者は連帯責任を感じ、報復を成し遂げるまで部族の人たちと共に戦った。

アラブの部族間では政治的・社会的・心理的理由による攻撃、略奪、戦いが絶えることがなかった。その部族間の戦いは「エイヤーム・アル＝アラブ」と呼ばれた。戦いが起きた場所や原因や結果により、様々な名称が与えられた。たとえば「ヨウム・ブアース」、「ヨウム・カール」、「ヨウム・フィジャール」といったように。これらの戦いは、アドナンの各部族とカフターンの各部族の間に生じることも、またそれらの支族の間で生じることもあった。「エイヤーム・アル＝アラブ」は、個人や部族の間に生じたいさかいから始まり、それが戦いに発展し、部族全体を巻き込んだものとなるのが常であった。これらの戦いの目的は多くの場合報復にあった。預言者が四十歳のときに起こったものとしては、アラブ人とイラン人の間に起こったズー・カール、アウス族とハズラジュ族の間に起こったブアース、クライシュ族・キナーナ族とカイス族・アイラン族との間に起こったフィジャールの戦いなどが、戦役の中でもよく知

られたものである。アラブ人はヒジュラ暦（ヒジュラ暦とは西暦六二二年の聖遷を元年とするイスラームの暦）のズ・アル＝カアダ（十一月）、ズ・アル＝ヒッジャ（十二月）、ムハッラム（一月）、ラジャブ（七月）月は戦いを行わなかった。もし戦いを行った場合、それは「フィジャール」と呼ばれた。これらの戦いは部族間に憎悪や悪意を植えつけ、人の死や血の報復、復讐感情などをもたらすものとなった。一方で戦いはアラブの勇者の出現、アラビア語の発達、ことわざの発展、詩、戦いに関する伝承を生み出していった。このような観点から、戦いというものはアラブ人の社会的・文化的生活に重要な位置を占めていたといえよう。[21]

部族は、自由民、解放奴隷、奴隷から構成されていた。部族の本来のメンバーである自由民は、共通の父祖を持つ人々であった。彼らはアシュラーフとアヴァムの二つに区分される。富裕層、司令官、詩人、占い師などは、他の人々よりも上位に位置すると見なされた。ただ、その権利や生き方という面では、他の人々との間に差異はなかった。マッカで、クサイの一族である者は、その他の自由民に対し貴族階級を形成していた。クライシュ族やサキーフ族などのような部族の出身であることも、誇りとされた。なぜならクライシュ族はハラーム地域に住み、外国との交易を行うことによって、アラブ人や周辺諸国の支配者の尊敬を集めていたからである。彼らのキャラバンはどこでも自由に旅をすることができた。

奴隷たちは市場で売り買いされ、財産のように遺産として親から子供に引き継がれたりした。彼らは農業や商業などに従事していた。奴隷たちの主な供給源は戦争であった。戦争で捕虜となった者は、多くの場合、奴隷にされた。また、夫婦とも奴隷の場合は、生まれてくる子供も奴隷となった。奴隷商人たちはエチオピアから連れてきた奴隷を市場で売っていた。クライシュ族のタイム支族であったアブドゥッラー・ビン・ジュードゥは有名な奴隷商人であった。また奴隷は、自らの価値に見合うお金を支払うことによって自由になることもできた。

解放された奴隷はマワーリー（単数形はマウラー）と呼ばれた。彼らは奴隷と自由民の中間に当たる地位にいた。奴隷は、その解放した人のマウラーとなり、同時に部族の一員と見なされた。彼らは奴隷のように売り買いされるこ

とはなかった。しかし自由民と同じというわけではなかった。結婚や遺産相続などにおいて、自由民とは区別された。たとえばマウラーは、自由民の女性と結婚することはできなかった。マウラーの補償金は、自由民の補償金の半分しかなかったのである。

c　家族構成

部族における最小単位は家族である。家族には、同じ家やテントで暮らす祖父母、その子供たち、孫たちから成る大家族や父母と子供だけの小家族があった。結婚は、様々な形で行われていた。婚姻に宗教的な意味はなかった。イスラーム以前の時代の婚姻は、私たちが知っているような形で行われることもあったが、それ以外にも様々な形態があった。婚姻を行わない夫婦生活、期限付きの婚姻、配偶者を互いに交換すること、ある男性の子供を生ませるために妻をその男性に差し出すこと、息子が父の死去の前に義母と結婚すること、花婿が花嫁の家族に払うべきお金がないため、家族間で娘たちを交換する習慣などがあった。だがイスラームは、今日知られている形式以外の結婚のあり方をすべて禁止している。

養子というシステムも存在していた。養子は、里親の相続人となることはできたが、里親の家族と結婚することはできなかった。離婚は広く行われており、離婚する権利は男性だけにあった。ただし一部の女性は、結婚するとき離婚する権利を条件にすることがあった。離婚した女性は、一年間再婚することができなかった。女性は子供を生んで初めて、家族の一員として認められた。女性は自由民と奴隷の二種類に分けられた。奴隷の女性は、イスラーム以前の人たちの目にはラクダほどの価値しかなく、ラクダのように売り買いされた。しかし自由民の女性は異なっていた。彼女たちは男性と同等に見なされることはなかったが、奴隷のような扱いを受けることもなかった。女性は多くの場合、人間としての権利さえ与えられていなかった。遺産を相続することもできなかった。しかし、厳しい砂漠の生活では、女性は多くの労働を求められていた。食事の準備、子育て、ラクダの乳搾り、焚き木を集めること、テントの修理、

ナツメヤシの繊維から縄を編むことなどと、それは多岐にわたっていた。その他、戦いに従事している者たちに水を運ぶこと、彼らを詩で勇気づけること、けがの治療なども女性の役割であった。しかしこれらの仕事は女性たちに権利や地位を与えることはなかった。マッカ、マディーナ、ターイフのような定住民の中心地では、自由民の女性たちは相応の地位を保持していた。部族の長や有力者の娘たちは、部族内の男性より高い地位にあった。マディーナのナッジャール族のセルマ・ビント・アムル、クライシュ族のハディージャ・ビント・フウェイリド、ヒンド・ビント・ウトベ、著名な詩人ハンサーなどが名の知れた女性たちであった。

d　慣習

ラクダの肉、ナツメヤシの実、炒めた小麦粉、そして乳製品がアラブ人の主な食料であった。大麦から薄いパンをつくった。服装は簡素だった。簡単な一枚仕立ての服にベルト、そしてアバーヤ（女性の衣装）を用いた。金持ちはその上にカフタンという服を着ていた。戦いのときは、軍隊の後背には女性や子供がおり、彼らが敵の捕虜にならないように男たちは必死で戦った。星を見て針路を割り出した。いさかいが生じると、仲裁人や占い師を頼った。自分たちで解決できない問題が起きると、占い師に意見を求めた。また病気になると彼らの勧めに従い、夢についても彼らに解釈を求めた。将来何が起こるかということも、彼らから知ろうとした。

アラブ人は重要な出来事が起きると、新たな歴史の始まりとした。イスラームがもたらされた頃、二つの出来事が生じた。その一つは象の事件であり、もう一つはワリード・ビン・ムギーラの死であった。

この時代のアラブ人の暦は太陰暦（一月より順にムハッラム、サファル、ラビーウ・アル＝アウワル、ラビーウ・アル＝サーニー、ジュマーダ・アル＝ウーラー、ジュマーダ・アル＝サーニー、ラジャブ、シャアバーン、ラマダーン、シャウワール、ズ・アル＝カアダ、ズ・アル＝ヒッジャ）であった。月によっては戦いや略奪が禁じられている「ハラームの月」というものがあり、この月の間は自由に交易ができ、巡礼もこの時期に行われた。

アラブ人の間には、ナシーというシステムが存在した。それは十二番目の月ズ・アル＝ヒッジャが終った後、一月ムハッラムまでの間に十三番目の月を加えることであった。それはハラームの月ではなかった。したがって、月は少しずつずれていった。つまり、一月のムハッラムは二月のサファルに、二月のサファルは三月のラビーウ・アル＝アウワルへとずれていった。ナシーのシステムは、本来、巡礼の時期が温暖な季節にあたるよう取り入れられた。しかし時とともに、戦いや略奪を行いやすくするためにそのシステムは継続された。ズ・アル＝カアダ、ズ・アル＝ヒッジャ、ムハッラムとハラームの月が続き、戦いができなかったからである。イスラームはこのナシーという月の順番をいれかえるシステムを禁止した。[22]

イスラーム以前の時代、アラブ社会は民族的に統一されていなかった。部族や町ごとの伝統にのっとった祭りや式典が催されていた。これらに加えて、巡礼の季節には定期的な市が開かれ、各部族は祭りを楽しんだ。各部族には少なくとも一つの偶像があった。そのため、それぞれの偶像にまつわる祝祭日が存在した。これらの日にも市場が開かれた。宗教的な祭日は、詩や音楽、酒、そして女性が参加した娯楽が行われた。マッカの周辺ではザートゥ・アンヴァートの祭りがよく知られていた。ザートゥ・アンヴァートとは大きな常緑樹のことである。アラブ人たちはその木のもとに集まり、剣を枝につるし、その周囲で祈りを捧げ、犠牲の動物を屠った。マディーナではペルシャ文明の影響を受けた年に二回の有名な祭りがあった。

医学に関しては、アラブ人は二種類の治療法を持っていた。一つは占い師やまじないによるもの、もう一つは薬によるものであった。占い師やまじない師は病人に呪文を唱え、秘術を施し、偶像に犠牲を捧げ、祈ることによって治療を行った。薬としては、草の種、果実のシロップ、蜂蜜などが用いられていた。血を抜くことも重要な治療方法であった。痛みには、その箇所に熱した鉄でお灸を据えた。これらの治療方法は主に一族の老人たちの経験に頼るものであった。イスラーム以前の時代には高名な医者たちもいた。ハーリス・ビン・ケレデは、医学についてジュンディシャプールで学んだ。彼は預言者の時代に生きた医者であった。

e　道徳

イスラーム以前の時代におけるアラブ人の悪しき振舞いは、文献において「アラブの恥部」として記されている。それらはうぬぼれ、無知、強欲、飲酒、買春、報復、窃盗、流血、孤児の財産の横領などであった。もちろん、アラブ人のすべてがこうした行いをしていたわけではない。酒を飲まない者も、買春を行わない者も数多くいた。アブー・バクルはその一人であった。しかし、これらの習慣は社会全体に蔓延していた。アラブ人のイスラーム以前の信仰や態度、行動を、クルアーンやハディース、教友たちの言葉では、イスラーム時代のものと区別してジャーヒリーヤ（無明）という表現が用いられている。その特徴は無知、偶像崇拝、野蛮、不正、不公平、無秩序、略奪、人権の抑圧、血筋による差別、子供の殺害、女の子を生き埋めにすること、横暴な振舞い、血の報復、飲酒、賭博といったものである。イスラームはそれらのすべてを禁じている。

この一方で、アラブ人にはよい振舞いもあった。それを「アラブの徳」と呼ぶ。独立心、自由を求めること、勇敢さ、気前のよさ、誠実さ、客へのもてなし、自分たちに庇護を求める者を守ること、決意の固さ、忍耐強さなどがその例である。[23]

f　文学とカリグラフィ

イスラーム以前の時代、アラブ人の社会では散文にはそれほど大きな価値が与えられていなかった。しかし、家系図や歴史に関する散文は存在していた。さらに、ことわざ、アラブ人の過去を伝える伝承もよく知られていた。また詩と演説は非常に発達していた。

イスラーム以前の時代の詩は、その当時の生活のすべてを克明に記している。当時のアラブ人のよい慣習や悪い習慣、戦いに関することなどは、すべて詩の中に見出すことができる。詩に詠まれるのは、相手への賞賛、自尊心、風刺、勇敢さといったものであった。詩人は自分の所属する部族の占い師であり、指導者であり、発言者であり、学者でもあっ

た。詩によって、人物や部族の名誉をさらに高めることができた。詩人は、司令官が剣でその部族を守るよりもなお強く部族を守ることができた。出来事を詩に詠み、他の部族の詩人が自分の部族に詩で挑戦してきたときは、詩人がそれに応じた。一つの部族から詩人が出れば、他の部族からその部族を祝福しに人々がやってきた。市では定期的に詩のコンテストが開かれ、勝者は表彰された。その詩はカアバ聖殿の壁に掲示された。イムリウ・アル＝カユス、ナービガ・アル＝ズブヤーニ、ラビード・ビン・ラビーア、ウマイヤ・ビン・アブッサルト、ズハイル・ビン・アウスルマ、アーシャーなどが、この時代の著名な詩人である。

アラブ人は演説も重視していた。子供たちは幼い頃から演説に慣らされた。この時代には、有名な演説家が生まれている。演説家は詩人に継ぐ地位を持っていた。あるいは詩人と同等と見なされることもあった。演説のテーマは詩と同様、相手への賞賛、風刺といったものであった。演説家が自分の部族の勇敢さ、気前のよさなどについて演説すると、対抗する部族の演説家がそれに応じた。部族の生活、部族間の出来事は、詩と同様、演説にも反映された。戦いで行われる報復の演説、結婚式などの宴で行われる演説、和解を呼びかける演説、使者を迎え入れるときの演説、会議や市場、その他様々な集会で行われる演説、お悔やみの演説などが当時の演説の最良の例である。イヤード族やタミーム族は、そうした優れた演説によって知られていた。[24]

アラブ人は当初、南アラビアで発達したムスナドと呼ばれる文字を使用していた。のちに、北アラビアで発達し、今日まで使用されているアラビア文字を用い始めた。この文字は、北アラビアのナバトの文字が様々な形で改良されたものであった。アラビア文字は、ナバトの国であるハウランから、アンバールへ、そしてヒーレ、ヒジャーズへと広がった。さらに、ヒジャーズの人々がシリアと交易関係を持っていたことから、ハウラン、ペトラ経由でヒジャーズに伝わったとも言われている。イスラームがもたらされたとき、ヒジャーズではすでに文字が知られていたが、それほど広まってはいなかった。マッカでは、読み書きのできる人はほんのわずかであった。イスラーム以前のアラブ人は、ヘブライ語、シリア語の宗教書と共に、これらのアラビア語版やアラビア語で書かれた教養書などを持ってい

た。また、個人や部族の間における協定、奴隷の所有証書、信託物に関する証書、手紙、墓の碑文、カアバの壁に飾る書などはアラビア語で書かれていた。印章もアラビア語で彫られていた。文字は皮革、ナツメヤシの枝、土器の破片、ラクダの骨、柔らかく白い石、板、そしてパピルスなどに書かれた。イスラーム以前の時代、知識、出来事、文学などのアラブの文化は、記憶することによって世代から世代へと伝えられていた。そのため、話し言葉による伝承が基本であった。書いたものは暗唱の補助に過ぎなかった。イスラームの誕生と共に、読み書きが大切にされ文字も発達していった。読み書きができる人の数も増えていった。

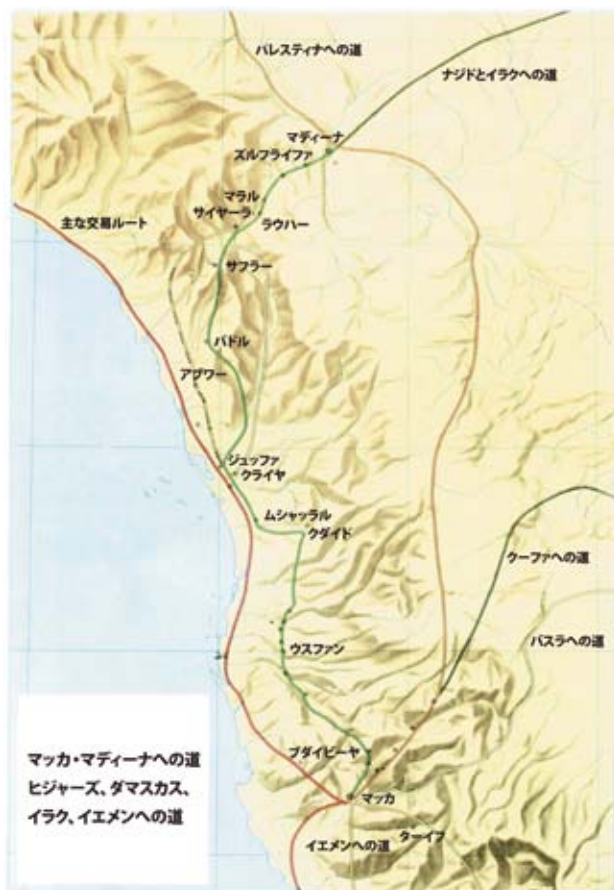
四　経済的状況

アラビアの経済は、自然条件と部族の生活様式にのっとり、一般的に牧畜、農業、交易に頼っていた。特に牧畜は遊牧民の生計を支えていた。彼らは育てたラクダや羊、山羊といった動物から様々な形で利益を得ていた。その肉を食べ、乳を飲み、その毛から服やテントをつくり、残ったものは売り、他の必要なものを入手する資金とした。農業や交易を行う定住民は、遊牧民ほどではないとしても、キャラバンのために必要なラクダや羊、わずかではあるが牛を飼育していた。ラクダは保証金や花嫁への結婚準備金などを計る規準とされた。アラブ馬も優れた馬であった。忍耐強く、頭もよく、持ち主に従順であり、ことに戦闘などにおいてその能力を発揮した。

農業も人々が生計をたてる上で重要な位置を占めていた。定期的に雨が降るイエメンの土地はたいへん肥沃であった。そのため、イエメンは緑の大地と呼ばれた。この地域では、雨水をより有効に利用するため、貯水池がつくられた。麦の生産で知られるイエメンの他には、肥沃な土地としてはターイフ、マディーナ、ナジド、ハイバルなどがあった。バスラ湾岸の地域の多くは、農業に適していた。イエメン地方はアラビア半島の穀倉であった。定住し、農業によって生計をたてている人々は、穀物、果実、ナツメヤシ、そして野菜などを育てていた。ヒジャーズはナツメヤシ、ター

イフはブドウの生産地としてよく知られていた。
一部の都市では農業以外に、かなりの数の工房や工業施設があった。工業としては織物、皮革、酒の製造、貴金属や香水の製造などがあった。
アラビア半島において、農業や牧畜業よりもさらに重要な生計の源は、交易であった。イエメンの人々はかなり古い時代から交易を行っていた。インドや南部アフリカ沿岸、そして中東地域の間で交易を行っていた。北部のナバテア族も交易を行っていた。一世紀以降、ヒジャーズのアラブ人は交易においてイエメンを凌いでいた。ヒジャーズのアラブ人は、イエメンやエチオピアで買い求めた品々をシリアやエジプト、さらにはイランに運び売りさばいていた。北部で買ったものは南部に運んでいた。農業に適さないマッカのクライシュ族も交易を行っていた。クライシュ族は本来、アラビアの様々な場所からマッカに巡礼に訪れる人たちの求めに応じるため、かなり古くから交易を行っていた。この観点から、当時マッカが宗教的にも経済的にもアラビアの中心であったということは先に述べたとおりである。
マッカはイエメンから地中海、バスラ湾、東部アラビア、そしてジェッダへと至る交易路の交差する地点に位置していた。クサイの孫に当たるハーシム、アブドゥッシャムス、ナウファル、ムッタリブは、ビザンチン、エチオピア、イラン、イエメンの支配者と政治的・経済的な関係を持ち、交易に関する条約を結んでいた。クライシュ族のキャラバンがそれらの国を安全に通過できるようにしていたのである。
クルアーンに示されているように、[25] クライシュ族は冬と夏、年に二回、キャラバンを組んで旅に出た。冬はイエメンに、夏はシリアに向かった。クライシュ族のこのやり方を確立したのは、預言者の曽祖父にあたるハーシム・ビン・アブドゥッマナーフである。彼はまた、ビザンチンの皇帝と交易の条約を結んだ人でもあった。冬と夏の道程は、イエメンのサヌアから始まり、ターイフ、マッカ、ヤスリブ、ハイバル、ヒジュル、タブーク、マアン、タイマー、ムータ、そしてブスラを経て、ダマスカスに至った。これ以外にも、北部へ向かって紅海沿岸を移動し、アカバ湾岸のアイラから地中海に至る道もあった。さらに、マッカとイラン、イラク、バーレーンを結ぶルートもあった。クライシュ

族のキャラバンはイエメンから香水、のり、材木、象牙、トラの毛皮、貴金属、鉱物、武器、香辛料などを運んだ。これらの品物の一部はインドネシア、インド、中国、南アフリカからもたらされたものであった。品物を北に運んだキャラバンは、その南への帰路には麦、オリーブ、オリーブオイル、絹織物、器などを運んだ。エチオピアやバーレーンから戻るキャラバンは、毛皮、珊瑚、真珠、織物、金、銀などを持ち帰った。イスラームがもたらされた時点では、クライシュ族の夏・冬の旅はハーシムとその兄弟が管理していた。アラビアの地を旅するキャラバンは、常に略奪の危険に直面していた。しかし、クライシュ族のキャラバンに手を出す者はいなかった。クライシュ族のキャラバンであることを知らずに攻撃してきた者も、彼らがクライシュ族であることを知ると、すぐに彼らを放免し、その品物にも手をつけることはなかった。このことはクルアーンにも触れられている。

「かれらは、われが安全な聖域を定めたのに気付かないのか。まわりでは人々が略奪に晒されているというのに」[26]

ヒジャーズのアラブ人には、固有の通貨というものはなかった。通貨としてはディナール（ビザンチンの金貨）やディルヘム（イランやイエメンの銀貨）が使われていた。

アラビアの各地では定期市が開かれていた。これらの市の一部は、ハラーム月に開かれていた。それ以外の月に開かれるものもあった。市は五日から三十日の間の異なる日程で開催されていた。これらの市は、アラブ人の経済生活にとって重要であると同様、社会生活にとっても重要なものであった。部族間の問題はそこで話され解決されたからである。市の中で最も重要なものは、文学的な競い合いの場でもあったウカズの市であった。ここでは文学的討論が行われたり、詩人たちが自分の作品を詠み、選ばれた詩はカアバの壁に掲示された。アラブ人はこの市のおかげで、様々な部族の習慣を知ることができた。このように、イスラーム以前の時代において政治的な統一を持つことがなかったアラブ人たちが、経済面においてはかなり一体化していたということは注目に値することである。[27]

五　宗教的状況

a　ユダヤ教

アラビアの地にもたらされた神の教えの中で最も重要で、かつ最も古いのがユダヤ教である。この教えはパレスティナからシリア、ヒジャーズの間の地域に避難していたユダヤ人たちによってもたらされ、ヤスリブにまで到達していた。紀元前六世紀、バビロンの王ネブガドネザルがエルサレムを侵略し、ユダヤ人たちをバビロンへと連行した。そのとき、一部のユダヤ人が逃亡し、マディーナ、ハイバル、ヴァーディル・クラー、ファダクなどのヒジャーズの各地に定住したことは、先にも述べたとおりである。ローマ帝国の皇太子チトスがエルサレムを攻撃し、その後ローマによってユダヤ人が迫害されるようになったときにも、ユダヤ人の一部がヒジャーズ地方に移住してきていた。マディーナの周辺とイエメンを除けば、ユダヤ教はアラブ人の間でそれほど関心を持たれなかったと思われる。ユダヤ人のそもそ

もの土地はパレスティナであった。イエメンではユダヤ教は限定的ではあったが広まりを見せた。その結果、ヒムヤールの支配者ズーヌワースがユダヤ教に改宗し、キリスト教徒を迫害したのは前述のとおりである。

ユダヤ教がアラブ人に受け入れられなかった理由として、ユダヤ人が自分たちを神に選ばれた民だと見なしていたことが挙げられる。アラブ人は自分たちを、この宣教者たちの下の位階に置かなければいけない教えを受け入れようとはしなかったのである。アラブ人のユダヤ教徒たちは、財産に対して彼らが示す熱意と同程度の熱意を持って教えを広めようとしていたわけではなかった。同時に、当時のユダヤ人たちが恩知らずで、財産に固執する者との風評が立っていたことも、アラブ人たちは気に入らなかった。イエメンで、ズーヌワースがキリスト教徒を迫害したことも、マディーナのユダヤ人たちのアウス族とハズラジュ族に対する否定的な態度も、アラブ人たちを彼らから遠ざけた。一方で、ユダヤ教の説く生き方の多くが、遊牧生活に適さないものであったことも、この教えがアラブ人に受け入れられなかった要因の一つとも言われている。[28]

b　キリスト教

キリスト教は、アラビア半島の北部、特にガッサーニー族やヒーレ族の間で広まった。前者は後者よりもかなり前にヤコブ派キリスト教徒となった。なぜならガッサーニー族はビザンチン帝国と親密な結びつきがあったからである。ヤコブ派はシリアのアラブ人の間にも広まった。イラク地域ではキリスト教徒の多くがネストリウス派であった。ヒーレにも、キリスト教を信仰するアラブ人の集団があった。ヒーレを支配し、最初は多神教徒であった皇帝一家は、長い期間キリスト教の宣教者の活動を妨害していた。しかし、最後には彼らもキリスト教に改宗した。ヒーレ族はササン朝の属州のような存在であったにもかかわらず、ペルシャの宗教であったゾロアスター教を受け入れることはなかった。キリスト教はイラク、シリア、そしてガッサーニー族、ヒーレ族の他、多くのアラブの部族の間にも広まっていた。

キリスト教はイエメンや南部アラビアにおいては、主にナジュランに信徒が存在していた。この地には、エチオピ

アの統治時代にキリスト教がもたらされていた。ビザンチン帝国は、キリスト教を影響力や交易をより強めるための手段の一つとして用いた。そしてナジュランに神父を派遣し、この地に「ナジュランのカアバ」として知られる修道院をつくった。ローマ帝国は三四三年、イランに対抗する統一勢力を形成するため、イエメンのヒムヤール族に使節団を派遣した。その中には司教や神父が含まれていた。ユダヤ教徒たちはこの一団を妨害しようとしたが、その試みは成功しなかった。司教はヒムヤールの支配者から三つの教会を建てる許可を得た。これらの教会の一つは、当時のヒムヤールの首都であったザファールに、一つはアデンに、一つはバスラ湾岸にあった。[29]

その後、エチオピア支配第二期の時代においては、アブラハをはじめとしてエチオピアの知事たちはキリスト教の布教に大きな努力を払った。「象の事件」は、そのときの状況をよく示している。キリスト教はヒジャーズ地方のマッカ、マディーナ、ターイフで広まることはなかったが、その存在はよく知られていた。これらの地域では、奴隷たちからキリスト教を学び、受け入れた人たちもいた。ただ、キリスト教は中央アラビアにおける偶像崇拝に対して大きな影響力を示した。

c　ゾロアスター教

イスラームがもたらされた当時、ササン朝の公的な教えはゾロアスター教であった。この教えはアラブ人の間ではあまり広まることはなかった。アラビア半島におけるゾロアスター教の信徒の多くは、バーレーン、イエメン、オマーンに住むイラン人であった。バーレーンのゾロアスター教徒は数も多く、オマーンの人々と比べると、地域で大きな影響力を持っていた。なぜならバーレーンはイランにより近かったからである。ゾロアスター教徒はバーレーンへバスラ湾の東岸から移住していた。イエメン地方ではゾロアスター教は、エチオピアについでこの地を支配したイランの兵士たちによってもたらされた。

ゾロアスター教はアラブ人にはあまり受け入れられなかったが、イラン人とかかわりを持つ一部のアラブ人に受け

入れられていたとも伝えられている。いずれにしてもその数は大きなものではなかった。なぜならイラクでササン朝に従属していたヒーレ族は、ゾロアスター教どころかキリスト教すらも受け入れていなかったからである。イラン人がゾロアスター教を民族の教えとし、それを広めようとしなかったこともその要因である。ササン朝では宗教を広めることよりも、政治的・経済的な支配に重きを置いていたからである。

d　サービア教

サービア教はクルアーンで、[30]アラブ人にとっては啓典の民であるユダヤ教徒やキリスト教徒と共に思い起こされる存在として記され、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が登場する以前の時代、アッラーと来世を信じ、正しい行いをし、アッラーによって報奨を与えられ、恐れや苦しみのない人々として知られていた。[31]

サービア教の起源は、イーサー（イエス）以前の時代、ユダヤ教の公の解釈に対抗するものとして出現したナスラ派にまでたどることができる。最初期のサービア教の信徒たちはのちに聖ヤヒヤに従う集団とつながりを持ち、ヤヒヤが殺害された後はユダヤ人の迫害を受けるようになった。この迫害により彼らは一世紀頃、祖国パレスティナおよびヨルダンを離れ、北東メソポタミアのムスル周辺の山地に移った。さらにのちには、その地から南メソポタミアに移り定住した。そして、その地に神殿を建設した。アラブ人は彼らをサービア教徒と名づけた。この地域は七世紀イスラーム教徒によって征服され、サービア教の信徒は啓典の民として扱われた。

サービア教徒は創造主の存在を信じ、創造主の力、不可知論のような基本的な信仰を持ち、聖典も持っていた。彼ら独自の祈り、断食、洗礼、犠牲、聖なる日、祝日、神殿を持っていた。アルコールを禁じ、偶像崇拝も大きな罪と見なしていた。彼らの書によれば、サービア教徒にみられる洗礼、儀礼的な食事、崇拝行為はアーダム（アダム）に教えられたものである。サービア教徒の聖典では、聖ヤヒヤに大きな重要性が与えられ、彼を光の預言者、真の預言者と見なしていた。来世への信仰も持っていた。クルアーンで言及されているサービア教徒とは彼らのことだとされ

ている。[32] またアラブ人は、部族の教えを放棄し、他の教えに入る者のこともサービアと呼んでいた。マッカの住民は当初、この二つ目の意味で、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やイスラームの初期の信徒たちをサービアと呼んでいた。

アッバース朝時代に広まった見方では、特にハッラームの多神教徒たちがサービア教徒であったとされている。彼らのアッシリア、バビロンの時代から伝承してきた惑星崇拝に基づいた偶像崇拝は、サービア教徒の重要な特質とされている。しかしハッラームの多神教徒は、サービア教をかなりのちになって、おそらくはアッバース朝時代、ズィンミー（異教徒の庇護民）の立場を手に入れる目的で受け入れたのである。

惑星崇拝はハッラム、イエメン、そしてイラクの一部に存在した。南部アラビアでは、月、太陽、そして金星からなる三つの神という考え方が存在した。ここでは月は父神であり、太陽は母神であり、金星は息子の神であった。月の神の名前はアルマカフ、別名をワッドと呼んだ。アルマカフの偶像もつくられていた。月はすべての神の中で最も強い神と見なされていた。この信仰の起源はバビロンにさかのぼるとされている。

イスラーム以前の時代のアラブ人の中には、太陽崇拝者もいた。太陽は南部アラビアでは女性、タドムル族では男性の神とされていた。有名な偶像のうち、ラート、マナート、ウッザーは太陽を体現する神とされている。太陽が聖なるものとされ、神と見なされたことにより、イスラーム以前はアブドゥッシャムス（太陽の奴隷）という名前が広く使われていた。アブドゥッシャムスの名は、サバ族やクライシュ族にも用いられていた。月、太陽、金星以外の星も聖なるものと見なされていた。ラフム族、ヒムヤール族、そしてクライシュ族は、シリウスの星を神聖視していた。クルアーンもこの星について「また狼星（シリウス）の主もこの御方」[33] と述べている。この星を最初に崇拝し、またそれによってクライシュ族の偶像崇拝に反対を唱えたのはアブー・カブシャというフザー族出身の人であった。太陽崇拝を行う者は日の出、正午、日没の一日三回、太陽を象徴する偶像に祈りを捧げた。イスラームではこの三つの時間帯は、太陽崇拝者と区別するために礼拝してはいけない時間とされている

e　偶像崇拝

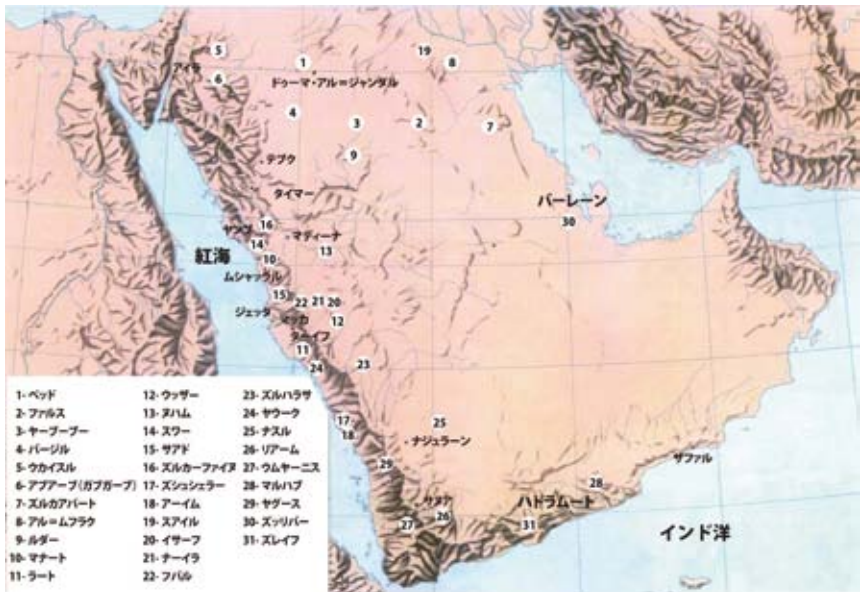
北部アラブ人、つまりイスマーイールとその子孫はもともと唯一神信仰を持っていたのではないかといわれている。カアバはその唯一神信仰の象徴である。偶像崇拝はその後、外部からもたらされたものである。そして、アッラーと他のものを同時に崇拝するようになっていき、アスナーム、アヴサン、アンサーブなどと呼ばれる偶像や石像などを崇拝の対象としたのである。これらの神殿は「家」と呼ばれ、立方体の家はカアバと呼ばれた。それらに加え、人々はそれぞれ固有の偶像を持つことを望み、それができない者はカアバやその他の神殿の前に気に入った石をまつり、その石の周りを回り崇拝行為を行った。遊牧民はテントの神殿をつくった。またそれぞれの家族が一つの偶像を持ち、家の中でそれを崇拝した。家の誰かが旅に出るときは、この偶像に手や顔をこすりつけた。それは旅に出る前に家で最後に行うことであり、しきたりとなっていた。旅から戻ったときも、その偶像に手や顔をこすりつけた。それもまた、旅から戻り家族に会う前に最初に行うことであった。[34] そのため、それぞれの家は神殿のようであった。それに加え部族が共通で使っている偶像も存在した。

ヒムヤール族にはサヌアにリアームという偶像があった。ターイ族にはファルス、ラビーア・ビン・カアブ族にはルダーという名の偶像があった。クーファとバスラの間のザフル地方にあるシンダードのズルカアバートという名の神殿は、バクル・ビン・ヴァーリ族とイヤード族のものであった。ズルハラサはマッカの南方、イエメンへ向かう道の途中のタバーラにあった。様々な冠が彫られたこの石像は、ハサーム族とバジーラ族のものであった。

ターイフに住むサキーフ族には、ラートという名の偶像があった。彼らはラートのために神殿もつくっていた。この神殿をカアバに対抗するものと見なしていた。ウッザという名の偶像は、クライシュ族とキナーナ族が崇拝していた。この偶像は、マッカの郊外、バトゥヌ・ナフラと呼ばれる地にあった。マディーナのアウス族、ハズラジュ族、及び周辺の部族が崇拝の対象としていたマナートという名の偶像は、紅海沿岸のアル＝ムシャッラルのクダイドと呼ばれる地にあった。クルアーンでは、これらの偶像の名前が次の章句で言及されている。「あなたがたは、アッラートとウッ

ザーを（何であると）考えるか。それから第三番目のマナートを」[35]

アラブ人たちは偶像を神聖視し、その周囲で犠牲の動物を屠った。しかし、これらの神殿はカアバが尊重される妨げになることはなかった。

カアバには百六十の偶像があった。これらのうち、最も大きく重要であったのがフバルである。この偶像はそもそも北部アラビアで神とされていたものであるが、のちにマッカに運ばれた。偶像を崇拝する習慣は、アムル・ビン・ルハイによってシリアからヒジャーズへもたらされた。アムルは病から逃れるため、バルカーと呼ばれるところへ行き、そこの泉で沐浴をした。ここで人々が偶像を崇拝しているのを目にし、なぜ崇拝しているのかと尋ねた。すると「私たちはこの像を崇拝している。雨を望めば降らせてくれるし、助けを求めれば助けてくれる」と彼らは答えた。アムルは、彼らからもらったいくつかの偶像を持ち帰り、それをカアバの近くに立てた。紅玉でつくられたフバルという偶像の右手が折れたときには、クライシュ族が新たに金の手を付けたことが伝えられている。[36] その後、クライシュ族はフバルをカアバの内部に移した。クライシュ族はアムル

イスラーム以前のアラビア半島の主要な偶像

をまねてつくった偶像をカアバの周辺に並べた。そして、偶像の前で占いの矢を引くこともあった。人々は旅立ち、商売、結婚、親のはっきりしない子の父親を定めること、税金を払わせること、井戸掘りなどの前に、この矢を引いて占った。そしてその結果に従って行動した。[37]

アラビア半島の他の地域の部族も、石や木、鉱物からなる様々な偶像を、彼らの地域や家に設置し始めた。クライシュ族は、カアバに来る巡礼者たちの興味を引き、彼らから利益を得るために、他の部族の偶像もカアバの周囲に並べていた。そしてサファーにはイサーフ、マルワにはナーイラという偶像があり、多神教徒たちはその前で犠牲を屠った。

クルアーンでは、ワッド、スワーウ、ヤグース、ヤウーク、ナスルといった名の多神教徒の偶像に言及している。「かれらは言います。『あなたがたの神々を捨てるな。ワッドもスワーウも、またヤグースもヤウークもナスルも、捨ててはならない。』」[38]

ワッドはカルブ族の偶像で、ドゥーマ・アル＝ジャンダルに存在した。スワーウは女性の形をし、フザイル族の偶像であった。ヤグースはライオンの形をし、イエメンのマズヒジュ族とジュレシュ族が崇拝していた。ヤウークは馬の形をし、サヌアから二日ほどのところにあるハイワンという村にあった。ナスルはヒムヤール族がユダヤ教を受け入れる前に崇拝していた偶像であった。これはヒジャーズの一部の地域でも知られた偶像であった。アラビアの地にはこれ以外にも多くの偶像が存在していた。

一部のアラブ人は、ジン（精霊）を地に住む神として見なし崇拝していた。[39] ジンは多くの出来事を起こすのだと信じていた。アッラーとジンとの間に親密な関係があると見なし、[40] アッラーと同位に置いた。[41] 自然の出来事によって生じた音は、ジンが姿を変えるときに生じると考えられ、人々は最後にはジンは偶像そのものとなったと信じていた。

アッラーが天使たちを生んだと信じる者もいた。アッラーはこれらの考えを否定し、クルアーンには次のように述べられている。「かれらは、『慈悲深き御方は子をもうけられます。』と言った。ああもったいない。いや、（かれら天使は）栄誉あるしもべである」[42]

そもそも、偶像崇拝が広まった後、アラブ人が様々な神や偶像を崇拝しながら、一方でアッラーのことも信じていた。アッラーに対しては偶像より上位の存在だと見なしていた。アッラーの名のもとに誓いを立てていた。多神教徒は偶像とは別に、自分たちを、そして天と地をアッラーが創造したのだと認識していた。クルアーンには、このことに関するいくつかの記述が見られる。

ある箇所では次のように記されている。

「もしあなたがかれらに、『天地を創ったのは誰か。』と問えば、かれらは必ず『アッラー。』と言うであろう」[43]

雨を降らせるのも、それによって大地に命を与えるのもアッラーであると認識していた。ある章句では次のように述べられている。

「もしあなたが、かれらに『誰が天から雨を降らせ、それで、死んでいる大地を甦らせるのか。』と、問うならば、かれらはきっと『アッラー。』と言うであろう」[44]

誓いを立てるときはアッラーの名において誓った。天使はアッラーの娘だと見なしていた。アッラーに息子や娘がいるとの中傷を行った。多神教徒は偶像が自分たちをアッラーに対してとりなすものであると考え、それらが自分たちをアッラーに近づけると考えていた。これらに関しては、クルアーンで次のように述べられている。

「だがかれを差し置いて(他に)保護者を求める者は、『わたしたちがかれら(神々)に仕えるのはただわたしたちがアッラーの御側に近づくためである。』(という)」[45]

イスラーム以前の時代には、多神教徒は偶像をまつった建物で祈り、ひれ伏し、周回し、誓いの捧げものを行い、犠牲の動物を屠り、お金を寄付していた。これらの行為の目的は、健康や富を得ること、戦いに勝つこと、男の子をもうけることなどであった。そうしたことについて、偶像のとりなしを求めたのである。

このように、偶像崇拝には現世的な目的があった。彼らは来世を信じていなかったからである。復活については「古いおとぎ話」だと見なしていた。しかしなかには、来世を信じる人々もいた。

アラブ人の中には、偶像に敬意を払わない人々もいた。現世的なことを求め、願いがかなわなかったとき、あるいは占いの矢を引いたが望む結果が出なかったときなど、彼らは怒り偶像をののしった。文献にはこれに関する多くの出来事が記されている。あるとき、報復の意志を持つ者がタバーラにあったズルハラサという偶像を訪れた。彼は占いの矢を引いたが、その結果は報復を禁じるものであった。三度占いを繰り返したが、三度とも同じ結果が出た。男は腹を立てて矢を取り、岩の形をした偶像に投げつけ、「もしあなたの父も殺されていたら、私の報復の邪魔をすることはなかっただろうよ」と怒鳴ったのであった。[46]

イブラーヒームから伝えられた崇拝行為や伝統のいくつかは継承されていた。しかしそれもまた、アラブ人を偶像崇拝から救うことはできずにいた。部族の人々は、自分たちの偶像に敬意を示し、祈ることをやめずにいた。たとえば、ヤスリブの巡礼者はカアバで周回を行い、アラファトに留まった後、ミナーにおける義務も果たし、マナートに向かい、そこでひげをそり落とし、偶像に敬意を表していたのである。[47]

f　ハニーフ

イスラーム以前の時代、アッラーの唯一性を信じ、偶像崇拝を否定し、クライシュ族の誤った慣習や信仰に異議を唱えていた人々がいた。彼らをハニーフと呼ぶ。唯一神の信仰をもつハニーフたちは、イブラーヒームの教えを実行しようとしていた。ユダヤ教やキリスト教には距離を置き、偶像崇拝にも対抗していた。彼らは文字の読み書きができ、ヘブライ語やシリア語などを理解することができた。彼らの中には、イブラーヒームの教えに最も近かったキリスト教を信じる者もいた。

ハニーフたちは全体的な統一を成し遂げていなかった。同様に共通の崇拝行為も持っていなかった。それぞれ個別に宗教生活を送っていた。文献にはハニーフとされているいくつかの名前が見受けられる。ワラカ・ビン・ナウファル、ウベイドゥッラー・ビン・ジャフシ、ウスマーン・ビン・フワイリス、ザイド・ビン・アムルなどである。彼ら

は一堂に集まり、偶像崇拝が迷信であること、祖先イブラーヒームの唯一神の教えに従うことを確認し、その考えを確固としたものにするため各地に出向いた。ワラカ・ビン・ナウファルはダマスカスに行き、キリスト教を受け入れ律法と聖書を学んだ。ウベイドゥッラー・ビン・ジャフシは思考をめぐらしていた。ウスマーン・ビン・フワイリスはビザンチン皇帝の下でキリスト教を受け入れ、その地に留まった。ザイド・ビン・アムルはキリスト教もユダヤ教も受け入れることはなく、偶像を崇拝することもなく、偶像の名において屠られた肉は絶対に口にしなかった。女の子が生き埋めにされることにも反対していた。彼は詩で、いつもアッラーの唯一性を詠っていた。アラビアにはこの四人の他にも、アッラーの唯一性と来世を信じるハニーフたちがいた。有力な演説家であるクス・ビン・サイダやターイフの詩人ウマイヤ・ビン・アブーサルトなどもそうした人々であった。[48]

預言者としての活動を始める以前のムハンマド（彼の上に平安あれ）

一　家族

ここで、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の祖父、父、母、彼らの家族、近い親戚について、そしてハーシム家全体についていて触れてみたい。妻や子供たちについてはのちの項で述べる。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、マッカに住むクライシュ族の中のハーシム家の出身である。その血筋は、フィル（クライシュ）・ビン・マーリクからイブラーヒームの孫アドナンにまでさかのぼる。父はアブドゥッラー・ビン・アブドゥルムッタリブ、祖父はアブドゥルムッタリブ・ビン・ハーシム、曽祖父はハーシム・ビン・アブドゥマナーフ、父の母はファーティマ・ビント・アムルであった。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）の父方の親族の紹介を、曽祖父ハーシムから始めたい。ハーシム家の始祖であり、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の曽祖父であるハーシムの本来の名前はアムルであった。マッカで飢饉が起きたある年、曽祖父はシリアからソムン（ふくらんだ形のパン）を運び、小さくちぎってティリットという料理をつくらせた。そこで「細かくする」という意味のハーシムと呼ばれるようになったのである。それ以降はこの名前で思い起こされるようになったのである。

先にも述べたように、クライシュ族の夏、冬のキャラバンの旅を最初に指揮し、それを部族の慣習にしたのが彼であった。ハーシムは交易のために出かけたマディーナで、アディ・ビン・ナジャール家のセルマ・ビン・アムルと結婚した。この結婚によってムハンマド（彼の上に平安あれ）の祖父シャイバ（アブドゥルムッタリブ）が誕生した。ハーシム

はその後旅の途中、ガッザで死亡し、そこに埋葬された。[49]

ハーシムにはムハンマド（彼の上に平安あれ）の祖父であるアブドゥルムッタリブを含めて五人の息子と五人の娘があった。アブドゥルムッタリブは八歳のときまで、マディーナの母の元で過ごした。ハーシムの死後、ハーシムの兄弟ムッタリブはマディーナを訪れ、母セルマから許可を得て、アブドゥルムッタリブをマッカに連れてきた。町に入るとき、ムッタリブのラクダと共にいる子供を見たマッカの人々は、彼をムッタリブの奴隷と思い込みアブドゥルムッタリブ（アブドは奴隷の意味）と呼んだ。そしてそれ以来、彼はその名前で知られるようになったのである。ムッタリブが彼を自分の奴隷だと紹介した、という伝承もある。

ハーシム家の長のアブドゥルムッタリブは、巡礼者に水や食べ物を供給する任務（シカーヤとリファーダ）についていた。この任務は父から引き継いだものであった。彼は自分が見た夢に基づき、ジュルフム族がマッカを去るときに埋めてしまったザムザムの泉の場所を探り当て、そこに新たな井戸を掘った。クルアーンでも言及されている「フィールの事件」が起きたときは、カアバを破壊しに来たアブラハとの会見を行った。[50] ハーシムの他の息子たちアブー・サイフィー、アサド、そしてナドゥラの血筋は、イスラームが誕生した当時は存続していたが、のちに途絶えている。そのためハーシムの一族からはアブドゥルムッタリブの血筋のみが継続した。

ザムザムの井戸と当時の水の汲み方

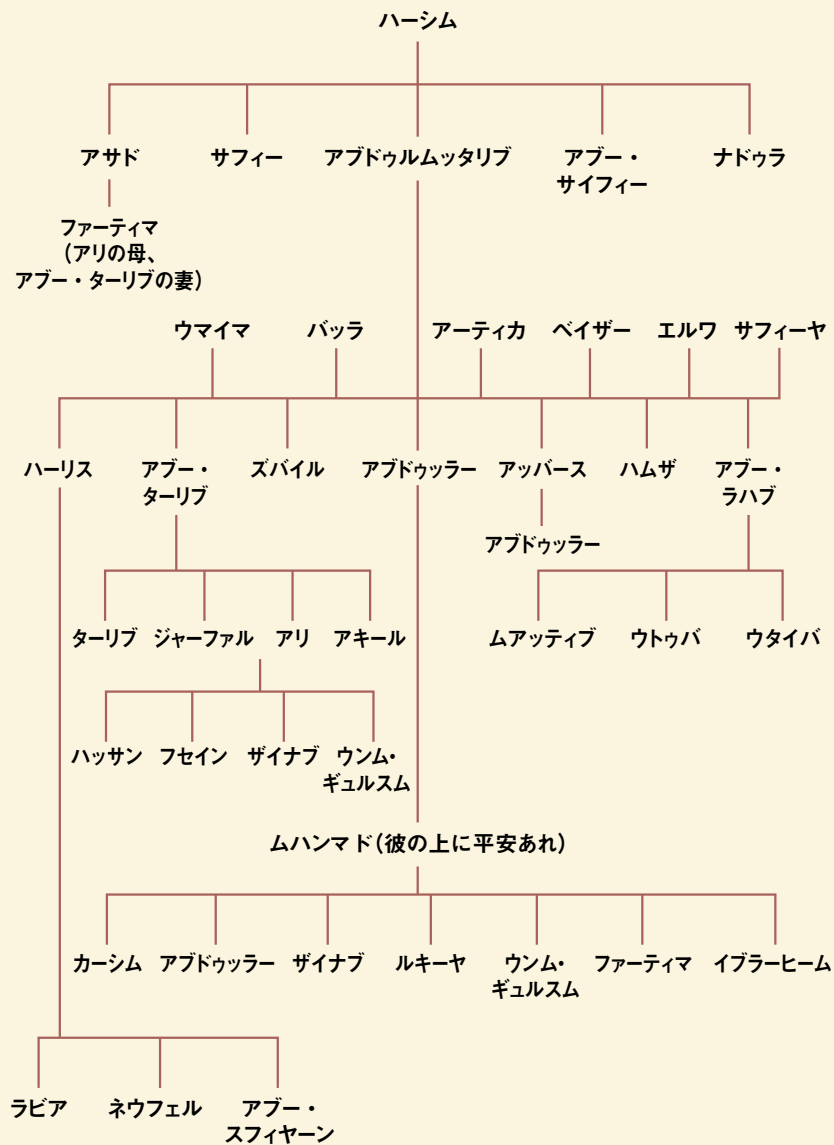
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の父アブドゥッラーは、アブドゥルムッタリブの息子の一人であった。アブドゥッラーが体験した最も大きな出来事は、父が彼を犠牲に捧げようとしたことである。その出来事は次のように起こった。

ザムザムの井戸を掘っていた頃、アブドゥルムッタリブにはハーリスという名の息子が一人いるだけであった。そのため、クライシュ族の有力者たちが彼を苦しめるようになった。彼は自分を支える息子が十人いれば、その一人を犠牲として捧げるとの誓いを立てた。そして十人の息子が生まれると、その中の一人を犠牲に捧げることになった。その子を決めるくじで、まずアブドゥッラーが選ばれた。しかし、ラクダを百頭にまで増やして再度行われたくじで、アブドゥッラーの代わりに百頭のラクダが捧げられることになったのである。そのときアブドゥッラーは、兄弟の中で最年少であった。[51]

ムハンマド（彼の上に平安あれ）にはハーリス、ズバイル、アブー・ターリブ、アブー・ラハブ、ハムザ、アッバースという叔父がいた。このうちハーリスとズバイルはイスラームが登場する以前に亡くなった。それ以外の叔父はイスラームの時代にまで生きることができた。そのうちアブー・ラハブとアブー・ターリブはイスラームを受け入れなかった。ハムザとアッバースはムスリム（イスラーム教徒）になった。ハーシム家はアブドゥルムッタリブの四人の息子、すなわちアッバース、ハーリス、アブー・ターリブ、アブー・ラハブによって、アッバース家、ターリブ家、ハーリス家、ラハブ家となった。アブドゥルムッタリブのもう一人の息子、すなわち預言者の父アブドゥッラーの血筋は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の娘ファーティマによって受け継がれた。

ハムザには三人の息子と一人の娘がいた。しかしその血筋が継承されることはなかった。[52] またムハンマド（彼の上に平安あれ）にはアーティカ、ベイザー、エルワ、バッラ、サフィーヤ、ウマイマという叔母がいた。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）の母は、クライシュ族のズフラ家のアーミナ・ビントゥ・ワフブである。アーミナの父ヴァフブ・ビン・アブドゥマナーフは、ズフラ家の重要な人物であった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の

預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)の家系図
ハーシム
アサド
サフィー
アブドゥルムッタリブ
アブー・
サイフィー
ナドゥラ
ファーティマ
(アリの母、
アブー・ターリブの妻)
ウマイマ
バッラ
アーティカ
ベイザー
エルワ
サフィーヤ
ハーリス
アブー・
ターリブ
ズバイル
アブドゥッラー
アッバース
ハムザ
アブー・
ラハブ
アブドゥッラー
ターリブ
ジャーファル
アリ
アキール
ムアッティブ
ウトゥバ
ウタイバ
ハッサン
フセイン
ザイナブ
ウンム・
ギュルスム
ムハンマド(彼の上に平安あれ)
カーシム
アブドゥッラー
ザイナブ
ルキーヤ
ウンム・
ギュルスム
ファーティマ
イブラーヒーム
ラビア
ネウフェル
アブー・
スフィヤーン

祖母は、クライシュ族のアブドゥッダール家のバッラ・ビント・アブドゥルッザである。したがって、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の父方も母方もクライシュ族の重要な家の出身であった。この二つの支族はキラーブ・ビン・ムッラでつながっていた。[53]

アブドゥッラーは結婚する年頃を迎えると、父の仲介によってアーミナ・ビント・ワフブと結婚した。伝統にのっとり、結婚生活のうちの三日間はアーミナの家で過ごした。そしてアブドゥッラーは結婚の数ヵ月後、夏の交易のためシリアへと向かった。しかしそこからの帰途、ヤスリブにいる父の叔父のところで病気に倒れた。一ヵ月ほど臥せったのち彼は亡くなった。そしてそこに埋葬された。父を亡くしたときムハンマド（彼の上に平安あれ）はまだこの世に生まれてきていなかった。アブドゥッラーが遺産として残したのは、五頭のラクダ、数十頭の羊、そしてウンム・アイマンという名の奴隷であった。[54]

二　誕生、子供時代、青年時代

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は西暦五七一年四月二十日、マッカのバーニ・ハーシム地区で、父アブドゥッラーの残した家で誕生した。フィール事件の五十五日後、ラビーウ・アル＝アウワル月（三月）の十二日の夜のことであった。[55]

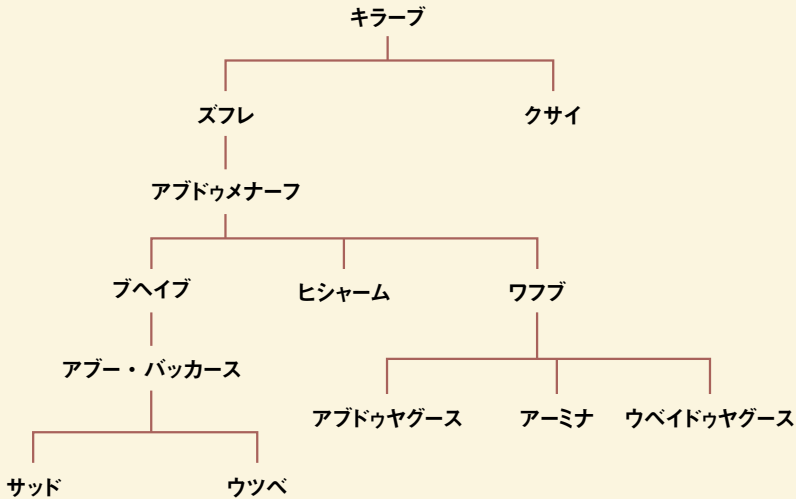
アーミナは出産後すぐに義父アブドゥルムッタリブに知らせを送り、孫の誕生を伝えた。アブドゥルムッタリブが来ると、アーミナは妊娠中に見た夢で、子供にアフマドもしくはムハンマド（彼の上に平安あれ）という名をつけるよう言われたことを伝えた。アブドゥルムッタリブは子供を抱いてカアバへと赴いた。そしてアッラーに感謝し、その名をムハンマド（彼の上に平安あれ）とした。誕生から七日目にマッカの住民が訪問してきた。預言者が割礼を受けた状態で誕生したという伝承もあるが、[56] 生後七日目に祖父によって割礼を受けたとも伝えられている。[57] アブドゥル

ムッタリブは、祖先にムハンマド（彼の上に平安あれ）という名前の人がいないことを思い出し、なぜこの名前を付けたのかと問う人に対し、「彼が天と地で賞賛されることを望んだから」と答えた。[58] 預言者のもう一つの名はアフマドである。アラブ人の中には、すでにムハンマド（彼の上に平安あれ）もしくはアフマドという名前を持った人がいた。文献にその名前を持つ人を見出すことができる。[59] ただ、これらの名前はそれほど広く使われていたわけではなかった。

誕生後の三日間もしくは九日間、母のアーミナが、その後は叔父アブー・ラハブの奴隷スワイバがムハンマド（彼の上に平安あれ）に乳を与えた。スワイバはそれ以前にハムザ、それ以降にアブー・サラマに乳を与えているため、この二人はムハンマド（彼の上に平安あれ）の乳兄弟にあたる。[60]

マッカの暑さは赤ん坊が健康に育つにはふさわしくなかったので、町の有力者たちは新しく生まれた子供たちを遊牧民の乳母に託した。それによって子供たちは砂漠の健やかな空気の中で育ち、同時に明快なアラビア語を学ぶことができた。子供たちは九歳、十歳頃まで乳母のもとで育った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の誕生した頃、ターイフの近くの砂漠で遊牧生活を送るハワージン族のサアド・ビン・バクル家から、ハリーマ・ビント・アブーズアイブを含む十人の女性が、乳母として面倒を見るべき子供を求めて町に来ていた。彼女たちは乳母になって収入を得ようとしていたので、裕福な家の子供たちを選んだ。ハリーマも当初、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の乳母になることを望まなかった。他の女性も片親であるという理由で預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の乳母になることをためらっていたが、夫から手ぶらで帰ることのないようにと言われていたので、彼の乳母になることにした。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）を抱いて帰っていった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は乳母の家族にとても愛され、彼らに幸運をもたらし恵みを運んだ。そして家族は豊かになっていった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が三歳を迎えようとする頃、ハリーマは彼を家族に見せるためマッカに連れていった。アーミナはマッカでペストが流行していたことから、彼が乳母のもとに留まることを望んだ。ハリーマはそれを聞きムハンマド（彼の上に平安あれ）を連れ帰った。その後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が五歳もしくは四歳のとき、マッカに連れてきて母親に引

き渡した。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）は六歳までマッカで母と暮らした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）にはアブドゥッラー、ウナイサ、シャイマーという乳兄弟がいた。乳母、乳父、乳兄弟がイスラームで認められているのは周知の通りである。[61] サアド・ビン・バクル家は、きれいなアラビア語を話すことで知られていた。預言者がきれいな言葉を話すのは、幼少時代をこの一族と共に過ごしたからであるとされている。[62] 諸文献によると、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が乳母の家に住んでいたとき、奇跡的な出来事がいくつか起こったとされる。その中で、「シャック・シャドル（胸が開かれる）」という事件は重要なものと見なされている。この出来事は諸文献によると次のように伝えられている。

ハリーマの話では、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマッカに連れてこられてから数ヵ月後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が乳兄弟と共に家の裏で子羊の群れを追っていたとき、乳兄弟が両親のもとに駆け込んできた。白い服を着た二人の男がムハンマド（彼の上に平安あれ）を捕まえ、地面に寝かせ、胸を開け、中を触っていると伝えた。ハリーマと夫が駆けつけると、

ムハンマド（彼の上に平安あれ）の顔色がひどく悪かった。何が起きたのかと尋ねるハリーマに、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「白い服を着た二人の男が自分を寝かせて胸を開け、何かを探した」と答えた。それを聞いた乳母と夫はムハンマド（彼の上に平安あれ）を抱いてテントに戻った。[63]

この出来事に関しては異なった伝承もある。その伝承では、ムハンマド（彼の上に平安あれ）本人がある質問に答えてこの出来事を語ったとしている。[64]

さらに、十歳の頃、ヒラーの洞窟で天使ジブリール（ガブリエル）と最初に出会ったことなども諸文献には見受けられる。出来事に関する説明は年齢、場所、時間、それが何度起こったか、というような点でお互いに異なっており、矛盾も見られる。様々な研究によって、上に述べた伝承は、伝承者と信頼性の観点から批判もされている。

もしこの出来事が、アッラーによってムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者となるための準備として行われたものだと主張するのであれば、その事件は精神的な清めとしてとらえるべきである。しかしこの伝承では、その事件は物理的な手術のような形で行われたとされている。またこの出来事は、クルアーンの「胸を広げる章」と結び付けられてきた。[65]しかしこの章では、「われは、あなたの胸を広げなかったか」（胸を広げる章第一節）とされている。胸を開く、ではなく胸を広げる、である。ここで言われている胸を広げるとは、真実が彼に告げられ、預言者としての務めをどのように果たすかという迷いや恐れが、アッラーによって胸を広げられることによって取り除かれ、心が穏やかになり楽になる、ということを意味している。つまり物質的なものではなく、精神的なものなのである。同じ章の第二、三節では、「あなたから重荷を降したではないか。それは、あなたの背中を押し付けていた」と述べられている。これは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の背にあった物質的な重荷をアッラーが地に置かれた、ということをいっているのではない。預言者を悲しませ、重くのしかかる困難をアッラーが取り除かれた、ということである。[66]すなわちこの章の第一節も、物質的な手術ではなく、精神的な出来事を示していると見なすべきであろう。したがって外科的な作業が必要とされなかったことは明らかである。

ただ、精神的な出来事が象徴的に語られ、後世の伝承者によって、このような出来事として見なされるようになったのであろう。

また次のような側面も考えられる。奇跡的な出来事が、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がまだ幼少のうちから起きていたということを証明しようとして、このような伝承が出現した可能性である。また「胸を開く」という行為は東方の文化によく見られ、アラブ人も知っている神話に出てくる話でもある。同じような話がムハンマド（彼の上に平安あれ）以前の時代にあり、その古い物語がムハンマド（彼の上に平安あれ）に当てはめられた、という見方もある。[67]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が六歳の頃、母アーミナはムハンマド（彼の上に平安あれ）と奴隷のウンム・アイマンを連れてマディーナへ向かった。その目的は、出産前に亡くなった夫アブドゥッラーの墓を訪ね、同時にその家族を訪問することにあった。マディーナでは、アンナービガの家で客となった。アブドゥッラーの墓はこの家の敷地内にあった。そこに一ヵ月ほど滞在し、マッカへの帰途、母アーミナはマディーナから約百九十キロのところに位置するアブワで病に倒れ亡くなった。そしてそこに埋葬された。ウンム・アイマンはマッカまでムハンマド（彼の上に平安あれ）を連れ戻り祖父に引き渡した。また、アブドゥルムッタリブは一行と共に旅をしたとの伝承もある。[68]ムハンマド（彼の上に平安あれ）はのちにマディーナで、このときの旅についての記憶を語っている。[69]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は母を亡くした後、八歳まで二年間、祖父のもとで育った。世話はウンム・アイマンが行った。祖父はムハンマド（彼の上に平安あれ）をとても愛していた。彼なしで食卓につくこともなかった。

カアバの壁の陰にあたるところに、アブドゥルムッタリブのための腰掛が置かれていた。彼に敬意を表し誰もそこに座ろうとはしなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）がそこに座ったとき、叔父たちは彼を下ろそうとした。だがアブドゥルムッタリブは「私の孫をそのままにしておきなさい。アッラーに誓って言うが、この子は将来大きな名誉を得るだろう」と言い、腰掛に共に座り背を撫でた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が八歳のとき、祖父が亡くなった。[70] ムハンマド（彼の上に平安あれ）は祖父の死をとても悲しんだ。ウンム・アイマンは、その日、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が嘆き悲しんだと伝えている。[71]

アブドゥルムッタリブは亡くなる前に孫をアブー・ターリブに託した。ズバイルとアブー・ターリブとの間でくじが引かれたとも、ムハンマド(彼の上に平安あれ)がアブー・ターリブを選んだとも伝えられている。ズバイルはアブー・ターリブとアブドゥッラーの兄弟であることも記しておきたい。アブー・ターリブはムハンマド（彼の上に平安あれ）を自分の本当の子供のようにして愛した。どこかに出かけるときは必ず彼を伴った。アブー・ターリブは亡くなるまで、四十年以上も真の父親のように振舞った。彼を大切にし、守り、成長のためにできる限りのことをした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）もアブー・ターリブの仕事を手伝った。なぜならアブー・ターリブの家族は人数が多い割に収入が少なく、経済的な状況はあまりいいとは言えなかったからである。アブー・ターリブの妻ファーティマ・ビント・アサドも真の母親のように世話をした。アリーの母親でもあったこの女性は、自分たちの子供より先にムハンマド（彼の上に平安あれ）に食事を与えた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・ターリブの死後、信仰に目覚め、マディーナへ聖遷を行ったファーティマ・ビント・アサドをしばしば訪問した。[72]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が十二歳（九歳とも伝えられる）のとき、アブー・ターリブは交易のためにシリアへ行くことにした。ムハンマド(彼の上に平安あれ)は自分も連れて行ってほしいと主張した。そこでアブー・ターリブは彼を伴って出かけた。イスラーム史の諸文献によれば、このキャラバンがシリアのブスラの町に留まっていたとき、一つの雲がキャラバンの中の誰かに影を落としているのを目撃したバヒーラという神父は不思議に思い、キャラバンの人々全員を食事に招待した。バヒーラはその中の子供に注目し、いくつかの質問を投げかけた。そしてアブー・ターリブに、彼の甥ムハンマド（彼の上に平安あれ）が聖書でその到来が約束されている預言者であることを述べ、彼を丁重に保護するようにと忠告した。アブー・ターリブはその助言に従い、ダマスカスへ行くことを断念しマッカ

に戻ったのであった。[73]

この伝承に関しては、のちにキリスト教徒の歴史家とイスラーム教徒の歴史家との間で論争が生じた。この出来事はキリスト教徒の歴史家によって悪用されたこともあった。彼らの中にはこの出来事を否定する者もいた。啓典の民とされる人々が、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者になるということを知っていたという伝承について、それはキリスト教からイスラームに改宗した人たちがでっち上げたものである、という主張も行われた。また、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がイスラームの根本的な教義の一部を、バヒーラから学んだと主張する者もいた。さらには、「クルアーンを書いたのはバヒーラだ」と主張する者すらいた。この種の西洋の学者たちの主張を不快に感じたムスリムの学者たちの一部は、バヒーラにまつわる伝承がすべて誤りであるとし、その伝承を伝えた人々の中にはその様子を実際に見た人は誰もいないと主張した。さらに、その時点でまだ子供であったムハンマド（彼の上に平安あれ）が、バヒーラからイスラームの根本的な教義を学んだというのは常識的にも論理的にもおかしいと考え、この出来事を完全に否定したり、あえて研究する必要はないという見解を示したりした。バヒーラとのこの出来事が真実であったとすると、当時九歳もしくは十二歳であったムハンマド（彼の上に平安あれ）が、数時間のうちにクルアーンを暗誦し、新たな宗教上の思想を学び、長い期間ののちにそれを周囲の人々に伝えることは不可能である。さらにこの伝承では、バヒーラがムハンマド（彼の上に平安あれ）に何かを読誦した、何かを教えたということは記録されていない。もしそのような事実があったとしたら、当時同じキャラバンにいた人たちが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者としての活動を始めた後、そのことを主張しなかったとは考えにくい。そして何よりも、イスラームのタウヒード（神の唯一性）の考え方とキリスト教の三位一体説とは全く異なるものである。またクルアーンには、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が青年時代にキリスト教と接触があったことや、そこから何かを学んだことを示す論拠は一切存在していない。[74]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の青年時代において最も重要な出来事の一つは、第四次フィジャール戦争

に参加したことである。イスラームが登場する以前のアラブの諸部族の間では、様々な理由から紛争が絶えなかった。その中の四つは、悪事や流血が禁じられていた月に行われたもので、それはフィジャール戦争と呼ばれている。ムハンマド（彼の上に平安あれ）がこの戦争に加わったのは二十歳のときであった。この戦役ではクライシュ族とキナーナ族がカユス・アイラーン族やその仲間の部族と対峙した。この戦いは、キナーナ族のベッラド・ビン・カユスが、商売上の競合が原因でハワージン族のウルワ・ビン・ウトゥバによって殺害されたことに端を発している。戦いはハワージン族がクライシュ族とその同盟部族を攻撃し、ハラームという神聖な地域にまで達したことにより起こった。この戦いでクライシュ族とキナーナ族の司令官はハルブ・ビン・ウマイヤであった。さらにクライシュ族の各支族も、それぞれ戦いに参加した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）自身は戦わず、叔父たちのために物資の保全を行い、放れた矢を盾で防ぎつつ回収し、彼らに渡したと伝えられている。一方で、弓を放ち、そのことを後悔しなかった、と伝えている文献もある。また他の文献では、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のいた隊列が対戦した敵はすべて敗れ、そのことがクライシュ族の司令官ハルブ・ビン・ウマイヤの注意を引いていたとされる。クライシュ族にとってこの戦役の重要性は、戦いが禁じられているハラームの月の和平を侵害したことに対する処罰や交易活動の妨害を取り除くことと、神聖なる地とされている地域を守ることにあった。[75]

アラブ人の間では、防衛、庇護、弾圧を受けたときの救済などを目的として同盟が結ばれた。これは二つ以上の部族が、そこに属する人たちの間の相互扶助を保つために行うものであった。これはヒルフと呼ばれるものであった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はフィジャール戦争の少し後に、ハーシム、ムッタリブ、アサド、ズフラ、タイムの各支族の間で結ばれたヒルフ・アル＝フドゥールと呼ばれる条約に加わった。この条約はムハンマド（彼の上に平安あれ）の叔父ズバイルによって提案された。タイム族の有力者であるアブドゥッラー・ビン・ジュドアンの家に集まった同盟の立役者たちは、「迫害された人の権利を迫害者の手から取り戻すまで戦う。マッカの人々、そしてマッカに外部から入ってきている人々のうち、不正を受けた者と共に彼らの権利が回復されるまで彼らを支える」ことを決めた。

この条約は次の出来事を引き起こしたといわれる。ズバイド族の一人がマッカに来て、持ってきていた品物をアース・ビン・ヴァイルに売った。だがアースはその対価を支払わなかった。このズバイド族の男は、アフラーフ族のアブドゥッダール、マフズム、ジュマフ、サフム、そしてアディーにそのことを告げた。しかし彼らは、アースと対立してまでこの男を助けようとはしなかった。そこで彼はクライシュ族に助けを求めた。ズバイル・ビン・アブドゥルムッタリブとアブドゥッラー・ビン・ジュドアンの先導によってヒルフ・アル＝フドゥール条約が適用され、それに加盟していた人々はアース・ビン・ヴァイルのもとに赴いた。そして品物の対価を受け取り、そのズバイド族の男に与えたのである。[76] 二十歳のときこの同盟に参加したムハンマド（彼の上に平安あれ）は、のちにこの出来事を賞賛して次のように語っている。「アブドゥッラー・ビン・ジュドアンの家で条約が締結されたとき、私はその場にいた。この条約を、たとえそれが立派なラクダの一群であっても交換することはできない。イスラームにおいて、このような同盟に呼ばれたら、すぐに参加するだろう」[77]

三　ハディージャとの結婚

この二つの出来事の後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が二十五歳でハディージャと結婚するまでの間に起きた出来事について詳細に記した文献は存在しない。この時期にムハンマド（彼の上に平安あれ）は叔父のアブー・ターリブの手伝いをしていたとされる。ハディージャと結婚する前に、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼女のキャラバンをシリアに連れて行き、また戻ってきたことも知られている。ここではまず、ムハンマド（彼の上に平安あれ）と結婚する前のハディージャのことについて簡単に述べてみたい。

ハディージャはクライシュ族のアサド家出身のフヴァリド・ビン・アサドの娘である。彼女はムハンマド（彼の上に平安あれ）と結婚する前に二度結婚している。まずアブー・ハーラと、そして彼の死後、アティーク・ビン・アー

ビドと結婚した。この二度の結婚のいずれにおいても子供が生まれている。二度目の夫と死別するに至ってハディージャは子供と仕事に打ち込むようになっていた。他の裕福なクライシュ族たちのように自らキャラバンをシリアやイエメンに派遣した。彼女は知的で能力が高く、貞節で裕福な美しい女性だったので、クライシュ族の有力者たちは誰でも彼女との結婚を望んでいた。しかし彼女は多くの結婚の申し込みをことごとく拒否していた。

ハディージャとムハンマド（彼の上に平安あれ）は共にマッカの住人であり、お互いに知り合いの仲であったが、結婚の少し前にはさらに親しい間柄になっていた。[78] 預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はハディージャの交易品である香料をシリアへと運んでいた。シリアへの旅にでる以前には、ハディージャの代理人メイセラと共にヒジャーズとイエメンの交易ルート上にあるフバーシャの市場に商いのために出かけていたと伝えられている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が二十五歳のとき、ハディージャがキャラバンをシリアに派遣するため人を探していることを知ったアブー・ターリブは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）にそれを伝え、ハディージャに仕事を求めるように言った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・ターリブのもとで交易の経験を積んでいた。ハディージャは人々が信頼し正直な人だと賞賛していたムハンマド（彼の上に平安あれ）に、喜んでキャラバンを任せることに決めた。文献によっては、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の正直さや信頼の置ける人柄、徳の素晴らしさを知ったハディージャがムハンマド（彼の上に平安あれ）に仕事を依頼した、ともされている。[79] ハディージャは奴隷のマイサラをムハンマド（彼の上に平安あれ）のお供につけた。ハディージャは旅の報酬として通常二頭のラクダを与えるところを、ムハンマド（彼の上に平安あれ）にはその二倍の四頭を与えることにした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はシリアのブスラまで行き、マッカから運んだ品物を売り、また必要な品物を買い、マイサラと共にマッカに戻った。そして持ち帰った品々をハディージャに引き渡した。このキャラバンはそれ以前のキャラバンの二倍の利益をあげた。マイサラはハディージャにムハンマド（彼の上に平安あれ）について賞賛を交えて語った。キャラバンの成果に満足したハディージャは、約束していた対価の二倍をムハンマド（彼の上に平安あれ）に支払った。[80]

ハディージャはその後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に求婚した。[81] その結婚はハディージャの友人であるネフィサ・ビンティ・ウマイヤの仲介によるものであったとされている。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はハディージャの申し出について叔父たちに相談した。そして、それを受け入れたのである。婚姻の儀式や宴のための日取りが決められ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は叔父のアブー・ターリブやハムザと共に、ハディージャの家へと出向いた。そこにはクライシュ族の有力者たちも集まっていた。ハディージャは父をフィジャールの戦いで失っていたため、叔父のアムル・ビン・アサドに知らせを送った。叔父の息子であるヴァラカ・ビン・ナウファルもその場に来ていた。アラブの伝統に従い、アブー・ターリブとヴァラカ・ビン・ナウファルがそこで演説を行った。アブー・ターリブはムハンマド（彼の上に平安あれ）の優れた徳について語り、叔父にハディージャをムハンマド（彼の上に平安あれ）にくれるように求めた。婚姻の対価として支払われるものが告げられ、それは二十頭のラクダもしくは五百ディルヘムの銀とされた。ヴァラカ・ビン・ナウファルも、この婚姻が彼らにとって栄誉であると語った。アブー・ターリブはラクダを屠り宴の食事を整えた。[82]

数日後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は妻の家へと転居するためアブー・ターリブの家を出た。その後二人は幸福な生活を送った。愛情と敬意、お互いの固い絆の上に成り立っていたこの結婚は、イスラームの歴史を通して人々の模範とされてきた。現在でも、それは模範的な家庭とされている。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はハディージャとの結婚の後、経済的困難から解放され、暮らしは安定した。結婚後、最初の数年間はハディージャの財産によって交易を行っていた。一方で、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は若い頃から世話になっていた叔父アブー・ターリブのことを忘れたわけではなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は三十六歳のとき、叔父アブー・ターリブの負担を軽減するため五歳になっていた彼の息子のアリーを引き取った。その後アリーは、ヒジュラ（聖遷）のときまで、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のそばで育てられた。アリーの弟のジャーファルも、別の叔父に引き取ってもらうよう手配した。[83]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はハディージャと結婚したとき二十五歳であった。そのときハディージャは四十歳もしくは四十六歳、あるいは二十八歳であったとする伝承がそれぞれ存在する。[84] 一般的には四十歳であったとされている。しかし、二十八歳であったとする説も有力である。なぜなら二人の間には六人の子供が生まれているからである。それは四十歳以上だと不可能だと言い切ることはできなくても、結婚当時二十八歳だったとすればより現実的だからである。アフマド・アル＝タージューは、「もしハディージャがムハンマド（彼の上に平安あれ）と結婚したとき四十歳だったとすれば、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に啓示が下された時点で五十五歳だったということになる。果たしてこうした高齢の女性が六人もの子供を生むことができるであろうか。実際、啓示以降アブドゥッラーという子供が生まれている」と記し、ハディージャが二十八歳で結婚したとの伝承が正しいと見ている。[85]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とハディージャの間には二人の男の子と四人の女の子が誕生している。男の子の名はカーシムとアブドゥッラーであり、女の子の名はザイナブ、ルキーヤ、ウンム・ギュルスム、そしてファーティマであった。二人の男の子はまだ乳児の頃に死亡している。女の子のうちザイナブ、ルキーヤ、ウンム・ギュルスムはムハンマド（彼の上に平安あれ）の生前、ファーティマはムハンマド（彼の上に平安あれ）の死後半年で亡くなっている。アラブ人には、最初に生まれた子供の名前によって呼ばれるという風習があり、ムハンマド（彼の上に平安あれ）とハディージャとの間に最初に生まれたのがカーシムであったことから、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・アル＝カーシム（カーシムの父）と呼ばれていた。

四　カアバ聖殿での仲裁

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は三十五歳のとき、改築されたカアバ聖殿の壁に黒い石を置く作業のことで、クライシュ族の支族の間の仲裁を行った。当時マッカではしばしば洪水が起こり、カアバ聖殿も長年その被害を受け

ていた。壁にひび割れができ、建物には崩壊の危機が迫っていたのである。建物には屋根がないため、内部の貴重なものが盗難にあう危険もあった。そのため、クライシュ族は協議し、この建物を改築することにしたのである。ちょうどその頃、紅海で嵐に遭ったビザンチンの船が、ジェッダに近いシュアイバで座礁し、バラバラになってしまった。その船にワリード・ビン・ムギーラが乗っていたことを知ったクライシュ族の一団は事故の現場に赴き、船の残骸をカアバの改築に使う目的で購入した。そして、船にいたビザンチンの建築家バークームも連れてマッカに戻ってきた。

預言者の時代のマッカ

カアバの壁はイブラーヒームによってつくられたといわれる礎石の部分まで剥がされた。クライシュ族の各支族は、くじで工事を担当する部分を決めた。そしてそれぞれが、自分たちに割り当てられた部分のレンガを積み始めた。また正しい方法で稼いだお金を寄付として受け入れることも宣言された。ムハンマド（彼の上に平安あれ）もこの工事に従事し、叔父のアッバースと共に石を運んだ。イブラーヒームによってカアバの建造が行われたとき、周回を始める地点を定めた黒い石を新たに設置することとなった。その仕事をする栄誉をすべての支族が求めた。アブドゥッダー

ル家とアディー家は、この名誉を他に譲る気がないと宣言した。この騒動は、ひとつ間違えば戦争に発展しそうな様相を見せていた。その時、クライシュ族の最長老であったアブー・ウマイヤ・ビン・ムギーラの提案によって、カアバのベニー・ジャイバ門から最初に入ってきた人に仲裁を任すことが決められた。そしてそのとき、その門からムハンマド（彼の上に平安あれ）が入ってきたのであった。

クライシュ族の人々は口々に、「彼は信頼できる人だ、彼が決めることに我々は従う」と言った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）にその場の状況が説明された。彼は即座に、着ている上着を脱ぎ、それを地面に敷いた。黒い石をそこに載せ、その端をそれぞれの支族の人たちにつかませた。そして、その石を置くべき場所まで運ばせ、最後は自ら石をその位置に置いたのであった。

クライシュ族の人々はこのやり方に納得した。戦争にもつながりかねない問題を、大きくすることなくどの支族にも恨みを抱かせず、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は解決したのである。壁を積む作業が終るとカアバには屋根も設けられた。[86]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が三十五歳のときのこの出来事以降、啓示が下される四十歳のときまで、毎年ラマダーン月（九月）にヒラーの洞窟に篭っているムハンマド（彼の上に平安あれ）の姿が目撃されるようになった。

五　預言者としての活動を始める以前のムハンマド（彼の上に平安あれ）の生活と人柄

ここまではムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者として活動を始める以前の人生と、その時代に起きた重要な出来事について述べてきた。話を預言者時代に移す前に、その時期におけるムハンマド（彼の上に平安あれ）の生き方の特長について述べてみたいと思う。啓示が下される前までは、彼がどのような性格の持ち主であったかを理解する一助になるからである。ここでは、孤児として貧しさの中で育ったこと、文盲であったこと、商いに従事していた

こと、その人柄や宗教生活について述べていきたい。

a　孤児として、貧しさの中で育つ

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は孤児として育った。前にも述べたように、生まれる前に父を、六歳のときに母を、八歳のときに祖父を亡くした。その後は叔父のもとで暮らした。おそらくアッラーは、将来預言者という使命を与えられることになる彼に対し、このような人生がふさわしいと見なされたのであろう。彼は父母や祖父に影響を受けることなく育った。結果として、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の成長はアッラーのみにその責務が与えられた、と言えるだろう。実際ムハンマド（彼の上に平安あれ）はあるハディースで、「アッラーが私を育まれた。最良の形で育まれた」[87]と言っている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は貧しさの中で成長した。八歳までは祖父の庇護のもとで、二十五歳までは叔父のそばで暮らした。父のアブドゥッラーは五頭のラクダと数十頭の羊、そしてウンム・アイマンという女の奴隷を残していた。しかし祖父がまだ健在のときに父が死んだため、アラブ人の遺産相続のならわしにより、その遺産はムハンマド（彼の上に平安あれ）には与えられなかった。遺産は一家の中で最も年長の者が受け取ることになっていた。もっとも、仮にこの遺産がムハンマド（彼の上に平安あれ）に分け与えられたとしても、それは彼を豊かにするほどのものではなかった。二十五歳のときですら、ハディージャのキャラバンをわずか四頭のラクダを見返りにシリアまで連れて行き、戻ってくることを請け負っていたのである。

しかし、その服装や振舞いが人の注意を引くほど貧窮していたわけではなかった。孤児であったとはいえ、自分の苦悩と一人で向き合っていた孤独な人というわけでもなかった。なぜなら、親族間の結びつきが強いものであったからである。そして裕福な女性であったハディージャと結婚することによって、マッカの有力な商人や金持ちほどではないにしろ、安定した生活を送れるようになった。

一方、一人の預言者としてムハンマド（彼の上に平安あれ）が貧しさの中で育ったことの重要性は、次のように分析できるだろう。もし仮に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が裕福な人であったとしたら、イスラームへの呼びかけを行ったとき、人々は彼の財産目当てに信じたふりをした、と見る人もいたであろう。しかし彼は人々を惹きつけ、周囲に集め、話したことを認めさせるのに十分なお金を持っていたわけではなかった。人々はお金のためではなく信仰のために彼の周囲に集ったのである。[88]

b　文盲として

信頼できる諸文献には、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が読み書きを知らなかったこと、つまり文盲であったことが記されている。彼が育った時代、マッカには学校はなかった。外部から来た人たちがわずかに読み書きができ、またはその人たちから読み書きを教わった人もいたが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は教わっていなかった。将来彼に与えられることになる預言者としての使命は、彼が読み書きのできない人であることが必要だったのである。ヒラーの洞窟で最初の啓示をもたらした天使が、彼に「読め」と言ったとき、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「私は読むことができない」と答えた。しかし同時に、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者として活動する中で読み書きに非常に重きを置き、教友たちにもそれを勧めていたことが知られている。彼に最初に下された啓示は「読め」であった。下された啓示は、自ら暗記すると共に、書記たちに書き取らせてもいた。彼はおそらく、孤児であり貧しさの中で育ったため、学ぶ機会がなかったのかも知れない。もし預言者としての活動を始める前に読み書きができ、書を読み、何かを記していたとしたら、預言者としての活動を始めた後、彼が他の啓典や諸民族の過去をつづった書物を読んで得た知識を利用して布教していると見なす人々がいたであろう。実際、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が文盲であったことに秘められた英知はクルアーンで次のように語られている。

「あなたはそれ（が下る）以前は、どんな啓典も読まなかった。またあなたの右手でそれを書き写しもしなかった。

そうであったから、虚偽に従う者は疑いを抱いたであろう」[89]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が文盲であったことは、彼に下された啓示が他の思想と混同してしまうことも防いでいた。また彼は、当時の著名な宗教者や詩人、占い師、知識人などに師事して何かを学んだこともなかった。占い師が用いるまじないなどについても一切知識を持たず、占いについては嫌悪感さえ抱いていた。一部の学者は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が文盲であったことを預言者のしるしの一つであるとしている。なぜなら、彼は文盲であったにもかかわらず、わずかでも模倣してつくるのが不可能な一つの書をもたらしたからである。預言者時代、彼は自らに下されたこの書を読み、暗誦し、一文字たりともおろそかにすることはなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は交易に従事していたことから、お金に書かれていた文字を読むことができた。しかし、啓典を読むことはできなかった。[90] ムハンマド(彼の上に平安あれ)は当時知られていた知識や思想を吸収して成長したのではなかった。集団生活の中で暮らし、人々と交わり、風習や習慣を学び、集団を支配する規律を身につけ、先見の明を持ち、有能で周囲に対して思いやりを持つ人として育てられたのである。[91]

ハーシム家の男たちのほぼ全員が、さらには女性たちも詩を読んでいたにもかかわらず、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は詩をつくらず、そのための努力をしたこともなかった。実際クルアーンでは、「われはかれ（ムハンマド（彼の上に平安あれ））に詩を教えなかった。それはかれに相応しくない」[92] と記され、詩人であることと預言者であることは共存できないことであると述べている。イスラーム以前の時代の詩は、主に賞賛、風刺、皮肉、勇敢さなどをテーマとしていた。四十歳までこのような感覚の詩をつくっていた人が、その後謙虚になり、人々を救うという考えを抱くことは考えにくい。部族の予言者や支配者としての地位を与えられていた詩人であったとしたら、事実当時の詩人はそのような状況にあったのだが、名誉や誇りに固執する人であったかも知れない。[93]

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は予言者や占い師、霊媒師などでは決してなかった。そのような人たちを嫌悪していた。預言者として活動を始めるまで啓示についての知識を持っていなかった。そして預言者になることを一切知

らなかった。
クルアーンの言葉を借りるなら、「あなたは、啓典が何であるのか、また信仰がどんなものかを知らなかった」[94]という状態であった。ただし、その外見からも、徳によっても、人の注目を集める資質を明白に備えていた。この観点から、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を超人であるかのように見なすことは過ちである。と同時にありきたりの人だと見下すこともまた正しいことではない。

c　交易に携わる

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者としての活動を始める以前は交易に従事していた。この仕事は彼に多くの資質を獲得させた。勇敢さや、自分を騙そうとする相手を見極め、略奪や強盗を行おうとする相手に気をつける明敏さは、その資質の一つである。さらに、交易を通じて物の売り買いの方法、人々と交流するすべを学んだ。社会性を発揮し、様々な国や地域の人々とその文化を知った。習慣や風習についての知識も獲得した。彼はヒジャーズ地方やアラビア半島での交易にとどまらず国際的な交易にも携わっていた。
交易に従事していたことは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に新たな資質を与えた。すなわち、他人の重荷にならず自分で努力して稼ぐ、ということである。実際、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「人にとって最も価値のある稼ぎは労働によって得られるものである」[95]と述べている。交易はまた、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に誠実さと信頼の置ける人という資質も備えさせた。

d　羊飼いになる

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は幼少時代から青年期にかけて、最初は乳母であるハリーマのもとで、その後はマッカで羊飼いをしていた。自分の一族の群れだけでなく、マッカの他の住民たちの所有する群れの世話もし

ていたとされる。羊飼いはマッカで幼少時代から青年期を過ごす人が行う仕事として一般的なものであった。ウマルやアブドゥッラー・ビン・メスドも子供の頃には羊飼いをしていた。なぜなら、ムハンマド（彼の上に平安あれ）や同様の状況にあった子供や若者がまず行った仕事が親の交易の仕事を手伝うことか、動物の世話をすることであったからである。特に交易において重要な役割を果たすラクダを育てることは大切な仕事だった。クライシュ族は定住生活を送っていたとはいえ、キャラバンに欠かせないラクダを育てることは必要不可欠だったのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はのちに羊飼いのときの思い出を楽しく語っている。ハディースで預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「預言者たちの中で、羊飼いをしたことがない人はいない」[96]とも語っている。たとえば、ムーサー（モーセ）もダーウード（ダビデ）も羊飼いであった時期に預言者となった。[97]ただし、羊飼いであることが預言者の条件というわけではない。ムハンマド（彼の上に平安あれ）もその他の預言者も、それぞれの時代の状況によって、羊飼いという仕事に従事していたのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が叔父の交易の手伝いをしたように、動物の世話の手伝いをすることはごく自然なことで

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が羊を飼っていた地域の景観

あった。同時に、羊を飼うことは人にがまんすることや忍耐を教える。そして、自分の庇護のもとにある者たちを守る、という責任感を与えるのである。

e　社会的地位と周囲の人々

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカやターイフで特に裕福だと見なされる存在ではなかった。これに関して、啓示が下されるようになった後、対立する人々が彼について次のように述べたとクルアーンにはある。「またかれらは、『このクルアーンは、何故二つの町の有力な人物に下されなかったのでしょうか。』と言う」[98]

彼らの考えでは、預言者という使命はマッカの金持ちであるワリード・ビン・ムギーラやターイフの有力者のウルワ・ビン・メスウードに与えられるべきであった。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者になる以前の友人はよい性格を持った人々であった。そのうち最もよく知られているのがアブー・バクルである。それ以外にもクライシュ族の中で尊敬され、ハディージャの甥でもあるハキーム・ビン・ヒザームも彼の親友であった。さらに、アズド族の医者で、詩人でもあったドゥマード・ビン・サラバや、マフズム族のカユス・ビン・サーイブもまた親友であった。カユスはいつも、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が信頼の置ける誠実な人であると語っていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は多くの同年代の若者が陥っていた飲酒、賭博、姦通、盗みといった悪い習慣に近づくことはなく、またそのような習慣を持つ者とは友だちになることはなかった。常に彼らから遠ざかり、彼らの影響を受けないようにしていた。

f　信頼の置ける人

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が優れた性格の持ち主であったことはよく知られていた。その代表的なものが「信頼が置ける」性格であった。これはそもそも、すべての預言者に共通する性格である。最後の預言者である

ムハンマド（彼の上に平安あれ）も、生涯を通して信頼の置ける人であった。恩義を忘れず、約束を守り、勇敢かつ正直で、信頼の置ける人であったことから、彼は「ムハンマド（彼の上に平安あれ）・アル＝アミーン」（アミーンは誠実な、信頼にたるという意味）という称号を得ていた。そして二十五歳の頃、マッカでは単に「アル＝アミーン」と呼ばれていた。[99] ハディージャはムハンマド（彼の上に平安あれ）が信頼の置ける人であることを確信し、安心してキャラバンを彼に託していたのである。当時は現金や貴金属を安全に保管する機関がなかったため、クライシュ族の中には価値ある品をムハンマド（彼の上に平安あれ）に預けていた人もいたとされる。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は信頼を裏切ることは決してなく、預かり物はきちんと持ち主に返していた。最も困難な状況に陥ったときですら、それに手をつけることはなかった。彼は言行においても信頼されていた。決して不義を行うようなことはなかった。

g　徳のある人

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は知性があり、冷静で、信頼され、適度にバランスの取れた振舞いをし、その人柄が人々に高く評価され皆に好かれる人であった。彼の正直さや誠実さが疑われることはなかった。商人として同業者の敬意を集めていた。預言者となる以前、彼と商売上でかかわりをもったことのある人たちは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はとてもよい友であり、偽善などを働く人ではないと語っている。[100] また嘘をつくことはなかった。親友だけでなく敵であっても、彼は嘘をつく人ではないと告白している。そして親戚たちの権利を守り、家族を大切にし、正しい方法で生活の糧を得ていた。孤児を保護し、援助を求めている人を助け、また客をよくもてなした。そして、どのような人とも仲がよかった。

h　宗教生活

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は啓示が下される以前、アラビア半島やその周辺に広まっていたユダヤ教やキリスト教、ゾロアスター教などのどの宗教にも入ることはなかった。これらの宗教の信徒が語りかけてきても関心を示すことはなかった。マッカの多神教徒の間で育ったにもかかわらず、偶像崇拝にも興味を示すことはなかった。多神教徒の風習に染まることもなかった。アラブ人の歩んでいた道が誤りであり、偶像を目立たせるために行われる行事も無意味なものであることを理解していた。偶像は何の役にも立たず、益も害ももたらさず、何かを創造したり、災いを取り除いたりする力を持たない存在だからである。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、社会の諸問題に気づいていた。部族の有力者である裕福な商人たちは、自らの親戚の中の困窮者に対してすら責任を果たそうとはしなかった。彼らの財産はマッカの金持ちたちを思い上がった横柄な性格としていた。様々な理由で無力となっている人たちに対し、自分が優れていると見せつけるような態度をとっていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は乏しい資力の中で、貧しい人々や助けを求めている人々を助けていた。彼は啓示が下される前に、すでにこうしたマッカの社会的問題に気づいていた。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアッラーの存在とその唯一性、そして来世を信じていた。人々が道を踏み外しているのを見ても、それに対して何をすべきか、どのようにして社会を多神教から救えばいいのかわからなかった。何もできずに無力感にとらわれていた。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）が三十五歳のとき、カアバ聖殿の補修が行われることとなり、唯一神に捧げられたはずのその中に無数の偶像が並べられていることを知り、彼は大きな衝撃を受け、それがきっかけとなり瞑想生活に入った。事実、啓示が下る四十歳のときまでムハンマド（彼の上に平安あれ）は、毎年ラマダーン月（九月）になると、マッカの北東、カアバから約五キロのところにあるヒラーの洞窟に籠るようになった。そこでひたすら瞑想に励み、アッラーとその創造の力に思いを馳せ、崇拝行為に打ち込んだ。食べ物が尽きると家に戻り、食べ物を持参して再び洞窟に籠った。洞窟に籠るのを終えると、カアバで周回を行い家に戻っていった。

預言者としてのマッカ時代

一　預言者という使命

これまで述べてきたように預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、特に三十五歳以降、瞑想や崇拝行為に多くの時間をさくようになっていた。マッカの北東、カアバ聖殿からおよそ五キロのところにあるヌール山のヒラーという洞窟に[101]籠った。人々の中傷や陰口から逃れ、瞑想に耽りながら自己を見つめ直していた。眠っていたときに見た夢が、昼間の光のように明るくはっきりしたものとなり、夢に見たことがそのまま現実となっていったのである。このような状態を続けていくうちにムハンマド（彼の上に平安あれ）は、一人で思索する時間を好むようになり、ラマダーン月（九月）を洞窟で過ごすようになった。ときにはハディージャと共にヒラーへ行くこともあった。また洞窟を訪れる貧しい人々に持っていた食べ物を分け与えた。食べ物が尽きると家に戻り、新たな食料を携えて再びヒラーへと向かうのであった。そして山に籠る行を終えるとマッカに下り、カアバ聖殿で周回を行ってから家に戻るのが習慣となっていった。

クルアーンには、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者という任務をどのように始めたのか詳細な記述はない。ハディースや歴史書では、啓示が真実を語る夢によって始まったと述べられている。預言者としての良き知らせがもたらされたとき、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は一人でヒラーで瞑想していた。彼はそのとき四十歳であった。西暦六一〇年のラマダーン月の二七日の未明、[102]崇拝行為を行っていたムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとに、啓示をもたらす天使ジブリールが現れ、「読め」と命じたのである。

それまで見たこともない天使の自らへの呼びかけに驚き、恐れを抱いた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「私は読めません」と答えた。ジブリールはムハンマド（彼の上に平安あれ）を息ができないほど抱きしめた後、彼を放し、再び「読め」と命じた。「私は読めません」と再度ムハンマド（彼の上に平安あれ）は答えた。こうしたやりとりが三度行われた。そして三度目の返事ののちジブリールはまた息もできないほど強く彼を抱きしめ、放した。そしてここに、クルアーンの凝血章の冒頭の五つの節が下されたのであった。

「読め、『創造なされる御方、あなたの主の御名において。一凝血から、人間を創られた。』読め、『あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって（書くことを）教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である。』」[103]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの最初の啓示を、ジブリールの指示通りに暗誦した。しかし興奮と恐怖は続いていた。震えながら家に戻った。そして寝床に入り、「私を抱いてくれ、私を抱いてくれ」とハディージャに言った。それから深い眠りに落ち入り、目が覚めた後ハディージャに自分の身に起こったことを伝えた。そして「私は自分に恐れおののいている」と言った。ハディージャの言葉はムハンマド（彼の上に平安あれ）を落ち着かせるものであった。「恐れることはありません。アッラーに誓って言いますが、アッラー

ヌール山の景観

はあなたを損なわれることはないでしょう。あなたは一族の権利を守る正直な人です。あなたは一族の権利を守る正直な人です。困難の中にある人の仕事を引き受ける人です。貧しい人々に食べ物を与え、人々をもてなし助ける人です」

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のこの不安や恐れは、何が起きたのか理解できない状況に直面したことによるものであった。そのことが狂気の発露とか何かの予兆ではないかという恐れを抱かせるものとなったのである。[104] ハディージャはムハンマド（彼の上に平安あれ）を落ち着かせたのち叔父の息子であるヴァラカ・ビン・ナヴファルのもとへ連れて行った。文献によってはハディージャが一人で行ったと伝えるものもある。[105] ハディージャは細心の注意を払い最善の道を選んだ。まず、出来事を隠さなかった。夫と自分だけで苦悩の日々を過ごすことを選ばなかったのである。そして相談相手も適切に選んだ。彼女はヴァラカ・ビン・ナヴファルではなく他の誰かのところに行くこともできたが、そうはしなかった。相談することによって彼らの苦悩をやわらげ、誠実に助けとなってくれる人物を選んだのである。なぜならヴァラカは、ユダヤ教やキリスト教についての知識を持ち、諸啓典を読み、それらを理解し、発言力も備えている知識人であったからである。ヴァラカは偶像崇拝を憎み、真の教えを求めてザイド・ビン・アムルと共にシリア

ヒラーの洞窟の景観

へ行ったこともあった。キリスト教を受け入れていたという説もある。読み書きもできる人であった。聖典を研究し、それをヘブライ語とアラビア語に翻訳していた。盲目であったヴァラカは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に起こったことに耳を傾けると、次のように言った。「あなたが会ったのは、アッラーがムーサーにも遣わされた天使ジブリールである。私がもう少し若ければよかったのに。一族があなたをここから追放するとき、私がこの世にいることができればよかったのに」[106]

ヴァラカのこの言葉を聞いた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「人々は私をここから追放するのですか」と尋ねた。ヴァラカは答えた。「そうだ。なぜならあなたがもたらすものは、かつてそれをもたらしたすべての人に、人々からの敵意を呼び起こした。もし私がそのときまで生きていられるならば、私は必ずあなたを助けよう」

ヴァラカのその言葉はムハンマド（彼の上に平安あれ）の心を落ち着かせた。もう一度同じことが起こり、再び天使に出会うことを望んだ。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はジブリールと出会ったヒラーの洞窟にたびたび足を運んだ。だが、何週間過ぎても、天使が現れることはなかった。そして時が過ぎていった。これを「啓示の中断」と呼ぶ。文献によって、その期間は数日間から三年間までの差がある。しかしそれはそれほど長くは続かなかった。だがムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのことに苦痛を覚え、疑問を抱き始めた。さらには神に見放されたのではないかという思いを抱き始めた。

ある日、ヒラーの洞窟から家に戻っていたとき、最初に見たときと同じ荘厳さの中で天使ジブリールの姿を見た。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は以前と同じような恐れと興奮に襲われ、家に駆け戻り、寝床に入った。しかし天使は彼の家で再度姿を現し、次のようにムハンマド（彼の上に平安あれ）に呼びかけた。

「（大衣に）包る者よ、立ち上って警告しなさい。あなたの主を讃えなさい。またあなたの衣を清潔に保ちなさい。不浄を避けなさい」[107]

このクルアーンの節は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に預言者という使命が与えられたこと、今後はアッラー

からの啓示を受けて人々に伝えること、人々をアッラーの道に招くこと、それに従った者は現世と来世において幸福を得ること、顔を背ける者には地獄の罰が与えられることを示すものであった。

二　イスラームへの招きと最初の信徒たち

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はクルアーンの包る者章の啓示を受け、人々へイスラームを呼びかけ始めた。諸文献によると、預言者としての使命が与えられてからの三、四年間は、隠すことなく伝えるよう命令が下されるまで、イスラームは秘密裡に伝えられたとされる。[108] この時期、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はまず家族に、そして親友や信頼の置ける人々に対し布教を行った。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は最初の布教を妻のハディージャに対して行った。啓示された節を彼女に読み聞かせ、「私を誰が信じるだろうか」と言ったとき、彼女は「誰も信じなくても、私は信じます」と答え、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であることを最初に認めた人となったのである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は天使ジブリールが教えた礼拝と礼拝前の清めを、最初にハディージャに伝えた。娘のザイナブ、ルキヤ、ウンム・ギュルスムも母と同時に入信した。ファーティマは当時まだ四、五歳の子供であった。ハディージャと娘に次いで、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の家に住み、当時十歳か十一歳であったアリー・ビン・アブー・ターリブと、奴隷であったザイード・ビン・ハーリサも入信した。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）がハディージャと共に礼拝を行うのを目にしたアリーは、それが何であるか知りたがった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアッラーが選ばれた教えとはこれであると彼に教えた。唯一神信仰であるイスラームを受け入れ、益も害ももたらさない偶像への崇拝を放棄することを望んでいる、と伝えた。アリーは最初、父に相談したいと言った。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）は、この布教についての説明をぬきにして

そのことが広まることをよしとせず、黙っておくようアリーに求めた。翌日アリーは、父親に相談することなく、イスラームに入信した。ある日アブー・ターリブは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がハディージャとアリーと共に礼拝するところを目にした。そして、その教えについて説明を求めた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、この教えがアッラーのものであり、天使のものであり、父祖イブラーヒームの教えであること、そしてアッラーが自らを使徒として遣わされたことを伝えた。アブー・ターリブは、先祖から伝わり、自分が信仰しているものを放棄することはできない、と述べた。しかし、アブー・ターリブは否定的な反応を示すことはなく、また死ぬまでムハンマド（彼の上に平安あれ）を庇護し続けたのであった。[109]

家族に続き、親友たちが布教の対象となった。信頼が置け、誠実な親友であるアブー・バクルは迷うことなくムハンマド（彼の上に平安あれ）の布教を受け入れ入信した。それだけでなく、親しい人々や発言力を持つ人々に対しても、自らがイスラームに入信したことを明らかにし、その教えを受け入れ、アッラーを信じ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）をその使徒であると信じるように人々へ呼びかけた。イブン・ヒシャームはその作品の中で、アブー・バクルの布教によって入信した信徒について触れている。それはウスマーン・ビン・アッファーン、ズバイル・ビン・アッヴァーム、アブドゥルラフマーン・ビン・アブフ、サアド・ビン・アブーバッカース、タルハ・ビン・ウベイドゥッラーたちである。[110]アブー・バクルは様々な人々を預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとへ連れて行き、彼らをイスラームへと導き共に礼拝を捧げた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は最初に布教を始めたときから、男女や年齢、貧富、奴隷か否かなどといった区別をせず、すべての人々に対してイスラームを呼びかけた。実際、初期の入信徒を調べてみると、社会のあらゆる階層の人々が含まれていることがわかる。入信したとき、その何人かは五十歳前後であり、また何人かは三十五歳を超えていたが、多くが三十五歳以下であった。自由人や裕福な家庭の人々が含まれている一方で、奴隷や女性たちもいた。要するにイスラームは、初期の段階から社会の様々な階層の人々に受け入れられていたのである。そうした

傾向はそれ以降も引き続いて見られる。

隠れて布教を行っていた時代に入信した人々は、信頼が置け秘密を守ることのできる誠実な人たちであった。偶像崇拝やイスラーム以前の時代の迷信や悪しき行いを好まず、真実の教えを知ろうとしていた人々であった。その時代の信徒たちは、人目をしのび家の中か人気のない山中などで礼拝前の清めを行い礼拝を捧げていた。しかし、集団で崇拝行為を行うことはできなかった。また、多神教徒が多く居住する地域で布教を行うこともできなかった。クルアーンも隠れて読んでいた。人目につくところで布教を行うと攻撃を受けたからである。

ある日のこと、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がアルカーム・ビン・アブルアルカームの家で語り合っていたとき、アブー・バクルをはじめとする信徒数名が多神教徒にイスラームを説くため、カアバに行くことを提案した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はまだ自分たちの数が十分ではないので、それには賛成できないと言った。しかしアブー・バクルが何度も主張したため、皆でハラーム・シャリフ（聖域）へと向かった。多神教徒はそこに集まり語らっていた。アブー・バクルはその場に入っていき、彼らに話をし始めた。偶像崇拝を放棄し、アッラーとその使徒を信じるように説いた。それに腹を立てた多神教徒たちは彼を攻撃し始めた。ウツバ・ビン・ラビーアはアブー・バクルを殴打し、彼を血まみれにした。そして彼らはムハンマド（彼の上に平安あれ）に向かって攻撃を始めた。[111]

そのような状況から、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラームの布教にとって安全な場所は、今のところアルカームの家しかないと判断した。マッカ時代の初期、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がアルカームの家で布教を行ったことは、布教活動を行っていく上で重要な節目となった。まだ十七、八歳のときイスラームに入信したアルカームの家は布教に適した地にあった。カアバに近く、サファーの丘のふもとにあった。周囲の注意を引くことなく、巡礼のために他の地方からやってくる人たちと接触することが可能であった。さらに、マッカのムスリムたちも容易にこの家に来ることができた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの家で、教友たちにイスラームの教えを伝えながら、人々をイスラームへと導いた。ムスリムにクルアーンを読み聞かせ、彼らと共に礼拝を行った。この家での活

動の結果、多くの人々がイスラームに入信した。ウマルはこの家で入信した最後の人である。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者として活動を始めた六年目のズ・アル＝ヒッジャ月（十二月）にウマルが入信したことを契機に、アルカームの家から離れた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「あなたの近親者に警告しなさい」[112]、「だからあなたが命じられたことを宣揚しなさい。そして多神教徒から遠ざかれ」[113]という啓示が下されたことにより、近親者をはじめクライシュ族などすべての人々へ堂々と布教を行い始めた。

クルアーンの相談章においては、まず自分の親類縁者から布教を行うようにと命じられている。それは一般の人々にもイスラームの教えを伝えていく上で大切なステップとなるものであった。この章の啓示に従ってムハンマド（彼の上に平安あれ）は四十人から四十五人の親戚の人たちを家に招いた。食事の後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の話の機会を奪うように叔父アブー・ラハブが話し始めた。「あなたほど、一族に悪いものをもたらした人間はいない」と。すると人々はムハンマド（彼の上に平安あれ）の話を聞くことなく去っていってしまった。アブー・ラハブのこの振舞いはムハンマド（彼の上に平安あれ）を傷つけるものであった。その数日後、再度集まりがもたれ、その席でムハンマド（彼の上に平安あれ）は「感謝はアッラーに対しなされるものである。アッラーに感謝し、アッラーに助けを求め、アッラーに庇護を乞う。アッラーの他に神のないことを証言する。アッラーは唯一であられ、それに比類するものは存在しない」と話し始めた。嘘をついているのではないこと、人々を騙すつもりはないことを明らかにしつつ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は話を続けた。

「アッラーの他に神はありません。私はあなた方、そしてすべての人々に遣わされたアッラーの使徒です。アッラーに誓って言います。あなた方は眠りに落ちるように死に、眠りから覚めるように復活するのです。そしてあなた方が行ったことの勘定が問われるのです。善行に対しては報奨が、悪行に対しては罰が与えられるのです。天国も地獄も永遠です。このことを最初にあなた方に警告したいのです」

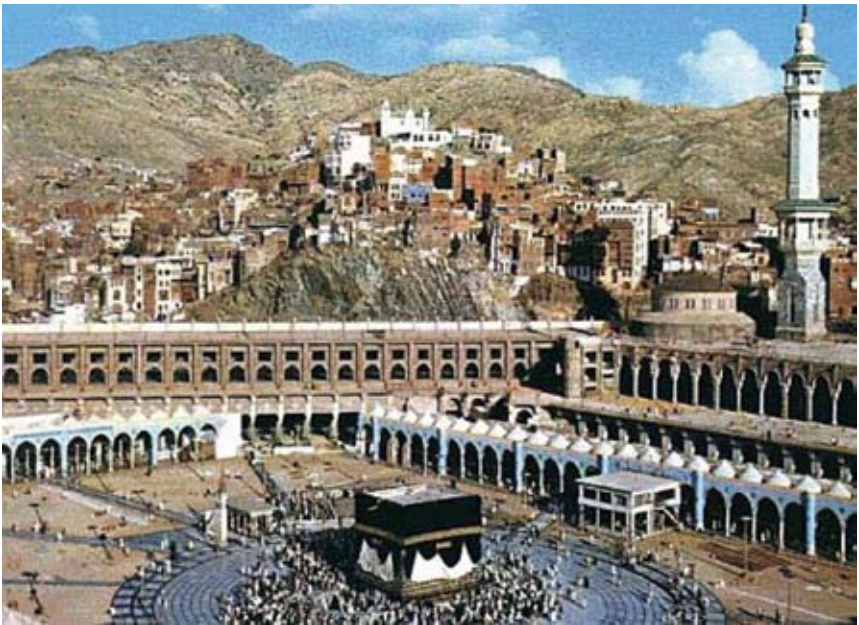
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の話の後、叔父のアブー・ターリブは彼の言うことは素晴らしいことで、命じられたとおりその任務を務めるようにと言った。彼を支援するが、自分自身は父祖伝来の教えから離れるつもりはないとも明言した。別の叔父アブー・ラハブはムハンマド（彼の上に平安あれ）の言うことは悪であるとして、親戚の人々に彼の活動を妨げるように呼びかけた。もし彼の布教活動を認めようとする者があれば軽蔑すると言い、もし彼を助けようとする者がいればその人間は殺されるだろうとまで言った。それに対しアブー・ターリブは、自分が健在でいる限り彼を守ると宣言した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の叔母のサフィアも、アブー・ラハブに対抗し、彼の振舞いは適当ではないと述べた。アブー・ターリブもサフィアに同調した。アリーもムハンマド（彼の上に平安あれ）の支えとなることを誓った。だが彼はまだ子供だったので、その席にいた人たちは笑い、その場を去っていった。この集会では、アブー・ターリブの息子ジャーファルと、ムッタリブ家のウバイダ・ビン・ハーリスがイスラームに入信している。

預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)はイスラームをマッカの全住民に伝えていくことを決断した。そしてサファーの丘に登り、「クライシュの人々よ」と呼びかけた。やがてクライシュ族の人々が集まってくると言った。「もし私が、この山のふもとに騎兵の一団がいるといえば、あなた方は信じますか」と。人々は答えて言った。「信じます。なぜなら、あなたが嘘をついたところを見たことがないからです」

そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）は続けた。「では、私はあなた方に、恐ろしい罰を受けるだろうと警告したい。アブドゥルムッタリブ家の人々よ、アブドゥマナーフ家の人々よ、ズフラ家の人々よ、アッラーは私に、近親者から警告を与えるように命じられました。あなた方が『アッラーの他に神はなし』と言わない限り、この世でもあの世でも、私があなた方の力になることはないのです」

そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）が言葉を切るやいなや、アブー・ラハブは立ち上がり、「くたばれ、こんなことのために我々を呼んだのか」と怒りをあらわにした。[114]

このような困難に直面しながらもムハンマド（彼の上に平安あれ）は、イスラームをマッカの人々に伝えていったのである。その後、マッカ以外に住む部族に対しても布教が始められた。彼らは以前から様々な目的でマッカに来ていた人々を通じて、イスラームの存在を知るようになっていた。

周辺部族の中には全員そろってイスラームに入信していた例もあった。だが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、イスラームをさらに広く伝えるため、マッカ周辺で開かれるウカーズ、マジャッナ、ズルマジャールといった定期市を巡り、そこに交易のために集まってくるアラブの諸部族や巡礼者たちにイスラームを説いた。イブン・サアドは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者としての使命を受けた四年後から広く布教を始め、それは十年続いたと伝えている。[115] ムハンマド（彼の上に平安あれ）のそうした活動はヒジュラ（聖遷）のときまで続けられた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその後、ターイフに住むサキーフ族へ布教を行おうとした。だがアブー・ラハブは行く先々に出没し、彼の言葉は嘘であると喧伝した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は魔術

マッカのアブー・クバイス山とサファーの景観

師のような嘘つきであり、人々を陥れていると説き、その言葉に耳を傾けてはいけないと言い募った。他のクライシュ族の多神教徒たちも、あらゆる手を尽くしてイスラームの布教を妨害した。様々な部族から様々な反応が示された。下劣な手段で、慇懃な態度で、逃げ口上で、遠まわしにといろいろな反応が見られたが、それはどれも否定的なものであった。一部の人々は政治的な理由で、たとえばクライシュ族に遠慮して入信を拒んだこともあった。[116]アウス族のエネス・ビン・ラーフィは、「私たちはクライッシュ族と同盟を結ぶためにここに来た。彼らの敵となって戻りたくない」と語った。しかしどのような態度が示されようと、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は失望することなく、自らの道を突き進んだ。あらゆる機会を利用して、人々にイスラームを呼びかけ続けた。

マディーナ時代の布教についてはのちに述べたい。

三　多神教徒の反応

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が最初の三年間は限定的に、その後は広くイスラームを説き、アッラーの教えを伝えていったことに対して、当初マッカの多神教徒はそれほど大きな反発を示してはいなかった。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）が彼らの偶像崇拝を非難し、多神教徒に対して否定的な見解を示し、多神教徒として死んでいった彼らの先祖が人の道をはずれており、地獄へ行く者であると説き始めたことによって、多神教徒たちは彼のこの活動を非常に危険なものであると見なし始めた。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）を敵視して行動し始めたのである。[117]

特に偶像やそれを崇拝する多神教徒たちが地獄の燃料となることを示すクルアーンの節が下されると、彼らの敵意は一気に増大していった。

「本当にあなたがた（不信徒）も、アッラーの外にあなたがたの崇拝するものも、地獄の燃料である。あなたがたは

そこに（必ず）落ちて行くのである。これらがもし神であったならば、そこに落ちるようなことはなかったであろう。だが（かれらは）それぞれ、その中に永遠に住むのである。かれらはその中で呻く、そこでは（外に何も）聞こえないであろう」[118]

多神教徒たちは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の布教を妨害するためにあらゆる手段に出た。まずムハンマド（彼の上に平安あれ）や信徒たちを見下し嘲った。彼らが自分たちのそばを通りかかると、彼を指さして、狂人や占い師、魔術師といった言葉を浴びせかけた。[119] 啓示についても何か文句を言ってやろうと策を巡らせ、「クルアーンは、誰かが彼に教えているのだろう」[120]と言ったりした。その誰かとは、アラビア語もほとんど知らないジャブルという名のキリスト教徒の奴隷であった。[121] クルアーンには「われは、かれらが、『かれ（ムハンマド（彼の上に平安あれ））に教えるのは、ただの人間である。』と言うのを知っている。だがかれらの頼るものの言葉は、外国語であるが、これは純粋明確なアラビア語である」[122]と明示されている。

多神教徒たちはさらに、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のことを「他人に入れ智恵された者、憑かれた者」[123]と言い、啓示についても「（それは）夢の寄せ集め。いや、かれの偽作です。いや、かれは詩人です。」[124]と中傷した。

また「魔術だけ」[125]あるいは「これは、かれが作り上げた虚言に過ぎない。外の者たちが、かれに協力したのである」[126]とか、「昔の物語で、それをかれが書き下したのである。それを朝夕、口で言って書き取らせたのである」[127]と、それぞれに矛盾した主張を繰り返した。そうしたすべての中傷に対し、クルアーンでは厳しい表現で、それらは人間の言葉ではなく、人間のまねることのできない神の言葉であると明言している。もしできるなら同様の書を記してみよと言われた多神教徒たちは、どのようにしてもそうすることができなかったとも伝えられている。[128] またクルアーンでは、「あなたは占い師でも気違いでもない」[129]とも明言されている。

クライシュ族による敵対行為は、言葉による非難から、時としてボイコット、殴打、拷問、さらには殺害といった次元にまでエスカレートしていた。最も困難な状況に陥ったのは奴隷であり、庇護する者を持たない信徒たちであった。

多神教徒たちはその恨みを自由民ではなく奴隷たちに向けたのである。

イスラームを受け入れたため迫害を受けた者の一人にハッバーブ・ビン・アラトがいた。彼は熱く焼けた石の上で拷問を受け、その痕は死ぬまで彼の背中に残っていた。ウマイヤ・ビン・ハレフの奴隷であったビラール・ハベシーは太陽の強い陽射しの下で地面に転がされ、身体の上に石を置かれイスラームを放棄するように迫られた。

マフズム家の奴隷であったアンマールの父ヤーシルと母スマイヤは拷問によって殺害され、アンマール自身もひどい拷問を受けた。多神教徒たちは彼を気絶するまで殴ったのであった。彼らの主人がイスラームを受け入れない限り、彼らには教えを放棄するか、誰かに買われて自由になるしか道はなかったのである。

奴隷たちを助けたのはアブー・バクルであった。彼は大金を支払い多くのムスリムの奴隷たちを自由にしたのである。ビラール・ハベシーとその母ハマーマは、その中の一人であった。[130]

奴隷だけではなく、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やクライシュ族のムスリムたちもまた、迫害や拷問を受けた。前述のようにアブー・バクルはカアバ聖殿の近くでクライシュ族の者にひどく殴打された。ハリード・ビン・サイドは父によって殴られ、その後牢に入れられ水と食料を絶たれた。ウスマーン・ビン・アッファムは叔父のハケム・ビン・アブール・アーシーによって手足を捕縛された。しかしこうした拷問によっても、ムスリムの一人でさえイスラームの教えから遠ざけることはできなかった。

多神教徒たちはムハンマド（彼の上に平安あれ）自身にも苦痛や拷問を与えてきた。アブー・ジャハルにそそのかされたウクバーは、礼拝中のムハンマド（彼の上に平安あれ）の両肩にラクダの内臓を載せた。さらにウクバーは、礼拝中のムハンマド（彼の上に平安あれ）の襟巻きを絞って窒息させようとしたこともあった。そのとき間一髪アブー・バクルが預言者を助けた。[131] またサジュダ（礼拝のとき額を床につけること）を行っている最中に、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の首を押さえつけ絞め殺そうとしたこともあった。イブン・アブディルベルが伝えるところによると、あるとき多神教徒たちは失神するまでムハンマド（彼の上に平安あれ）を殴打した。それを見たアブー・バクルは「な

んということを。あなた方の主がアッラーであることを教え、そしてアッラーのご命令を伝えたという理由だけであなた方は人を殺すのか」と応じ、それに対し多神教徒たちは「お前たちは、狂信徒だ」と二人を中傷した。[132]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の叔父アブー・ラハブとその妻ウンム・ジャミールは、最もひどい敵対者であった。アブー・ラハブは預言者の家の前に汚物をまき散らし、ウンム・ジャミールも夜半ムハンマド（彼の上に平安あれ）の通る道にトゲをまいた。そうした出来事に対して啓示されたのがクルアーンの棕櫚章であった。[133] アブー・ラハブ、アブー・ジャヒル、ワリード・ビン・ムギーラ、アス・ビン・ワーイル、ナーディル・ビン・ハーリス、アブー・ウハイハ、ウクベ・ビン・エビ・ムアイト、ウツベ・ビン・レビア、シェイベ・ビン・レビア、ウンム・ジャミール、ウマイヤ・ビン・ハレフ、ウバイ・ビン・ハレフ。彼らはマッカ出身のイスラームの敵として名の知れた人々であった。[134]

マッカの多神教徒たちは攻撃や拷問を加え、全力を挙げあらゆる手段を講じてイスラームの拡大を阻止しようとした。たとえばクライシュ族は、外部からマッカへ巡礼にやって来る人々がムハンマド（彼の上に平安あれ）と直接話すことを防ぐために、それぞれが分担してマッカへの街道に立ちふさがった。歴史家イブン・ハビーブの記録によれば、様々な部族からなる十七人の一団が道を封鎖し、そこで人々を待ち構えた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）を訪ねようとする人がいれば、「彼は狂人だ、魔術師だ」などと中傷し、巡礼者たちがムハンマド（彼の上に平安あれ）と話さないように仕向けたのである。[135] だがそうした妨害はそれほどの効果を上げることなく、逆に人々のイスラームへの関心を高めるものとなった。なぜなら多神教徒が妨害すればするほど、人々はムハンマド（彼の上に平安あれ）と会おうとしたからである。

その中の一人であるディマド・ビン・サラバの入信の経緯はたいへん興味深いものである。アズディ・イ・シャヌーア族の首長であったディマドは、ウムラ（小巡礼）のためにマッカへやってきた。クライシュ族が預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）について、あの男は狂っているのだと話しているのを耳にし、ならば自分が治療してやろうと思い

立った。ディマドはムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとにやってきて、もし望むならば治療しましょうと申し出た。この申し出に対しムハンマド（彼の上に平安あれ）は次のように答えた。

「感謝はアッラーに対してこそなされるものです。私はアッラーに感謝し、アッラーに助けを求めます。アッラーが誰かにお導きを下されたなら、誰もその人を迷わせることはできません。アッラーが誰かをお迷わせになったのなら、誰もその人を正しく導くことはできません。私はアッラーの他に神が存在しないこと、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのしもべであり、その使徒であることを証言し、それから・・・」

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がまだ答え終らないうちに、ディマドは興奮してその言葉を遮った。そしてその言葉を三度繰り返すように求め、続けて言った。「私はこのような言葉を聞いたことがありません。今まで予言者や魔術師や詩人たちの言葉をたくさん聞いてきましたが、こんな言葉は聞いたことがありません。この言葉は荒れた海をも鎮めることでしょう」

ディマドはその場でイスラームに入信しムスリムとなった。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）に対し、自らの名とその一族の名において誓いを立てたのであった。[136]

ダウス族の有名な詩人の一人であるトゥファイル・ビン・アムルがマッカへやってきたとき、多神教徒たちが彼のもとに駆けつけ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の布教がいかに有害なものであるかをかき口説いた。彼らは長い時間をかけて口々にムハンマド（彼の上に平安あれ）を非難し、自分たちがいかにその害を被っているかを語り、自分たちの身に起こったことがトゥファイルたちの身にも起こることを心配している、と話した。トゥファイルは絶対にムハンマド（彼の上に平安あれ）と話をしない、彼の言うことには耳を貸さないと心に決めてマッカの町に入った。ハラーム・シャリフ（聖域）に出かけたときには、誤ってムハンマド（彼の上に平安あれ）の言葉を聞いてしまうことがないようにと耳栓をしていたほどであった。そこまでしてカアバに来てみると、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がそこで礼拝をしていた。彼が言葉を唱えているのを知り、トゥファイルは自分が有能な詩人であり、善

悪を見分ける力を持っているのだから、たとえムハンマド（彼の上に平安あれ）の言葉を聞いてもそれがどういうものか判断するだけの力が自分にはある、と思っていた。そして、礼拝を終えて帰宅するムハンマド（彼の上に平安あれ）について行き、これまでのことを打ち明けた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）も彼にイスラームのことを話した。そしてクルアーンを読んで聞かせた。するとたちまちトゥファイルはクルアーンの表現の美しさやその内容に魅せられた。そうして彼はイスラームを受け入れ、祖国へ戻り自らの家族や一族の入信にも力を尽くしたのであった。[137]

四　多神教徒からの和解案

クライシュ族の多神教徒たちは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が力強く人々をイスラームに招くのを目の当たりにし、それを阻止するために叔父のアブー・ターリブにムハンマド（彼の上に平安あれ）を庇護することをやめるように申し出た。イブン・ヒシャームはクライシュ族が三度、この申し出を行ったことを記録している。また最初の申し出を行った一団の名前も記録している。この一団はアブー・ターリブのもとを訪れ次のように言った。「アブー・ターリブよ。あなたの甥は私たちの神を罵った。私たちの教えを悪しざまに言った。私たちを馬鹿呼ばわりし、私たちの父や祖父が人の道から逸脱していると言った。あなたは彼の行動を止めるか、もしくは庇護することをやめるべきだ」

アブー・ターリブは丁重にその申し入れを断った。

最初の一団がよい結果を得ることができなかったので多神教徒たちは次の一団を派遣した。そして自分たちはもはや預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の言葉には耐えられないこと、その活動をやめさせるか、庇護することをやめなければ、あなた自身にもよくないことが起きるであろうと半ば脅すような態度に出た。このときアブー・ターリブはムハンマド（彼の上に平安あれ）を呼び、クライシュ族の申し入れを彼に知らせた。活動はもうやめてもらい

たい、この問題は自分ではもうどうにもできないと伝えた。それを聞いたムハンマド（彼の上に平安あれ）は叔父が自分を庇護することについて考えを変えたと思い、「彼らが私の右手に太陽を、左手に月を与えたとしても、アッラーがこの教えを人々の間で優位なものとなさるまで、あるいは私が死ぬまでこの活動をやめることはありません」と言い、その場を立ち去ろうとした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）のその言葉を悲しんだアブー・ターリブはこう語った。「わが甥よ、行ってあなたが望むままに彼らに語りなさい。アッラーに誓って言うが、あなたを彼らに引き渡すことは決してない」[138]

多神教徒たちは、アブー・ターリブは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の庇護をやめないこと、彼らにムハンマド（彼の上に平安あれ）を引き渡すつもりがないこと、さらには必要とあれば自分たちから離れることもあり得ると理解した。彼らはワリード・ビン・ムギーラの息子ウマーラをそばに呼び、アブー・ターリブのところへ連れて行った。そしてアブー・ターリブに若く容姿端麗であったウマーラと、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を交換しようという奇妙な提案を行ったのである。「アブー・ターリブよ。クライシュ族の中で最も強く、最も美しい若者ウマーラを連れてきた。彼の頭脳や力はあなたの役に立つであろう。彼を養子にしてもらいたい。あなたのものにしてもらいたい。その代わりにあなたや父祖の教えに対立し、部族の統一を乱すあなたの甥ムハンマド（彼の上に平安あれ）を私たちに引き渡してもらいたい。その交換としてこの若者を差し上げよう」

このひどい提案にアブー・ターリブは厳しい声で答えた。「アッラーに誓って言うが、あなた方のこの提案はひどいものだ。そんなことができるだろうか。あなたは自分の息子を育てさせるために私に与えるというが、私からは私の甥を殺す目的で求めている。そういうことではないのか。そんなことは絶対にありえない話だ」[139]

多神教徒は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）自身にも申し出を行い、いくつかの提案をした。あるときはウツバ・ビン・ラビアが一人で、あるときは集団でやってきた。そして、財産が欲しければ財産を与え、支配権が欲しければ支配権を与え、病気であれば治療を施すと言った。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）は、私はそのようなこと

を求めているのではなく、アッラーによって与えられた預言者としての使命を果たすためには何があっても耐えるつもりであると伝えた。[140] 多神教徒たちは「私たちはあなたが崇拝するものを崇拝する、あなたも私たちが崇拝するものを崇拝しなさい」という提案も行った。[141] これに対して不信徒達章が啓示された。「言ってやるがいい。『おお不信徒たちよ、わたしは、あなたがたが崇めるものを崇めない。あなたがたは、わたしが崇めるものを、崇める者たちではない。わたしは、あなたがたが崇めてきたものの、崇拝者ではない。あなたがたは、わたしが崇めてきたものの、崇拝者ではない。あなたがたには、あなたがたの宗教があり、わたしには、わたしの宗教があるのである』」[142]

五　対立の理由

クルアーンは人々にアッラーの唯一性を信じさせ、ひたすらアッラーを崇拝することへと呼びかけている。偶像崇拝を非難し、偶像には何の益もないことを説いている。次のような章句がその例である。

「あなたがたは、アッラーを差し置いて偶像を拝し、虚偽を捏造しているに過ぎない」[143]

「かれらはアッラーの外に、かれらを害せず、また益のないものに仕えて、『これら（の神々）は、アッラーの御前でわたしたちを執り成すものです。』と言う」[144]

またクルアーンは、偶像や多神教徒たちが地獄の燃料となることも伝えている。

「本当にあなたがた（不信徒）も、アッラーの外にあなたがたの崇拝するものも、地獄の燃料である」[145]

同時に、天使やジン（精霊）を崇拝する人々も非難し、それらがアッラーを崇拝するために創造されたものであることを明示している。要するに多神教徒の誤った信仰や崇拝行為のすべてを非難し、彼らを唯一神アッラーの信仰へと招いているのである。しかし、多神教徒たちは父祖伝来の教えや崇拝行為や伝統を放棄することはなかった。

カアバ聖殿はすべてのアラブ人から聖地と崇められていた。マッカの多神教徒たちは、すべてのアラブ人がカアバ

に対して権利を持っていると考えていた。彼らは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に、クルアーンの表現を借りるなら「わたしたちが、もしあなたと一緒になって導きに従うならば、わたしたちはこの土地から追われることになろう」[146]と言い、イスラームを受け入れたときにはマッカから追放される恐れがあることを、言い訳として口にしていた。しかしアッラーは彼らのこの主張に対し、「われは、かれらのために安全な聖域を設け、われからの糧としてすべての果実をそこに集めたではないか。だがかれらの多くはそれが分らない」[147]と述べられ非難されている。

クライシュ族の多神教徒たちは、偶像を崇拝しなくなることによって、すべてのアラブの部族にとって既成の事実となっている宗教上の優位さと商業上の利益を失うのではないかという不安を抱いていた。さらに、偶像をつくりカアバ聖殿を訪れる人々に売っている者たちもいた。イスラームがそうしたことを禁止したために、偶像を販売していた者たちはたいへん腹を立てたのである。

アラブ人たちは、彼らの父祖から受け継いだ慣習、風習、伝統をたいへん重く見ていた。クライシュ族の人たちにとって偶像崇拝は守らなければならない尊いものであった。彼らの父祖が連綿と偶像を崇拝しており、彼らにとっても最も尊ばなければならない道は父祖の信仰を守っていくことだと常に言っていた。自分たちのかたくなな行動を正当化するために父祖の伝統を根拠としていたのである。父祖を見習うことは、偶像崇拝者にとって、信仰の面からも崇拝行為や生き方の面からも放棄することのできない基盤であった。彼らはそれに従わない者すなわちイスラームを、父祖の道すなわち伝統的振舞いや信仰への攻撃であると見なした。クルアーンはこのような彼らの考え方を次のように非難している。

「かれらに向かって、『アッラーが下されたもの、ならびに使徒の許に来なさい。』と言えば、かれらは『わたしたちには祖先が伝えたもので十分です』と言う。何と、かれらの祖先は全く知識もなく、また（正しく）導かれなかったではないか」[148]

クルアーンは、アラブ人の道徳心の欠如、残虐な行為、不正、醜悪な生き方をはっきりと批判し、それを悪である

と見なし、彼らの行いを非難している。クルアーンがもたらした道徳は、アラブ社会の伝統的な道徳観とは根本的に異なるものであった。[149]彼らの道徳はクルアーンの教える道徳とは対立する部分が多かった。クルアーンは人々を良い徳、善へと導いているのである。

マッカの偶像崇拝者たちは死後の永遠の生や、審判の日にこの世での行いが問われることなどを信じなかった。あるいは、信じることを望まなかった。クルアーンが、悪を行った者には罰が与えられると指摘していることも彼らは気に入らなかった。彼らは悪い行い、不正な方法で利益を得ることによって他者を苦しめること、飲酒、姦通といったイスラームの禁じる罪に対してあの世で問われることなど考えもしなかった。「人生とは現世でのみ生きるものである。私たちは生まれ、いつか死ぬ。時間のみが私たちを滅ぼすことができる」[150]と彼らは考えていたのである。

彼らの部族的な考えは社会の階級に重きを置いていた。マッカの人々は、自分たちの奴隷が主人と異なる宗教を持つことは想像すらできなかった。彼らがイスラームに入信することは自分たちに対する反逆だと見なしていた。しかし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は人間は皆等しいと説き、人々の間の差別を認めていないのである。奴隷であれ、その主人であれ、また貧しい者であれ、金持ちであれ、皆が同じ立場であるとし、そこに優劣をつけるとすればそれは信仰の篤さ次第であると信徒たちに宣告していた。奴隷の所有者たちは、そのような自分たちと奴隷を同等の立場とする教えを受け入れたくなかったのである。

マッカの人々がイスラームと対立したことには、部族間の競争意識も重要な要素となっていた。アブー・ジァフルは、彼らがアブドゥマナーフ家とライバルであることから、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を信じなかったということを次のように語っている。

「我々はアブドゥマナーフ家と名誉に関する問題で対立していた。彼らは民衆に食事を振舞っていた。我々も振舞った。彼らは乗り物がない旅行者に動物を提供していた。我々も提供した。彼らは民衆に寄付をしていた。我々も寄付を行った。そして、ついに我々は彼らと同じレベルとなり、僅差でレースをする二頭の競走馬のような状態となった。

そのとき彼らは『私たちの仲間から、天からの啓示を受ける預言者が出現した』と言ったのである。私たちはいつ、その段階に到達できるだろうか。アッラーに誓っていうが、私たちは決して彼らを信じない」[151]

アブー・ジァフルは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のことをマッカの町の管理者や巡礼にまつわる任務の責任者のようなものであると考えていた。そしてその任務がアブドゥマナーフ家の一員に与えられたことに我慢できなかったのである。彼らはそのことについて次のように不満を述べている。「多くの任務にアブドゥマナーフ家の者が就いている。預言者まで彼らの中から出現した。我々には何が残ったのか」[152]

イスラームに対立した一部の人々は、クルアーンが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）よりも由緒正しい人に下されるべきであったと主張した。ワリード・ビン・ムギーラはムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であることをどうしても認めることができなかった。彼は言った。「どういうことだ。私はクライシュ族の有力者であり長である。なぜ私が脇におかれ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に啓示がもたらされることになったのか。アブー・マスード・アムル・ビン・ウマイルはサキーフ族の長であるのに、なぜ彼が脇におかれるのか。私たち二人がこの二つの町の長なのだ」彼のこのような主張に対し、アッラーは次のように仰せられている。

「またかれらは、『このクルアーンは、何故二つの町の有力な人物に下されなかったのでしょうか。』と言う。かれらは主の慈悲を割り当てるのか。われは、現世の暮しに必要な物を、あなたがたに配分し、また或る者を外の者より上に地位を上げ、或る者を外に服させる。あなたの主の慈悲は、かれらが蓄積したものより、はるかに尊いのである」[153]

六　ハムザとウマルの入信

偶像崇拝者のクライシュ族のイスラームへの敵対行為が激しい暴力と共に続いていた頃、勇敢さによって知られる二人の人物、ハムザ・ビン・アブドゥルムッタリブとウマル・ビン・ハッターブがイスラームに入信している。この

出来事はムスリムに力を与えただけでなく、イスラームの対立者にも衝撃を与えた。それは重要な出来事であり、初期のイスラーム文献の多くが二人がムスリムとなったいきさつを、独立した章を割いて説明している。

ハムザは甥である預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）よりも何歳か年上であった。二人は幼馴染であると同時に、乳兄弟でもあった。ハムザは猟を好み、猟から戻ると家に帰る前にカアバの周回を行った。強い力を持つ人であり、不正に虐げられている人々の支えとなっていた。まだムスリムにはなっていなかったが、甥ムハンマド（彼の上に平安あれ）をとても愛し、彼に対してなされるひどい振舞いにいたく悲しんでいた。あるときアブー・ジァフルがサファーの丘の近くで預言者を罵っていた。彼の語る教えや彼が預言者であるという訴えを蔑視し、罵りに満ちた言葉を投げかけ、いつものようにムハンマド（彼の上に平安あれ）を傷つけ悲しませていた。アブドゥッラー・ビン・ジュドゥアンの女奴隷がすぐ近くにいて、その一部始終を見ていた。そして彼女はその後、猟から戻ってきたハムザにその出来事を告げた。ハムザはその説明を聞いて怒り、まっすぐハラーム・シャリフ（聖域）に向かい、そこでクライシュ族の有力者たちと共にいたアブー・ジァフルに近づいていった。ハムザは彼のすぐそばまで来ると、矢を頭上に掲げ、それを半分に折った。そして「あなたはムハンマド（彼の上に平安あれ）を侮辱しているが、私も彼の教えを信じる一人だ。できるものなら私も侮辱してみなさい」と彼を威圧した。アブー・ジァフルの一族であるマフズム家の男たちは彼を助ける行動に出ようとしたが、アブー・ジァフルはハムザが正しいとして彼らを制したのである。

ハムザの入信は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちに力を与えた。偶像崇拝者たちは彼を恐れ、彼がムハンマド（彼の上に平安あれ）を守ろうとすることを知っていたため、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に危害を加えることを避け始めたのである。[154]

ハムザの入信はウマルよりも早かった。当時ムハンマド（彼の上に平安あれ）はダール・アル＝アルカーム（アルカームの家）で活動を続けていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は布教活動を続ける一方で、イスラームとクルアーンの勝利のために力ある人々が入信することをアッラーに乞い願った。アブー・ジァフルかウマルのどちらかの入信

を願い、次のように祈った。「アッラーよ。イスラームを、アブー・ジァフルかウマルによってより強固なものとなさってください」ウマルの入信によってこのドゥアー（祈り）は叶えられたのである。

ウマル・ビン・ハッタープはアディー族の出身で、クライシュ族の勇者たちの一人であった。彼は当初イスラームの強力な対立勢力の一人であり、入信した女の奴隷たちに拷問を加えた。ある日、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を殺害するために剣を携えダール・アル＝アルカームに向かった。その途上で、同じアディー族のヌアイム・ビン・アブドゥッラーと遭遇した。ヌアイムは彼に、どこに行くのかと尋ねた。ウマルは、「クライシュ族の団結を乱し、我らを惑わし、我らの教えを否定し、我らの神を侮辱するムハンマド（彼の上に平安あれ）を殺しにいくのだ」と答えた。それに対しヌアイムは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を殺せばアブドゥマナーフ族から必ず報復があるであろうと語った。そして彼の妹婿であるサイード・ビン・ザイドと妹であるファーティマもまたムスリムであることを知らせた。すでに入信していたヌアイムのここでの意図は、おそらくサイードやファーティマを告発することではなく、ウマルの関心を他に向けることによって時間稼ぎをすることにあった。妹を殺すことはできないかもしれないが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を殺す決意は固いように見えたのである。

ウマルは即座に妹婿の家に向かった。そこではハッバーブ・ビン・アラトが皆を前にクルアーンを読んでいた。身の危険を感じ彼はすぐに姿を隠した。ウマルは怒りに燃えながら家の中に入った。彼は外でクルアーンが読まれているのを聞いていたのである。彼は自分が聞いたことは事実であったと確信し、妹婿と妹を殴り始めた。妹は自分たちがイスラームに入信したこと、何があっても教えを捨てることはないと訴えた。そこでウマルは、彼らが読んでいるものを持ってくるようにと命じた。彼らはクルアーンのター・ハー章が書かれた紙を差し出した。

ウマルは差し出された紙に記された一文に目を見張った。そして、それが気に入ったと伝えた。そこで隠れていたハッバーブ・ビン・アラトも姿を現した。ウマルは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のところに行きたいと述べ、まっすぐアルカームの家へ向かった。そこにいた人々は、ウマルが剣を手にしているのを見て扉を開けることを躊躇した。

しかし中にいたハムザは、「もし彼が良い意志で来たのであれば、その気持ちをないがしろにすることはできない。もし悪い意志で来たのであれば、彼の剣で彼を殺そう」と言った。そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）は扉を開けることを許し、ウマルを入り口で出迎え、何の目的で来たのかと尋ねた。彼は「アッラーの使徒よ。私はアッラーとその使徒、アッラーによって下されたものを信じるためにここに来たのです」と答えた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれを聞き、「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」と唱えたのであった。

ウマルがイスラームを認めたことはムスリムに力を与え喜ばせた。[155] 彼の入信はムスリムたちのエチオピアへの移住が行われた後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者となって六年目の年（西暦六一五年）のズ・アル＝ヒッジャ月（十二月）に実現している。

ここで、人々の入信、すなわち個人や集団がイスラームへと惹きつけられていった状況における、クルアーンの影響を指摘しておく必要があるだろう。ウマルやその他多くの人々の入信に際し、クルアーンのあり方やその文学的な特質が大きな役割を果たした。クルアーンは、その文体や文学的特質の観点から、人知を超えた特性を持っている。ウマルの他にも、有名な詩人のトゥファイル・ビン・アムル、アカバの地で入信したハズラジュ族の六人、アウス族の長サアド・ビン・ムアーズなど、多くの教友たちがクルアーンの章句を耳にするやいなや時をおかず入信したと伝えられている。

七　エチオピアへの最初の移住

あるとき預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、困難な状況に直面した教友たちのことに心を痛めていたが、何ら有効な手段をとることができずにいた。そこで彼らに「アッラーが、あなた方を苦しみから救う道を示してくださるまでエチオピアに移住してください。その地の支配者はあなた方を迫害することなどないでしょう」と告げ、彼

らにエチオピアへの移住を勧めた。
　そこで一部のムスリムたちは迫害を逃れエチオピアへと移住した。これはイスラームの最初の聖遷である。諸文献はエチオピアへの移住は二度行われたと伝えている。最初のエチオピア移住はムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者として活動を開始してから五年目（西暦六一五年）のラジャブ月（七月）に行われ、そこに加わったのは女性が四人、男性が十一人の計十五人であったとされている。
　彼らの何人かは妻を同行して移住した。ある者は乗り物に乗り、ある者は徒歩で、秘密裏に紅海沿岸のシュアイバ湾に集結した。湾には二艘の船が待機していた。彼らは商人たちに船賃を支払い乗船し数日の航海ののち無事エチオピアに到着した。クライシュ族の偶像崇拝者たちはエチオピアに追手を送ったが、移住者たちを捕えることはできなかった。このようにして移住したムスリムたちはその地で安全な日々を送り始めたのである。[156]
　ムスリムたちは、他の地域ではなくなぜエチオピアに移住したのであろうか。この問いには、アラビア半島がムスリムたちにとって安住の地であったかどうか確かめることで答えることができる。まず、アラビア半島のアラブの諸部族のもとへと移住することはまったく不可能であった。なぜなら彼らは偶像崇拝者であったからである。彼らが様々

エチオピアへの移住経路

な目的でマッカを訪れるたびに、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らをイスラームへと招こうとしていたが、まったく色よい返事を得ることができずにいた。さらに彼らはクライシュ族と強く結びついていたため、ムスリムたちのために彼らが、クライシュ族との仲を悪化させることは望むべくもなかった。また、ユダヤ教徒やキリスト教徒の影響下にあるアラビア半島の諸地域に移ることもできなかった。当時ユダヤ教徒とキリスト教徒は対立関係にあり、互いに敵対している状態で、新たな勢力の登場を望んでいなかったからである。イエメン地方への移住も不可能であった。なぜならその地はゾロアスター教を国教とするイランの支配下にあったからである。彼らは啓典の民の教えに近づこうとしなかっただけではなく、その教えを信じる人々の存在を許していなかったからである。イラクやシリアもムスリムの移住先として適切ではなかった。陸路その地域へ到達するにはたいへん困難な旅が予想された以上に、クライシュ族が両地域と密接な交易関係にあったからである。さらにその地はイランやビザンチンの支配地域で、彼らは住民に圧政を敷いていた。アンマンの地にも圧政が存在していた。したがって、ムスリムたちにとって唯一の安全な地域が、エチオピアだったのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）もムスリムたちの移住先はその地しかないと考えていたが、そのことは彼がいかに的確に当時の社会状況を把握していたかを物語るものである。

ムスリムの移住者たちはエチオピアの支配者からも住民たちからも快く迎え入れられた。ひどい言葉を投げつけられることもなく、拷問を受けることもなく、自由に崇拝行為を行うことができるようになったのである。

当時、エチオピアに移住した一部の人々は、マッカで起こったある出来事のため、移住の四ヵ月後に一度マッカに戻っている。しかしその出来事が深刻なものではなかったため再びエチオピアに戻ったと伝えられている。ムスリムたちのエチオピア移住はラジャブ月（七月）に実現している。移住者たちはそこでシャアバーン月（八月）とラマダーン月（九月）を過ごし、シャウワール月（十月）にマッカに戻ったのである。のちに詳しく触れるここでの出来事は、ラマダーン月に起こったものである。[157]

イスラームの歴史書で『ガラーニークの逸話』として知られる記述によると、預言者ムハンマド（彼の上に平安あ

れ）がカアバ聖殿の近くでクルアーンの星章を読んでいたとき、「あなたがたは、アッラートとウッザーを（何であると）考えるか。それから第三番目のマナートを」[158]の箇所の後で、シャイターン（悪魔）の干渉をうけムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「それらは偉大な白鳥のようだ。彼らの執り成しが期待される」という言葉を口にした。夜になって天使ジブリールが偶像崇拝者たちはムハンマド（彼の上に平安あれ）によって偶像が賞賛されたことを喜んだ。偶像崇ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れ、「アッラーによって啓示されていない言葉を読んだ」ことを知らせた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれをとても悲しみ、シャイターンの干渉によって読んだクルアーンの部分を取り消したという。[159]

イブン・サアドやタバリーのような最も古い時代の歴史家たちが、十分な検証を行うことなく残したこの伝承は、のちのムスリムの学者たちにより実話ではないと見なされている。言葉の矛盾、伝承としての信頼性の低さ、そして何よりその伝承はタウヒード（神の唯一性）に反するなどといった様々な問題点が指摘されている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が、当時その存在のために苦しめられていた偶像について賞賛の言葉を述べることは考えられない。事実、クルアーンの星章第十九節及び二十節は、偶像や偶像崇拝を非難し、それらがいかに無意味なものであるかについて述べている。その章句に続けてムハンマド（彼の上に平安あれ）が偶像を賞賛するような言葉を口にすることはありえない。また信頼のおける伝承の中には、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が偶像を賞賛するような言葉はまったく存在していない。

おそらく、古い時代の歴史家たちはこの伝承を、神の啓示はシャイターンの攻撃によってもゆらぐことはないということを示そうとの良い意図から取り上げたのであろう。[160]しかし多くの西洋の歴史家たちは、移住者たちがマッカに戻った出来事などを根拠としてガラーニークの逸話を事実であるとし、しばしば話題として取り上げてきた。その逸話をイスラームを攻撃する材料とし、クルアーンの啓示への信頼性を損なわせる目的で利用してきたのである。最近では、一九八八年にインド系イギリス人サルマン・ルシディによって書かれた『悪魔の書』という書物で、再びその

話が取り上げられている。ガラーニークの逸話の解明のために、イスラーム世界では数多くの研究が引き続き行われている。[161]

八　エチオピアへの二回目の移住

偶像崇拝者たちによるムスリムへの迫害が日々激化していくに伴い、第一次エチオピア移住の一年後、ジャーファル・ビン・アブー・ターリブの指揮下、八十二人の男性と十八人の女性からなる一団がエチオピアに移住した。この移住者たちの氏名はイスラームの文献に記録として残されている。クライシュ族の偶像崇拝者たちは、ムスリムたちのエチオピアへの亡命を許さず、移住者をエチオピアから追放させるために、エチオピア皇帝ナジャーシー・アスハマのもとへアムル・ビン・アースとアブドゥッラー・ビン・アブー・ラービアを贈り物と共に使者として派遣した。皇帝は使者たちの申し出を聞いた後、移住者たちからも話を聞くことにした。宮殿の役人やキリスト教の指導者たちが見守る中、移住者たちを代表してジャーファル・ビン・アブー・ターリブが話をした。当時二十五歳前後の若者であったジャーファルは、勇敢さと明快な論証能力を用い、イスラーム以前の時代の信仰と慣習、そしてイスラームがもたらしたものについて語った。イスラームの信条について説き明かしつつ、祖国を出ることになったいきさつを説明した。短い言葉で簡潔に語るという預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がイスラーム布教の初期に用いていた方法と同じ手法で語られたこのときの演説を、ここに引用してみたい。

「皇帝よ、私たちは無知と野蛮の中に生きるジャーヒリーヤ（イスラーム以前の無明時代）の民でした。偶像を崇拝し、死肉を食べ、不道徳なことを行い、親戚とのつながりを断ち、隣人の権利などを省みることもありませんでした。強い者は弱い者を迫害していました。このような状況で生きていたとき、アッラーは私たちに、私たちの中から、皆がその血筋も正しさも、そして信頼性も高潔さも理解している人を預言者として遣わされました。この預言者は私た

ちを導かれ、私たちはアッラーを唯一であると知り、その方に崇拝行為を行い、私たちや父祖が崇拝していた石や偶像を放棄したのです。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、正しいことを語ること、預かったものを持ち主に返すこと、親戚に敬意を示すこと、隣人の権利を尊重すること、殺人や血を流すことをやめるように命じられました。不道徳なことを行うこと、嘘の証言を行うこと、孤児の財産を奪い取ること、潔白である女性を中傷することを禁じました。この他、預言者は私たちに、ただアッラーにのみ崇拝行為を行うこと、何者であれアッラーと同等に見なしてはいけないことを命じました。私たちに礼拝、喜捨、そして断食することを教えられました。[162] 私たちもそれを受け入れ、信じたのです。アッラーから預言者に告げられたものに私たちも従いました。私たちはただアッラーのみを崇め奉ります。何者かをアッラーと同等に配することはありません。禁じられたものを放棄しました。合法とされたものを合法と受け入れました。

しかし、私たちの部族が私たちを攻撃したのです。私たちを拷問したのです。崇高なアッラーへの崇拝ではなく偶像への崇拝を続けるためにイスラームの教えを捨てること、以前自由に行っていたように、イスラームによって禁じられた事柄を行うことを命じました。このようにして私たちを苦しめ、イスラームの教えを守っていくことを妨害したため、あなたの国に移住したのです。あなたを選択したのです。あなたの保護を求めたのです。あなたのそばでは私たちに残虐な行為が行われないことを希望しているのです」

これに対しエチオピア皇帝ナジャーシーはジャーファルに、「アッラーからあなた方の預言者に下されたものは手元にあるか」と尋ねた。ジャーファルは「はい、ございます」と答え、ナジャーシーの求めに応じてクルアーンのマルヤム章を読誦した。それに納得し、ナジャーシーはムスリムたちを使者に引き渡さないことを決めたのである。

翌日、使者たちはムスリムたちがイーサーについて悪い考えを持っていると訴え、ナジャーシーの心を動かそうとした。ナジャーシーは再度ジャーファルを呼び、イーサーについてどのような見解を持っているかと尋ねた。ジャーファルは「イーサーについては、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が私たちに教えてくださったとおりに認識して

います。イーサーはアッラーのしもべであり、使いであり、魂であり、マルヤム（マリア）に授けられたかれの御言葉なのです」と答えている。[163]

ナジャーシーはジャーファル・ビン・アブー・ターリブの言葉に心を動かされ、さらにはイスラームに入信したとする説もある。ナジャーシーは移住者たちのエチオピアでの安全な暮らしを保障すると宣言した。そして彼らをクライシュ族の使者に引き渡すことはなかった。使者たちが携えてきた贈り物も、彼らのもとに返された。使者たちは任務を果たせないままマッカに戻ることになった。

その後、移住者たちの一部は、様々な時期に自らの意志でマッカやマディーナに戻っている。イブン・サアド[164]の伝えるところによると、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナにヒジュラ（聖遷）を行ったことを知ったエチオピア移住者たちのうち男性三十三人と女性八人の計四十一人はエチオピアから帰還している。その中の二人はマッカで死亡し、七人はマッカで投獄され、二十四人はバドルの戦いに参加している。ジャーファルを含む移住者の最後の一団が帰還したのはヒジュラ暦七年、西暦六二八年、ハイバルの征服のときであった。

九　ハーシム家に対しての排斥運動

マッカの偶像崇拝者たちはムスリムの数が次第に増え、ハムザやウマルの入信によって力を得たこと、エチオピアへ移住したムスリムたちが安全を保障されて暮らしていたこと、ナジャーシーが彼らを引き渡すどころか保護したことなど、一連の状況を踏まえ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を殺害する決断を下した。彼が殺害されるまでは、ハーシム家及びムッタリブ家との間の和平、安全保障、親戚関係、そして相互の掟の尊重といった取り決めを白紙に戻すことをはっきりと宣言し、この二つの支族に対し敵対関係に入ったことを明らかにしたのである。アブー・ターリブは甥ムハンマド（彼の上に平安あれ）や一家の人々の安全を確保するため、彼らをアブー・ターリブ地区へ

と移らせた。[165]

偶像崇拝者たちはこの二家族に対し娘を嫁がせたり、そこから娘を娶ったりすること、取引を行ったり、共に座して話し合いの場を持ったりしないと誓った。彼らは宣誓書に署名し、それをカアバ聖殿の壁に掲げた。預言者を捕えるまで、それを固く守ることを誓いあった。偶像崇拝者たちの目的は、これによって預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と彼を庇護するハーシム家とムッタリブ家に罰を与えること、彼らに圧力をかけることによってムハンマド（彼の上に平安あれ）を庇護することを断念させること、そして彼らにムハンマド（彼の上に平安あれ）の引渡しを行わせることであった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の叔父アブー・ラハブと息子たちを除く、すべてのハーシム家とムッタリブ家の人々は（信徒である人は宗教への結びつきのために、まだ入信していない人は部族への結びつきのために）アブー・ターリブ地区に移った。アブー・ラハブと息子たちはそうした動きに加わることなく偶像崇拝者の側に立っていた。[166]

ハーシム家は三年間、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者としての使命を受けてから七年目から十年目の年にかけて（西暦六一六年〜六一九年）、社会的・経済的な排斥運動を受けた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）、ハディージャ、そしてアブー・ターリブは財産のすべてを使い尽くした。なぜならこの条件のもとでは、キャラバンによる交易を行うことができなかったからである。ただ巡礼の季節、そしてハラーム月にはアブー・ターリブ地区の外に出て生活に必要なものを確保することができた。だが偶像崇拝者はそこでも彼らを見逃すことはなかった。彼らが食料を購入しようとすると、その価格を吊り上げた。

排斥運動に加わった部族の中には、ハーシム家と姻戚関係だった人々もいた。彼らは時々、排斥運動の誓いを破り、その地区に食べものを持ち込んでいた。その後、良心を持つ一部の人々が、排斥運動をやめさせるために一堂に会した。その中の何人かはハーシム家の親戚にあたる人々であった。たとえばズハイル・ビン・アブー・ウマイヤはアブー・ターリブの妹の息子であり、ヒシャーム・ビン・アムルはアブー・ターリブの叔父ナドゥラの異父兄弟の息子であった。

この二人はクライシュ族の有力者であるムティム・ビン・アディーやアブル・バフタリー・ビン・ヒシャームを説得し、彼らの支援を得てアブー・ターリブ地区に赴き、困難な状況にある人々を助け出した。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの人たちから受けた善行を決して忘れなかった。アブー・ターリブ地区でハーシム家と共に苦難を味わったムッタリブ家の人々は、のちにクルアーンで〝近い親戚〟の中に加えられている。ハーシム家とムッタリブ家に同程度に近い親戚であるアブドゥッシャムス家やナウファル家は〝近い親戚〟の中に加えられていない。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、カアバ聖殿の壁に掲げられた誓いの文を書いた板が虫に食われ、最初の「ビスミカッラー・フンマ（アッラーの御名によって）」という言葉以外、親戚関係を断つことなどに触れた部分が消失していることを偶像崇拝者たちに知らせた。彼らはその板がムハンマド（彼の上に平安あれ）が知らせた通りの状態になっているのを見て排斥運動を中止した。それはムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者としての活動を始めてから十年目、すなわち西暦六一九年のことであった。[167] 偶像崇拝者たちはこの排斥運動で期待した結果を得ることができず、イスラームの勢力拡大を阻止しようとしたもくろみは失敗に終ったのである。

十　悲しみの年

偶像崇拝者たちによる排斥運動が終了した後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を守り愛してきた叔父アブー・ターリブと妻ハディージャが相次いで亡くなった。この年は、悲しみの年とされた。アブー・ターリブは排斥運動の終了から八ヵ月と二十日後に、ハディージャもそれからまもなく、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者となって十一年目のラマダーン月の一〇日（西暦六二〇年四月一九日）に亡くなった。ハディージャの死後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのなきがらをマッカのハジューンという墓地に運び、自らの手で埋葬した。当時はまだ葬儀の礼拝は行われていなかった。[168] その後ムハンマド（彼の上に平安あれ）はしばしばこの地に足を運び、ハディージャの

墓参に訪れている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はハディージャと二十五年の歳月を共に過ごした。ハディージャは彼が預言者であることを最初に認め、その布教活動を支えた。すべての財産をイスラームを広めるために費やした。人々が彼から顔を背けた時期に、彼に力を与えたのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はハディージャの死後も決して彼女のことを忘れることはなく、常にその存在を思い起こしていた。

アブー・ターリブの死後、ハーシム家の長となったアブー・ラハブは、親戚であることを理由にムハンマド（彼の上に平安あれ）に庇護を与えることとした。しかし、それはイスラームに対する彼の考えの変化を意味するものではなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）を庇護することは、単に部族の中の相互扶助のために行っていると明言していた。彼のこの行動はムハンマド（彼の上に平安あれ）の叔母たちの要請によるものであったと伝えられている。記録によると、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の叔母たちはアブー・ラハブのもとに行き、彼がどれほどムハンマド（彼の上に平安あれ）の考えを認めていないとしても、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼の甥であり、彼の庇護者として最もふさわしいのはアブー・ラハブ自身であると訴えた。アブー・ラハブは当初その要請を受け入れていたが、その後アブー・ジァフルの干渉によりその処置を取りやめている。[169] そのため、この後で触れるターイフへの旅からの帰途ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、別の一族であるナウファル家のムティム・ビン・アディーの庇護を受けてマッカに入ることができたのである。

十一　サキーフ族への訪問

アブー・ターリブとハディージャの死後、偶像崇拝者たちは以前にもまして預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を苦しめるようになった。布教という点から見れば、マッカの人たちに対してはすでに十分な布教活動が行われていた。

そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）は、他の人々を布教の対象にしようと考え始めていた。マッカ時代の最後の三年間、まずターイフで、その後マッカを訪れる遊牧民のアラブの諸部族、そしてマディーナのアウス族やハズラジュ族へと布教活動の対象を広げていった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はザイド・ビン・ハーリサを伴い、ターイフに赴くことを決めた。そこに住むサキーフ族への布教と、クライシュ族に対し共に行動を起こしてくれることを期待してのことであった。預言者となって十一年目の年（西暦六二〇年）のハディージャの死の一ヵ月後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの地に赴いた。ターイフの有力者であるアムル・ビン・ウマイルの息子たちをイスラームへと招いた。そして自らの支援者となってくれることを求めた。しかし彼らはこの招きを受け入れなかった。なぜならサキーフ族の人々は、クライシュ族との関係が悪化することを望まなかったからである。彼らの間には親戚関係と交易上の結びつきがあり、ターイフにはクライシュ族の人々の土地もあった。それに対しムハンマド（彼の上に平安あれ）は、少なくともこの面会について口外しないことを求めたが、彼らはそれにも耳を貸さなかった。それどころか人々にムハンマド（彼の上に平安あれ）を攻撃させたのである。彼らは道の両側に並び、道の真ん中を行くムハンマド（彼の上に平安あれ）とザイドに石を投げつけた。石はムハンマド（彼の上に平安あれ）の足に当たり傷つけた。彼を守ろうとしたザイドは頭に傷を受けた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は投げつけられた石のせいで歩けなくなり座り込んだが、彼らは無理やり腕を取って立ち上がらせムハンマド（彼の上に平安あれ）が歩き始めると、彼らは再び石を投げ嘲笑を投げかけた。[170] 彼らはクライシュ族のラビーアの息子ウトバとシャイバの果樹園に至るまでその酷い仕打ちを続けた。この困難な状況においてムハンマド（彼の上に平安あれ）は手を掲げ、アッラーに次のようなドゥアーを捧げた。

「アッラーよ、私の力の弱さ、人々に対する力の不足をあなたの御前に示しています。最も慈悲深いお方よ、あなたは無力な者たちを導かれる神であられます。あなたは私を導いてくださる神であられます。あなたは私を誰の手に委ねられるのですか。私に悪事をなすよそ者たちにですか。敵たちにですか。これが私へのあなたのお怒りからもた

預言者ムハンマドがターイフからの帰途休息を取り、供されたブドウを食べた果樹園の景観

らされるものでなければ、私は気に留めることはありません。しかしあなたからもたらされる庇護や保護はいつもより良いものです。あなたの怒りに触れることからの庇護を求めます。闇を輝かせ、現世と来世をより良くされるあなたの御顔の光に庇護を求めます。すべてがあなたのご満悦のためです。力や強さはただあなたからもたらされるものなのです」[171]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はのちに質問に答え、ターイフへの旅の際の苦痛はウフドの戦いのとき以上のものであったと語っている。[172]

ムハンマド（彼の上に平安あれ）とザイドはウトバとシャイバの兄弟の果樹園で休息をとった。そのとき兄弟の奴隷の一人であるアッダースが、主人のいいつけですと言ってムハンマド（彼の上に平安あれ）に一房のブドウを差し出した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）がそれを食べる前に「ビスミッラー（神の御名において）」と言ったことがアッダースの注意を引いた。そして「この地域の人々はそういった言葉を使っておりません」と言った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が彼に「お前はどこの出身なのか」と尋ねると、アッダースは自分はニノヴァ出身のキリスト教徒であると答えた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が「そうか、誠実な人ユーヌス・

ビン・マッタの町から来たのだね」と尋ねると、アッダースは「ユーヌスのことをどうして知っているのですか」と問うた。するとムハンマド（彼の上に平安あれ）は「彼は私の兄弟だ。彼は預言者だった。私も預言者なのだ」と続けた。アッダースはムハンマド（彼の上に平安あれ）のその一言によってイスラームへの入信を決意したのである。

この間にサキーフ族たちはマッカに知らせを送っていた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は部族を離れてマッカの外に出たため、庇護を得て再びマッカに入ることができる人物を探し求めていた。アフナス・ビン・シャリークとシュハイル・ビン・アムルは、彼の庇護の要請を拒否した。結果としてナウファル家の長であるムティム・ビン・アディーがムハンマド（彼の上に平安あれ）を庇護し、息子たちと共に彼を守った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はまずカアバ聖殿で周回を行い二ラカート（ラカートは一連の動作からなる礼拝の単位）の礼拝をしたのち家に戻った。[173]

十二　イスラーとミーラージュ

三年間続いた社会的・経済的排斥運動の直後に叔父と妻を亡くした上に、その後ターイフから何も得るものなく戻ったことは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を悲嘆の淵に沈めた。そのような状況下でいくつかの宗教上の重要な項目を彼に知らせ、そして彼の苦痛を和らげる目的でイスラーとミーラージュが実現している。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が、夜、マッカからエルサレムのアル＝アクサー・モスクに導かれ旅したことを「イスラー」と、天に召し上げられたことを「ミーラージュ」と呼ぶ。そのことについてクルアーンの夜の旅章では次のように述べられている。「かれに栄光あれ。そのしもべを、（マッカの）聖なるマスジドから、われが周囲を祝福した至遠の（エルサレムの）マスジドに、夜間、旅をさせた。わが種々の印をかれ（ムハンマド（彼の上に平安あれ））に示すためである。本当にかれこそは全聴にして全視であられる」ムハンマド（彼の上に平安あれ）がアル＝アクサー・モスクから

天に召し上げられたことについては多くのハディースや歴史書で言及されている。この出来事が実現したことに関しては学者たちの間で意見は一致している。[174]

十三　アカバの誓い

イスラームがマディーナの人々に広く知られ、そしてその地へのムスリムたちの移住の準備が整っていったことには、アカバの誓いが大きな役割を果たしている。アカバはマッカに位置しハラーム地域へ三キロの地点にあった。そこはミナーとの境であり、周囲を丘に囲まれた小さな静かな土地であった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその地で、西暦六二〇年、六二一年、六二二年と三年にわたり、ハッジ（大巡礼）の季節にマディーナの人々と会っていた。最初は単に出会いとして、二回目と三回目は約束の上での会合であった。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、イスラーム以前の時代の慣習に従い巡礼や定期市のためにマッカに来る様々なアラブの部族にイスラームの教えを説いていた。預言者となって十一年目の年のハッジの季節に人々をイスラームへと招いていたとき、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヤスリブ（マディーナの旧名）の住人でありハズラジュ族に属する六人の人々と出会った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は髪を切っていたこの六人のそばに座りイスラームを説いた。彼らはアサド・ビン・ズラーラ、アウフ・ビン・ハーリス、ラーフィー・ビン・マーリク、クトゥバ・ビン・アーミル、ウクバー・ビン・アーミル、そしてジャービル・ビン・アブドゥッラーという名の人々であった。この六人はイスラームを受け入れることによって、アウス族との間で何年も続いた紛争によって生じた敵対関係を終らせ、二つの部族の間に統一と協調が生まれることを期待していると述べた。それには、マディーナには政治的な統治者が必要であるということも指摘した。彼らは次の年も同じ場所で会うことを誓い合った。[175] その六人はマディーナに到着するや人々に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が移り住んで来ることを告げた。それが最初のアカバの

アカバの誓いが取り交わされた場所の景観

出会いと呼ばれている。

翌六二一年には、前年にアカバで会った六人を含む十人のハズラジュ族、二人のアウス族からなる十二人の一団が、約束どおりにアカバで預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と会った。そして何者をもアッラーに配しないこと、その命令に従い子供たちを殺さないこと、中傷しないことなどを預言者に誓った。つまり、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がもたらした命令や禁止事項に服従することを誓い合ったのである。第一のアカバの誓いと呼ばれるこの出来事の後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はムサアブ・ビン・ウマイヤを、ヤスリブのすでにイスラームに入信している人々にはクルアーンを教え、まだ入信していない人々にはイスラームを伝えるために派遣した。ムサアブはアサド・ビン・ズラーラの家で客人となった。彼の一年間にわたる活動の結果、アウス族の二つの大きな支族の長であるサアド・ビン・ムアーズとウサイド・ビン・フダイルを含む多くのヤスリブの住民、そしてその一族であるアル＝アシュハル家の全員がイスラームに入信している。

六二二年のハッジの季節には、二人の女性を含む七十五人の人々が預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と会うためにマッカを訪問している。彼らはムハンマド（彼の上に平安あれ）を

ヤスリブに招くという本来の目的を隠し、ハッジのためであるかのように見せかけてその地を訪れた。マッカに到着すると彼らは極秘裏にムハンマド（彼の上に平安あれ）に知らせを送った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は叔父アッバースと共にアカバへ赴き、そこで秘密裏に会合が持たれた。アッバースはアブー・バクルとアリーを偵察のために要所に派遣し、[176]甥であるムハンマド（彼の上に平安あれ）は現在自らの部族の庇護のもとにあること、しかしマディーナの人々が招いてくれるならその地に移り住むことを望んでいると伝えた。彼らがあらゆる困難を覚悟し、敵からムハンマド（彼の上に平安あれ）を守ってくれるのであれば、彼をマディーナに連れていくことができると言った。マディーナの人々はそれを承認した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）もそこで話をしクルアーンを読んだ。移住をした場合、彼らの命、財産、子供たち、女性たちを守ることはもちろんのこと、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を守り、彼に従うこと、善を行い悪を退けること、何者にも遠慮することなく正義を貫くことなどが誓約された。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の求めにより、マディーナの人々は九人のハズラジュ族と三人のアウス族からなる十二人の代表を決め、常に連絡が保てるようにした。第二のアカバの誓いと呼ばれるこの出来事の後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は教友たちにマディーナへの移住の許可を出した。そして彼らは大小の一団を形成して移住を始めた。この三ヵ月後、ラビーウ・アル＝アウワル月（三月）に、彼自身もアブー・バクルと共にマディーナへ聖遷を行うことになるのである。[177]

十四　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のマッカ時代の教えのまとめ

ここまでムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者として遣わされる以前の生活、彼に啓示が下された以降の生活、また当時の社会状況などについて見てきた。話を預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の聖遷とマディーナにおける生活へと移す前に、マッカでの教えを総括をすることはムハンマド（彼の上に平安あれ）の活動をよりよく理解し、

彼が何をしようとしていたのかを明白にする上で有益であると考える。なぜならマッカ時代には啓示を伝えることに大きな努力が払われていたからである。その教えを明らかにするためにも、マッカ時代に下されたクルアーンの言葉を見ていくことが必要であろう。というのも、クルアーンの五分の三はマッカ時代に啓示されたからである。

マッカ時代に下された啓示は、主に唯一神信仰、預言者、来世といった基本的な信仰箇条にまつわるものであり、崇拝行為や道徳の基本についても述べられている。この時代の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の呼びかけは、まず偶像崇拝や多くの神々を崇拝すること、来世の否定などを信仰から取り除くことに重きが置かれていた。そうした考え方にのっとって、唯一神信仰を人々の心に植えつけ、アッラーや啓典、天使、預言者たちへの信仰へと呼びかけている。そういった事柄を人々に受け入れてもらうために、そして迷うことなく信仰心を育んでいくためにも、人々が受け入れやすい真実が言及されている。そこには人や世界が神によって創造され、規律が維持されていることの論拠が示されている。月や太陽が一定の法則にのっとって動くこと、地球やその他の星が創造され、それらの間にも均衡や規律があることなどが示されている。クルアーンのある章では「あなたがたは（かれが）うち建てられた天（の創造）が、あなたがたを創ることより難しいとでも思うのか。かれはそれを高く掲げ、それから整え」[178]と述べられている。

マッカ時代の教えが信仰に関する内容に集中していることは自然なことである。なぜならムハンマド（彼の上に平安あれ）は、偶像を崇拝し死後の復活を信じない人々に預言者として遣わされていたからである。人々の心にイスラームの信仰を植えつけていくためには、まずそういった信仰上の基本的な事柄を伝えていくことが必要であった。そのことは布教の次の段階でハラール（勧められていること）やハラーム（禁止されていること）といった具体的な事柄をより容易に受け入れられるようにする点からも重要である。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の妻の一人であるアーイシャはこの点について次のように説明している。「クルアーンで最初に啓示されたものは天国と地獄が説かれた章です。そして人々がイスラームに集っていった後に、ハラールやハラームといった具体的な法規を含む章が啓示されています。もし、最初から『酒を飲んではいけない』と言ったような形で啓示が下されていれば、人々は『私

たちは決して酒をやめないだろう』と言い、『姦通してはいけない』という章句が下されていれば『決してそれをやめないだろう』と言っていたことでしょう」[179]

タウヒード(唯一神信仰)に反する信仰は、アッラー以外の何ものかをアッラーと同等と見なすという意味の「シルク」という概念で説かれている。アッラーの存在について、クルアーンが用いている論拠は、生来備え持っている本質を失っていない人々によっては自然に理解され得るような事柄によっている。クルアーンには、アッラーの存在が真実であることを証明するものは人の内面にも、外の世界にも存在することが示されている。[180] そしてこの世界が持っている驚くべき均衡や秩序が示されている。神性をアッラー以外のものに帰することは感覚的にも論理的にもありえないことだと述べられている。タウヒードと共に、来世と死後の復活、天国と地獄についても言及されている。来世の存在は何度も語られている。同時に現世をないがしろにすることもよしとされず、現世も来世も等しく大切にしなければならないとされている。[181] 「アッラーがあなたに与えられたもので、来世の住まいを請い求め、この世におけるあなたの（務むべき）部分を忘れてはなりません」[182]

マッカ時代の章句には信仰に関する事柄とともに、人としての普遍的な生き方や道徳など時代が移っても変わることのない基本的な教えが含まれている。たとえばよい振舞いが命じられ、強い信仰を持つこと、耐え忍ぶこと、清潔さ、礼拝、純潔さ、正しさ、両親を大切にすること、親戚を訪ねること、善を行うこと、正義や善行を勧めることなどがよしとされ命じられている。一方で、人を殺すこと、女児を生き埋めにすること、不正、圧制、残虐行為、人の財産を不正に利用すること、思い上がりや高慢な態度などが禁じられている。

善行や公正に振舞うことはしばしば言及されている項目である。善行にふさわしいものはひたすら善であり、[183] 善と悪とは同じではないことが指摘されている。[184] また悪行は最も効果的に防ぐことが望まれ、それによって敵すらも心からの友となり得ることが示されている。[185] 公正さが命じられ、罪はそれを犯した人個人のものであり、罪を犯した本人のみが罰せられるべきであると教えられている。[185] また人は皆、それぞれ自分の振舞いに責任を負うべきであると述べ

られている。
過度に物惜しみすること、そして浪費することも非難されている。[186] 恩知らずであること、[187] 財産に固執すること、[188] いつも他人の欠点を探し批判すること、うわさ話をすること、善を行おうとする人を妨害すること、攻撃的であること、罪深い人、[189] 下品で粗野な人が非難されている。また女性を蔑視すること、[190] 女の子が生まれることを忌み嫌うことを非難している。[191] 孤児の財産を不正に使ってはいけないこと、はかりを不正に用いてはいけないこと、十分な知識を持っていない事柄に口を出さないことなどを戒めている。
崇拝行為についてもマッカ時代にその形が定められ始めた。この時代の最後の時期には礼拝が日に五回と決められ、ザカート（喜捨）についても言及されている。崇拝行為が新たに命じられる際には、アッラーの命令や禁止されたことを守ることは人間にとって決して難しいことではなく、実行できないことは何も含まれていないことも示されている。[192] また崇拝行為はひたすらアッラーのご満悦のみを求めて行うべきであるとしている。[193]
純潔を守ること、[194] 信託を確実に履行すること、[195] 約束を果たすこと、正直であること、相談しあって物事を行うこと、不正に対し相互に助け合い立ち向かうこと、[196] 父母に善をなすこと、[197] 親戚や貧しい人々や旅人に救いの手を差し伸べることが求められている。困窮している人や貧しい人々を助けることが賞賛されている。[198] また預言者ヤヒヤが例として挙げられ、父母によく振舞い、高慢にならず彼らに背くことのない人々が評価され、[199] 謙虚で平和を望む人、[200] 嘘の証言を行わない人、[201] 浪費することなく過度な物惜しみをしない中道をいく人[202]が誉められている。命を大切にする人や姦通を行わない人[203]が評価される一方で、人の命を奪ったり、姦通を行う人には罰が与えられることも明示されている。[204] お金や地位といった現世的な価値がアッラーの御前においては何の意味も持たないことも[205]告げられている。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やムスリムに対する抑圧や拷問については常に耐え忍ぶことを教えている。[206] ムハンマド（彼の上に平安あれ）と教友たちを勇気づけるため、過去の預言者たちの努力や成功の物語が説かれている。
預言者イブラーヒームやヌーフ（ノア）、ムーサーやイーサーの物語はムハンマド（彼の上に平安あれ）に、その後彼

が経験する出来事と似た状況を示しているのである。これらの物語によってアッラーは、ご自身が預言者たちをどのように助けられたか、どのように彼らを成功へと導かれたか、そして、その教えを否定した預言者や人々がどのように滅んでいったのかを教えておられる。[207] また普遍的な正しい徳をその体現者によって明らかにするために、しばしば物語が用いられている。

さらに、マッカ時代に啓示された章句では過去の預言者たちと彼らに従った人々について、そして彼らが移住の必要性に迫られ移住を行ったことについても言及されている。この点については預言者イブラーヒーム、ルート、シュアイブ、そしてムーサーの移住が例として挙げられている。[208] それらはムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちが移住に備えての精神的な心構えを説いたものと見なすことができよう。

マッカ時代の最後の時期に下された啓示は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が他のすべての人々と同様に、特別な力を持っている存在ではなく、ただ自らに啓示されたものに従っているだけだ[209]と指摘している。人が神の啓示という道案内を必要としていること、アッラーがムハンマド（彼の上に平安あれ）を媒介として人々に伝えられた教えと、他の啓典の民たちに与えられた教えの根本にあるものは同じであること、預言者たちは皆、唯一の真実を伝えていることが基本的なテーマとなっている。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であり正しい道にあること、[210] クルアーンはムハンマド（彼の上に平安あれ）に下された啓示そのものでありアッラーの御前から下されたものであること、すべての人々のための預言者として遣わされたこと、[211] クルアーンはムスリムのための真の導きへの道案内であり、慈悲であることが[212]示されている。

また、マッカ時代の終り頃には、イスラーム社会の重要な特質である協議や相談を行うということを、一つの原則、規律とする章句が下されている。この原則を冠した相談章では、ムスリムは物事を協議によって進めていくべきであると示されている。[213] このことはマディーナ時代にも再度触れられ、アッラーから預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）には協議によって物事を決めるように命じられている。[214] タウヒードや来世に関する事柄をはじめとして、マッカ時代に

触れられたことはマディーナ時代の啓示においても重ねて何度も触れられている。マディーナ時代には個人や集団の生活に秩序を与える教えが多く啓示され、ムスリムとしての崇拝行為や行動に関する規範が明示されている。

ヒジュラ（聖遷）とマディーナでのイスラーム社会の形成

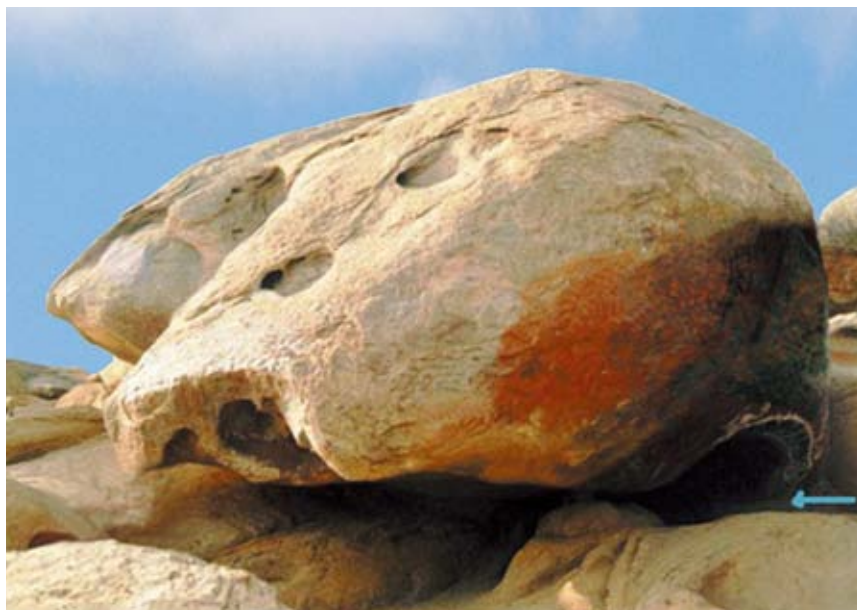
一　ヒジュラ

ヒジュラという言葉は通常、放棄する、別れる、ある土地を放棄して別の土地へ移る、と言ったような意味を持つ。宗教用語としては、固有の表現として預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）及びマッカのムスリムたちがマディーナへ移住したことを、また一般的にはムスリム国家ではない地域からムスリム国家へと移ることを意味している。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、イスラームを広めるための拠点となり得る土地を探していた。アカバの誓いが交わされた頃、一つの計画としてマディーナへの移住が検討されていた。なぜならマディーナは戦略的に重要な土地であったからである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）とその一族は曽祖父のハーシムの時代以降、マディーナと密接なつながりを持っていた。アブドゥルムッタリブの母はハズラジュ族の出身であった。ある土地問題によってアブドゥルムッタリブとその叔父ナウファルとの間に対立が生じたときも、マディーナの人々はアブドゥルムッタリブの援助に駆けつけていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の母アーミナと父アブドゥッラーの墓はマディーナにあった。アッバースもマディーナの人々と親しい友人関係にあった。それに加え、アカバの誓いやその他の要因によって、マディーナでイスラームが根づき広まっていく土壌があったと思われる。第二のアカバの誓い以降、ラビーウ・アル＝アウワル月が近づくと、ムハンマド（彼の上に平安あれ）とアブー・バクル、そしてその家族、アリー、そして投獄されていたり病気で弱っていて移住ができない数人を除き、マッカにはほとんどイスラーム教徒は残っていなかった。その一部はエチオピアにいたが、多くはマディーナへヒジュラを行っていたのである。アブー・バクルはム

ハンマド（彼の上に平安あれ）に何度もヒジュラを決行する許可を求めたが、その返事は「急いではいけない。おそらくアッラーはあなたに友を与えられる」というものであった。アブー・バクルはその友が預言者であることを願った。[215]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が最後の瞬間まで、他のムスリムたちと共にヒジュラを行わなかったのは、マッカの多神教徒たちによる妨害を恐れていたからである。なぜならマッカの多神教徒は、彼が他の部族と合流することは自分たちに不利をもたらすと考えていたからである。マッカの多神教徒たちはイスラームがマディーナで広まり、ムスリムたちがそこへ移住することを心よく思っていなかった。多神教徒たちはムスリムがマッカを出て行くだけで満足していなかった。ヒジュラの流れは彼らの不安をさらに増すものであった。彼らはムハンマド（彼の上に平安あれ）もまたヒジュラを行うことを予想しており、それが現実のものとなることを恐れていたのである。[216]彼らは根本的にムスリムたちのマディーナへのヒジュラに反対だったのである。事実そのためにアカバの誓いは極秘裏に行われ、ウマルを除く他の多くのムスリムたちはこっそりとヒジュラを行った。なぜなら多神教徒たちは、イスラームがマディーナで力を持つことを恐れており、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がヒジュラを行うことによってイスラームがそこでさらに力をつけ勢力を増していくことは、マッカの人々にとって政治的・経済的な危機をもたらす可能性があったからである。マディーナはマッカとシリアを結ぶキャラバンルートの途中にあり、クライシュ族の交易が阻害されかねないこと、そして何よりも外からの脅威にさらされる危険性があったのである。

これらはすべてクライシュ族を深刻に悩ませるものであった。しかし、まだすべての可能性を失ったわけでもなかった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はまだ彼らのもとにいるのである。彼を抹殺することによって危機を未然に防ぐことができる。彼らはそう考えていた。だがハーシム家の存在は脅威であった。なぜならムハンマド（彼の上に平安あれ）を殺害すれば、ハーシム家が血の報復を行うことが予想され、それによってクライシュ族の間で、部族の歴史の中でかつて起こったこともないような、大規模な血が流れる戦いが起きる可能性があったからである。

セブルの洞窟の外観

セブルの洞窟の内部

解決の道を探し求めていた多神教徒の有力者たちは、必要な措置をとるためにダール・アル＝ナドゥワに集まり話し合いを持った。会合の内容が非常に重要なものであったことから、ハーシム家からはアブー・ラハブを除く誰も呼ばれず、また多神教徒たちが信頼していない人々も参加できなかった。会合では三つの案が論議された。一つはムハンマド（彼の上に平安あれ）を投獄し、鎖につなぎ、死ぬまで拘束しておく案であった。しかしムスリムたちが彼を助け出しに来る可能性を考え、その案は却下された。二つ目はムハンマド（彼の上に平安あれ）をマッカから追放し、二度とマッカには戻らせないという案であった。しかし追放された地で仲間を増やし、マッカを征服しに来るのではという恐れからこの案も却下された。三つ目は、アブー・ジャハルによる提案であった。それはそれぞれの一族から屈強な若者を選び、彼らにムハンマド（彼の上に平安あれ）を襲わせ殺害するという案であった。ハーシム家はすべての一族に対して血の報復に出ることは不可能で、殺害した賠償金でよしとせざるを得ないであろうとの計算が働いていた。その殺害の賠償金も一族がそれぞれ分担して支払うとされた。この案は投票によって承認され、実行に移されることとなった。この件についてはクルアーンにも次のような記述がある。「また不信心者たちが、あなた（ムハンマド（彼の上に平安あれ））に対し如何に策謀したかを思い起しなさい。あなたを拘禁し、あるいは殺害し、あるいはまた放逐しようとした。かれらは策謀したが、アッラーもまた計略をめぐらせられた。本当にアッラーは最も優れた計略者であられる」[217]

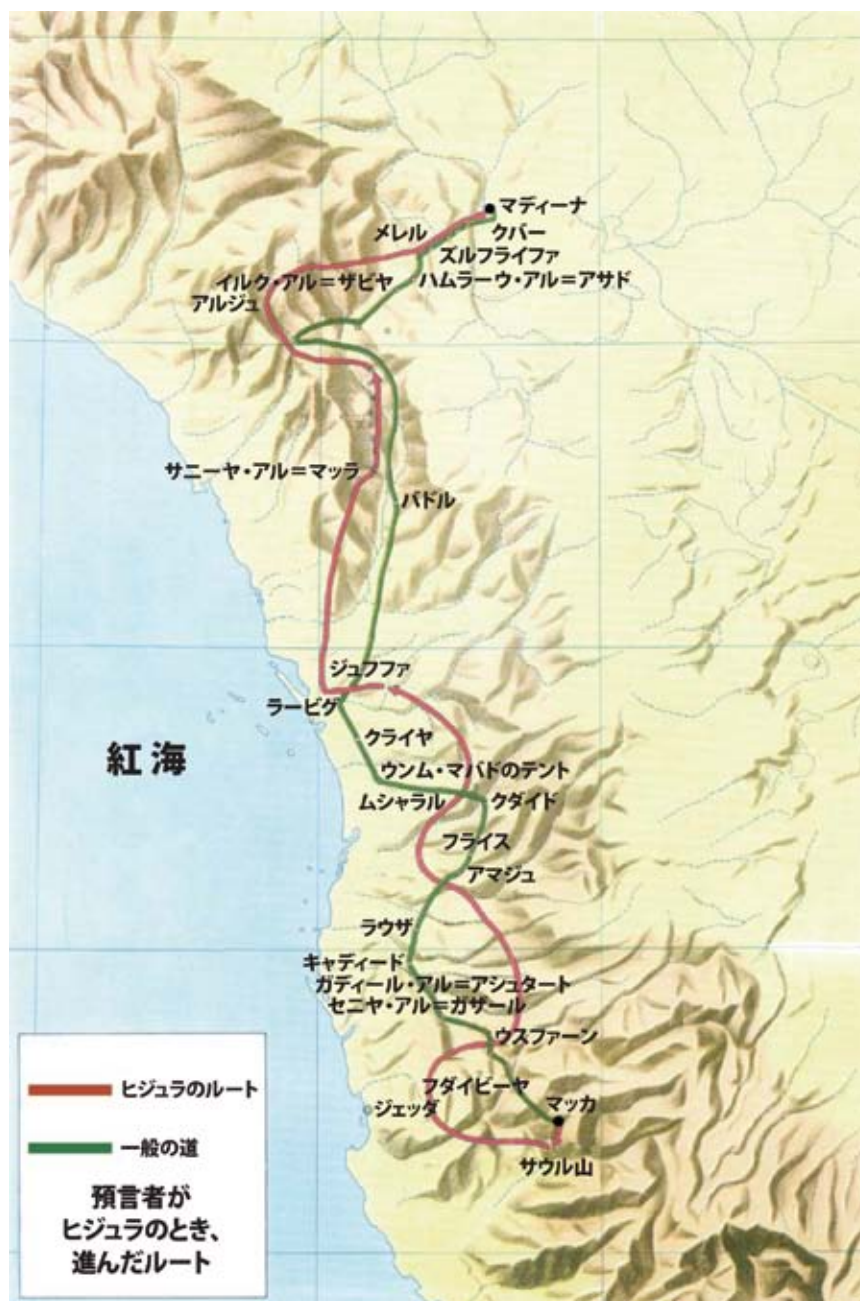
この多神教徒たちの会合の後、天使ジブリールがムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れ、アッラーからヒジュラの許しが出たことを伝えた。隣人からクライシュ族のこの策略を聞きムハンマド（彼の上に平安あれ）に知らせたのは、アブドゥルムッタリブの兄弟の娘ルカイカ・ビント・サイフィーであったと伝えられている。[218]

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は知らせを受けるやいなやマディーナへのヒジュラを決意した。いつもはムハンマド（彼の上に平安あれ）は朝晩アブー・バクルの家に寄っていたのだが、その日は昼頃にアブー・バクルの家に行った。そのことからアブー・バクルには、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が重要なことについて話し合うために来た

セブルの洞窟からヌール山を望む

ことがわかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアッラーからヒジュラの許しが出たことを伝えた。自らも同行するとの回答を得たアブー・バクルは喜びのあまり涙を流した。そして、手塩を掛けて育てた何頭ものラクダをムハンマド（彼の上に平安あれ）に差し出すと申し出た。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はお金を払うことなくラクダを受け取ることはできないと述べ、その中の一頭だけを受け取った。それはカスワという名のラクダであった。アブー・バクルの娘たちアスマとアーイシャは旅のための食料を用意した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）とアブー・バクルは名の知れた道案内人であるアブドゥッラー・ビン・ウライクトを雇った。アブー・バクルはこの道案内人にラクダを預け三日後にサウル山で会うことを約束した。この道案内人はまだイスラームに入信していなかったが、彼は熟練した道案内人であると同時に、信頼のおける人物でもあった。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・バクルとの話を終えるとすぐに家に戻った。自らの手元にある信託物をアリーに託し、持ち主に返すこと、そして彼もまた後でマディーナに来るようにと命じた。多神教徒たちをあざむくために、夜が来たら私の床に寝ているようにと指示した。

マディーナ
メレル
クバー
ズルフライファ
イルク・アル＝ザビヤ
ハムラーウ・アル＝アサド
アルジュ
サニーヤ・アル＝マッラ
バドル
ジュフファ
ラービグ
紅海
クライヤ
ウンム・マバドのテント
ムシャラル
クダイド
フライス
アマジュ
ラウザ
キャディード
ガディール・アル＝アシュタート
セニヤ・アル＝ガザール
ウスファーン
フダイビーヤ
ジェッダ
マッカ
サウル山
ヒジュラのルート
一般の道
預言者が
ヒジュラのとき、
進んだルート

夜半、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・バクルの家に赴いた。そして二人は深夜、家の裏口から抜け出し、徒歩でマッカの五キロ南西にあるサウル山の身を隠すのに適した洞窟に向かった。マディーナは北方に位置するにもかかわらず南方に向かったのは、追跡者を混乱させる目的があったからである。彼らはこの洞窟に三日間滞在した。その間、アーミル・ビン・フへイラがその周囲で羊を放ちながら、洞窟の近くにまで連れてきては絞った乳を彼らに飲ませた。アブー・バクルの娘アスマは洞窟に食べ物を運び、マッカにいた息子アブドゥッラーは夜になると洞窟を訪れ、マッカで起こっていることを報告した。未明にアブドゥッラーが町へと戻っていくときには、アーミル・ビン・フへイラが羊たちを後について歩かせ足跡を消した。多神教徒たちが大規模な追跡を開始したため、洞窟では緊迫した時間が流れていた。

一方、クライシュ族は朝になってムハンマド（彼の上に平安あれ）の寝床にアリーが寝ていてムハンマド（彼の上に平安あれ）が逃げたことに気づき、それまでの計画が水泡に帰したことを知った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の殺害計画に失敗した彼らは激しく腹をたてた。アリーは投獄されたが、その後釈放となった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）を発見し殺害した者にはその報奨として百頭のラクダが与えられるとのおふれが出た。アブー・ジャハルたちは、アブー・バクルの家へ行きアスマを尋問した。アスマは父がどこにいるか知らないと答えた。アブー・ジャハルはアスマの耳飾りがちぎれるほど殴った。多神教徒たちはアブー・バクルが家にいなかったので、彼もムハンマド（彼の上に平安あれ）と共に逃げたことがわかった。彼らは即座にマディーナへ向かって出発した。一団は残されていた足跡をたどってサウル山に到達した。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）が隠れていた洞窟の入り口までやって来た。アブー・バクルは不安に駆られていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼に恐れることはないと告げ、多神教徒たちが彼らに害を及ぼすことはないと伝えた。

そのときのことをアブー・バクルは次のように回顧している。『頭を上げると、彼らの足が見えた。『アッラーの使徒よ、彼らが腰をかがめて中をのぞけば私たちは見つかってしまいます』と私が言うと、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は『黙

アル=ガアーバ
ウフド山
ルーマの泉
ジュルフ
カナート谷
ハーリサ族
アル=ナビート
アブドゥルアシュハル族
サウーラ族
ザフェル族
サーフィレ
セニヤ・アル=ワダー
シャイハアイン城
セニヤ・アル=ヌール
サリメ族
ハーリス族
ナッジャール族
アル=スンフ
サル山
アル=バアキー
ズレイカ族
ワークフ族
サーイダ族
ハーリス族
カイヌカー族
ベヤーザ族
ハブラ族
アウス・マナート
クライザ族
アーリヤ
ジャフジャバー族
ナディール族
アフブ・ビン・アル=ハズラジュ族
ラーヌーナ谷
カアブ・ビン・アシュラフ城
ヒジュラのとき、
預言者がクバから
マーリク・ビン・
ナッジャール族の地へ
移動したルート
アフブ・ビン・マーリク族
ダフヤーン城
クバー
アイル山
ウネイフ族
シュネーフ城

りなさい、アブー・バクル。二人の旅人にとって三人目の友はアッラーなのだ。恐れることはない』と応えられた」

クルアーンもそのときの出来事について次のように言及している。「たとえあなたがたがかれ（使徒）を助けず、不信心の者たちが、かれを追放しても、アッラーは必ずかれを助けられる。かれは、ただ一人（の同僚）と、二人で洞窟にいた時、その同僚に向かって『心配してはならない。アッラーはわたしたちと共におられる。』と言ったその時アッラーはかれの安らぎを、かれ（アブー・バクル）に与え、あなたがたには見えないが、（天使の）軍勢でかれを強められた。また不信徒たちの言葉を最も低いものになされ、アッラーの御言葉を最も高められた」[219]

多神教徒たちは洞窟の入り口まで来たにもかかわらず、その中をのぞくことなく、他の場所へと行ってしまった。洞窟の入り口に一匹の蜘蛛が巣をはり、また一羽の鳩がその場所に卵を産んで温めていたので、多神教徒たちは中をのぞくこともなく立去った、と諸文献は伝えている。[220] そうしたことは起こり得ないことではない。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は旅に出るとき蜘蛛や鳩を計算には入れていなかった。ただ彼はできうる限りの備えをして出発しただけであった。

洞窟での三日間が過ぎると多神教徒たちの探索もやんだ。道案内人は約束どおりの時間にラクダを伴ってサウル山にやってきた。彼らはマディーナへ向かって出発した。一行は多神教徒たちの罠にかからないようにキャラバンが通る人通りの多い道、あるいは知られているルートを避けて進んだ。もし人通りの多い道を行けば、マッカへと向かう旅人たちが彼らに気づく可能性があったからである。マッカを離れてしまうと、マディーナの庇護を受けるまでは殺害される危険があった。それゆえ彼らは道案内人の選んだ道を進んだ。その道はマッカの南に位置するサウルから始まり、ジェッダへ向かって北西方向に進んだ後、再び内陸に戻る。マッカの北方に位置するウスファーンを過ぎると、四度本来の交易ルートと交わり、そのルートの半ばのジュフファにおいて本来のルートを紅海側に抜け、そのままマディーナへと到達する。ジュフファの後はもはやクライシュ族が影響力を持つ地域から抜け出たことになる。

マディーナへの途上一行は、何度か追跡や尋問を受けそうになったことがあった。そうした出来事の一つは次のよ

うにして起こった。キナーナ族の支族であるムドゥリジュ家のスラーカ・ビン・マーリクは、クライシュ族が布告した報奨金の話を知り、ムハンマド（彼の上に平安あれ）一行が近くを通過することを知るやいなや、武装して馬に乗り行動を起こした。彼がアッラーの使徒の一行に接近したとき、突然馬がつまずいた。体勢を立て直し、再度馬を走らせようとすると、今度は馬が砂の中に足を突っこみ、スラーカは地面に倒れた。彼は馬が大変な事態に陥っていることに気づいたが、助けることもできず、降参した。なぜなら事態は彼にとって危機的であったからである。スラーカは一人で歩いており、ムハンマド（彼の上に平安あれ）たちは四人連れであった。彼らはその気になればスラーカを殺すこともできたであろう。だが彼が助けを乞うたため殺すことなく、彼を許した。スラーカはムハンマド（彼の上に平安あれ）たちの前に歩み出、馬がムハンマド（彼の上に平安あれ）が祈った次の瞬間に倒れたと言った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はスラーカの馬が近づいて来たのを見て、「アッラーよ、あれを倒してください」と祈ったのであった。馬が倒れてしまったスラーカは、「アッラーの使徒よ。何を望まれますか、命じてください」と訴えた。アッラーの使徒は「あなたは後ろにいなさい。そして我々の後をつけてくる者に対処しなさい」[221]と命じた。スラーカはそれ以後ムハンマド（彼の上に平安あれ）との約束を破ることはなかった。

　その危機が去った後、再び別の男が報奨金目当ての行動を起こした。エスラム族のサフム家に属するブライダ・ビン・フサイブは、旅の途上のムハンマド（彼の上に平安あれ）たちを呼び止め、お前たちは何者だと誰何した。だが結論を言うと、ブライダもムハンマド（彼の上に平安あれ）の説くイスラームの話しに心を動かされ、ためらうことなくムスリムとなった。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）が旗を持たずにマディーナへ入ることは彼にふさわしくないと進言し、自らのターバンをほどきそれを槍に結びつけ、その地域を抜けるまで彼らを保護したのである。

　そうした出来事に加え、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の一行を客として迎えた人々もいた。エスレム族のアウス・ビン・フジュルは一行のために一頭のラクダと一人の召使を提供し、マディーナまで彼らに奉仕させた。一行がクダイドまで来たとき、食べ物を得るためにフザーア族のウンム・マバドのテントを訪ね、そこで休憩し食事をとった。

そして彼らはウンム・マバドに、ナツメヤシと肉を買いたいと申し出た。しかし彼女は手元にはもう食べ物が残っていないと伝えた。そのときムハンマド（彼の上に平安あれ）はテントの近くで、群れに加われないほど弱り、乳も出なくなっていた山羊を見つけた。そしてその乳を搾っていいかと許可を求めた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が神の名のもとにその乳を搾ると、そこにいたすべての者が飲むにはあり余るほどの乳が出たのである。美しい言葉を使うことで知られていたウンム・マバドは、放牧地から戻ってきた夫アブー・マバド・アル＝フザーアの求めに応じ、預言者について語ったこのときの美しい言葉は非常に有名である。[222] それはムハンマド（彼の上に平安あれ）の美徳をうたう文学となっている。彼らの息子マバド・アル＝フザーアはのちにウフドの戦いののちマッカへと向かう多神教徒の軍の中でいさかいを起こさせ、それはムスリムたちの助けとなった。マバドの一家は困難な状況にあったムハンマド（彼の上に平安あれ）を助けたことによりその名が知られることになる。

一行はマディーナへと旅を続けた。ジュフファに到達し、ヒジュラの道と昔からの交易の道が交わっているところに出たとき、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はかつてその道を通ったことを思い出し懐かしさにひたった。そして、弾圧を受け逃れなければならなくなった故郷マッカへ、再び戻れるであろうことを示すクルアーンの章句が下された。「本当に、クルアーンをあなたに授けられるかれは、必ずあなたを帰る所（マッカ）に帰されるであろう」[223]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はラビーウ・アル＝アウワル月の一二日、西暦六二二年の九月、マディーナまで三キロの地点にあるクバーに到達した。そこにはアウス族の支族であるアウフ・ビン・マーリクの一族が住んでいた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らの客となった。この一族の長老の一人であるクルスム・ビン・ヒディムは四日間（もしくは十四日間）一行をもてなした。その期間にクバー・モスクがつくられた。このモスクのキブラ（マッカのカアバ聖殿の方角）側の壁の最初の石をムハンマド（彼の上に平安あれ）が、その隣の二番目の石をアブー・バクルが置いた。一人マッカに残っていたアリーは、三日間でムハンマド（彼の上に平安あれ）から預かっていた信託物を持ち主に返し、彼らの後を追ってマディーナへと向かいクバーでムハンマド（彼の上に平安あれ）たちと合流

することができた。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は金曜日にクバーからマディーナへと出発した。サーリム・ビン・アウフが住むラーヌーナ谷で説教を二つ行い、百人ほどのムスリムと共にマディーナでの最初のジュムア（金曜礼拝）を行った。そのことからこの地のモスクは現在、ジュムア・モスクと呼ばれている。礼拝ののち一行はマディーナへと向かった。人々は喜びの表情で道の両側に並んでいた。部族の長たちは競ってムハンマド（彼の上に平安あれ）を家に招こうとした。そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）は、放ったラクダに行き先を決めさせることにした。そしてラクダはハズラジュ族の支族であるナッジャール家の地区へと至り、二人の孤児が持つ土地に来て座り込んだ。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が座り込んだ土地から最も近いところに家を持つアブー・アイユーブ・アル＝アンサーリーが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の荷物を受け取り自らの家に運びこんだ。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）を、礼拝所と住居が完成するまでの七ヵ月の間、客としてもてなすことになったのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が休む寝台はアサド・ビン・ズラーラが贈った。[224] このようにしてヤスリブの町はヒジュラ以後、「マディーナトゥ・ラスールッラー（アッラーの使徒の町）」と称ばれるようになった。
ヒジュラは、イスラームの歴史はもとより世界の歴史においても最も重要な出来事の一つである。ヒジュラ後の最初の一年については、クルアーンやハディースにもその前の数年分よりも多くの記述がある。ヒジュラには、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちの自己犠牲をはじめとする多くの素晴らしい模範的行為を見出すことができる。移住者たちはマッカから自分たちが持てるだけの荷物しか持たずに旅立った。土地や家、家畜などはマッカに残したままであった。戻ることができるか、あるいは戻ることができるとしてもそれがいつになるかはわからなかった。したがって移住者たちは多くの財産を失った。しかしそうした犠牲を払うことにためらう者はいなかった。マディーナへの移住は長びくものと思い、皆そこに住む覚悟で出発していた。
ヒジュラの目的は、拷問や困難辛苦から逃れることではなかった。仮に目的がそうであったとしても、それは決し

て非難されることではなかった。イスラームでは、現生や来世において善いこと、美しいこと、幸福を求めることはその教えの基本だからである。しかし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）や教友たちをヒジュラへとうながした理由は、マディーナにおけるイスラームの輝かしい将来にあった。そもそもムスリムたちはマディーナにおいても様々な困難に直面した。ただ、マッカでは多神教徒たちの迫害に対しひたすら忍耐が求められたのに対し、マディーナ時代においては報復の権利が認められていた。この権利は、必要なら命や財産を投げ出すことを要求していた。バドル、ウフド、塹壕、そしてフナインの各戦いにおいて、命を懸けた戦闘が繰り広げられたのである。しかしそれでも彼らは団結し相互扶助の精神を大切にし、やすらぎに満ちた集団を形成していたのである。

ヒジュラはアッラーの使徒が戦略面においても正しかったことを示すものでもある。家を後にしたときから、多神教徒たちが思いもよらない逃走路を辿ることによって[225]多神教徒たちの策略や罠から逃れ、戦略的に正しい判断を積み重ねることとよってマディーナに到達したのである。この点においてはアッラーの援助や支えを忘れてはいけない。しかし、どんな状況においても預言者はできる限りのことを行い、常に用心を怠ることはなかったのである。

このようにヒジュラにおいて預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、アッラーに限りない信頼を抱くこと、強い意志を持ち忍耐強くあること、希望を失わないこと、冷静さを保つこと、寛容であることといった様々な模範的行動を示している。それはムスリム個人個人にとっても根本とされる気質である。困難に立ち向かうこと、献身的であること、イスラームのために命や財産を捧げること、約束を守ること、現世的なつながりや利益にとらわれずアッラーのご満悦を考えること、などムスリムとしての模範的行為を、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のヒジュラにおいて見出すことができる。ヒジュラはムスリムたちの歴史に大きな影響を与え、それゆえヒジュラはウマルの時代にヒジュラ暦の起源とされたのである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラを行ったとき太陰暦によれば五十三歳であった。

二　ヒジュラの時代のマディーナ

ヒジュラが行われた当時のマディーナの民族的・政治的・社会的・文化的、そして経済的構造をここで詳細に述べてみたい。なぜならムハンマド（彼の上に平安あれ）の預言者としての活動の多くはマディーナ時代に見られるからである。ヒジュラが行われた時代のマディーナの状況を知ることは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の活動をよりよく理解する助けとなるからである。

旧名を「ヤスリブ」といったマディーナは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がヒジュラを行った時代にはヒジャーズ地方の重要な定住地の一つとなっていた。ヤスリブという名は「騒乱」という意味の語源から生じたものであったため、ヒジュラの後、この地にすばらしいという意味を持つ「ターバ」という名称が与えられた。しかしその後、町という意味を持つ「マディーナ」と呼ばれるようになった。なぜならこの地を町としたのは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）であったからである。もともと「マディーナトゥ・ラスールッラー（アッラーの使徒の町）」と呼ばれていたが、のちに「マディーナ」と短く呼ばれるようになったのである。

ヒジュラの後、アディー・ビン・ナジャールの土地に定住した預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、この地を政治的・社会的・文化的、そして文明的な意味でも一つの中心とした。この町はクルアーンには「ヤスリブ」、もしくは「マディーナ」の名で登場している。気候はよく、土地も豊かであり、それほど深くはないが豊かな地下水脈を持つ町であった。

民族的構成

ヒジュラ以前のヤスリブには、クライザ族、カイヌカー族、ナディール族からなるユダヤ人たち、南アラビア出身のアウス族及びハズラジュ族のアラブ人たち、クダー族、アマーリカ族、そして少数ではあるがかつて奴隷であった

民族、たとえばイラン人などが住んでいた。ヤスリブのイスラームが登場する以前の居住者は、先住民族のアマーリカ族であったとされる。アマーリカ族が滅び、紀元前六世紀の初頭、ユダヤ人のバビロン捕囚という出来事があったときには、逃亡したユダヤ人がヒジャーズ地方へと向かい、ハイバル、ヴァーディルクラー、そしてヤスリブなどに住み始めた。キリスト教がシリアで広まったのち、ローマ人の厳しい追跡を受けたシリアとパレスティナのユダヤ人の一部もヒジャーズ地方に移り住んだ。ヤスリブに定住したユダヤ人たちは、アラブの伝統を受け入れアラビア語の名前を用いた。ユダヤ人たちとアラブの各部族はそれぞれ別の地区に住んでいた。ユダヤ人のヤスリブへの移住はムーサーの時代まで続いたとされている。

一方、南部のアラブ人、つまりカフターニー族に属する一部の部族は、イエメンのマアリブのダムの崩壊に伴い、おそらく二、三世紀頃、まずティハマに、その後北方へと移住した。アウス族とハズラジュ族の人々はヤスリブへと移ったのちユダヤ人による政治的・社会的・経済的弾圧を受け、一時期ユダヤ人たちの支配のもとに暮らしていた。そこで彼らは、親族に当たるガッサーニー族に援助を求めたところ、ガッサーニー族はそれを受け入れヤスリブへとやって来た。そしてユダヤ人の長官などを殺害したのである。ユダヤ人たちがこのことによって力を失ったため、ヤスリブで優位に立ったのはアウス族とハズラジュ族の人々であった。アウス族とハズラジュ族は従属的な地位から解放された後、ヤスリブの町の内部に定住するようになった。しかしまもなくユダヤ人たちはこの兄弟のような関係にあった二つの部族の以前からの小競り合いをぶり返させ、両部族は互いに相手を弱体化させていった。

政治的状況

ヤスリブの人々は定住生活を送っていたが、社会、文化、そして道徳的な面では部族の伝統が彼らを支配していた。それぞれの部族には長がいた。血の報復が広く行われていた。中央集権的な権力は存在していなかった。言い換えるなら、部族間に共通した統治者はいなかったのである。アラブとユダヤの各部族は、相互に従属することなく数キロ

アル=ガアバ
ウフド山
ルーマの泉
ジョルフ
カナート谷
ハーリサ族
アル=ナビート
アブドゥルアシュハル族
ザウーラ族
ザフェル族
サーフィレ
シャイハアイン城
セニヤ・アル=ワダー
セニヤ・アル=ヌール
サリメ族
ハーリス族
ナッジャール族
アル=スンフ
サル山
アル=バアキー
ズレイカ族
ワークフ族
サーイダ族
ハーリス族
ベヤーザ族
カイヌカー族
ハブラ族
アウス・マナート
クライザ族
アーリヤ
ジャフジャバー族
ナディール族
アフブ・ビン・アル=ハズラジュ族
カアブ・ビン・アシュラフ城
ヒジュラ以前の
マディーナの
主要部族と地名
アフブ・ビン・マーリク族
ダフヤーン城
クバー
アイル山
ウネイフ族
シュネーフ城

の距離を置いて集団を形成し住み分けていた。だが時折アラブとユダヤの各部族の間では深刻な不和が生じていた。その一方で様々な政治的理由から、互いに同盟を結ぶこともあった。アラブの各部族は時には、他のアラブの部族と相対したためにユダヤ人と同盟を結ぶことがあった。アウス族はクライザ族やナディール族と、ハズラジュ族もベニー・カイヌカー族と同盟を結んでいた。アウス族とハズラジュ族は共通の王をたて、一つになろうとしていたが実現できずにいた。どちらが上に立つかをめぐって激しく対立し、統一の実現を阻んでいたのである。それぞれの部族で長を指名し、それぞれが一年交代で王位につくという考えもあったが、実現することはなかった。諸文献には、マッカにおける「ダール・アル＝ナドゥワ（集会所）」のような存在の記録がヤスリブに関しては見当たらない。アウス族とハズラジュ族との間の対立は、共通の集会の設立をも阻んでいた。アブドゥッラー・ビン・ウバイを共通の長とする計画もあったが、それは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のヒジュラによって実現しなかった。ヒジュラの前には、これら二つの部族よりもそれぞれを構成する支族の存在がより重要なものとなってきていた。

ヤスリブの周辺にはターイフにあるような城壁は存在しなかった。各部族はそれぞれの区域内に強固な城を持っていた。危険が生じたときには、男たちは戦うために外に出たが、女たちや子供たちはこの城の中に避難した。こうした城の数は二百ほどあったとされている。さらにそれぞれの部族には固有の果樹園や土地もあった。

ヤスリブの町はイスラームが周辺に広まっていく上で中心的な地位にあった。

アウス族とハズラジュ族がユダヤ人から支配権を奪うことによって生じた平穏な時代はそう長くは続かなかった。この二つの部族は縁戚関係にあったにもかかわらず、イスラーム出現までの百二十年もの間、敵対し続けていたのである。両者の衝突はシュメイルの戦いによって始まり、その後もいくども戦いが続いた。アウス族の男がハズラジュ族に庇護を求めた者を殺害したことによって生じたブアースの戦いは、激しい戦いを繰り広げたのちアウス族の勝利に終った。この戦いはヒジュラの五年前に起き、長びいた戦闘は町の力を深刻なまでに奪い、人々が生きていくことを困難なものとしていた。ユダヤ人たちも時折双方の間の対立を煽った。アウス族とハズラジュ族は和平を実現できず、

戦いや敵対関係の上に成立していたベドウィンの生き方を色濃く残していたのである。

宗教的状況

マディーナにユダヤ教徒が存在していたことは先に述べたとおりである。それと同時に、当時のアラブ人たちの間には偶像崇拝が広まっていた。アウス族とハズラジュ族はマナートと呼ばれる偶像を崇拝していた。マディーナの人々の基本的な崇拝の対象はこの偶像であった。それに対し犠牲を捧げ、供え物をしていた。子供たちにもそれにちなんだ名前を与えていた。他の部族の人々もマナートを崇拝していたが、それに最も敬意を払っていたのはアウス族とハズラジュ族の人々であった。この像は黒い石でできており、神聖とされていた場所に置かれていた。アウス族とハズラジュ族を含む多くの部族が、マナートへの崇拝と並んでハッジ（巡礼）を行っていた。しかしサファーとマルワの丘の間を行き来するサーイという行為は行われていなかった。マナートが置かれていた地域には定められた巡礼用の衣装を身につけて入った。ハッジを行ってから、マナートのもとへ来て髪を切り、それによってハッジを終えた。彼らはマナートと並んでラートという偶像も崇拝していた。これらの他、家族の者が崇拝する家族固有の偶像もあった。木から作られた多くの偶像が存在していた。アラブの各部族の人々が、ユダヤ教やユダヤ人の道徳観念に影響を受けていたことも知られている。

しかし、そこにおいてもアッラーが想念され、アッラーを創造主として認めていたことも見受けられる。イブン・サアドはイスラーム以前の時代においても、偶像を崇拝することを好ましく思わず、偶像を憎み、そして唯一神への信仰を口にしていた人々がいたことを記録している。

キリスト教はマディーナでは広まっていなかった。しかしアウス族のアブー・アーミル・アル＝ラヒブという人物は、キリスト教やユダヤ教に影響を受け、偶像崇拝に新たな形式を加え、ムスリムとなったアウス族を自らのもとに引き入れようとした。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼を「大罪を犯した者」と呼んでいた。また非常に複雑

で解決が困難な問題が生じたときに頼りにされ予言を行う占い師たちもいた。

社会的状況

この地域では重婚が一般的であった。また男性が亡くなるとその妻や女の子はもちろんのこと、幼い男の子たちも遺産を相続することができなかった。遺産を相続できるのは、武器を持って戦闘に参加できるほどに成長した男の子だけであった。もし、男の子たちが一人も相続できる年齢に達していなければ、叔父をはじめ父方の親戚がすべての遺産を手にした。したがって、当主を亡くした家がたとえ裕福な一家であっても、遺産相続人との関係がよくなければ彼らから援助を受けられず、一夜にして一文無しになり物乞いをしなければならない境遇に陥る可能性があった。祭りや宴のときには専門の歌い手がよばれ、また葬式には専門の泣き手がよばれた。この泣き手はグループで葬儀を出す家を訪れ、まず何人かが泣き叫び、それがやむと次の者たちが泣き叫ぶというように続けられた。韻を踏んで見事に詩を読むことのできる詩人などもいた。

経済的状況

マディーナは古くから南北を結ぶ交易路の途上にあった。ここでユダヤ人たちは農業、商業、貴金属商、鍛冶屋、織物業、そして武器の製造業などを営んでいた。アラブの多くの部族は農業に従事し、それぞれの家族が固有の土地を持ち、子供たちや奴隷たちの力を借りて農業を行っていた。商業を営む人たちはシリアの市場に取引に出かけ、そこからマディーナへ商品を持ち帰った。ナバーティー族の人たちは時折キャラバンを組んでマディーナへ食料や穀物、オリーブ油を運んできた。様々なアラブの部族、特に遊牧民たちはラクダや馬、宝石類などを町へ持ち込み売ったり、彼らに必要なものと交換した。外国人の輸入業者から品物を買い付ける仲買人もいた。土地を持たない者は金を稼ぐために森から木を切り出してきて売った。ナツメヤシで有名なマディーナには、ナツメヤシの果樹園が広がっていた。

マディーナの人々はナツメヤシの栽培に長け、一年を通してナツメヤシを腐らせず新鮮に保つために缶詰にする技術を持っていた。ナツメヤシからアルコールを含んだ飲み物もつくられていた。ナツメヤシの他に小麦や大麦の栽培も行われていた。当時のマディーナの主な職業として織工、仕立て屋、肉屋、鍛冶屋、食料品店、建具屋、木こり、香水屋などがあった。マディーナには地域に流通する通貨はなく、ビザンチンの通貨ディナールやイランの通貨ディルヘムが使われていた。

第一回のアカバ会議からヒジュラまでの二年間で、マディーナでは、アウス族やハズラジュ族の間でイスラームへの入信が増加していた。マディーナにイスラームを伝えるために派遣されていたムスアブ・ビン・ウマイルの活動が功を奏し、長老のサアド・ビン・ムアーズの入信をはじめ、アウス族の重要な支族であるアブドゥル・ラシャル家の人々は全員がムスリムとなった。またアブー・サラマから始まったマッカのムスリムのマディーナへの移住は、その後も継続した。諸文献には預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のヒジュラの際、ムハンマド（彼の上に平安あれ）とアブー・バクルの家族、アリーとその母を除くと、マッカには投獄されたり移住ができないほど体が弱っていた者たち以外ムスリムは一人も残っていなかったと記録されている。

ヒジュラを行った教友たちの一部は、アウス族の五大支族のうち最も数が多く強い一族であったアミル・ビン・アウフ家の客となった。アブー・フザイファの解放奴隷であったサーリムは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のヒジュラの前にクバーでムスリムたちの礼拝を導いていた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とアブー・バクルが共にクバーへやって来たとき、サーリムは一時期彼らのそばで過ごし、有名なクバー・モスクを建設することになるのである。アミル・ビン・アウフ家の他にアウス族のアブドゥッラー・シュハル家や他の支族のムスリムたちも、移住者たちを温かく迎え入れた。ベニー・ナッジャールやバルハリス・ビン・ハズラジュをはじめとしてハズラジュ族の人々も移住者を客としてもてなした。ナッジャール族のアサド・ビン・ズラーラがムスアブ・ビン・ウマイルを助け布教活動を展開する上で重要な役割を果たした。さらにアサド・ビン・ズラーラがマディーナに建設したモスクで、

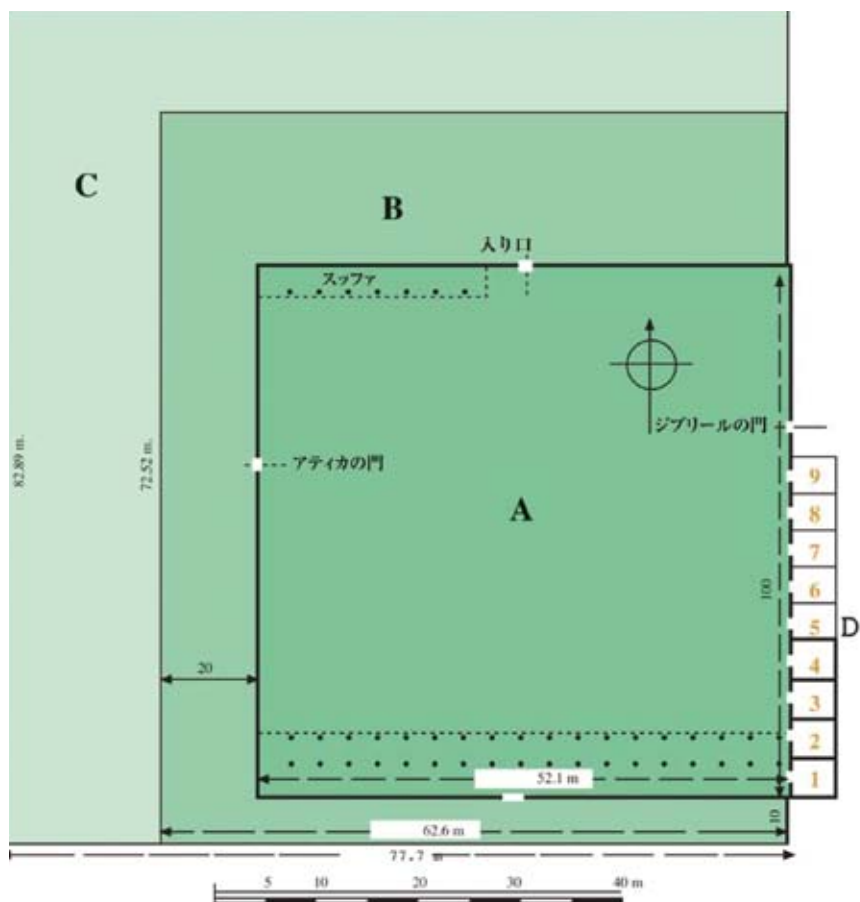
ムスアブ・ビン・ウマイルと共に定時の礼拝や金曜日の礼拝を行ったことも記録されている[226]。

三　組織化の始まり

a　預言者モスクと、その時代の他のモスク

マディーナでイスラーム社会を形成させ、ムスリムの間に一体感を生じさせた最も重要な要素が預言者モスクである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はラクダが座り込んだ場所にモスクの建設を決めた。ナツメヤシを乾燥させるのに使っていた土地を購入したいというムハンマド（彼の上に平安あれ）の意向がマディーナの人々に伝えられると、それらの土地の持ち主は無償で提供したいと申し出た。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれを受け入れず、アブー・バクルが土地の価格である十ディナールを支払った[227]。

工事は土地をならすことから始められた。まずそこに植えられていたナツメヤシの木々が伐採された。そしてそこにあった墓地は他の場所に移され、小高くなった部分が平にされた。建物の基礎と下部には石が、上部には日干し煉瓦が使われた。そこで伐採されたナツメヤシの木が丸い柱として、礼拝所のキブラの方向に立てられた。そしてその上に、ナツメヤシの枝と葉でできた屋根が載せられた。モスクの建設に当たって、ムハンマド（彼の上に平安あれ）をはじめとして移住者も移住者を助けた人々も共に力を合わせて働いた。

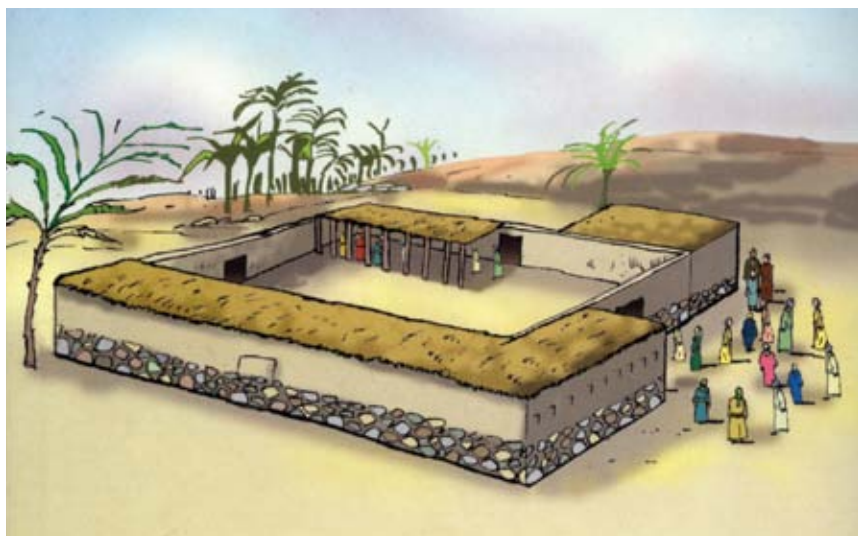
当初はエルサレムの方向が礼拝の方角として定められていた預言者モスクには三つの扉があった。一つ目の扉は南に、すなわち今日のキブラの方角にあった。二つ目の扉は東側にあった。南側全体にスッファと呼ばれる空間があった。礼拝する方角がエルサレムからカアバ聖殿へと変更されると、南側の扉は閉鎖され、北側に二つの扉がつくられた。それ以外の扉に変更は加えられなかったが、スッファは南側から北側へ移された。天井は人の手が届くほど低かった。またモスクの建設当初は、礼拝所には細かい砂が敷かれていた[228]。

預言者モスクの計画図

A. キブラを変更した後のモスクの状況
B. ウマルの時代に拡張した部分（ヒジュラ暦17年／西暦638年）
C. ウスマーンの時代に拡張した部分（ヒジュラ暦24年／西暦644年）
D.1～9は預言者の部屋

当時、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は金曜礼拝の説教をナツメヤシの切り株に寄りかかりながら行っていた。礼拝を行う人々の数が増加し、長い時間話すことが苦痛になってくると、説教壇が設けられた。そこには三つの段があり、その一つに人が座ることができた。[229] ムハンマド（彼の上に平安あれ）は説教壇に上がると三段目に座り、二段目に足を置いた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は礼拝所のキブラの側の一定の場所で礼拝を行った。今日からすると穴のような形に見える最初のミフラーブ（マッカの方向を示す壁の凹み）は、ウマル・ビン・アブドゥルアジーズがマディーナの知事になったときにつくられた。

預言者モスクの完成後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は一時的に滞在していたアブー・アイユーブの家を出て、礼拝所の隣につくられたムハンマド（彼の上に平安あれ）と家族のための住居に移った。当初はこの部屋の数は二つであったとされるが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の結婚によってその数は増え九つとなった。部屋の入り口は絨毯や布で覆われていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の部屋の壁は日干し煉瓦で覆われていた。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は家族をマディーナへ呼び寄せるため、アブー・ラーフィーとザイド・ビン・ハーリサをマッカへ派遣した。彼らはムハンマド（彼の上に平安あれ）の妻のサウダと娘のファーティマ、ウンム・ギュルスムをマディーナへ連れて来た。長女のザイナブは、当時多神教徒であった夫が彼女を手放さなかったため来ることができなかった。次女のルカイアは夫ウスマーンとすでにヒジュラを行っていた。彼らはアブー・バクルの家族すなわち妻のウンム・ルーマーン、息子のアブドゥッラー、娘のアスマとアーイシャたちと共に集団でマディーナへとやって来た。マッカの人々は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のヒジュラ後もマッカに残っていた彼らを苦しめることはなかった。[230]

預言者モスクの機能に関しては、この場所は何よりもまず崇拝行為を行う場所であった。ムスリムたちは金曜礼拝及び定時の礼拝を集団で行った。日に五回の礼拝はどこでも行うことができるが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は集団で行う礼拝をよりよきものとし、教友たちもその勧めに従ったのである。

預言者の時代のモスクのイラスト

預言者モスクは崇拝行為の場であると同時に、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が説教を行う場所でもあった。その他、軍事行動について話し合ったり、使者を迎えたり、時には裁判が行われたり、民族舞踊が披露されたりする場でもあった。預言者モスクは同時に教育の場としても使われた。礼拝後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が礼拝所で腰をおろすと、すぐにその周囲に教友たちが集まった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らに教えを説き、アッラーに従うようにと彼らを導いた。また、日々の生活全般にわたっても様々なことを勧めた。預言者モスクは、「神の名によって詠め」というクルアーンの最初の啓示で求められている宗教と科学を一体化したものなのである。[○231] ムスリムが一体となり、互いに親しみあうためにも、この上なく重要な機能を果たしていた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代、預言者モスクは軍事行動について協議する場でもあった。外部から加えられる可能性のある攻撃や威嚇に対しどのように自衛するかがそこで話し合われ、決定された。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が軍を遠征に出すときには、その一団の司令官となる者がモスクへ呼ばれ、必要な通達がその場で行われた。軍隊が遠征から戻るとまっすぐに預言者モスクを訪れ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に戦いの報告をし

た。ムハンマド（彼の上に平安あれ）自身が軍隊の指揮官となった場合は、礼拝所で二ラカートの礼拝を行い、そののちに武具を身につけ外へ出た。そして門のところまで連れてきた馬に乗り、遠征へと出発したのである。遠征から戻ったときにもまっすぐ預言者モスクを訪れ、礼拝所に入り、やはり二ラカートの礼拝を行った。

戦闘で負傷した兵士がモスク内に張られたテントで治療を受けることもあった。塹壕の戦いで負傷したサアド・ビン・ムアーズはエスレム族のルファイダという女性のテントで治療を受けたが、助からなかった。預言者モスクは戦いで連行した捕虜を拘留する場所としても用いられた。預言者モスクは使者の接見の場としても使われた。ヒジュラ暦五年（西暦六二六年）からヒジュラ暦一一年（西暦六三二年）の間、ヒジュラ暦九年（西暦六三〇年）を頂点として、アラビア各地から様々な集団が訪れた。それらの多くは一族全体がムスリムとなったことを報告し、イスラームの教えに従うことを誓い、その根本教義を学ぶためにやって来たのである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らと「使者たちの柱」と呼ばれた柱の前で面会した。モスクは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代には裁判や審理の場としても用いられた。そもそもムハンマド（彼の上に平安あれ）がその場にいさえすれば、市場であってもテントであっても裁判を行うことができた。預言者モスクは時には戦争劇の舞台にもなった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は一度、エチオピア人がそこで演じた戦争劇を妻アーイシャと共に観賞している。また彼はモスクでの寄付を認めていた。様々な場所から集められたザカートはモスクに集められ、そこから必要なところへと分配されたのである。[232]

マディーナでは、ヒジュラ後の最初の年から、預言者モスク以外にも多くの礼拝所がつくられた。それらの多くは一族の名前や、地名に由来する名前で呼ばれた。「二つのキブラを持つモスク」のように、様々な出来事に由来する変わった名称を持つモスクも存在した。キブラが変更したことに由来する名称を持つこのモスクは、ハズラジュ族のベニー・サーリマのつくったものであった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラの後、十六ヵ月もしくは十七ヵ月の間、エルサレムの方角へ向かって礼拝を行っていた。ヒジュラの二年目に、このモスクでムハンマド（彼

の上に平安あれ）と教友たちがズフル（昼）の礼拝の最初の二ラカートを行ったとき、礼拝する方角の変更に関するクルアーンの言葉が啓示された。それによってムハンマド（彼の上に平安あれ）は礼拝する方角をカアバ聖殿へと変更し礼拝を行った。このようにして預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が、異なる二つの方角へ礼拝を捧げたモスクであることから、そのような名前が付けられたのである[233]。キブラの変更が告げられたとき、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者モスクにいたという伝承もある。

二つのキブラを持つモスクの他にも、アウス族のベニー・アル＝アシュハルの一族によって建設されたベニー・アル＝アシュハル・モスク、アウス族の別の一族のベニー・ハーリセによるベニー・ハーリセ・モスクなどが、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代にマディーナに存在したモスクである。ムスリムたちはこれらのモスクで定時の礼拝を行い、金曜礼拝は預言者モスクに集まって行っていた[234]。

マディーナ以外では、ジュワーサー・モスク、ベニー・ムスタリク・モスク、ベニー・サードゥブ・ベキル・モスク、ベニー・ジャズィーマ・モスクなどがあった。ターイフやヤマーマにもモスクができていた。さらに遠征時に各地につくられた多くのモスクの名前が諸文献には記録されている[235]。

b　スッファ

スッファは預言者モスクに隣接して建設され、ナツメヤシの枝でできた屋根を持つ、貧しい人々や身寄りのないムスリムのための空間であった。ここに住む人々は「スッファの民」や「スッファの友」と呼ばれた。スッファには身寄りのない移住者や独身者、アラブの部族の出身でムスリムとなりマディーナへ移住した人、学問を志す教友などが住んでいた。彼らは一般的に貧しい人々であった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はスッファの民の食事などの世話をしていた。善行を好む教友たちも預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の勧めに応え、彼らを一、二人ずつ家に呼んでは食事などの世話をした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は裕福なムスリムたちにも彼らを助けるように勧

めていた。アンサール（マディーナに以前から住んでいて、移住者を助けたムスリム）たちはナツメヤシの実を預言者モスクに運んだ。スッファの友たちの中には、様々な職業についている者がいた[236]。
スッファには、文字の読み書きやクルアーンを教えるために、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の他にその任を負う教師がいた。ウバーダ・ビン・サーミドはその一人であった。ここに集まっていた生徒たちは、クルアーンを学ぶために日々を捧げた。昼はクルアーンの言葉を唱え、夜は勉学に時間を費やした。彼らは「クッラ（読む人々）」と呼ばれた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナ以外の地にイスラームの布教のために人を送るときには、このスッファの友の中からそのメンバーを選んだ。彼らの中には軍に加わる者、外交上の任務を与えられる者、アザーン（礼拝の呼びかけ）を唱える者もいた[237]。

C　新しい友好システム

アンサールと移住者との間に特別な友好関係が結ばれたことが、イスラーム社会の形成における重要な第一歩となった。このことに言及する前に、イスラームがもたらし、発展させた両者の友好関係の歴史的経緯について簡単に触れてみたい。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラームの布教を始めたときから、ムスリムとなった人々は民族、部族、国の出身を問わず、皆等しいとした。そして部族間の友好のかわりにイスラームが結ぶ友好をもたらしたのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は一方で人々にアッラーの存在とその唯一性を説き、また一方ではその信仰のもとに集まった兄弟たちを一つのものとしたのである。その考え方のもとでは、エチオピアの奴隷とクライシュ族の戦士の間に何ら違いがなかった。
イスラーム史における最も古い文献ではヒジュラの一年前にマッカで、他の諸文献ではヒジュラ後にマディーナで、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が二度、ムスリムたちを兄弟として契らせたことが記録されている。マッカにおける兄弟の契りでは、非常に意義深い注目すべき点がある。それは、クライシュ族に属する一部のムスリムが解

放奴隷と兄弟の契りを宣言したことである。伝承によるとクライッシュ族の所有していた奴隷たちはすべて解放され兄弟とされた。たとえば預言者ムハンマドは、ザイド・ビン・ハーリサを解放しハムザと兄弟とし、アブー・フゼイファの奴隷サーリムを解放しアブー・ウベイダ・ビン・ジャルラと兄弟にし、アブー・バクルはビラール・ハベシーを解放しウベイド・ビン・ハーリスと兄弟としている。[238]

こうした考え方をムスリムたちは短期間で身につけた。つまりムスリムは、多神教徒である同じ部族の者や親戚とのつながりを絶ち、血縁関係のない異なる部族や国に属するムスリム、あるいは奴隷のムスリムたちと、物質的・精神的に助け合うようになったのである。イスラームの最初期ですら、アブー・バクルは拷問を受けていた奴隷たちを、自分とは一切血縁関係がないのにもかかわらず、そして一切見返りを求めることなく、ただムスリムであるという理由だけで、大金を支払い解放したのである。

マッカからマディーナにヒジュラを行った移住者たちは互いにまとまり、兄弟という意識を持っていた。マディーナのアウス族とハズラジュ族が「アンサール」となったことについて述べると、イスラーム以前この二つの部族は、同じ父祖を持つにもかかわらず何年もの間争ってきた。双方の間の不和は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がヒジュラを行うまで続いていた。第一回目のアカバの会談でイスラームを受け入れたマディーナの人々は、アウス族とハズラジュ族の間の関係が重大な局面に至り、切実に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）による救いを求めていることを次のような言葉で明らかにしている。「我らが人々は、内紛のために最悪の状態にある。おそらくアッラーは、あなたによって、我々を戦い、そして混迷状態から救われるだろう。そして我々を一体化させるであろう」[239]

事実、アウス族とハズラジュ族の間の血の報復はたいへん深刻な状態になっていた。この二つの部族はあやうく歴史の舞台から消え去るところであった。クルアーンはこれについて次のように述べている。

「あなたがたはアッラーの絆に皆でしっかりと縋り、分裂してはならない。そしてあなたがたに対するアッラーの恩恵を心に銘じなさい。初めあなたがたが（互いに）敵であった時かれはあなたがたの心を（愛情で）結び付け、その

御恵みによりあなたがたは兄弟となったのである。あなたがたが火獄の穴の辺りにいたのを、かれがそこから救い出されたのである」[240]

アッラーはイスラーム以前のアウス族とハズラジュ族の状態を炎の穴にたとえられている。炎の穴の周囲にいる人々は、滅亡の危機にある。彼らもそのような状態にあり、互いに怒りの炎を吹きかけ合っていたのである。部族間の闘争により相手を殲滅しようとしていたとき、アッラーは教えを下され、彼らを救われた。そして兄弟の集団とされたのである。彼らは互いに結びつき、イスラームの入信において互いに競い合うかのようであった。イスラームの人々をまとめる傘のもと、彼らは「アンサール」としてイスラーム社会の名誉ある一員となったのである。

次に、移住者とアンサールたちの友好関係がある。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、アナス・ビン・マーリクの家で（別の伝承によれば預言者モスクで）ヒジュラの最初の年の半ば頃に人々を集めた。そして二人ずつ兄弟の契りを結ばせた。兄弟の契りを結んだ人たちの数は、四十五組九十人、もしくは五十組百人であったと伝えられている。[241]兄弟となった人々の名前は諸文献に記録として残されている。[242]

兄弟の契りは、適当に選んだ二人を組み合わせて行われたものではない。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラ後の六ヵ月間で人々を十分に把握し、それぞれの状況を詳しく調べた上で組み合わせを決めていることもここで明らかにしておきたい。[243]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が、他に類を見ない社会的相互扶助の例としてこの兄弟制度をつくった目的は、強い絆で結ばれた新たな人間関係を構築することによって、イスラームのためにマッカで築いていた生活のすべてを放棄し、生まれ故郷を離れることによって彼らが受けた苦痛と悲しみを軽減することにあった。この制度はまた、アンサールと移住者を強い絆で結びつけ、知識や経験を共有させ、共同で仕事を行い生産活動に従事させるという目的を持っていた。アンサールの移住者に対する献身はたいへん大きなものであり、ナツメヤシの農園を移住者の兄弟

たちに分け与えようと提案した人すらいたほどである。ただし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれを適切なこととは見なさなかった。共に働き、収穫物を分かち合うことを決定したのである。兄弟とされた者たちは互いに遺産相続人となることもできた。遺産相続に関する判断はバドルの戦いの後で啓示されたクルアーンの言葉によっている。[244] 兄弟の契りというあり方は、イスラーム以前の時代のヒルフという制度がイスラームの兄弟愛の精神に取って代わられたものである。しかし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、イスラーム以前の時代、不正を防ぎ、相互扶助を目的としてつくられたヒルフの制度も正しいものと認めていた。ただ、イスラーム時代、特にヒジュラ後は、ムスリムの間の相互扶助と兄弟としての契りが確立されたため、ヒルフの制度は必要でなくなった、と説明している。それによって移住者たちはマディーナでの新しい生活に、より短期間でより容易に、足場を築くことができた。経済的な支援や遺産相続は物質的な側面であるが、これは単に物質的な援助によって成り立っているものではなかった。もしそうであったとすれば、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアンサールたちに移住者への経済的援助を命じていたであろう。そして彼らも喜んでその命令に従っていたであろう。しかしこの経済的援助は精神的な兄弟愛によって支えられていたのである。アンサールたちと移住者たちの間には共通のアイデンティティが形成され、精神的な一体化がもたらされたのである。内政的にはユダヤ教徒や偽信徒たちに、また外政的には多神教徒のアラブの各部族に対抗し得る融合され一体化した集団が誕生したのである。これはのちにさらに発展し、すべての信徒を含むイスラームの兄弟愛へと高められていくことになる。

兄弟愛については、人権という観点からも評価してみる必要がある。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその活動において、常に生命、財産、名誉といった基本的な人間の権利を守り尊重した。亡くなる直前の「別れの説教」においても、人権に関する基本的な事柄を再度強調して説いている。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は人権に加え、兄弟たちの権利も示している。彼は「アッラーのしもべたちよ、あなた方は兄弟でありなさい」と述べている。これは人間の権利のさらに発展した形である。なぜなら兄弟愛においては、権利のみにとどまらず、自己犠牲や愛情

なども関わってくるからである。

ヒジュラの後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は移住者たちを定住させる目的で、マディーナに新しい定住地を計画した。アンサールたちは移住者たちに与えるようにと、余っている土地をムハンマド（彼の上に平安あれ）に差し出した。もし彼が望めば、家も与える用意があることを彼らは伝えた。しかし彼はそれを認めず、移住者たちを持ち主のいない土地やアンサールたちが寄付した土地に住まわせた。移住者の家族や個人に一定の土地が割り当てられた。[245] クバーの、家の建設には向かない土地では、移住者たちは引き続きアンサールたちの客として彼らの家に滞在していた。マディーナのムスリムたちは、自分たちの家に客となっている移住者たちをお互いに競い合うようにしてもてなしたのであった。[246]

d　共存の試み

先に述べたように、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナにヒジュラを行った時期、その地にはすべての住民を包括する全体的な統治のシステムは存在していなかった。それぞれの部族が個別に統一を成し遂げているに過ぎなかった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は兄弟の契りを取り入れることによって、ムスリムの間に統一をもたらすと共に、ムスリムと非ムスリムのアラブ人、そしてユダヤ人をも包括する、そしてそれまでマディーナが経験したことのなかった新しい政治的・社会的システムを確立した。それはいわば、民族的な出自や宗教の異なる様々な集団による連邦制のような連帯の制度であった。それは何よりもまず、マディーナの住民が平和と安定のもとで暮らすことができるように、という目的を持ったものであった。まず、マディーナにおいてムスリムたちの安定を確かなものとすることが必要であった。それはイスラームとムスリムの将来という観点からも非常に重要な課題であった。なぜならマッカの多神教徒たちはマディーナを攻撃する機会をうかがい続けていたからである。

マディーナでは、ムスリム以外に偶像崇拝を行うアラブ人やユダヤ人たちが大きな勢力として存在していた。ユダ

ヤ人たちはその経済力や人口の多さから、無視できない存在であった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は当初、ユダヤ教徒やキリスト教徒に対し敵意を抱かず、彼らを町の中心部から遠ざけたりすることはなかった。むしろ彼らと条約を結び、それによりユダヤ教徒や偶像崇拝者たちがマディーナを攻撃する危険性を回避し、そして彼らと共に外部の勢力からマディーナを守ろうとしたのである。このことは政治的・軍事的観点からきわめて重要なことであった。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）はムスリムたちに加え、マディーナの社会を構成しているユダヤ教徒やその他の集団を、マディーナの統治機構に組み入れることを主張した。これについて協議するため、アナス・ビン・マーリクの家で会合が開かれた。この会合に参加した人々は、マディーナに新たな秩序をもたらす仕組みをつくり出すことを決定した。彼らはマディーナの人間と外の人間との関係、統治や法のあり方、個人の宗教や良心の自由、権利や責任について、一定の原則を定める文書を作成した。一つの社会契約として認められるこの文書は、様式の面で今日の憲法とはかなり異なっているとしても、一つの憲法としての特性を備えている。この文書の全文は文献に記録されている。法とはかなり異なっているとしても、一つの憲法としての特性を備えている。この文書の全文は文献に記録されている。「文書」「書」「和平条約」などといった名称を持つこの文書は、時代によって「マディーナ憲章」「マディーナ文書」「マディーナの書」「マディーナ条約」「マディーナ人の誓い」などと呼ばれた。

この文書は研究者たちにより四十七もしくは五十二の条項に区分され、その主要な項目は以下のとおりである。

これは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）によるクライシュ族出身者、ヤスリブ在住の信者、そしてムスリムたち、さらに彼らに従う人々、またその後に加わった人々、そして彼らと共に聖戦を行った人々のための文書である。

これらの人々は他の人々とは異なるウンマ（信仰上の共同体）を形成する。

クライシュ族の移住者たちは、彼らの慣習にのっとり血の代償の支払いに加わる。また戦争捕虜の救出のための身代金を、信徒たちが正しいと認める根拠や法に従い共に支払う。

信徒たちは重い経済的な責任を負った仲間を放置せず、彼らが身代金や血の代償といった負債を負ったときには、正しいと認められる根拠に従って与える。

アッラーを畏れる心を備える信徒は、侵略や不正な行為を計画する者、あるいは罪を犯し悪事を行う者、他者の権利を侵害する者、信徒たちの間に混乱を引き起こそうとする者と敵対する。そのような者たちが仮に自らの子供であったとしても、彼らと敵対しなければいけない。

アッラーを畏れる心を備える信徒は、最も正しい道を行く。

意見の一致を見ることのなかった事柄については、アッラーとムハンマド（彼の上に平安あれ）にその判断を委ねる。

ユダヤ教徒はムスリムと同様に、戦いを継続する限り自らの戦いの費用を負担しなければならない。

ユダヤ教徒はムスリムと共に戦った場合、その費用を負担する。

この文書が示している人々にとって、ヤスリブ渓谷は神聖にして不可侵の土地である。

ムスリムとユダヤ教徒は、ヤスリブを侵略しようとする勢力に対し共に助け合って戦う。

文書は、宗教的であると同様に政治的な性格を持つ共同体をマディーナに出現させようとの意図を持っていた。最初の条項でこの共同体が、アンサールと移住者のムスリム、そして戦いが起きたときにムスリムと共に侵略者と戦うことを承認する非ムスリムから成ると定められている。そして、この共同体は他のあらゆる集団とは異なる特性を持つ。共同体を構成する社会集団間で意見の一致を見ることができない事柄はすべて、その淵源をアラーの教えとする法に従って行われる。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は相異なる社会集団をまとめる最も偉大な調停者である。

文書はユダヤ教徒が、マッカの多神教徒もしくは彼らに同調する人々に対して援助したり、庇護することを明白に禁じている。敵が攻撃してきたときには、ムスリムとユダヤ教徒は一致団結してことにあたり、マディーナ防衛のために行われる戦いの費用は両者が負担する。しかしマディーナ以外の場所で行われる戦いにおいては、どの集団も相手を助ける義務を負わない。ムスリムが行っている戦闘にユダヤ教徒が加わるには、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がそれを許可することが前提となる。ユダヤ教徒はムスリムの敵であるマッカの人々に対し、今後庇護を与えることができなくなった。

文書では、ムスリムの集団とイスラームの教えの法的・社会的な存在が、マディーナの社会を構成する他の集団の人々によって認められている。これはムスリムにとって重要な進展であった。なぜならこの条約により、マディーナの偶像崇拝のアラブ人とユダヤ教徒はイスラーム教徒を宗教的・政治的・社会的に認めたからである。同時に彼らはマッカの人々との協力関係を破棄し、ムスリムとの協力関係を築いた。ムスリムは非ムスリムに対し、信条や思想の自由、財産と生命の安全を保障した。他の集団に対するはかりごとや背信行為が禁じられた。世界的に見て専制、暴政、権利や法の軽視、圧制や暴力が支配的であった当時にあって、この文書はたいへん大きな進歩であった。[247] さらに、「地上における国家が約束した、最初の記述された憲法である」としても認められている。同時にこの文書は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が稀有の外交手腕の持ち主であったことも示している。[248]

ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちはこの文書に示された各条項を尊重していた。ユダヤ教徒たちがそれらを軽んじたときには、ムスリムたちはそのつど彼らに誓いを厳守しなければならないことを指摘した。しかし、ユダヤ教徒たちの誓いに反する振舞い、すなわちクライシュ族のムスリムを挑発し、はかりごとを企て、アウス族とハズラジュ族の間に不和を生じさせ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の暗殺を計画するといった行為により、まずカイヌカー族が、続いてナディィール族がマディーナから追放された。そして塹壕の戦いの後、クライザ族が罰せられるに及んで、この文書はその存在意義を失くしたのである。[249]

四　ヒジュラ直後の重要な出来事

統計を重視していた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ヒジュラの後、ムスリムについて統計をとっている。イスラームにおけるこの最初の人口調査が行われた年と、そこで得られた結果については様々な見解が出されているが、ヒジュラ暦元年に行われた統計調査によるとムスリムの数は千五百人であった。[250] ヒジュラ暦一年のシャウワー

ル月（西暦六二三年四月）、あるいは同二年のシャウワール月（西暦六二四年四月）に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアーイシャと結婚している。

ヒジュラ暦元年もしくは二年に、アザーン（礼拝への呼びかけ）が始められた。礼拝はマッカ時代にムスリムのなすべき義務とされたが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナに移住するまでは礼拝時間を告げる手段がまだ考え出されていなかった。そもそもマッカ時代の状況ではそのような余地がなかった。マディーナ時代の初期にはムスリムたちは一箇所に集まって礼拝時刻を待っていた。ある時期からは礼拝の時間になると、通りで「礼拝へ、礼拝へ」という呼びかけが行われた。しかしそれは十分なものではなく、礼拝時刻になったことをムスリムにあまねく知らせる手段が必要とされていた。そこで礼拝時刻を告げるため、キリスト教徒たちが現在の鐘の代わりに使っていたこん棒で叩いて音を出す板を使う、ホルンのようなものを吹く、かがり火をたく、旗を揚げるなど様々な方法が提案された。しかしホルンはユダヤ教徒が、板はキリスト教徒が、火はゾロアスター教徒が慣習として使っていたことから、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのどれもよしとはしなかった。その頃、教友の一人であるアブドゥッラー・ビン・ザイド・ビン・サラバがアザーンの夢を見、翌日ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れてそのことを話した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「それは真実を伝える夢だ」[251]と言い、ビラール・ハベシーにアザーンの言葉を教えた。そしてビラールは、ナッジャール族の所有する高い家の屋根に上がり、最初のアザーンを唱えたのである。そののち預言者モスクの後方に、アザーンを唱えるための専用の場所が設けられた。

ヒジュラの年、金曜礼拝がムスリムの義務とされた。また以前は旅行中であれ日常生活のときであれ、すべての礼拝が二ラカートずつ行われていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラの一ヵ月後のラビーウ・アル＝サーニー月（三月）に、ズフル（正午過ぎの礼拝）、アスル（午後の礼拝）、イシャー（夜の礼拝）を四ラカート行うこととした。[252] ヒジュラの翌年のシャアーバン月（八月）には、毎年ラマダーン月（九月）に断食を行うことを義務とした。同年の断食あけの祭り（イード・アル＝フィトル）の数日前、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は断食あけの施し（サ

ダカ・イ・フィトル）について説教を行っている。またシャウワール月（十月）が始まると同時にイード（祭り）の礼拝を行い、ズ・アル＝ヒッジャ月（十二月、巡礼の行われる月）の十日目には犠牲祭（イード・アル＝アドハー）の礼拝を行った。そしてヒジュラ暦二年のラマダーン月には、ザカート（喜捨）を義務としている。[253]

ムスリムへの攻撃に対する預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の闘い

一　多神教徒との関係

a　預言者、平和と戦争

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のマディーナ時代における、フダイビーヤ条約からマッカ征服までの約二年続いた平和の時期を除き、マッカの多神教徒や偶像崇拝を行うアラブの各部族との関係は、おおむね対立と戦闘状態にあったといえる。ただし、クライシュ族の多神教徒たちに対してとられた政策は、一部の支族を対象外としたものであった。その後マッカの征服、フナインの勝利、そしてそれに続きアラビア半島各地から人々が集団でマッカを訪れイスラームへと入信していったことによって、多神教徒との関係はより柔軟なものとなっていった。一方で預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の多神教徒との戦いは、ヒジュラ暦九年にその対立関係が終焉を迎えるまで続けられた。

多神教徒たちとの関係と同様、ヒジュラ暦二年以降、ムスリムたちとユダヤ教徒たち、キリスト教徒たちとの関係においても、戦いが重要な位置を占めている。そこで、ここでは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の戦いに関する見方について言及してみたい。

まず明らかにしておかなければならないことは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカ時代においてもマディーナ時代においても、説教やクルアーンを読むことなど平和的手段によって、人々をイスラームへと招いていた。したがって彼の周囲には、強制ではなく優しい言葉づかいと説得によって人々をアッラーへと導こうとした結果、自

由な意志によってイスラームを選んだ人々が集まっていた。[254] 人は力ずくでその行いを変えることができても心まで変えることはできないのである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の目的は、単に人の行いを変えることではなく、人の本性に呼びかけ、それをよりよいものとすることにあった。平和、愛情、そして慈悲の預言者であるムハンマド（彼の上に平安あれ）は、基本的に戦争や戦いを好まなかった。イスラームとムスリムたちに対し、マッカ時代に敵対関係にあり、残虐行為や暴力を振るった人々に対し、同じ方法で対抗することはなく、報復することはなかった。マッカ時代に啓示されたクルアーンの章句は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）や信徒たちに対し常に忍耐を求めている。[255] ムスリムたちが自分たちの受けた拷問を訴えたとき、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「耐えなさい、私は戦いを命じられていない」と答え、彼らに忍耐を求めたのである。

クルアーンの説く、他の集団とのかかわりの基本は平和である。信徒たちに対し、常に平安の道へと入るように命じている。[256] もし人々が平和を望むなら、あなたも平和を望みなさい、と預言者に命じられた。[257] クルアーンでは「信仰する者よ、あなたがたがアッラーの道のために、出動するときは、（慎重に）事態を見きわめ、あなたがたに挨拶する者に向かって、『あなたがたは信徒ではない。』と言ってはならない」と命じられている。[258]

人が平和を求めるのは、人間の本性に備わる肯定的な性質の一つである。クルアーンでもこの人間の本性は高く評価され、それを求め続けていくことが命じられている。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に対しても、アッラーが人間に与えられた本来の特質を人間に取り戻させることが求められている。[259] 平和をここに結び付けて考えるなら、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の実践においても平和がその基本にあるということがより容易に理解できるであろう。なぜなら預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、生涯を通し、自ら人の本性に逆行するような行動を避け、教友たちをもそうした行動から遠ざけていた。

マディーナに来てからムスリムになったアディ・ビン・ハーティムに語ったムハンマド（彼の上に平安あれ）の次の言葉は、たいへん意義深いものである。「アッラーに誓って言うが、近いうちに女性が一人でカーディシアからラク

ダに乗ってカアバを訪ねることができるほどに、アッラーへの畏れ以外に何の恐れも感じない、ということをあなたは耳にするだろう」[260]

私たちは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のこの言葉を、彼が将来起こることを予知したというようには考えない。なぜなら、何よりもまず、このような平和や安定をもたらすことが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の最大の望みであり、目的であったからである。さらに、この言葉が語られたヒジュラ暦九年までに、平和を目指して実施した政策がもたらした様々な成果も、この目的に到達できることを具体的に示していた。それまでと同じようにその努力が続けられていけば、女性が一人でカーディシアとマッカの間を安全に旅行することが決して不可能でないことは明白であった。またこのことが実現するであろうと語ることを予言と見なす必要もない。そもそも預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）もそのようなことは主張していない。前述のように、具体的な成果から類推して、そのような結論に至ったものと思われる。

マッカ時代の預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、剣によってイスラームを知らしめようとはしなかった。力に訴えてイスラームを広めようとはしなかったのである。アウス族とハズラジュ族がどのようにしてムスリムとなったかは先にも述べたとおりである。彼らには、イスラームを認めムスリムになったという理由だけで剣が突きつけられた。それゆえヒジュラ後は、耐え忍ぶだけではなく戦うことが許された。さらには戦うことが命じられたのである。戦うことが許されたこと、聖戦が合法とされた理由は以下のように要約することができる。

合法的自衛　戦いが許された最大の理由は、ムスリムたちの生命、財産、名誉が危機に瀕しそれを守るためであった。ムスリムたちがマッカの多神教徒に寛容に振舞えば振舞うほど、彼らはその残虐性を高めていった。それはヒジュラの後も引き続いた。アブー・スフィヤーンとウバイ・ビン・ハラフは、アンサールたちに手紙を送り、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）たちから遠ざかるように求めた。それを受け入れない場合は戦いを挑むとも通告した。アンサールたちがこれを拒んだことにより、クライシュ族たちは偽信徒やユダヤ人たちに手紙を送った。アブー・スフィ

ヤーンは一団を引き連れ、マディーナ攻撃の用意を開始した。そして、ヒジュラの八ヵ月後には、二百人の一団と共にバトゥーニ・ラビーと呼ばれる土地まで遠征を行った。そのような差し迫った状況は、マッカの多神教徒たちは寛容な態度や穏やかな振る舞いを理解せず、彼らの攻撃は寛容さで対処することはできない、ということを意味していた。力に対し力で応じねばならない状況となっていたのである。そして聖戦を許可するクルアーンの言葉が啓示されたことで、ムスリムたちは自らの命や財産を守るために戦うことができるようになったのである。クルアーンでは、「戦いをし向ける者に対し（戦闘を）許される。それはかれらが悪を行うためである。アッラーは、かれら（信徒）を力強く援助なされる。（かれらは）ただ『わたしたちの主はアッラーです。』と言っただけで正当な理由もなく、その家から追われた者たちである」と述べられている。[261]

イスラームへの安全な導き　アッラーが、すべての人々のために下されたイスラームの教えが安全に広められる必要があった。自ら望んでイスラームを信仰しようとしている人々に剣を向けてくる人間から身を守る権利を与えないということは、イスラームを広める上で大きな妨げとなった。なぜなら、イスラームの布教を武力で妨げようとする多神教徒たちの前でムスリムたちがなす術を持たないという状況を目にした人々は、その教えを受け入れることを躊躇するからである。

人権と信仰の自由を保障　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は力に訴えて人々をイスラームに入信させることは決してなかった。同様に、自らの意志によってムスリムとなった人々を力に訴えて改宗させる権利は、誰にもないのである。力を行使して改宗を強いることは人権の侵害であり、宗教の自由を奪うことを意味する。

条約を守らない者、裏切りを働く者の処罰　ユダヤ人たちとの戦いは、条約を守らない者を罰するという政策の一環と位置づけることができる。マディーナのユダヤ人たちは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）との間で結んだ条約を早くも破るようになった。多神教徒たちと共同で事業を起こしたり、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に対し暗殺計画を企てたりする人々が現われたのである。カイヌカー族とナディール族は、マディーナからの移住を

承認していた。そのような人々は処刑されてしかるべきであったが、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれを行わなかった。クライザ族は塹壕の戦いでムスリムたちから離反ししマッカ側についたため、その行いに判決を下す者として自ら選んだアウス族の長の決定によって処刑された。

外部の侵略からのイスラームの土地の防衛　イスラームがアラビア半島の全土に広がるに及び、それまではイスラームの勢力を気に留めていなかったビザチンやササン朝ペルシャといった帝国がイスラーム世界への攻撃を計画するようになった。そして、その攻撃に対し自衛の手段を持たなければ、イスラームもムスリムたちも甚大な被害を受けるという状況に至った。タブーク遠征とムータの戦いは、そうした大国の攻撃から守るために行われたものである。それらの戦いが避けられなかった理由はクルアーンに記されている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の戦いは、戦術の観点からも、また宗教的・政治的な結果という観点からも大きな重要性を持つものである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代に起きた衝突は、世界の戦争の歴史において最も流された血が少なかったとされている。その時代に生じたムスリムの殉教者の数は百三十八人であり、多神教徒の戦死者の数は二百十六人であったとされている。なぜなら預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、戦いの目的は敵を滅ぼすことにあるのではなく味方としていくことにあったからである[262]。

b　最初のセリーヤとガズワ

ここで、戦役の概念について簡単に説明しておきたい。戦いに参加した兵士の数の多少に関わらず、また実際に戦闘があったかどうかに関わらず、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が参加したすべての戦いをガズワと呼び、彼が参加せず、教友を司令官として派遣した戦いをセリーヤと呼ぶ。

イスラーム史の研究者によると、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の指揮のもとで二十七回のガズワが行われ、その中で実際に武力衝突が起きたのは九回のみであった[263]。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が参加しなかった遠征は、三十五回から六十六回までと様々な説がある。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナへヒジュラを行い、新しい国家を建設し、戦いが容認されるようになったことにより、ムスリムたちに脅威を与えてきたクライシュ族に対し、彼らの交易ルートを抑え経済的な制裁を加えることが策定された。それによって様々な戦略に基づいた遠征や戦役が行われることとなり、バドルの戦いの前にも四回のセリーヤやガズワが準備された。ただ実際にはバトゥヌ・ナフラというセリーヤ以外、武力行使は行われていない。

一ヵ月ほどの間隔をおいて連続して実施された四回の遠征は以下のとおりである。最初は、ヒジュラ暦元年のラマダーン月（西暦六二三年）にハムザを司令官として行われたシーフ・アル＝バフルの遠征である。二番目は同じ年のシャウワール月にウバイダ・ビン・ハーリスを司令官として行われたラービグの遠征である。三番目は、その一ヵ月後にサアド・ビン・アブー・ヴァッカスに率いられて行われたハッラールの遠征である。

武力衝突が起こった四番目の遠征は、ヒジュラ暦二年のラジャブ月（西暦六二四年）にアブドゥッラー・ビン・ジャフシュによっ

最初のセリーヤ

て率いられたバトゥヌ・ナフラの遠征である。その遠征は結果においても重要であることから、次に説明してみたい。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、のちに述べることになる第一次バドル遠征から戻り、ラジャブ月には叔母ウマイマの息子アブドゥッラー・ビン・ジャフシュをすべて移住者たちによって形成された七人組（八人、もしくは十二人という説もある）のもとに遣わし、ウバイ・ビン・カアバに書かせた手紙を届けさせた。アブドゥッラーには、マディーナ東方のナジード街道を進むこと、その道を二日間進んでから手紙を開くこと、そしてそこに書かれている指示に従うこと、友人たちには同行を強制してはいけないことなどが命じられた。アブドゥッラー・ビン・ジャフシュは二日後に、その手紙を開いた。そこには次のように書かれていた。「私のこの手紙を読んだ後は、命じられたとおりターイフとマッカの間のバトゥヌ・ナフラまで行きなさい。そこでクライシュ族のキャラバンを監視しなさい」手紙を読んだのち出発したアブドゥッラー・ビン・ジャフシュとその友人たちが、マディーナから二百キロの地点にあるバフランという地に到達したとき、サアド・ビン・アブー・ヴァッカスとウトゥバ・ビン・ガズワンがラクダを見失った。二人はラクダを探すために隊列から離れ、道に迷い、一行からはぐれてしまった。他方、アブドゥッラーたちは無事バトゥヌ・ナフラへと到達した。ところがそこで待機中、ターイフからマッカへと戻る途中の四人のクライシュ族のキャラバンと遭遇した。一行はその時期が戦いが禁じられているハラームの月であるラジャブ月の最後の日か、シャアバーン月の一日か、決めかねていた。しかし結果として、彼らはキャラバンの隊長であるアムル・ビン・アル＝ハドゥラミーを殺害し、他の二人も捕虜としてしまった。だが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのようなことは命じていなかった。アブドゥッラー・ビン・ジャフシュはそこで得た戦利品を五等分し、その五分の一を預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のために取り分け、残りを自分たちで分配した。当時、戦利品の分配についてのクルアーンの言葉[264]はまだ啓示されていなかった。
一行がマディーナに戻ると、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は自らの取り分とされた戦利品は受け取ることはなかった。そしてハラームの月に戦うことは命じていないと再三指摘し彼らを非難した。アブドゥッラー・ビン・

ジャフシュと仲間たちは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やムスリムたちが彼らを非難したことをたいへん悲しんだ。その頃クライシュ族の多神教徒たちは、「ムハンマド（彼の上に平安あれ）とその仲間たちは、戦いが禁じられた月に血を流し、キャラバンの荷を奪い、人々を捕虜とした」とムスリムを告発した。ムスリムたちはその出来事はシャアバーン月に起こったものであると主張した。そうしたときクルアーンの雌牛章第二一七節が啓示された。

「かれらは聖月中に戦争することに就いて、あなたに問うであろう。言ってやるがいい。『聖月中に戦うことは重大事である。だがアッラーの道に近付くのを妨げ、かれを否定し、また聖なるマスジド（マスジド・アル＝ハラーム）を汚し、そこ（の聖域）に住む者を追放することは、アッラーの御目にはもっと重大事である。迫害は、殺害より遙かに悪い。』」[265]

これにより、遠征に加わった人々のとった行為は正しかったとされ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）も一度は拒否した戦利品を受け取った。多神教徒たちは捕虜と交換する身代金をマディーナに送ってきた。しかし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はすぐには捕虜を釈放せず、一行からはぐれたサアド・ビン・アブー・ヴァッカスとウトゥバ・ビン・ガズワンが戻ってきた後

バトゥヌ・アル＝ナフラの出来事が起こった場所の景観

で釈放した。捕虜の一人はイスラームを受け入れ、一人はマッカへ戻った。[266] バドルの戦いが起こるのはこの一ヵ月半後のことである。

この時期に計画されたガズワは、アブワー、ブワート、第一次バドル、ズルーウシャイラの戦いである。これらの戦いは様々な理由からヒジュラ暦二年、バドルの戦いの前に計画された。戦いに際し預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、マディーナとマッカの間に住む一部の部族と、互いに攻撃を仕掛けず、またマッカ、マディーナいずれの陣営にも組しないという条約を結び、彼らに中立の立場を約束させたのである。[267]

c　バドルの戦い（ヒジュラ暦二年、西暦六二四年）

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と多神教徒との間の最初の戦いはバドルで起こった。ヒジュラ暦二年、クライシュ族はアブー・スフィヤーンの指揮のもと大きなキャラバンをシリアへと送った。五万ディナールの資金を費やし千頭のラクダによって編成されたこのキャラバンは、クライシュ族が派遣した最大のキャラバンの一つである。キャラバンの積荷には五十万ディナールの価値があった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその知らせを受けただちに教友たちを集めた。キャラバンの運ぶ荷の多さと、それを守る人数の少なさが明らかとなり、そのキャラバンがマッカへの帰途に立ち寄るバドルでそれを奪う計画を立てた。そして人々に戦いを呼びかけ、必要とあれば多神教徒との戦闘が行われるであろうと話した。アンサールも移住者も共にこの戦いに加わることとなった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナを出発する十日前、タルハ・ビン・ウバイドゥッラーとサイード・ビン・ザイドはキャラバンについての情報を収集するためにシリアへと向かった。しかしこの教友たちがマディーナに戻ったときには、すでにバドルの戦いは始まっていたのである。[268]

このとき、別のところからキャラバンが帰途についたという情報を得た預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ヒジュラ暦二年ラマダーン月の二日（西暦六二四年）マディーナを出発し、ムサアブ・ビン・ウマイル、アリーとサアド・

ビン・ムアーズに旗手の任務を与えた。ムスリム軍の数は七十四人が移住者、残りがアンサールで計三百五人であった。軍には七十頭のラクダと二頭の馬が用意された。一頭のラクダが三人に割り当てられ交代で乗っていたのである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）、アリー、そしてアブー・ルバーバも、三人で一頭のラクダを乗り回していた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が歩く番になると、それを心苦しく思ったアリーたちはムハンマド（彼の上に平安あれ）にラクダに乗るようにと懇願し、自分たちが歩くと主張した。しかし預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)はそれを認めず、私を特別視してはいけない、私もあなたたちと同じように善き振舞いをし善行を積まねばならない身なのだ、と彼らに告げたのである。[269]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はバドルの戦いに出発する際、様々な任務や理由から、八人の移住者やアンサールたちに、遠征に参加しなくてもよいと告げていた。だがのちに彼らにも戦闘に加わった者たちと同じように戦利品が分配された。遠征の途上、まだイスラームに入信していなかったハズラジュ族のフバイブ・ビン・イサーフとカユス・ビン・ムハッリスが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れ、一族と共に戦いに加わりたいと訴えた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の答えは、多神教徒に対し多神教徒の助けを得て戦うことはできないというものであった。そこで二人はイスラームに入信し共に戦いに参加した。[270]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマディーナ出発後、キャラバンについての情報収集のために二人のジュハイナ族の男を派遣した。彼らはマディーナの百六十キロ南西、紅海沿岸に位置するバドルに向かい、キャラバンがまだそこに到達していないことを知り、そのことを預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に伝えた。バドルは当時、マディーナとマッカを結ぶ道がシリアへのキャラバンが通る道と交わるところにありキャラバンの補給基地となっていた。

他方キャラバンを率いている者たちは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がキャラバンの帰還を監視していることに気づき始めた。アブー・スフィヤーンはキャラバンのシリア出発後、クライシュ族に援軍を要請すべくダム

ダム・ビン・アムルという者を二十ディナール支払いマッカへと派遣した。ダムダムは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が派遣した男たちに追跡されていることに気づき、待ち伏せにあうことを避け、バドルを左手に見る普段あまり使われることのない道を選びマッカへと向かった。

アブー・スフィヤーンの援軍要請がマッカに伝えられると、クライシュ族は多くの支族からなる千人規模の軍を召集した。軍には七百頭のラクダと武装された百頭の馬が用意された。出陣に当たって裕福な多神教徒たちは軍に乗り物や資金を援助した。多神教徒の援軍はアブー・ジャハルを司令官としてマッカを出発した。そのときアブー・スフィヤーンはジュフファから使者を送り、軍にキャラバンが無事であるから戻るようにと伝えてきた。クライシュ族の軍は、キャラバンが海岸線に来ていることを知らず、通常の道を進んでいた。アブー・スフィヤーンからの知らせを受け、軍の一部は戦いがもう必要ないと判断して戻っていった。しかしクライシュ族の多くは、このような状況に二度と陥ることがないようにするため、ムスリムたちに軍の強大さを見せつけようと進軍を続けた。アブー・ジャハルはバドルまで行き、彼らの力を誇示し、略奪しないで戻ることはないと宣言した。[271] クライシュ族たちはまた、バトゥヌ・ナフラで殺害されたアムル・ビン・ハドゥラミーの報復を切望していた。[272]

バドルの近くまで軍を進めていた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、キャラバンの情報を収集するためにアリーとズバイル・ビン・アッワム、サアド・ビン・アブー・ワッカス、そしてベスベス・ビン・アムルを派遣した。クルアーンでは、双方の軍がバドルにやってきたとき、互いに相手のことに気づいていなかったと次のように述べている。

「あなたがたは川の谷間に近い方におり、かれらはその遠い方にいて、キャラバンがあなたがたよりも低い（平原）にいた時を思え。このときあなたがたが仮令互いに（会戦を）約束していても、必ずやその約束に反したであろう。しかし（予期に反して開戦した）それは、アッラーがなさるべきことを、完遂なされたため。死ぬ者に明証（を見せた）後に死なせ、生き長らえる者も明証によって生き長らえさせるためである。本当にアッラーは全聴にして全知であら

れる」[273]

このとき預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と教友たちは、クライシュ族の軍がマッカを出発していることをまだ知らなかった。ズバイル・ビン・アッワムとその仲間は、クライシュ族がバドル付近の泉に、水を汲ませるために送っていた数人の奴隷たちを見つけ、彼らを捕えて預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとに連れていった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのとき礼拝をしていた。奴隷たちを連れてきた人々は、彼らを尋問にかけ、お前たちは何者なのかと問い詰めた。奴隷たちがクライシュ族の軍に属する者であると答えると、彼らは奴隷たちを殴り始めた。なぜならその知らせは彼らにとって許しがたいものだったからである。殴られた奴隷たちは、今度は話を変え、アブー・スフィヤーンのキャラバンの者であると話し始めた。そのとき礼拝を終えた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、教友たちに「あなた方は彼らが本当のことを話したからといって殴り、嘘をついたときには放っておいている」と尋問のやり方を非難した。そしてクライシュ族の軍の位置を奴隷たちから聞き出した。軍の規模を尋ねられた奴隷たちは知らないと答えた。そこで預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、食事のために一日何頭のラクダを屠っているのかと尋ねた。そして、毎日九頭ないしは十頭のラクダを屠っていたことを知り、軍の規模は九百人から千人の間であると推定した。マッカの有力者の誰が軍に加わっているのかということも問うた。[274]さらに預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は奴隷たちからアディー族とズフラ族が多神教徒の軍を離脱してマッカへと戻ったことも聞き出した。二人の男に、奴隷の話の裏を取る任務が与えられた。二人は朝方になって、クライシュ族の陣地で大きな混乱が起きていると伝えた。なぜならクライシュ族は陣地に戻った別の奴隷たちから、ムスリムたちがバドル近郊に終結していることを知らされ緊張していたからである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はバドルで戦うという決定を下す前に、移住者とアンサールのそれぞれから意見を求めた。移住者からアブー・バクルとウマル、アンサールからサアド・ビン・ムアーズが発言した。

ウマルは、クライシュ族の軍との対決について、次のように自らの見解を述べた。「アッラーの使徒よ。アッラー

にかけて、彼らはその力を放棄することはないでしょう。あなたと戦おうとするでしょう。備えるべきです」サアド・ビン・ムアーズは、彼を信じ支えていくこと、そして敵と対決することも厭わないと語った。

　ヒジュラ暦二年ラマダーン月の一七日、西暦六二四年三月一四日の金曜日の早朝、双方の軍はバドルへと進軍した。先に到着したのはイスラーム軍であった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマディーナに最も近く、敵から最も遠い井戸の周囲に陣取った。教友のフバッブ・ビン・ムンジールはそこに陣取ることを適切だとは見なさず、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）にその決定が啓示によるものかどうかと訊ねた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がそれは自分の判断であると伝えると、フバッブは敵に最も近い井戸の近くに陣取り、残りの井戸はすべて塞いでしまうことを提案した。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその意見を適切なものとし、フバッブが示した井戸の周囲に陣地を設け、残りの井戸をすべて砂で塞いだ。[275]ただしのちに塞がなかった井戸から敵軍が水を汲むことを許可した。[276]

　そのときイスラーム軍に参加するために預言者ムハン

マド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れようとしていたフザイファ・ビン・ヤマーンとその父が敵軍に捕えられた。しかし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の軍に参加しないことを約束し、彼らは釈放された。二人は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れ、彼らの身に起こったことを話した。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は約束は守るべきであり、戦いに参加せず、マディーナへ戻るべきであると彼らに伝えた。[277] 最も困難な状況にあり、一人でも多くの兵士を必要としているときでさえ、たとえ敵軍との約束であっても守らねばならないとされたことは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が約束や誓いを守ることにどれほど重きを置いていたかをよく表すものである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は敵軍が到着し、戦闘が始まらんとする直前においてもなお、かつてクライシュ族の一員であったウマルを多神教徒の陣地へと派遣し、戦わずに平和の道を探ることを提案した。多神教徒軍の指揮官の一人ハキーム・ビン・ヒザームはこのムハンマド（彼の上に平安あれ）の提案を受け入れてはどうかと進言した。しかしアブー・ジャハルはその意見を認めず、あくまで戦うことを主張したのである。[278] 預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のこのような行いは、戦いの場においてすら物事を平和的に解決しようとする彼の姿勢をよく表している。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は戦いの前夜をアッラーへの崇拝行為とドゥアー（祈り）を行って過ごした。サアド・ビン・ムアーズは、戦いの場所に近いところに小屋をつくり、入り口で見張りに立った。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は軍に臨戦態勢を取らせた後、アブー・バクルと共にテントに戻りドゥアーを行った。「主よ、クライシュ族はおごり高ぶり、あなたに挑みかかっているのです。預言者を嘘つきだと見なしているのです。主よ、私たちに助けの言葉を、私に勝利が与えられんことを願います。アッラーよ、あなたがもし、この一握りのムスリムたちを破滅させるのであるなら、あなたに崇拝行為を行う者は誰もいなくなってしまうでしょう」アブー・バクルはそこで、「これで十分です。アッラーはほどなく約束された勝利をあなたに恵まれるでしょう」と言った。[279]

イスラーム軍はこの間に自分たちの陣地に石を積んだ。それらの石は防衛戦を行おうとするムスリムたちにとって効果的な武器となった。多神教徒軍は攻撃に出ようとしていたため、敵に投げつける一つ、二つの石を携えていた他は、何も持っていなかった。

戦いはアラブの伝統に従い、一騎打ちの形式で始まった。多神教徒軍からはアスワド・ビン・アブドゥッルアサド、イスラーム軍からはハムザが中央に進み出て戦った。そして、ハムザが相手を倒した。次にクライシュ族側からはウトゥバ・ビン・ラビーアとその弟シャイバとワリード・ビン・ウトゥバが出てきた。それに対抗してイスラーム軍からはアンサールの三人が進み出た。しかしクライシュ族側は彼らは対等の相手ではないと主張した。彼らにふさわしい相手を出すように要求したのである。そこで預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の命令により、ハムザ、アリー、そしてウバイダ・ビン・ハーリスが進み出て戦い、それぞれ相手を倒した。この一騎打ちの戦いの後、本隊の戦いは四時間から五時間続き、午後になってイスラーム軍の完全な勝利のもと終りを告げた。クライシュ族側はアブー・ジャハル、ウマイヤ・ビン・ハラフ、ウトゥバ・ラビーヤ、シャイバ・ビン・ラビーア、アブー・スフィヤーンの息子ハンザラをはじめとして七十人の死者を出した。またほぼ同数の人間が捕虜となった。イスラーム側は六人のアンサールと八人の移住者、計十四人の殉教者を出した。○280

バドルの戦いの殉教者の埋葬地

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は殉教者のための葬儀の礼拝を行い、彼らを丁重に埋葬した。敵側の死者へのあらゆる冒涜行為を禁じ、彼らもまた丁重に葬った。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は戦いの最中、敵側の一部の支族の人々、特に叔父のアッバースは強制的に戦いに参加させられているので殺害しないように求めた。イスラーム軍のアブー・フザイファ・ビン・ウトゥバはムハンマド（彼の上に平安あれ）のその言葉を聞き、「我々の父も、息子も、兄弟も殺害しなければいけない。しかしあなたの叔父だけは殺してはいけない。そういうことですか。アッラーに誓って言うが、アッバースに遭遇したなら私は彼の首をはねてやろう」と言った。この言葉を耳にした預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、アブー・フザイファに本当にそういうことを口にしたのかどうかを訊ねた。アブー・フザイファは、父や叔父、兄弟が殺されていくのを見て耐えられずにその言葉を口にしたのだと答えた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「あなたの父も叔父も兄弟も、真剣に我々と戦った。彼らはまったく強制されることなく自ら進んで戦いに参加したのだ。しかしハーシム家の人々は強制的に参加させられた」と言った。

事実、クライシュ族の軍がマッカを出発したときにはハーシム家の人々は軍に加わることなくマッカに残っていた。当初そのことに誰も気づかなかった。だが軍がしばらく進み休息をとったとき、アブー・ジャハルがそのことに気づき、「クライシュ族よ、あなた方は何をしているのか。ハーシム家の人々をマッカに残してきたではないか。もし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が勝利すれば彼らも勝利したことになる。もしあなた方が勝利すれば、彼らはあなた方の子供に報復するであろう。彼らをマッカに残してはいけない。共に連れて行くのだ」と命じた。そこで彼らはマッカへと戻り、ハーシム家の人々を強制的に隊列に加えたのである。

そして進軍の途中、人々はハーシム家の人々を「ハーシム家の者たちよ、あなた方は我々と行動を共にしているが、心は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と共にあるのであろう。我々はそれをよく知っている」と非難した。この言葉を受けてアブー・ターリブの息子ターリブはマッカに戻った。[281] 残っていたハーシム家の人々が預言者ムハンマ

ド（彼の上に平安あれ）の側に加わることを恐れ、彼らをテントに閉じ込め見張りを付けた。[282]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がハーシム家の人々を殺害しないように求めたことを、彼が自分の一族を特別視したと見なすことは正しくない。アブー・ラハブを除きハーシム家の人々は全員、ムスリムである者もそうでない者も、マッカ時代にムハンマド（彼の上に平安あれ）を支えてきた。そして三年間の弾圧の時代を共に耐えてきたのである。アッバースは当時からムハンマド（彼の上に平安あれ）への援助を続けていた。また預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、バドルの戦いにおいて自分の一族だけではなく、それまでに恩義を感じていた一部の人々についても殺害しないように求めた。その中には、弾圧をやめるように尽力したアブー・アル＝バフタールも含まれる。[283]また預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はザムア・ビン・アスワドとハーリス・ビン・アーミルを殺すことも禁じていた。だが、この二人は気づかないうちに殺されてしまっていた。

捕虜への対応について言及するなら、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は何よりもまず捕虜に対しよく振舞うように命じていた。捕虜のうち二人だけが、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やムスリムたちにひどい拷問を加えていたため死刑を宣告された。他の捕虜たちの処遇については教友たちに相談した。ウマルやサアド・ビン・ムアーズのような一部の教友たちは捕虜を殺害することを提案したのに対し、アブー・バクルは身代金を取って彼らを釈放することを提案した。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・バクルの提案を受け入れ、捕虜の経済的状況に応じ千ディルヘムから四千ディルヘムの身代金の支払いを求めた。捕虜の中には預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の叔父アッバースや他の叔父の息子であるアキールやナウファルも含まれていた。彼らの身代金の支払いについても特別扱いすることはなかった。読み書きのできる捕虜はその仕方をムスリムたちに教えるという条件で釈放された。[284]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の娘婿にあたるアブー・アル＝アスも捕虜の中に含まれていた。ザイナブは夫の身代金として、財産と共に結婚したときに母親にもらった首飾りを送ってきた。預言者ムハンマド（彼の上に

平安あれ）はその首飾りを見て胸を詰まらせ教友たちにも意見を求め、その首飾りをザイナブに返しアブー・アル＝アスを釈放するように命じた。[285] ただし、婿に対し娘ザイナブをマディーナへ送るようにと命じた。彼はそれに従い妻をマディーナへと送った。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は婿のそうした態度を高く評価したのである。

捕虜の一人であったアブー・アッザは、貧しく、自分には五人の娘がいると訴え、娘たちのためにも釈放してもらえないかと請うた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はムスリムたちと二度と戦わないこと、自分たちに対立しないことを誓わせ、彼を身代金なしで釈放した。[286]

捕虜の中には、クライシュ族の説教師であるスハイル・ビン・アムルも含まれていた。彼は足に矢を受け負傷し、逃げようとしたが捕まった。逃亡しようとした際に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼の殺害を命じていた。しかしのちに預言者は彼を捕まえたとき殺すことはなかった。[287] ウマルは「アッラーの使徒よ、彼の前歯を砕いてやりましょう、二度とあなたにたてつこうとしないように」と言ったが、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれを認めなかった。「私はそのような拷問を行うことはできない。もしそうすればアッラーが私に、預言者であるにもかかわらず、同じような罪を与えられるであろう」と答えた。そして続けて、「スハイルが、あなたが好むような態度を取るだろう」と言った。[288] 預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のスハイルへのこの振舞いは彼が生涯を通して敵に対しとった政治的な姿勢、すなわち捕虜たちに拷問を加えたりせず良く遇し、イスラームへと導き、いつか彼らが役に立ってくれることを期待するといった姿勢を顕著に示しているものである。

アブー・スフィヤーンの息子アムルも捕虜の中に含まれていた。多神教徒たちがマッカで捕虜のため身代金の用意をしていたとき、人々はアブー・スフィヤーンにも身代金を支払い息子を助けるように勧めた。しかし彼はそれを受け入れなかった。「息子ハンザラは殺された。アムルのために金を払えと言うのか。私は息子の命を失ったというのに、さらに財産も失えと言うのか。絶対にそのようなことはできない。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が息子を釈放するまで一年の月日がかかったとしても、私はその金を支払わない。私にそれが払えないというわけではない。アムル

がこのことで前例となることを私は認めない」と身代金の支払いを拒否したのである。

アブー・スフィヤーンは身代金を払わずに息子アムルを釈放させる方法を探し始めた。そして、その頃ウムラ（小巡礼）のためにマッカを訪れていたサアド・ビン・ヌマンとムンジール・ビン・アムルを捕え、息子アムルの釈放を条件に彼らを釈放することを計画した。ムンジールは逃げることができたが、サアドは捕まり、牢に入れられた。本来マッカの人々は、ウムラに来た人に害を与えることはなかった。投獄された教友サアドの近親者は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れ、アブー・スフィヤーンの息子とサアドを交換してくれないかと頼んだ。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らの要求にこたえアムルを釈放した。アブー・スフィヤーンもサアドを釈放した。[289] この出来事に対し預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のとった態度から、彼は仲間たちが困難な状況にあったり、獄につながれたり、拷問を受けるようなとき必ず救いの手を差しのべる、ということがわかる。この場合のように、アブー・スフィヤーンから取ることのできた四千ディルヘムと引き換えに一人の教友を失うようなことは決してしないのである。

教友たちが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に習い捕虜たちによく振舞ったということは、多くの文献においても言及されている。たとえば彼らは自分たちが持っているわずかばかりのパンを捕虜たちに与え、自らはナツメヤシを食べることで我慢した。傷つき、歩けないほどに弱った捕虜たちはラクダに乗せ、自分たちは徒歩で付き添った。[290]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は捕虜たちの生命を保障するため、事前に必要な手段を講じていた。殉教した者の近親者が興奮状態に陥り捕虜たちに危害を加えないように、次のように伝えた。「サアド・ビン・アビ・ワッカスに弟のウマイルが殉教したことを知らせてはいけない。そうでないと彼はすべての捕虜を殺害するであろう」[291]

こういったことによって預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は捕虜を保護すると同時に、戦士が怒りから報復の感情に襲われ、血の報復を実行し新たな血が流されることを未然に防いでいたのである。

マディーナに帰還したのち、すべての戦利品は一箇所に集められ、戦争に加わった人々へ平等に分配された。[292] その後、戦利品の分配の詳細に関するクルアーンの啓示が下された。「戦争で得たどんな物も、五分の一はアッラーと使徒そして近親、孤児、貧者、そして旅人に属することを知れ」[293] 預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの啓示を、バドルの戦いが起きたのと同年、カイヌカー族のユダヤ人から獲得した戦利品の分配において初めて実践している。バドルの戦いの戦利品が初めてクルアーンの啓示に従って分配されたとするイスラーム歴史学者の記録もある。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は総司令官の権利としてアブー・ジャハルのラクダを自らのものとした。彼はそれに乗り戦いにも参加したが、フダイビーヤの戦いのときには犠牲として捧げるためにそのラクダを連れていった。多神教徒たちはそのラクダを百頭のラクダと交換したいと言ってきたが、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「もし犠牲とする予定でなければ差し上げたのだが」と答えている。[294]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はバドルの戦いの勝利を伝えるためにザイド・ビン・ハーリサとアブドゥッラー・ビン・ラワーハをマディーナへ遣わした。ザイドが町に着いたとき、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の娘ルカイヤが亡くなり、埋葬されたばかりのところであった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はラマダーン月の終りもしくはシャウワール月の初めに軍隊と共にマディーナに帰還した。マディーナに残っていたムスリムたちは総出で預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と兵士を出迎え、その勝利と無事の帰還を祝った。

サラマ・ビン・サラーマという名の教友は、「どうして祝っているのですか。アッラーに誓って言うが、私たちは縛られたラクダのような、髪も抜けた老人たちと対決しただけなのです」というような不適切な発言をした。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその発言に苦笑し、クライシュ族の多神教徒たちもムスリムも過小評価しないようにと次のように述べた。「兄弟よ、彼らは有力者であり、一族の長なのだ」[295]

またこのとき、バドルの戦いに加わらなかった教友たちが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を訪れた。彼らを代表してウサイド・ビン・フンダイルが彼の前に進み出て、その勝利を祝福した。そして誓いをし、自分たちが戦

いに出なかったのは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマッカ軍と一戦を交えるのではなくキャラバンを襲うだけだと考えたからだと説明した。また参戦しなかったことを悔いているとも伝えた。それを聞いたムハンマド（彼の上に平安あれ）は「あなたは正直に話した」と答えた。[296] ここでの振舞いから、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がその誠実さを確信し、良い意志を持っていると信じた人たちに対しては尋問を行わず、彼らに対し疑いを持ってはいけないと考えていたことがわかる。

クルアーンでは、バドルの戦いのとき、アッラーが天使を遣わしムスリムたちを助けられたことが述べられている。「アッラーは、あなたがたがバドルで微弱であったとき、確かに助けられた。だからアッラーを畏れなさい。きっとあなたがたに感謝の念が起きるであろう。あなたが信者たちに言ったことを思い起せ。『主が、三千の天使を御下しになってあなたがたを助けられても、まだ充分ではないのか。』」[297]

同様にクルアーンの戦利品章でも、アッラーがバドルでムスリムを助けられたこと、戦士たちが天使によって支えられていたことが述べられている。[298] また雌牛章、イムラーン家章、戦利品章の多くの節でバドルの戦いについて触れられている。クルアーンはこの戦いを、「識別される日」、「二つの集団が対立しあった日」と呼んでいる。[299] 信者の一部は、それを好まなかったこと、[300] アッラーが、敵の二つの隊の中、一つはあなたがたのものであろう、と約束されたこと、[301] ムスリムたちを助けるため、その日雨が降ったとも伝えている。[302] 事実、バドルの戦いの日には雨が降り、クライシュ族の軍の陣地はぬかるみとなった。それに対し、砂埃がひどかったイスラーム軍側の陣地は雨によって固められ、ムスリムたちには力が与えられたのである。[303]

一部の章句では預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やムスリムたち、さらには多神教徒たちや偽信徒たちの戦いのさなかでの心の在り様について言及している。[304] そして捕虜の扱い[305]や戦利品の分配[306]についてムスリムたちが従うべき規範を明らかにしている。バドルで戦った二つの軍の一方がアッラーの道にあり、もう一方はアッラーを否定する集団であったこと、[307] そしてアッラーはムスリムたちを助けられる一方で、イスラームに対する反抗を示し続けたマッ

カの多神教徒たちに罰を与えられたということも述べられている。これらは多神教徒にアッラーの力を思い知らせるための奇跡というよりは、ムスリムたちを助けるために行われたものだと理解すべきであろう。クルアーンにあるバドシャ・クブラーという言葉[308]は、一部の学者によるとバドルの戦いのことを指している。それらの節はアッラーがムスリムたちを助けたという意味で理解されている。[309]

バドルの戦いにおいては、互いに親戚関係にある多くの人々が敵、味方に分かれて戦った。ハムザとその兄弟アッバース、アブー・バクルとその息子アブドゥルラフマーンなどがその例である。このように、異なる信仰を持った親子、兄弟、叔父と甥などが二つに分かれて戦ったのである。しかし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、父に挑もうとする息子、あるいは息子と戦おうとする父に対し、できる限りそれをやめさせようとした。たとえば、息子と対決することを望んだアブー・バクル、そして父と対決しようとしたアブー・フザイファに対し、それをやめさせたのである。

バドルの戦いは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）自身が戦術を立てたという観点からも重要な戦いである。彼はイスラーム軍を、太陽の光が兵士たちの目を射ることがないように有利な位置に配した。敵軍は逆にその光を受けることになったのである。当時軍服はなかったので、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は戦闘時にたやすく敵と味方を峻別できるように移住者、アウス族、ハズラジュ族に対しそれぞれの合言葉を定めた。また、この戦いでの捕虜や負傷者の扱い方が、それ以降の戦いにおいても踏襲されるようになった。

バドルにおけるイスラーム軍の勝利は、マディーナをはじめとしてアラビア半島全土、そして半島の外においてもムスリムの立場を高めるものとなった。アラブの地で名声を得ていたマッカの人々がこの戦いに敗れたことによって、すべての人々はマッカ軍に勝利したムスリムの存在に注目することとなったのである。[310]バドルの戦いの結果が及ぼした影響はアラビア半島にとどまらなかった。ムスリムの勝利を知ったエチオピアのナジャーシーの喜びはこの上ないものであった。[311]ただしユダヤ教徒たちは当初中立を誓っていたが、バドルの勝利の後になってムスリムたちの成功を妬むようになった。カアブ・ビン・アシュラフはその悲しみを「地の下のほうが、地上よりもましである」と表現し

ている。

バドルの戦いののちイスラームの歴史には「バドルの民」という概念が登場した。クルアーン[312]や預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の言行を記したハディース[313]でも、バドルの民は賞賛をもって言及されている。ハディースではムスリムの中でもバドルの民が最も徳のある存在だと述べられている。

イスラーム軍の勝利に終ったバドルの戦いが引き起こした最も重要なものの一つに、ウフドの戦いがある。マッカの多神教徒たちはクライシュ族の軍の敗北の知らせに嘆き悲しんだ。彼らはアブー・ジャハルに代わってアブー・スフィヤーンを頭としムスリムたちへの報復を誓い、すぐさまそれを行動に移したのである。

d　バドルとウフドの戦いの間の時期の多神教徒との関係

バドルの戦いで近親者を失ったことは、クライシュ族にとって大きな打撃となった。キャラバンの長としてマッカに帰還したアブー・スフィヤーンは、敗北を喫したクライシュ族の軍がマッカに戻ってきたとき、近親者が殺されたことを知り、その報復を成し遂げるまでは体を洗わず妻にも近寄らないことを誓った。そしてバドルの戦いの二ヵ月半後、アブー・スフィヤーンは二百人の兵と共にマディーナへと出発した。夜はナディール族のユダヤ教徒たちの客となった。マディーナに攻撃を仕掛けるだけの勇気がなかったため、その代わりに郊外の地域を襲った。ナツメヤシの果樹園で働いていた二人のムスリムを殺害し、果樹園にも火を放った。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその知らせを受けとるやいなや三十人の騎兵と百二十人の歩兵からなる軍と共にアブー・スフィヤーンを追跡した。しかし彼らはムスリム軍と戦う気がなく逃亡してしまった。アブー・スフィヤーンはこの遠征に出るに際して小麦粉を調理した食べ物（サウィーク）を携えていた。逃げるときそれが重荷になり袋からその一部を廃棄した。そこからこの戦いはサウィークの戦いと呼ばれている。[314]

ヒジュラ暦三年のムハッラム月（一月）、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はスライム族とガタファーン族が

マディーナを攻撃しようとしているとの情報を得た。そこで二百人の兵と共に出征したが、敵軍は戦うことなく逃走した。[315]

この出来事の二ヵ月後預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ガタファーン族のムハリブ及びサラバという支族の者たちがズーアマルという場所に集結し、マディーナ周辺で略奪行為を行おうとしているとの情報を得た。彼らに行動を起こさせないために、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は四百五十人の教友たちと共にマディーナを後にした。それを知った多神教徒たちは恐怖感に襲われ逃走し山に逃れた。そのとき雨が降っていた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が剣を木につるし、雨に濡れた服を乾かそうとしていたとき、多神教徒たちの長であるドゥスール・ビン・ハーリスが気づかれないようにムハンマド（彼の上に平安あれ）のそばに近づいた。そして手にした剣を振り上げ、「ムハンマド（彼の上に平安あれ）よ、今、私の手から誰があなたを救えるだろうか」と訊ね、彼を殺そうとした。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が、「アッラーが」と答えると、ドゥスールは動揺して剣を取り落とした。その剣を預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が手に取り、「今、あなたを私から誰が救えるだろうか」と訊ねた。彼は「誰も…」と答えた。しかし預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼を殺すことはなかった。そののちドゥスールはムスリムとなったのである。[316]

その出来事の二ヵ月後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマディーナから二百キロの距離にあるバフランでスレイム族がムスリムに対抗し兵を集めていることを知った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が三百人の教友と行動を起こすとスライム族は逃走した。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は敵と遭遇することなく十日後にはマディーナに戻った。[317]

その頃、海岸沿いのルートからシリアへキャラバンを送ることを断念したクライシュ族たちは、新たにイラク方面のルートを使うことにした。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は海岸線一帯に住むすべての部族と条約を結んでいた。そしてあるとき預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はクライシュ族のキャラバンがマディーナの東側か

らシリアへと向かっていることを知り、ザイド・ビン・ハーリサを司令官とする百人の軍を派遣した。ザイド・ビン・ハーリサはナジードのカラダという地方でキャラバンを捕えマディーナへと連行した。キャラバンの積荷は戦利品とされ、そのとき捕虜となったキャラバンの案内人フラト・ビン・ハイヤーンはイスラームに入信し、その後預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）によって釈放された。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の信頼を得たフラトはスッファの民に加わり、詩を詠んでムハンマド（彼の上に平安あれ）を礼賛した。[318]

e　ウフドの戦い（ヒジュラ暦三年、西暦六二五年）

バドルの戦いで多くの近親者を失ったマッカの多神教徒たちは、アブー・スフィヤーンのもとを訪れキャラバンで得た収益で預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちに報復を行うことを提言した。アブー・スフィヤーンは息子ハンザラや一族の有力者がバドルで殺されていることから、報復を最も望んでいるのは自分自身であると語り、この提案を受け入れる用意があると伝えた。彼らは報復とともにシリアへのキャラバンの道から脅威を取り除こうとしていた。なぜなら彼らは交易によって収入を得ており、マッカの人々にとってシリアへの道の安全はたいへん重要であったからである。

クライシュ族は、バドルの戦いで自分たちの部族だけで編成した軍で戦い敗れていた。そもそもバドルの戦いは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のキャラバン襲撃計画に端を発する。そこで彼らはバドルの戦いの原因となったキャラバンの利益を投じてムスリムと戦うべく兵士を募り、それによって兵士の数を増やすことにした。結果として二千人が兵士として雇われた。アブー・スフィヤーンはその二千人を含め合計で三千人から成る軍を編成し、マディーナへ向けて出発した。軍は二百頭の馬と六百人の武装兵士、そして三千頭のラクダから成っていた。

マッカの住人であるアッバースは、クライシュ族が戦いに備えていること、集められている兵士や動物の数、武器の状況などを手紙で預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に知らせた。手紙を運んできた人物はクバーで預言者ム

ハンマド（彼の上に平安あれ）と会見した。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその手紙をウバイ・ビン・カアバに読ませ、その内容を秘密にしておくように命じた。それからサアド・ビン・ラビーという教友の家へ行き、そこに誰もいないことを確認した上でアッバースの知らせを伝えた。そして彼にもこのことを隠しておくように命じた。サアドは約束を守った。しかしその話を盗み聞きしていたサアドの妻は、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナに戻ったのち耳にしたことすべてを夫に話した。サアドはすぐに妻を連れ預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとへと急いだ。妻が話を人にもらすのではないかとの危惧を持っている[319]と伝えたところ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はサアドに妻を拘束しないようにと命じた。結果としてその話はマディーナに広まってしまった。フザーア族の人々も預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）にクライシュ族の軍隊についての情報をもたらした。

クライシュ族のナウファル家出身のジュバイル・ビン・ムティムは彼の奴隷ハルブに、バドルで叔父トゥアイム・ビン・アディーを殺したハムザに報復すればお前を解放すると約束した。十五人ほどの女性たちと共に軍に加わったアブー・スフィヤーンの妻ヒンドも、バドルで父を殺したハムザの死体を持ってくることができれば、その肝臓を噛みつぶすと誓いを立てた。

一方、アッバースからの知らせを受け、ただちに預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ファダーラの息子アナスとムニスにマッカを発した敵軍の情報を集める任務を与えた。彼らはマディーナの南西にあるアキーク谷で多神教徒の軍を探り、彼らの数や状況、野営地について知らせてきた。[320]預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその後も、フバーブ・ビン・ムンズィルに敵軍の情報収集にあたり、その結果を自分にだけ伝えるように命じた。フバーブは敵軍の中に潜入し、その任務を果たした。そして預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその情報を細かく分析した。[321]

事態が切迫していたため、サアド・ビン・ウバーダ、サアド・ビン・ムアーズとウサイド・ビン・フダイルは敵軍がマディーナに接近した金曜日の夜を預言者モスクで過ごし、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の家の戸口で朝を迎えた。マディーナのあちこちで朝まで見張りが立った。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はムスリムを

集めて何をすべきかを話し合った。偽信徒たちも加わっていたこの話し合いで二つの案が検討された。それはマディーナにとどまりそこで防衛戦を行うか、町の外で敵軍を迎え撃ち広い場所で戦うか、という二案であった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は子どもや女たちを城に集め、マディーナにふみとどまり防衛戦を行うことを選択した。しかし、バドルの戦いに参加しなかった若者たちやハムザのような勇者たちは、広い場所での戦いを望んだ。[322] アナス・ビン・カターダの「殉教者になるか、戦利品と勝利を手に入れるかのどちらかだ」という言葉に対し預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「あなた方は敗北を喫するのではないかと恐れている」[323]と言い、その不安を表した。多くの教友たちの考えが広い場所で戦うことであったため、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）もマディーナの町の外で敵軍と対決することに決めた。金曜礼拝の後で説教が行われ、忍耐すれば勝利を手にすることができるだろうと語った。この決定に喜んだ者がいる一方、それが気に入らない者たちもいた。午後の礼拝の後、マディーナの郊外に住むムスリムたちが戦いの準備を整えて預言者モスクに集い始めた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・バクル、ウマルと共に家に戻り、よろいを身に付け、剣を持ち、かぶとをかぶった。そのときムスリムたちはムハンマド（彼の上に平安あれ）の家と説教壇との間で列をなし、彼が外に出るのを待っていた。その場でサアド・ビン・ムアーズたちはムスリムたちに、預言者はマディーナから出て戦うことを望んでいなかったのに彼らがそれを執ように求めたとして非難した。するとマディーナの外での戦いを望んでいた人々も、このとき準備を終えて外に出てきた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に、自分たちは彼に対立する意志はなく、望みどおりに行動してほしいと言った。それに対し預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「預言者はよろいを身に付けたならば戦わずしてそれを外すことはない。もしあなた方が耐え忍び、一人一人がその役目を果たすなら、アッラーは我々に勝利をお恵みくださるだろう」と答えた。

　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマディーナにアブドゥッラー・ビン・ウンム・マクトゥムを後任の指導者として残し約千人の兵を率いて出発した。マディーナとウフドの間の地で、偽信徒として知られていたアブドゥッ

ラー・ビン・ウバイの同盟者である六百人のユダヤ教徒に対し、自らの軍への参加を拒否した。アンサールたちの一部は、自分たちの同盟者である他のユダヤ教徒たちの助けを求めることを提案したが、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「我々は彼らの助けを必要としていない」としてそれを拒んだ。

軍がシャイハイン地区に至ったとき、少年たちはマディーナに帰す処置がとられた。帰されることになった少年たちの中には、ラーフィ・ビン・フダイジュやサミューラ・ビン・ジュンドゥブーなどがいた。ラーフィが弓の名手であることを訴えると、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼に特別の許可を与え軍にとどまらせた。またサミューラは格闘技でラーフィに勝ったことがあると預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に訴えた。[324] そこで預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らに格闘技で闘わせ、その結果、サミューラが勝ったことにより、彼にも軍と共に進む許可が与えられたのである。[325]

イスラーム軍はシャイハインで一夜を過ごした。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は軍を守るための必要な手段として、ウフドまでより近く、敵と遭遇することなく、より近い道を進むことができるように案内人を求めた。そしてアンサールの一人アブー・ハスマがその任務を請け負い、ハリサ族の土地を横切る道を通ってイスラーム軍を無事ウフドへと導いた。イスラーム軍はヒジュラ暦三年のシャウワール月の一一日、すなわち西暦六二五年一月二五日の土曜日の早朝、マディーナの北方約一時間の距離にあるウフド山に到達した。山を背にして軍はマディーナ側に向かい隊列を組んだ。そのときアブドゥッラー・ビン・ウバイは「私は戦争に反対しているわけではなくマディーナを出て戦うことに反対なのだ。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は若い連中の言うことに耳を貸して我々の意見を尊重しなかった」として、突然三百人の部下を引きつれ軍を離れた。[326] それによって軍の数は七百人に減少することとなった。それでも軍にはよろいを身に付けた兵士が百人いた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は戦闘態勢に入ることを命じ、旗をムサアブ・ビン・ウマイラに持たせた。さらに軍の前線、右翼、左翼、そして後ろにそれぞれ個別に司令官を任命した。軍に呼びかけ多神教徒軍が背後から攻めてくるのを防ぐためにアブドゥッラー・ビン・ジュバ

イルを指揮官として五十人の弓矢部隊を向かい側にあるアイナインの丘（のちに弓矢部隊の丘と呼ばれるようになった）に配置した。この部隊には、たとえイスラーム軍が優勢に立とうとも、次の命令が下されるまでは決して持ち場を離れないこと、もし敵軍が背後から攻撃を仕掛けてくれば馬を射るように命じられた。司令官アブドゥッラー・ビン・ジュバイルはその日目立つように白い服を着ていた。[327]

一方アブー・スフィヤーンはアウス族とハズラジュ族に、「私はあなた方には用はない。ここから離れなさい」という趣旨の使いを送ったが、アンサールの人々はそれを厳しくはねつけた。

バドルの戦いと同様、ウフドの戦いも一騎打ちによって始まった。クライシュ族側から進み出た旗手のタルハ・ビン・アブー・タルハをアリーが、そしてウスマーン・ビン・アブー・タルハをハムザが倒した。それから戦いが始まった。最初の段階で敵軍は二十人以上の死者を出した。旗手たちが次々に殺され、地に落ちた旗を拾う者もいなくなった。旗が落ちたことで多神教徒たちは敗走し始めた。戦陣の右翼と左翼の司令官たちは後退を迫られた。戦いはムスリム側の勝利に終わるかのように見受けられた。ムスリム

ウフドの戦い

正面前方の山に弓矢部隊が立てこもった。その後方がウフド山

たちは敵の後を追っているうちに戦いの場所から離れてしまった。そして敵軍の遺留品を集め始めた。弓矢部隊は敵が崩れイスラーム軍が優勢なのを見て、戦利品を取り損ねないようにと、司令官の制止も聞かず持ち場を離れてしまった。この二つの過ちが戦況を変えたのである。ムスリム軍を背後から攻撃する機会をうかがっていた敵軍のハーリド・ビン・ワリードは弓矢部隊の数が減ったのを見て行動に移った。持ち場を離れずにいたアブドゥッラー・ビン・ジュバイルと十人の仲間は敵と戦い殉教した。そしてハーリド・ビン・ワリードは、山の東側からイスラーム軍の背後に回り、戦利品を回収していたムスリム軍に奇襲を仕掛けたのである。

これを見たクライシュ族は敗走を止め元の場所へと戻り、ムスリム軍に逆襲した。ムスリム軍は両側から挟み撃ちにされたのである。兵士たちはパニックに陥り戦列が崩れた。一部の兵士はすでに武器を手離そうとしていたが、再度武器を手にし戦い始めたのであった。

ハムザを殺害する機会をうかがっていたワフシー・ビン・ハルブは、そのとき、やっとそれをかなえたのである。

多神教徒軍の四人の兵士が、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に向かって攻撃を仕掛けようとしていた。イブン・カ

ミアはムハンマド（彼の上に平安あれ）のすぐ近くにまで接近し、剣でムハンマド（彼の上に平安あれ）の顔に切りかかった。その一撃はムハンマド（彼の上に平安あれ）のかぶとを割り、そのかけらが頬にささった。ウトゥバ・ビン・ワッカスの投げた石によってムハンマド（彼の上に平安あれ）の下唇には裂傷が生じ歯が折れた。アブドゥッラー・ビン・シハーブはムハンマド（彼の上に平安あれ）の額を傷つけた。ウバイ・ビン・ハラフはムハンマド（彼の上に平安あれ）を倒そうとしていたが、逆にムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼に槍を投げつけ落馬させた。ウバイ・ビン・ハラフはこのときの傷が原因となりマッカからの帰途死亡した。ウバイは以前、バドルの戦いで捕虜になった息子の身代金を支払うためマディーナに来たとき、来るべき戦いのために一頭の馬を育てており、それに乗って彼を殺すつもりであると告げた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそう言い放つ彼に対し、逆に自分が馬上の彼を殺すことになるだろうと応じたことがあり、実際にそうなったのである。

　戦いの前に多神教徒軍のアブー・アーミルは落とし穴を仕掛けていた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の馬がその穴にはまり込み、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はひざを傷つけた。こうした敵軍の策略に対しムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「預言者に対してこのようなことを行う部族に、いかにして安楽が与えられようか。私はあなたたちをアッラーへと導いているのだ」と嘆いた。[328] アブー・バクルやウマル、アリーなどの教友たちは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の周囲を取り囲み彼を守った。アブー・ドゥジャーナは自らの体を盾にして彼を守った。敵の振りおろした剣からムハンマド（彼の上に平安あれ）を守ったタルハー・ビン・ウバイドゥッラーは腕を失った。そのときイブン・カミアの手によってムサアブ・ビン・ウマイルが殉教を遂げた。イブン・カミアはムサアブをムハンマド（彼の上に平安あれ）だとかん違いし、ついに彼を殺したのだと思い込んだ。[329]

　だがその後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の元気な姿を見かけたカアブ・ビン・マーリクは、「信仰する人々よ、よい知らせだ。預言者はここにおられる」とその場にいたムスリムたちに大声で知らせた。旗手であったムサアブが殉教したため、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアリーに旗を持たせた。[330] ファーティマやアーイシャなど

十四人のムスリムの女性たちは、戦場に食べ物や飲み物を運び、怪我をした兵士の手当てをした。ファーティマは父ムハンマド（彼の上に平安あれ）の顔の血をぬぐい取った。それでも血が止まらないのを見て、藁を焼き、その灰で傷口を押さえ流れ出る血を止めたのであった。[331]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は負傷していたため昼の礼拝を座ったまま行った。ムスリムたちもそれに習い後ろで座ったまま礼拝を行った。[332]

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は身近にいた教友たちとウフド山に難を逃れた。敵軍の将アブー・スフィヤーンは戦場を後にする前にムハンマド（彼の上に平安あれ）が生きているかどうかを確認しようと、ムスリムたちに向かって「ムハンマド（彼の上に平安あれ）はいるか」と三度大声で訊ねた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は答えることはないと言った。アブー・スフィヤーンは続けて、「アブー・バクルはいるか、ウマルはいるか」と三度訊ねた。返事がなかったので、「生きていれば彼らは答えたはずだ。つまり三人とも死んだのだろう。これですべてかたがついた」と叫んだ。ウマルはそれに耐えられず、「それは違う、アッラーの敵よ。三人とも生きている。あなたを倒すためにアッラーはその三人を生かしておられるのだ」と答えた。アブー・スフィヤーンは「今日の戦いはバドルの報いだ」と言った。ウマルはそれに対し、「だが我々は同じではない。我々の死者は天国に行くが、あなた方の死者は地獄に行くのだ」と言い返した。アブー・スフィヤーンは彼らの偶像を崇拝し始めたところ、ウマルは「アッラーは何よりも尊く崇高なるお方だ」と告げた。

アブー・スフィヤーンは「来年、またバドルで会い、戦おう」と言った。ウマルは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の許しを得て、「アッラーがお望みなら」と答えた。アブー・スフィヤーンはそうしたやりとりの後、仲間のもとへと戻っていった。クライシュ族の軍はやがてウフドを離れ、マディーナを攻撃することなくマッカへと引きあげ始めた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らがマディーナを侵攻しないかどうか確認するため、サアド・ビン・アブー・ワッカスに追跡の任務を与えた。[333]

多神教徒たちによってハンザラを除くすべての殉教者の遺体が損傷を受けていた。ハンザラは父親が多神教徒たちを支援しており、そのために死体の損傷をまぬがれたのである。[334] ワフシーはハムザの内臓を取り出しそれをヒンド・ビント・ウトゥバへ届けた。戦いの前に誓ったように、ヒンドは父の敵であるハムザの肝臓の一部を口に入れ噛みくだき、そして吐き出した。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は叔父ハムザの遺体が切り裂かれ、肝臓が取り出されひどい損傷を受け、鼻や耳も切り取られているのを見て途方もない悲しみに襲われた。そして、次に多神教徒たちに勝利したときは、我々は彼らの中の三十人に同様のことをするだろうと言った。[335] だがのちに啓示されたクルアーンの言葉によってそのような報復は禁じられた。[336] ムハンマド（彼の上に平安あれ）も報復よりも許すことを選択し、実際にそのような報復が行われることはなかったのである。

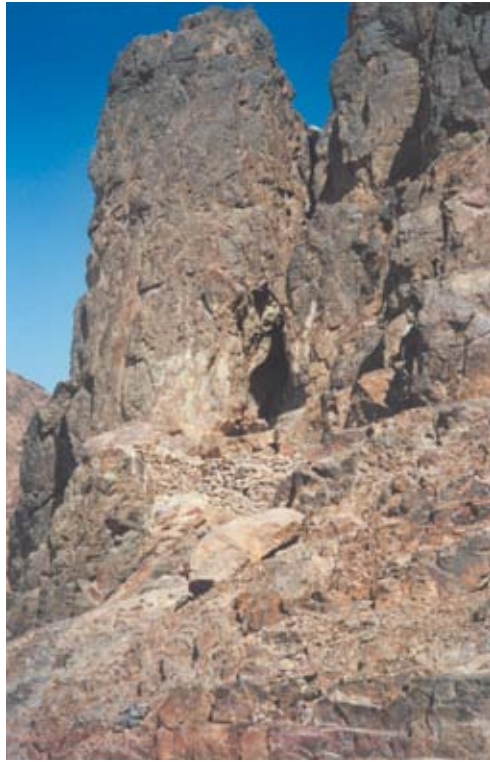
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の叔母サフィーヤは弟のハムザが殉教したことを知り戦場にやってきた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はサフィーヤの息子ズバイル・ビン・アッワムに、残虐な仕打ちを受けたハムザの無残な姿を母親に見せないように、彼女を弟ハムザの遺体に近づけないようにと命じた。ズバイルは母に、「預言者はあなたに戻るようにとおっしゃっています」と伝えた。それに対しサフィーヤは、弟にひどいことが行われたことを耳にしているが、それはアッラーの道において努力した者にとってささいなことであり、耐え忍ぶ用意があると語った。ズバイルがそのサフィーヤの言葉を伝えるとムハンマド（彼の上に平安あれ）は、彼女の望むとおりにさせるようにと命じた。サフィーヤは弟のなきがらを見て、アッラーにドゥアーを捧げた。[337]

このようにウフドの戦いの当初はムスリムが優勢であった。だが次の段階では戦利品に目がくらんだ一部のムスリムたちが失態を演じたため、最後の段階では何人かのムスリムが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を守り勇敢な働きを示したものの防戦一方となった。

ウフドの戦いの結果をムスリムたちの敗北と見なすべきではない。確かにムスリムたちは傷つき七十人もの殉教者

を出した。しかし彼らは敵に降伏したわけではなかった。戦いによって土地を失ってもいない。そして何よりも重要なことは、多神教徒軍はムスリムを捕虜にすることも、戦利品を手にすることもできず、またマディーナを攻撃することもできなかったのである。この戦いによって彼らは二十二人の死者を出している。

ウフドの戦いについてはクルアーンに様々な記述があり、多神教徒たちが戦いのために用意したものについても言及されている。多神教徒たちは人々をアッラーの道から遠ざけるために財産を費やしていること、今後も費やすであろうこと、[338]預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は信徒たちを戦場に配置するため早い時期に家族のもとを離れさせたこと、[339]彼らの守護者がアッラーであるにもかかわらず二つの支族（サラマ族とレニー・ハーリサ族）が恐れをなして離反していったこと、多くのムスリムたちが負傷したこと、[340]しかし多神教徒たちも同様に傷を負ったこと、[341]ムハンマド（彼の上に平安あれ）の呼びかけにもかかわらず逃亡した信徒がいたこと、[342]悲しみののちにある種の連帯感が生じたこと、[343]両軍が衝突した日、シャイターン（悪魔）が逃亡した者をアッラーの道から遠ざけようとしたこと、しかしアッラーは彼らを許されたことなどが語られている。[344]ムスリムは、他の人々がその二倍の災いを与えられているのに、自分たちに災いがもたらされると「これはどこから来たのか」と言い、それに対しムハンマド（彼の上に平安

ウフド山とウフドの戦いが行われた場所

ウフド山で預言者ムハンマドと教友たちが身を隠した場所

あれ）が「これはあなた方自身から来たものだ」と答えるようにアッラーから求められていることも明らかにされている。[345] また戦場では預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生死にかかわらず、ムスリムは戦列を離れることなく自分の持ち場を固守すべきであることが述べられている。[346] それはムハンマド（彼の上に平安あれ）が亡くなったという偽りの知らせに動揺したムスリムたちへの警告である。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は限りのある存在であり、イスラームは無限の存在である。だからムスリムはたとえムハンマド（彼の上に平安あれ）が亡くなったとしても、冷静にその事実を受け入れなければならないといったことが語られている。

クルアーンの別の章句では、両軍が衝突した日にムスリムたちの身に起こったことはアッラーの許しによってのものであり、信徒と偽信徒を区別するために起こったということ[347]が明らかにされている。ウフドの戦いについては他の章でも触れられている。[348]

ウフドの戦いののち一部の偽信徒とユダヤ教徒たちは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やムスリムたちについてあちこちで悪口を言うようになった。ウマルはそうした偽信徒やユダヤ教徒の口を封じるため預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に許しを求めた。それに対しムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「ユダヤ教徒たちは我々と

兄弟の関係にある宗教の信徒であり、彼らを殺すことはできない。偽信徒たちについても、私は『アッラーのほかに神はなくムハンマド（彼の上に平安あれ）はその使者である』と告白する人間を殺すことはできない」と語っている。[349]

ウフドの戦いから学ぶべき教訓については次のようにまとめることができるだろう。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はいつもそうであったように、この戦いにおいても教友たちと相談して決断を下すことに重きを置いていた。弓矢部隊の兵士たちが合議のうえ下された命令に背いたことが、人命の損失につながったのである。すなわち、戦いにおいては勝利は司令官の命令に従うことによってのみ手にすることができるのである。戦利品を手にしたいという我欲に突き動かされてはならず、何よりアッラーのご満悦を得ること、そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）の命令に従うことが優先されるべきである。ウフドの戦いではそれが守られなかったことが敗北の原因となったのである。戦いののちムハンマド（彼の上に平安あれ）は毎年ウフドの殉教者たちの墓を訪れた。その後のカリフたち、すなわちアブー・バクルやウマル、そしてウスマーンもそれに習った。[350]

f　ウフドと塹壕の戦いの間の時期の多神教徒との関係

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はウフドの殉教者たちを血がついた衣服のままの状態でその地に埋葬しマディーナへと帰還した。ムスリムたちはそれぞれの家で手当てを受けた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその翌日の明け方、クライシュ軍がマディーナを攻撃しようとしているとの知らせを受けた。敵の攻撃を防ぎ、同時にムスリム軍が弱体化していないことを示すためにクライシュ軍を追跡することにした。ほんの一日前までウフドにいた人々も参加し五百人規模の軍が編成され、マディーナから八キロの距離にあるハムラー・アル＝アサドまで進み、そこで五日間野営した。この遠征は「ハムラー・アル＝アサドの遠征」として知られる。追跡されていることを知った多神教徒たちの軍は、マディーナへ進むことを断念しマッカへと向かった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその地で

ムスリム軍の数を多く見せ、敵を怖がらせるために夜になるとたいまつを焚いた。五百個ものたいまつの炎ははるか遠方からも見えるほどであった。まだイスラームを受け入れていなかったマバド・アル＝フザイはハムラー・アル＝アサドの地へ来て、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）にウフドの戦いでムスリムたちの身に起こった災厄について悔やみを述べた。マバドの一族であるフザーアは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の同盟者であり、周囲で起こっていることを彼に告げていた。そしてマバド・アル＝フザイはムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを離れるとマッカへと出発し、マディーナから七十四キロのところにあるラウハーでクライシュ族の軍に追いついた。まさにそのときクライシュ族は、マディーナに戻り生き残ったムスリムを殺害することを検討していた。マバドはウフドの戦いに参加しなかったムスリムが加わった大規模なイスラーム軍が彼らを追跡しており、クライシュ族にとってマディーナに戻ることは危険であるとアブー・スフィヤーンに忠告した。その助言に危機感をつのらせたアブー・スフィヤーンはただちに軍にマッカへと向かうように命じた。マバドはこの出来事をムハンマド（彼の上に平安あれ）に伝えた。多神教徒の軍はマッカへの帰途、マディーナ方面に向かう小さなキャラバンと出会った。アブー・スフィヤーンはムハンマド（彼の上に平安あれ）への威嚇として、このキャラバンを通し、マディーナに戻り生き残ったムスリムを殺害するつもりであると告げた。それを耳にしたムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「私たちにはアッラーがいらっしゃるだけで十分である。そのお方はなんと素晴らしい代理者であることか」

ビッイル・マウーナとラジー事件

と語った。ムスリムはハムラー・アル＝アサドに五日間滞在したのち、ヒジュラ暦一七年シャウワール月の三日（西暦六二五年四月二日）にマディーナへ帰還した。[351]

ここで、クライシュ族以外のアラブの多神教徒たちとムスリムたちとの間に起こった出来事をいくつか紹介したい。マディーナからフラートまでの広い地域に住んでいたアサド族は、ウフドの戦いののちムスリムたちが弱体化したと考え、マディーナへ奇襲攻撃を加えることにした。彼らをそそのかした者の中には自らを預言者だと宣言したトゥライハ・ビン・フワイリドもいた。このことを知った預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ウフドの戦いのおよそ三ヵ月後のムハッラム月に、アブー・サラマを司令官として百五十人規模の軍をアサド族のもとへと派遣した。イスラーム軍はアサド族の水源のあるカタンまで進み、彼らにトゥライハの部下たちを呼び集める暇も与えることなく鎮圧した。[352]

ウフドの戦いの四ヵ月後、サファル月の第四日、西暦六二五年七月四日にムスリムたちを悲しませるある事件が起こった。アミル・ビン・ササア族の長アブー・バラーはマディーナを訪れ預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）にいくつかの贈り物をした。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「私は多神教徒からの贈り物は受け取ることができない」とこれを拒んだ。その後ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・バラーをイスラームへと招いた。彼はその招きを受け入れなかったが、かたくなに拒否することもなかった。そして、彼の一族にイスラームのことを説くことができる人間を派遣してくれるように依頼した。預言者は派遣する布教者の身に危険が生じるのではないかとの危惧を抱いていると告げた。だがアブー・バラーがその安全を保障したため、スッファの民の中からイスラームとクルアーンを教える七十人の一団が役目を担って派遣された。彼らはビッイル・マウーナと呼ばれる井戸の近くで野営し、その中の一人が使者として一族の長にムハンマド（彼の上に平安あれ）の手紙を届けた。使者はそのときアブー・バラーが亡くなったことを知らされ、アブー・バラーの甥であるアーミル・ビン・トゥファイルに手紙を渡した。そして人々をイスラームへと招いた。しかしかねてからイスラームの教えに反発していたアーミル・ビン・トゥファイ

ルは手紙を読むこともなくその場で使者を殺害した。そしてビッイル・マウーナに滞在しているイスラームの布教者たちを襲うために人々を集め始めた。しかしアブー・バラーが彼らの安全を護ると宣言していたため、その呼びかけに応じる人間はいなかった。そこでアーミル・ビン・トゥファイルは、別の部族から集めた兵と共にイスラームの布教者たちを襲い、アムル・ビン・ウマイヤとカアブ・ビン・ザイドを除く全員を殺害したのである。

　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの事件の知らせを受けたいへん悲しんだ。彼らはただイスラームを説くためだけに派遣されたのであり、また無防備であり、かつ生命の安全が保障されているはずであったからである。慈悲深いムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれまで自身や教友たちに対して行われた不正のために呪いの祈りをすることはなかった。しかしこのときは、朝の礼拝のときに布教者たちを殺害した一族に対し呪いの祈りを行ったのである。[○353]

　また同じ年のサファル月にこの事件と相前後して、ラジー事件が発生している。アダル、カーラの両部族からなる一団がマディーナを訪れ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に自分たちの一族のためにイスラームを説く一団を派遣してほしい

ラジー事件が起きた場所

と要請した。それに応じてムハンマド（彼の上に平安あれ）が派遣した十人ほどの一団が、マッカとウスファーンの中間地点のフザイル族の土地ラジーに至ったとき、フザイル族のリヒヤーン家に属する百人ほどの武装兵が現われた。そして、布教の一団を捕虜としマッカに連れていき売り飛ばすと告げたのである。一団はそれに激しく抵抗したが、数人を除いた全員が多神教徒との小競り合いのすえ殉教した。リヒヤーン家の者たちは殉教を免れた三人の手を縛りマッカへ連行しようとした。その中の一人はそれに耐え切れず縄を解いて抵抗し殉教した。その人、アブドゥッラー・ビン・タールクの墓はザフランにある。リヒヤーン家の者たちは残った二人フバイブとザイドをマッカまで連れて行き、バドルの戦いで近親者が殺害されその報復を望む人々に売ってしまった。人々はしばらく彼らを監禁したのち町外れで絞首刑にしたのであった。ザイドがまさに絞首刑にされようとしたときアブー・スフィヤーンとの間で交わした言葉は、教友たちの預言者との結びつきを示す代表的な例である。

アブー・スフィヤーンがザイドに尋ねた。「ザイドよ、もしムハンマド（彼の上に平安あれ）がここにいれば、お前は自分の命が助かれば代わりに彼の首が討たれてもいいと思っているのではないか。お前も生きて家族のそばにいたいのではないか」ザイドは答えた。「アッラーに誓って言うが、あのお方にとげが刺さることすら私は望まない」こうしたザイドの振舞いについてアブー・スフィヤーンは次のように述べている。「ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教友が彼を愛するほどに、人が人を愛するのを見たことがない」

フバイブはもしイスラームを捨てるなら釈放すると告げられたが、それを拒み、死ぬ前に二ラカートの礼拝を捧げてもいいかと尋ね、短く礼拝を行った。彼らがフバイブは死ぬことを恐れ、刑の執行を遅らせようとしているのだと思わないように、礼拝を長々と行わなかったのだとフバイブは語った。フバイブは死を前にして、ムスリムとして死ねるのならどのような死に方でも悔いは残らないと胸のうちを詩に読んだ。彼らはフバイブを木に縛りつけ、バドルの戦いで死んだ人々の子供を連れてきて、彼らに槍を持たせフバイブを処刑させた。[354]

約束を守ること、託されたものを守ることはイスラーム以前の時代においてすら、アラブ世界において最も価値あ

を守らず、イスラームの布教者たちを最も卑怯な方法で殉教させたのである。

ることとされていた。しかしアーミル族もリヒヤーン家の人々も、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）との約束

g 塹壕の戦い（ヒジュラ暦五年・西暦六二七年）

マディーナの周囲に町を守るために塹壕が掘り巡らされていたことから、この戦いを塹壕の戦いと呼ぶ。また様々な集団が連合してムスリムを攻撃したことから、部族連合の戦いと呼ばれることもある。クルアーンにはこの部族連合の名を冠した一章があり、その戦いについて述べている。

バドルの戦いとこの塹壕の戦いとの間の三年間で、イスラーム教徒とユダヤ教徒の関係には若干の変化が生じていた。塹壕の戦いがなぜ起こったか、その原因を探るためにも、その変化について簡単に触れておきたい。

ユダヤ教徒のカイヌカー族とナディール族は、ヒジュラ後に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）との間で締結した条約を破るようになっていた。マッカの多神教徒たちと手を組み、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の殺害をそそのかすまでになっていたのである。そのためまずカイヌカー族が、次にナディール族がマディーナから追放され、彼らの一部はハイバルに逃れた。塹壕の戦いが起こったときマディーナにいたのはクライザ族だけであった。

ハイバルに移住したユダヤ教徒たちやイスラームと対立していた人々、さらにキリスト教徒のアブー・アーミルなどの二十人近い人々はマッカへ行き、クライシュ族の多神教徒たちにムスリムとの戦争を勧めた。アブー・スフィヤーンは彼らのこの申し出をたいへん喜んだ。この一団はクライシュ族の他、偶像を崇拝するアラブのガタファーン、スレイム、アサッド、ファザンラ、ムッラ、アスチャーなどの諸部族を鼓舞し立ち上がらせた。たとえばガタファーン族には、ハイバルのナツメヤシを一年間収穫する権利を与えた。ガタファーン族はそもそも、ユダヤ教徒であろうと多神教徒であろうと、さらにはイスラーム教徒であろうと、利益があがりさえすれば誰とでも同盟を結んだ。このとき彼らは多神教徒たちと同盟を結ぶことに利ありと判断したのである。マッカ周辺のサキーフとキナーナ族もそこに

加わった。こうしてユダヤ教徒とクライシュ族や他の偶像を崇拝するアラブの諸部族は、ムスリムに対立する形で結びついていったのである。結果としてマッカとその周辺から四千の兵力が集まった。マッカから出発した四千人の軍に、周囲から様々な部族が加わり、マディーナに着いたときには、その数は一万人に膨れ上がっていた。

一方、多神教徒たちがマディーナに向かっているという知らせは、フザーア族の使者が通常十日かかる道を四日で駈けぬけ、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとに届けられた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマディーナで防衛戦を行うべきか、町の外で敵を迎え撃つべきか、教友たちに意見を求めた。その結果、マディーナにとどまり防衛戦を行うこと、そして攻撃が予想される場所に塹壕を掘るという案が採用された。[355] マディーナの岩や樹木に覆われた山はそもそも敵の侵入を阻む要害であり、その間を走る道も細かった。

塹壕の戦いで陣地に張られたトルコ式天幕

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は教友たちと共に塹壕を掘るべき場所を検討した。そして、クライザ族のユダヤ教徒たちから塹壕を掘る道具を借り、三千人のムスリムが塹壕を掘る任務に当たった。十人ごとに四十平方ジラー（一ジラーは約五十二センチ）が割り当てられ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその作業を監督すると同時に、自らもその背に土をかつぎ運んだ。塹壕はその中に落ちた人が出て来られない深さに掘られ、騎兵が飛び越せない幅を持たせた。塹壕は約五千五百メートルの長さ、九メートルの幅、そして四.五メートルの深さを持っていたと推定される。[356] ムスリムたちは塹壕が敵によって埋め立てられることを防ぎ、またそこから出た土を防御壁として使うため、土を自分たちの側に積み上げた。さらに敵軍に投げつけるための石も積んでいた。[357] 塹壕掘りが完了すると、マディーナはあたかも一つの城塞のようであった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラーム軍の陣地としてサル山のふもとを選

んだ。そしてその中央にトルコ式天幕を張った。[358]
敵の軍が南から、そして北からマディーナに到達したときには塹壕はすでに完成していた。[359] 敵軍はそのような防御方法に慣れておらず、塹壕を前にして戸惑いを見せた。そのような戦いにふさわしい武器も携えていなかった。多神教徒の軍はマディーナ周辺に三つの本陣を設けた。軍の総司令官はアブー・スフィヤーンであった。塹壕ができる一ヵ月前に収穫物の取り入れが終っていたため、敵の軍は連れてきた動物の食べ物に苦労し、軍に携えてきた食料を使わねばならなくなった。[360]
選抜された三千人のムスリムの歩兵と三十五人の騎兵が塹壕を守るためにその周囲を巡回した。塹壕を掘るだけでは十分ではなく、それを守ることも重要であった。歩兵や騎兵がその仕事を分担した。敵の軍は塹壕沿いに馬を走らせ、弱い箇所を探し始めた。彼らが塹壕を越え始めるとイスラーム軍から矢の攻撃が加えられた。敵軍の攻勢を受けムスリム側は防御に忙殺され、しだいに疲労の色を濃くしていった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）も朝や昼や日没の礼拝を時間通りに行えなくなっていた。[361] 何人もの敵の騎兵が塹壕を飛び越えようとしたが成功せず穴に落ち殺害された。敵の軍は司令官の一人であるナウファル・ビン・アブドゥッラーの死体を受け取るために一万ディルヘムの支払いを申し出た。アブー・スフィヤーンはそのために百頭のラクダを送ったとも伝えられている。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）は何も受け取ることなくナウファルの遺体を引き取らせた。[362]
多神教徒の軍では包囲が長びくにつれ兵士や動物たちの食料が底をつき始めた。彼らはハイバルから食糧の援助を受けていた。だが一度ナディィール族が送った二十頭のラクダに背負わせた小麦やナツメヤシがムスリム側の手に渡ったことがあった。
多神教徒たちを束ね一万の軍を動員していたナディィール族のフヤイ・ビン・アフタブは、自軍の兵士たちが塹壕を越えることに手を焼いているのを見て、マディーナの南東に住むユダヤ教徒のクライザ族の長カーブ・ビン・アサドを訪ね、彼らもまた同盟に加わり、ムスリムたちを背後から襲うことに同意させようとした。フヤイはアブー・スフィ

イスラーム軍が陣地を設けた場所

ヤーンによって遣わされたとする説もある。[363]

カーブ・ビン・アサドは当初色よい返事をしなかった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と同盟の条約を結んでおり、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の正直さと忠誠心を思うと彼を裏切ることはできない、とフヤイの要請を一旦断った。しかしフヤイは執拗にアサドに迫り、ついにアサドも同意せざるを得なかったのである。フヤイはアサドにムハンマド（彼の上に平安あれ）との間で交わした同盟の証書を持ってこさせ、それを破り捨て、アサドはもはや後戻りできないようにしたのである。[364]

このクライザ族の裏切りは、新たな敵に対峙することとなりムスリム軍を苦境に陥れた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がアブー・バクルと天幕の中にいたときウマルがやってきてクライザ族の条約破棄を伝えた。それに対しムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「我々にはアッラーが共にいる。何と力強い守護者であろうか」と述べ、対抗手段を講じるべく行動に移ったのであった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はズバイル・ビン・アッワムを派遣しクライザ族の動向を監視した。そこで彼はクライザ族が戦争の準備を行っているところを目撃し、その

後状況をさらに詳しく知るために派遣された一行は、クライザ族に再度条約を締結するように求めた。ユダヤ教徒たちはそれを認めるどころか彼らを侮辱さえした。両者の間で激しい口論が繰り広げられた。そのような状況では良い結果を得ることは不可能であるとして、ムスリムの使者たちは失意のうちにマディーナに戻りそのことをムハンマド（彼の上に平安あれ）に報告した。[365] 悪化する戦況はムスリムたちを不安と恐怖に落とし入れた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は女たちや子供たちを城壁や強固な建物に避難させた。

同時に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、多神教徒側の足並みを乱すためにガタファーン同盟の司令官の中のウヤイナ・ビン・フスンとハーリス・ビン・アウフに、この包囲を放棄すればマディーナの収穫物の三分の一を譲渡すると提案した。[366] ガタファーン側はそれを不服とし、収穫物の半分を要求した。そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）はアンサールのサアド・ビン・ムアーズとサアド・ビン・ウバーダにそのことについて意見を求めた。二人の教友はガタファーンの人々はイスラーム以前の時代、客へのもてなしや商売のとき以外には我々の果樹園からナツメヤシ一つすら取る勇気がなかったと指摘した後、「アッラーが我々にイスラームによって名誉を与えられ、正しい道に導かれ、あなたによって誇りを得た今になって彼らに財産を与える必要があるでしょうか」と話し、そのような契約はすべきではないと語った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らの意見に同意し、交渉を切り上げた。[367]

この時期、戦況を左右する、ムスリム側にとって重要な転機となることが起こった。敵側に属していたアシュジャ族の長ヌアイム・ビン・メスードがイスラームを受け入れ、極秘で預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れたのである。そして、自分がイスラームに入信したこと、多神教徒たちはまだその事実を知らないこと、ムスリム側を支援する用意があることを伝えてきた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヌアイムに、「戦争とは計略である」との原則にもとづき策略をめぐらすことよって戦況を動かし、そうしてムスリムたちを助けることができることを示した。彼は行動を起こしユダヤ教徒と多神教徒との間の同盟関係に亀裂を入れることに成功した。それは次のように行われた。

まずヌアイムはクライザ族のもとを訪れ、彼らの立場が他の包囲している部族たちとは異なっていること、すなわちここが彼ら自身の土地であり、クライシュ族やガタファーン族はそのうち自分たちの土地に戻るであろうということ、そのときには彼らはムスリムたちの近くで孤立し、そのような事態においては彼らはムスリム軍に対抗するほどの力はないということを指摘した。また多神教徒たちから人質を取ることも勧めた。ユダヤ教徒たちはそうした彼の見解を正しいものと見なした。

それからヌアイムはクライシュ族の多神教徒たちを訪れ、アブー・スフィヤーンと周囲の人々にクライザ族が預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）との条約を破棄したことを後悔し、クライシュ族とガタファーン族から人質を求め、それをムスリム側に引き渡そうと考えていると伝えた。そして人質を要求された場合、それを拒むように促した。その直後、クライザ族が人質を要求してきたことから、多神教徒たちはヌアイムの言うことを事実と認めた。そこでユダヤ教徒たちに使いを送り、自分たちは人質を差し出すつもりはまったくないと拒否した。そして、もし戦う気があるのなら共に出陣して戦うように求めたが、クライザ族側は人質を取ることなくして共に戦うことはできないとはねつけた。ヌアイムのこの一連の工作は彼らの間の信頼関係を損ねたのである。彼らは互いに相手を裏切り者と非難し合った。このようにしてユダヤ教徒と多神教徒との間の同盟は破棄されたのである。[368]

このとき、ズ・アル＝カアダ月が始まろうとしていた。マッカ周辺には市が開かれ巡礼の季節が巡ってきていた。同時に戦いが禁じられているハラームの月が始まっていた。そこでクライシュ族たちはマッカに戻ることを決断した。その矢先、嵐が起こり、敵軍の天幕は吹き飛ばされ、焚いていた火は消え、馬たちは驚いて暴れ始めた。その様子をクルアーンは次のように描写している。

「信仰する者よ、あなたがたに与えられたアッラーの恩恵をおもえ。大軍があなたがたに攻め寄せて来た時、われはかれらに対し大風と、目に見えぬ軍勢を遣わした。アッラーは、あなたがたの行うことを（明確に）御存知であられる」[369]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は夜半、フザイファ・ビン・ヤマーンに多神教徒の軍の陣地の様子を探って来るように命じた。フザイファは勇敢にも彼らの陣地に潜入し、大風が彼らの装備をバラバラにしていること、アブー・スフィヤーンが包囲網を解く決断を下したこと、そしてあわてふためきラクダの足を縛っていたひもを解くことなく乗ったことから、彼らの陣地からの撤退が見せかけのものではないことなどを確認し、ムスリム側の陣地に戻りそのことをムハンマド（彼の上に平安あれ）に報告した。多神教徒の軍が包囲網を解いたことで、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はムスリムたちに家に帰る許可を与えた。

クルアーンの部族連合章第九節から第二七節までの部分は塹壕の戦いにちなんで下されたものである。アッラーはこの件に関する最初の章句で、信者たちに与えた恵みを思い起こすようにと伝え、敵軍が攻撃してきたとき、それに対しアッラーが風や姿なき軍を送り、多神教徒の軍がマディーナのあちこちから入ってきたとき、信者たちは動揺し試されていたと述べている[370]。それに続く部分では、この戦いにおける偽信徒たちの心理と行動について言及している。「その時、偽信徒や心に病の宿っている者たちは、『アッラーとその使徒は、ただ欺いてわたしたちに約束したのです。』と言った。またかれらの一団は言った。『ヤスリブ（アル＝マディーナ）の民よ。あなたがたにはとても頑張れるものではない。引き返しなさい。』またかれらのある者は、預言者に（帰還の）許しを願って、『本当にわたしたちの家は（無防備で危険に）さらされています。』と言った。かれらは、さらされているのではない、ただ逃亡を望んだだけである」[371]

その後の章句では、多神教徒たちや彼らを支援していたユダヤ教徒たちの状況を描写している。そして最後に、「アッラーは不信心な者たちを、怒りのうちに（アル＝マディーナから）何ら益するところなく撤退なされた。戦いには、アッラーは、信徒たちの戦闘を（強風や天使によって）すべてにわたって、守って下さる。アッラーは強大にして偉力ならびなき方であられる。またかれは、かれら（連合軍）を後援した啓典の民を、それらの砦から追い、その心中に恐怖を投じられた。あなたがたは或る者を殺し、また或る者を捕虜とした」としている。[372]

クライシュ軍
ウフド山
ガタファン軍
ジュルフ
カナート谷
キナーナ、スレイム、
アサド、ファザーラ、アシュジア、ムッラ軍
ハリーサ族
アブドゥ・アル＝アシュハル族
塹壕
ナビト族
塹壕
シャイハイン城
ザファール族
ハーリス族
ムスリムたちの
野営地
ナッジャール族
サル山
ズレイカ族
ワークフ族
ハーリス族
カイヌカー族
サーイダ族
ベヤーザ族
ハブラー族
クライザ族
ジャフジャバー族
ナディール族
ラーヌーナ谷
アフブ族
カアブ・ビン・アシュラフ城
ダヒヤン城
アフブ・ビン・マーリク族
アイル山
ウナイファ族
シュネーフ城
塹壕の戦い

ヒジュラ暦五年のシャウワール月七日、西暦六二七年一月に始まった塹壕の戦いの包囲は二十三日間続いた。この戦いは部族連合軍の敗北によって終りを告げた。[373] クライシュ族が預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を抹殺しようとして起こした最後の試みも不成功に終ったのである。この戦いでは六人のムスリムが殉教し、多神教徒側には三人の死者がでている。[374] 塹壕の戦いはマッカの多神教徒との戦いにおいて重要な位置を占めるものである。結果として、多神教徒たちはその後二度とムスリムと戦いを行っていない。クライザ族のユダヤ教徒が、この戦争犯罪のため塹壕の戦いの後で罰せられたということについては、ユダヤ教徒との関係についてのところで触れたい。

塹壕の戦いにおける預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の行動で注目されるべき点は以下のようにまとめることができるだろう。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は敵が戦いを準備しているという情報を得るやいなや、すぐさまそのための手段を講じ準備を始めている。短期間のうちに注意深く進められた計画を何事にも屈することなく強い決意で実行している。塹壕を掘るという計画を立て、実際に掘り、そしてつくりあげた塹壕の守備も徹底した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそういった一連の行動の中で、どのような些細なことも見逃さず細心の注意を怠ることはなかった。ムスリムたちにとって大きな脅威となり得る局面においても、彼らが動揺しないように冷静に対処したのである。また敵軍の一翼を崩すためには、マディーナの収穫物の一部を与えるという損失を出すことも辞さなかった。だがその計画は教友たちとの協議の結果、断念している。さらに、必要に応じて雌雄を決する挙に出ず膠着状態を維持するといったこともしている。結果として大きな危機を双方とも最小限の犠牲を払うだけで回避している。もっとも多神教徒軍はムスリム軍の三倍の人間を動員し、ムスリムたちを滅ぼす目的でやってきていたのである。

この戦いののちにアームル・ビン・アス、ハーリド・ビン・ワリード、ドラール・ビン・ハッタータブなど多神教徒側の多くの人々がイスラームに入信している。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は塹壕堀りやその守備において、ムスリムたちの間で一切の区別を行わず平等という原則を貫き通した。そしていつものように、この戦いの最初から最後まで周囲の人々の意見を聞き相談したことも重要な意味を持っていた。情報を収集し敵軍のことを知ること

にも細心の注意を払い、その役割に適した人物をその任務につかせた。先に述べたようにユダヤ教徒の長であったカーブ・ビン・アサドは、条約を破棄するように求めたフヤイ・ビン・アフタープに対し、「彼は約束を大切にする、正義を尊ぶ良き隣人である」と答えている。それはムハンマド（彼の上に平安あれ）の人柄が敵の間でさえもよく知られていたことを示す好例である。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は包囲されている間に起きた困難な事態に直面しても、ムスリムたちの志気が落ちないように気を配り、逆に志気を高め力を発揮させるように努力を払っていたのである。

h　塹壕の戦いからフダイビーヤ和平条約までの間の時期の多神教徒との関係

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は塹壕の戦いで多神教徒側についた部族に対し少数の騎兵を送った。アサド族にはウッカーシャ・ビン・ミフサンを四十人の兵士と共に彼らの居住地ガムラに派遣した。それにちなみこの遠征はガムラの遠征と呼ばれる。アサド族はムスリムたちが攻撃して来ることを知り、その地を放棄[375]して逃亡した。ウッカーシャは逃亡した者を追わず、ムスリム側は一切の損失を出すことなくマディーナに戻った。同様に塹壕の戦いに加わっていたスライム族にも、ザイド・ビン・ハーリサが率いる一団を派遣した[376]。

またこの時期、かつてラジーでイスラームの布教者たちを待ち伏せし八人を殺害、捕虜となった二人をマッカの多神教徒たちに処刑させるために売ったアダル族とカーラ族に攻撃を加えて罰し、同時にマッカの多神教徒に脅威を与えることを目的に、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）も加わった遠征が準備された。この遠征ではマディーナ出発後、真の目的を隠すためにまずシリアに向かうかのように見せかけ、その後本来の目的地へと方向を変え、ウスファーンに到達した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が来ることを知ったリヒヤーン家の人々は逃亡した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はウスファーンからアブー・バクルたち十七人をマッカまで六十キロの地点まで派遣したが、彼らはそこに何ら脅威となるようなものは見出さず戻ってきた。この遠征はベニー・リヒヤーンの遠征と呼ばれている[377]。

そのとき預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、マディーナからシリアへと続く街道沿いのガーバ地方で放牧中の二十頭の搾乳中のラクダを略奪し、その持ち主のアブー・ザル・アル＝グファールの妻ライラとラクダを略奪し息子ザルを殺害したファザラ族の長ウヤイナ・ビン・フスンを追跡するため、ガーバ遠征を行った。この遠征はムスリム軍が露営した場所にちなんでズーカラド遠征とも呼ばれる。ガーバ遠征では略奪されたラクダの十頭分が取り戻された。アブー・ザル・アル＝グファールの妻も機を見て略奪されたラクダの一頭に乗ってマディーナへ逃れてきた。妻は敵の手から逃れたのち、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に「アッラーの使徒よ、私はもしアッラーが私をこのラクダで救ってくださったなら、アッラーのご満悦のためにこのラクダを犠牲に捧げると申し上げました」と言った。それに対しムハンマド（彼の上に平安あれ）はほほえみながら次のように答えた。「あなたはこのラクダになんとひどい罰を与えようとしているのだ。アッラーはこのラクダにあなたを乗せられ救われた。それなのにあなたはそのラクダを殺そうとしている。アッラーの恩をあだで返すような形で、しかも自分のものではないものを犠牲に捧げることはできない。これは私のラクダたちの中の一頭だ。あなたは家に帰りなさい」[378]

同じ頃、マディーナへ三十九キロの地点に位置するズール・カッサに二度の遠征が行われている。その一回目は、マディーナの人々の牧草地にいる家畜を略奪しようとしたサラバ族に対して行われた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ムハンマド・ビン・マスラマを長とする十人の一団を派遣した。この一団は仮眠中に弓矢による攻撃を受け、ムハンマド・ビン・マスラマだけが重傷を負いながらも生還した。二回目の遠征は一回目と同じような理由からムハーリブ族、エンマール族、サーレバ族に対して行われた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・ウバイダを司令官とする四十人の兵士から成る軍を送り、一回目の遠征で負傷したムハンマド・ビン・マスラマを除く全員が殉教した場所に無事に到達したが、相手の部族は恐れをなして山に逃げ込んだ。[379]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は同様な理由から数回、ザイド・ビン・ハーリサを司令官とする軍をスライム族、アンマール族、サラバ族に向けて送っている。かつてザイド・ビン・ハーリサはキャラバンのリーダーとし

てラジャブ月にシリアに向かっていたとき、ファザーラ族の急襲にあい、仲間が殺され財産も奪われた。ザイド・ビン・ハーリサは何とか難を逃れ、マディーナに戻りムハンマド（彼の上に平安あれ）にその一部始終を伝えた。その一ヵ月後、彼は軍の司令官としてファザーラ族のもとへと派遣され、彼らに大きな打撃を与えたのである。

ここでムスタリーク族との戦い（ヒジュラ暦六年・西暦六二七年）についても触れておきたい。ワーキディーやベラーズリーなどの諸文献はこの戦いが塹壕の戦いよりも前に起こったと伝えている。だがイブン・ヒシャーム、タベリー、イブン・アブドゥルベルのような歴史家たちは、これが塹壕の戦いの後に起こったものだとしている。我々はここでは、この戦いが塹壕の戦いの後に起こったとする説を採用している。なぜならムスタリーク族との戦いで二千頭のラクダと五千頭の羊が戦利品として獲得できたからである。もしこの戦利品を塹壕の戦いの前に得ていれば、その一ヵ月後には塹壕を掘り始めていたことになる預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちが食糧難に苦しむことはなかったはずである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が何千頭もの家畜をムスリムたちから隠し、彼らを空腹のまま放っておくことは到底考えられない。さらに、この戦いの最中には、イフク（濡れ衣）事件と呼ばれる出来事が起こり、その後一ヵ月にわたって啓示が下されなかった。のちに啓示が下され、イフク事件に関わった人々にムハンマド（彼の上に平安あれ）は罰を与えたのである。もしこの戦いが塹壕の戦い以前に起こったものであるとするなら、このイフク事件は塹壕を掘っている最中に起こっていることになる。しかし実際には、塹壕を掘っていた時期にそのようなことが起こったとする記録はないのである。[380]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、フザーア族のムスタリーク家の長ハーリス・ビン・アブー・ディラルが馬と武器を購入し、周辺の部族と共にマディーナへ向かっているという情報を得た。そしてこの情報の真偽を確認するため、フザーア族の支族エスレム族に属するブライダ・ビン・フサイブを密使として派遣した。ブライダは彼らを援助するように見せかけ敵軍の陣地に潜入し、情報が正しいことを確認してマディーナへ戻った。そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）は自分の代わりにザイド・ビン・ハーリサを長として残し、千人の兵士と共にマディーナを

出発した。ムライシーという井戸のすぐ近くで敵と遭遇したとき、まずウマルを遣わして彼らをイスラームへと招いた。しかしムスタリーク族はそれを受け入れず、直ちに戦闘状態に入ったが、[381]イスラーム軍の前に力及ばず敗北を喫し、多くの死者を出した。ムスタリーク族から戦利品として六百人もしくは七百人の捕虜、そして五千頭の羊と二千頭のラクダを獲得した。一方、ムスリム側は一名の殉教者を出しただけであった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマディーナに戻った後、捕虜の中にいたムスタリーク家の長ハーリスの娘ジュヴァイリアと結婚した。そのことを知った教友たちは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の親戚となったムスタリーク族の捕虜たちを釈放した。この結婚の真の目的は、ムスリムとムスタリーク族との間の対立関係を解消させ、その一族をイスラームに招くことにあったことは明らかである。事実、この結婚ののちハーリスをはじめその一族はイスラームに入信している。[382]

この戦いの最中に、アンサールと移住者との間で小競り合いが生じている。戦いがムスリム側の勝利で終り、軍がムライシーの井戸で水を汲んでいたとき、ムハージル（移住者）の一人であるウマルの馬丁ジャフジャーとアンサールのシナン・ビン・ワブラとの間に小競り合いが起こった。ジャフジャーはシナンを数回殴った。それに対しシナンは「アンサールの人々よ、助けてくれ」と叫び救いを求めた。ジャフジャーも「ムハージルの人々よ、助けてくれ」と彼らに救いを求めた。あわや両者の間に衝突が起きるところであったが、軍の幹部たちがその場を収めることに成功した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその仲裁に入り、そのような振舞いは無知の民のすることであるとし、「やめなさい。これは悪い行いである」と諭している。[383]

ムスタリーク族との戦いの後、アーイシャにイフク（濡れ衣）事件が起こっている。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの遠征に、妻であるアーイシャを同行させていた。戦いが終り軍はマディーナへ戻る途中、ある場所で野営した。そのときアーイシャはある事情からラクダを降り、その場所を離れた。野営地へ戻ってきたとき、アーイシャは首にかけていたネックレスを落としたことに気づき、それを探しに戻った。まさにそのとき、アーイシャは

ラクダの上のかごに乗っているものと思っていた人々は軍を出発させてしまった。アーイシャは野営地に戻り、軍が去ってしまったことに気づいた。彼女は自分を迎えに戻って来てくれるだろうとの期待を抱いてそこで待つことにした。そしてそのうちに眠りに落ちてしまった。軍が行動を起こすのはふつう夜間であったため、[384]このような成り行きは当然のことだったのである。他方、軍の最後尾に配置されていたサフワン・ビン・ムアッタールは野営地に取り残されていたアーイシャを発見し、ラクダに乗せ本隊に追いつくことができた。この戦いに参加していた有力な偽信徒の一人アブドゥッラー・ビン・ウバイは即座にアーイシャとこのサフワンの関係について中傷し、良からぬうわさを広めた。その際にはミスターフ・ビン・ウサーサ、ハッサン・ビン・サービット、ハムネ・ビントゥ・ジャクシュなども利用されていた。ハムネは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の妻の一人ザイナブの妹であり、彼女はザイナブへの愛情からそのよう行動に出たのである。しかしザイナブは、アーイシャについて妹の意見に同調することはなかった。

アーイシャは戦いから戻った後、一ヵ月ほど病に臥していた。その頃預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やアーイシャの両親は、彼女についてのうわさを知ることになった。しかし本人にはそのことを告げなかったが、アーイシャは偶然自分への中傷を知ることとなった。そして夫ムハンマド（彼の上に平安あれ）の許可を得て実家へと戻り、何日も泣き暮らした。母は彼女を慰めようと腐心した。そのようなことがあるはずがないとしてこの出来事に心を痛めたムハンマド（彼の上に平安あれ）は、人々の前で話す機会を得て、一部の者が彼の家族について行った中傷を悲しんでいると述べた。[385]ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアーイシャを信じてはいたが、全面的に信じているとはいえなかった。そこで彼女と離婚すべきかどうか、アリーやウサーマ・ビン・ザイドなどに相談した。ウサーマはそのような中傷は偽りに過ぎず、アーイシャがそんなことをするはずがないと主張した。アリーは、他にも女性は大勢いるのでムハンマド（彼の上に平安あれ）は他の女性と結婚したほうがいい、と言った。

この出来事の一ヵ月後、アーイシャが潔白であることを告げる啓示が下された。そのクルアーンの章句で、そのう

わさ話が根も葉もない中傷に過ぎないことが明らかにされ、ムスリムたちはそれを耳にしたとき、それはただの中傷であると受け止めるべきであることが示された。そしてそのようなうわさを信じ広める者は非難され、信仰を持つ人々が二度とそのような行いをすべきではないと警告された。また信仰する人々の間に醜聞を広めようとする者には、現世でも来世でも厳しい懲罰が下されると告げられた。[386] 預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアーイシャに、彼女が潔白であることを告げる章句が下されたことを伝え、彼女はアッラーに深く感謝したのである。

のちに預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は人々にも下されたクルアーンの言葉を伝え、同時に中傷に加わった者に厳罰を与えるとも告げた。[387] ハサン・ビン・サービドは、アーイシャについて、彼女は正直である、とその詩の中で述べ詫びている。[388]

クルアーンは中傷を悪しき行為としているが、中傷を受ける者が全員アーイシャのように幸運であるとは限らない。なぜなら、もはや中傷を受けた者の潔白を告げる啓示が下されることはないからである。ただクルアーンはここで従うべき原則を明らかにしている。すなわち、不確実で疑いの域を出ないようなことから無実の人について憶測や思い込みだけで判断を下すことは悪しきことであり、そのような悪しき行いに対しては重い懲罰が科されるということである。

i　フダイビーヤ和平条約（ヒジュラ暦六年・西暦六二八年）

フダイビーヤ和平条約について述べる前に、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちがウムラ（小巡礼）を行うためにマディーナからマッカへと移動したこと、そしてこの条約が締結される前にフダイビーヤで起きた出来事について触れておきたい。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラ暦六年のズ・アル＝カアダ月の初めに、カアバ聖殿を周回している夢を見たことから、ウムラを行うことにした。そして自分の代理としてアブドゥッラー・ビン・ウンム・マクトゥムをマディーナに残し、千五百人の教友と共にマッカへ出発した。ムスリムたちは旅の護身用の武

器として剣を身につけていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は他にも武器を持ったほうがいいとの教友の助言を退けていた。犠牲として捧げる七十頭のラクダも用意されていた。それに加えて、余裕のある教友たちは自分たちの犠牲に供する動物を用意していた。彼らはフダイビーヤまでズルフライファ、メラル、ラウハー、アブワー、ジュフファ、ハッラールとウスファーンを経由して進んだ。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は教友たちと共に、ズルフライファでウムラ用のイフラーム（巡礼用の白い衣服）に着替えた。教友の一部はジュフファでイフラームに着替えた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は二十人の騎兵団を先行させ、フザー族のブスル・ビン・スフィヤーンをウムラのために移動していることをマッカの人々に伝え、同時に彼らの状況を探らせるためにマッカへと派遣した。途中でムハンマド（彼の上に平安あれ）の母の墓地アブワーに詣でた。ブスル・ビン・スフィヤーンはウスファーンの近くのガディール・アル＝アシュタートという場所で、ムハンマド（彼の上に平安あれ）と合流しマッカの状況を報告した。その内容は、クライシュ族はムスリムたちがマッカに向かってきていることに脅威を感じ周辺から兵を集めていること、マッカ山に監視の兵を配置していること、ムスリムをハラーム・モスクに入れることをよしとせず戦争の用意をしていること、ハーリド・ビン・ワリードが騎兵と共にこちらに向かったことなどである。事実ハーリド・ビン・ワリードが二百人の騎兵を率いてガミームというところまで来ていた。ムスリムたちは恐怖を感じたときに行う作法に従って礼拝を捧げた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ブスルがもたらした情報をもとに、まっすぐカアバへと向かうか、それともクライシュ族を支援している部族の地域を進むかについて、教友たちの見解をたずねた。アブー・バクルはまっすぐカアバへ向かい、もし誰かが妨害してくるようであれば戦うことを勧めた。他に数名が同じ意見を述べたがムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「私たちは誰かと戦かうためではなく、ウムラのために来きたのだ」と言い、マッカへ進むことに決めた。多神教徒の妨害に遭うことなく、一行はマッカへ十七キロの地点にあるフダイビーヤの井戸に達した。そこで野営しているとき、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとにブダイル・ビン・ワルカーが数人の仲

間と共にやってきた。彼はマッカに家を持っていたので、多神教徒たちがムハンマド（彼の上に平安あれ）を憎んでいることを知っていた。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）に、彼らがどんなことをしてでも彼をマッカに入れさせないと決意していると伝えた。それを聞いたムハンマド（彼の上に平安あれ）は、我々は戦うためではなく、ただカアバ聖殿を訪問するために来ただけである、もし誰かがそれを妨げるのであれば彼らと戦うことも辞さないと告げた。ブダイルはマッカへ向かい、このことを多神教徒たちに知らせた。その後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）とクライシュ族の間で何度も使者が遣わされた。

　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はフラーシュ・ビン・ウマイヤをマッカに派遣し、ただウムラを行うために来たこと、カアバ聖殿の周回を終えればマディーナに戻ること、犠牲のための動物も連れてきていること、戦いは望んでいないことを伝えようとした。しかしクライシュ族は使者を歓迎するどころか、殺害を企てたほどであった。

フラーシュは帰還したのちムハンマド（彼の上に平安あれ）にそのことを伝えた。
他方クライシュ族が四、五十人の一団を送りイスラーム軍の周囲を探っていたとき、その一人が教友たちによって捕えられた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその男を許し釈放したが、彼らはムスリムたちに矢を放ってきた。[389]
次に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は自分たちの真意をクライシュ族に伝えるためウマルを派遣しようとした。しかしウマルはマッカに自らを庇護する親戚がいないこと、クライシュ族が自分に対して敵意を抱いていることを訴え、マッカへ行くことを拒否し、代わりにウスマーンを推薦した。そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）は今度はウスマーンを使者として遣わした。多神教徒たちはムスリムたちがマッカでウムラを行うことを認めない、もしどうしてもというなら彼だけカアバ聖殿の周回をしてもよいと言った。ウスマーンがその提言に同意しなかったので、クライシュ族は腹を立て彼を捕えた。そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとにウスマーンが殺害されたとの誤った情報がもたらされた。[390]
このような経緯から新たな戦争が起こる可能性が生じていた。そこで預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、多神教徒たちと戦わずしてマッカを去ることはない旨の誓いを教友たちに求めた。教友たちは伝承によれば死を覚悟するとも、あるいは戦いから逃げないとも誓ったとされている。その場にいないウスマーンの代わりにも、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は左手に右手を重ねるという形の誓いを教友たちと交した。
一方で、ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちとの強固な団結と、死をも覚悟した誓いが行われたことがマッカにも伝わり、クライシュ族たちは脅威を感じウスマーンを釈放した。そしてスヘイル・ビン・アムルを長とする使者の一団を、和平を結ぶために派遣してきた。[391]数度にわたるやりとりの後、遂に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とクライシュ族との間で条約が結ばれた。この条約は短期間でイスラームがアラビア半島全土に広まる契

機となり、[392]同時に約二年後にムスリムたちがマッカを征服する布石となったのである。条約は次のような条件で結ばれた。

1、ムスリムはその年はマッカへ入らない。カアバ聖殿の訪問も行わない。それは翌年行い、そのときには三日間に限りマッカに滞在することもできる。その際にはマッカの住民と接触してはならない。カアバ聖殿の訪問の際には旅行用の剣のみ携行できる。マッカから戻る際には同行を希望しないものを強制的に連れて行くことはできない。また共にマッカに来た者のうち、マッカに住みたいと願う者があればそれを妨げない。

2、双方は自由にアラブの諸部族と同盟を結ぶことができる。

3、クライシュ族からイスラームに入信し、ムスリムたちに庇護を求める者がいても、ムスリム側はそれを受けいれることができない。ただしマッカに逃れてくるムスリムがいれば、彼らは強制送還されることはない。

4、ハッジ（大巡礼）やウムラのためにマッカへ来る者、あるいはイエメンやターイフに向かう途中にマッカを経由する者、シリアや東方へ向かうためマッカを通る者の安全は保障される。

5、この条約は十年間有効とする。この間、ムスリムとクライシュ族は相互に攻撃してはいけない。その同盟者についても同様である。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はクライシュ族側が条約の署名に、「ビスミッラーヒ・ラフマーニ・ラヒーム（慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名によって）」の代わりに、イスラーム以前の時代から知られている、「ビスミッカッラーフンマ（アッラーの御名によって）」という言葉を用い、また「アッラーの使徒」という言葉の代わりに「アブドゥッラーの息子ムハンマド（彼の上に平安あれ）」という表現を用いることを容認した。それは唯一の神を信じるというイスラームの信条に反する表現ではなく、事実ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアッラーの使徒であると同時にアブドゥッラーの息子でもあったからである。アリーによって記された条約の文書は二通用意され双方の証人の立会いのもとで調印された。この条約が第三者にも与えている権限から益を受けることを求めたフザーア族はムスリ

フダイビーヤ条約が結ばれた場所

ムの、同様にバクル族は多神教徒の同盟者となった。

フダイビーヤ条約が発効した後に、クライシュ族の一団の長であったスヘイル・ビン・アムルの息子アブー・ジャンダルは、ムスリムということから入れられていた牢から脱出し、ムスリム側に庇護を求めた。しかし条約に従い、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼を父のもとに返した。このことは教友たちを悲しませた。しかし、アブー・バシールやアブー・ジャンダルをはじめとして、マッカから逃げたもののマディーナに入れないムスリムたちが紅海沿岸地方に住み着き、クライシュ族のキャラバンを攻撃するようになったことから、クライシュ族はムスリムであるマッカ住民の追放という項目を条約から取り除くことを求めてきた。

ウムラを行うことなくマディーナに戻ること、マッカ（多神教徒側）からマディーナ（イスラーム側）への亡命者だけが送還されること、アッラーの使徒という表現が条約に盛り込まれなかったことは、ムスリムたちにとって非常につらいことであった。ウマルはこの条約がムスリム側に不利であり、多神教徒側に有利であると主張した。さらにはウムラを行わずマディーナへ戻らざるをえないことにも納得がいかなかった。結局、アブー・バクルがこの条約を受け入れるようにウ

マルを説得した。条約締結後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちは犠牲の動物を屠りイフラームを脱いだ。そしてダイビアで十日間滞在した後、マディーナへと出発した。その帰途、ダジュナンというところでウムラやフダイビーヤ条約について言及するクルアーンの勝利章が啓示されたのであった。[393]

勝利章の最初の節は、「本当にわれは、明らかな勝利をあなたに授けた」である。そして預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に力強い援助が与えられたこと、ムスリムたちの心に安らぎを与え、彼らの信仰心を一段と強くしたことが述べられている。同時に、強い信仰を持たず、フダイビーヤ遠征に加わらなかったマディーナ周辺の一部の部族について、彼らの心には裏表があると指摘している。すなわち、彼らはフダイビーヤから戻ったムハンマド（彼の上に平安あれ）に許しを求めるであろうが、それは心からのものではなく、ムハンマド（彼の上に平安あれ）や他のムスリムたちが遠征から戻ってくることはないと考えていたこと、そしてそのような行いが彼らを破滅へ向かわせることを明らかにしているのである。そして、

「あとに居残った者たちも、あなたがたが出動して戦利品が取れるとなると、『わたしたちを入れてください。あなたがたの御供をします。』と言い、かれらはアッラーの御言葉を変えようと望む。言ってやるがいい。『あなたがたは、決してついて来てはならない。アッラーが既にそう仰せられたのである。』するとかれらは、『あなたがたはわたしたちを恨んでいる。』と言う。いや、かれらは少しも理解しないのである。あとに居残った砂漠のアラブたちに言ってやるがいい。『今にあなたがたは、強大な勇武の民に対して（戦うために）召集されよう。あなたがたが戦い抜くのか、またはかれらが服従するかのいずれかである。だがこの命令に従えば、アッラーは見事な報奨をあなたがたに与えよう。だがもし以前背いたように背き去るならば、かれは痛ましい懲罰であなたがたを処罰されよう。』」（勝利章第一五～一六節）

「かれらがあの樹の下であなたに忠誠を誓った時、アッラーは信徒たちに、ことのほか御満悦であった。かれはかれらの胸に抱くことを知り、かれらに安らぎを下し、手近な勝利をもって報われた。そしてかれらは、（その外に）沢山

の戦利品を得た。アッラーは偉力ならびなく英明であられる」（勝利章第一八～一九節）

「不信心者たちが、あなたがたと戦ったとしても、かれらはきっと背を向けよう。かれらには、保護者も救助者もいない」（勝利章第二二節）

「本当にアッラーは、使徒のためにかれの夢を真実になされた。もしアッラーが御望みなら、あなたがたは、安心して必ず聖なるマスジドに入り、あなたがたの頭を剃り、または（髪を）短かく刈り込んで（ハッジやウムラを全うする）。何も恐れることはないのである。かれはあなたがたが知らないことを知っておられる。そればかりか、かれは手近な一つの勝利を許された」（勝利章第二七節）

と続く。[394]

フダイビーヤ条約はイスラーム史において重要な位置を占めている。この条約は一見するとムスリム側にとって不利であるように映るが、実際にはムスリム勢力の拡大をもたらすものとなった。その最たるものとして、イスラームの急速な浸透を挙げることができる。この条約が結ばれる一年前の塹壕の戦いでムスリム側は、マディーナを三千人の兵士で守っている。しかしこの条約締結の約二年後に実現することになるマッカ征服には、一万人のムスリムが参加しているのである。他にもこの条約はヒジャーズ地方の要衝であるハイバルを、のちのマッカ征服時の足がかりとすることを可能にした。同時にこの条約によってムスリムは、その存在をクライシュ族側に完全に認めさせることとなり、このとき初めて一つの政治勢力としてその存在が意識されるようになったのである。こうした状況の変化は他の偶像崇拝を行っていた部族に脅威を与えることとなった。結果として、それまでクライシュ族に遠慮して預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と接触することをためらっていたアラブの各部族が、ムハンマド（彼の上に平安あれ）と会うことによってイスラームを理解するようになった。その中にはイスラームに入信する部族もいた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は和平が保たれている間に、周辺諸国の為政者たちにイスラームへと招く書状を送った。また一方でこの条約は、ハイバルのユダヤ教徒をその強力な同盟者であったマッカの多神教徒から切り離すこととなった。

この条約の締結後、ハイバルのユダヤ教徒とクライシュ族、ガタファーン族、ファザラ族の間の同盟が破綻したのである。それによってムハンマド（彼の上に平安あれ）は、クライシュ族が背後から挟み撃ちの攻撃を仕掛けてくる危険にさらされることなく、ハイバルを通過できるようになった。したがってこの条約はムハンマド（彼の上に平安あれ）の外交上の大きな成功となった。

その結果、この条約締結後の二年間でイスラームに入信した人の数は、それまでに入信した人の数よりも多くなったのである。[395]

j　フダイビーヤ和平条約締結後からマッカ征服までの時期の多神教徒との関係

フダイビーヤ条約からマッカ征服までの約二年の間に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、クライシュ族以外の偶像を崇拝している部族への遠征を行った。これらの遠征は多神教徒側との関係において重要な意味を持っている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はウマル・ビン・ハッターブを司令官とした三十人の軍を、ヒジュラ暦七年のシャアバーン月にトゥラバへと派遣している。また同じ月に、アブー・バクルを司令官とした軍をナジダのキラーブ族へと派遣している。その他の遠征軍には以下のようなものがあった。同年のシャアバーン月には、バシール・ビン・サアドの指揮のもと三十人規模の軍がムッラ族へ派遣された。この軍は敵の反撃を受け、バシール・ビン・サアドを含む少数の者だけが生き残った。同年のシャウワール月には、バシール・ビン・サアドは三百人規模の軍を率いて、マディーナへ攻撃を仕掛けようとしていたガタファーン族に対し遠征を行い成功を収めている。また同年のラマダーン月には、ガーリブ・ビン・アブドゥッラーがウワル族とアブド・ビン・サラバ族に対抗するため百三十人規模の軍と共にマイファーへ派遣されている。

ヒジュラ暦六年に多神教徒の妨害によって実現しなかったウムラは、ヒジュラ暦七年に成し遂げられた。このウム

ラ（ウムラ・アル＝カザー）はマッカの多神教徒との関係において重要な意味を持っている。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はフダイビーヤ条約の締結から一年が過ぎた頃、条約にしたがって、前年ウムラを行うことができなかった者を含む二千人の教友たちと共にマディーナを出発した。前の年に達成できなかったウムラを行うことがその目的であった。

ズルフライファでイフラームに着替え、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は先遣部隊としてそこからムハンマド・ビン・マスラマを百人の騎兵と共に遣わした。用心のため、あらかじめ弓矢やかぶと、槍といった武器も送っていた。しかし武器はマッカの市内に持ち込むことはせず、郊外に残し、そこに二百人の見張りをつけた。マッカの人々は、ムスリムが行うカアバ聖殿の周回を見ることが許されていなかったので、マッカの町は三日間無人の状態となった。しかしハラーム・モスクの近くからムスリムたちを見ている人々もいた。ムスリムたちはウムラを行い、犠牲の動物を屠った。マッカの通りを歩き、かつて住んでいた家々を眺め、そこで生まれ育ち、のちにやむを得ない理由で七年間離れていた故郷への思いを満たした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はウムラを終えた者の何人かをマッカ郊外に送り、そこで武器の見張りをしていた人々と交代させ、彼らもウムラを行うことができるように配慮した。ムスリムたちは四日目の朝、クルアーンの勝利章の第二七節で語られているように、約束が果たされたことをアッラーに感謝しながら、安らぎに満ちた心でマッカを後にした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はもし彼が望むなら、マッカにとどまりそこで支配権を獲得することもできた。しかし、条約を破棄したり約束を違えることは彼の信条に反することであった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの遠征の途中、叔父アッバースの義妹にあたるマイムーナと結婚した。それに対しマッカの人々の一部は、「ムハンマド（彼の上に平安あれ）は同郷の者をえこひいきしている」と語った。[396]

ウムラからマディーナへ戻った後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイブヌ・アビル・アウジャーエス・スレミーを長とする五十人の一団をイスラームの布教のためにスレイム族へと派遣した。しかしその情報が事前に漏

れ、スレイム族はあらかじめ攻撃の準備を整え彼らを待ちかまえていた。そしてイスラームを受け入れるどころか、彼らを攻撃したのである。この攻撃で一団の長は負傷しつつも助け出されたが、残りの人々は殉教を遂げた。
フダイビーヤ条約から一年以上が経過した頃、ヒジュラ暦八年のサファル月に、クライシュ族のハーリド・ビン・ワリード、アムル・ビン・アース、ウスマーン・ビン・タルファンがマディーナを訪れ、イスラームに入信している。
サファル月には、ガーリブ・ビン・アブドゥッラーの指揮のもと、カディードの地に住むキナーナの一支族であるムラッヴァーフ族に対し遠征軍が送られた。同時期に、六ヵ月前にバシール・ビン・サアドの友人たちを殺害したムッラ族に罰を与えるため、二百人の軍が整えられ、司令官にはズバイル・ビン・アウワムが任命された。しかし、ちょうどこのときカディードからマディーナに戻ったガーリブ・ビン・アブドゥッラーがズバイル・ビン・アウワムの代わりに司令官として新たに任命され、遠征が行われた。その一ヵ月後のラビーウ・アル＝アウワル月には、シュジャー・ビン・ワフブが二十四人の遠征軍と共にシイー地方に住むハワージン族の支族であるアーミル族へ派遣されている。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はベリー族とクダーア族がマディーナを攻撃するという知らせを受け、ヒジュラ暦八年のジュマーダ・アル＝サーニー月にアムル・ビン・アースの指揮のもと三百人規模の軍をザートゥッサラーシルに派遣した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼に遠征の途上通過することになるベリー、ウズラ、バルカインの三つの部族に支援を求めるように命じた。アムルの祖母はベリー族の出身であった。それはアムルにとって有利に働いた。目的地に近づいたアムルは、大軍と対戦することになると知り、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に支援を求めた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれに応え、アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラの指揮のもと、アブー・バクルやウマルも入った二百人規模の軍を支援部隊として派遣した。多神教徒たちは五百人ものムスリム軍の接近を知り、あわてて退散した。このようにしてこの遠征も成功を収めた。この遠征のさ中、アムル・ビン・アースは寒さのため火を焚こうとした者たちに安全の観点から許可を与えなかった。その帰途、グスル（全身の洗浄）をする必要があったときに、アムルは病気になることを恐れてそれを行わず、砂によるウドゥー（洗浄）を行い立ち上がって、人々

を礼拝に導いた。このアムルの二つの行いは教友たちの間で批判の的となった。アムルはマディーナに戻ったのちムハンマド（彼の上に平安あれ）にそのことを伝えた。するとムハンマド（彼の上に平安あれ）は何も話さずほほえんでいた。[397]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラ暦八年のラジャブ月にジュハイナ族に対し、アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラを三百人規模の軍と共に紅海沿岸のシーフ・アル＝バフルへと送った。遠征軍は敵の罠に陥ることも戦うこともなく帰還した。同年のシャアバーン月には、アブー・カターダを十五人の兵士と共にナジド地方のハドゥーラへ、ムハーリブ族の居住地に住んでいたガタファーン族に対して派遣した。

k　マッカの征服（ヒジュラ暦八年・西暦六三〇年）

イブラーヒームの時代から唯一神信仰の中心であったカアバ聖殿から偶像を取り除くことは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の最大の目的の一つであった。フダイビーヤ和平条約の締結後、ムスリムはマッカの多神教徒たちと平和に暮らすことができるようになったとはいえ、カアバ聖殿は依然として偶像崇拝の対象とされていた。さらに、のちに述べるように多神教徒たちはやがてこの条約を軽視するようになった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカの征服を決意したが、その決意を実行に移した本当の理由は、十年間有効であるとして締結されたはずのフダイビーヤ条約が二年もたたないうちに多神教徒たちによって守られなくなったことにある。フダイビーヤ条約によってムスリム側と同盟を結んだフザーア族と、多神教徒側と同盟を結んだバクル族との間には、古くから敵対関係が存在していた。ヒジュラ暦八年のシャアバーン月に、バクル族のあるグループが夜間、フザーア族に奇襲攻撃をかけ二十三人を殺害した。この攻撃に際し、クライシュ族はバクル族に武器や乗り物、水などを援助した。さらにサッファーン・ビン・ウマイヤやイクリマ・ビン・アブー・ジァフル、スヘイル・ビン・アムルといった一部のクライシュ族の者が、顔を覆ってこの攻撃に加わったのである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の同盟者であるフザーア族のアムル・ビン・サーリムと数人の騎兵はマディーナを訪れ、そこで起きたことを詩に詠んで報告した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らを歓待し、援助することを約束して故郷に戻らせた。そしてクライシュ族に書状を送り、バクル族との結びつきを断つか、フザーア族に賠償金を払うか、どちらを選ぶかと迫った。もしどちらも選ばなければ彼らと戦う用意があると告げた。クライシュ族はこのどちらも拒否した。しかしのちに考えを改め、条約を新たにするためにアブー・スフィヤーンを派遣した。[398] マディーナを訪れたアブー・スフィヤーンは、条約を新たにし、その有効期限を延長することを提案した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は自分たちは条約を守っていること、それに違反してはおらず、条約に変更を加えてもいないと告げ、先にあった出来事を知らないかのように振舞いつつ、「もしかしてあなた方は何か事件を起こしてこの条約に違反したのですか」と訊ねた。アブー・スフィヤーンはそれを否定し、それまでに起こっていた出来事を認めなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼の提案を受け入れなかった。そこでアブー・スフィヤーンはムハンマド（彼の上に平安あれ）の家族や一部の教友たちにも話し合いを求めたが聞き入れられず、結局目的を果たせないままマッカへと戻っていった。

アブー・スフィヤーンがマディーナを去った後、熟慮の末、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカの征服を決意したのである。そして極秘裏にその準備を始めた。当初はその遠征が何のために行われるのか妻のアーイシャにも明らかにしていなかった。のちにムハンマド（彼の上に平安あれ）はアブー・バクルにその意図を打ち明けたが秘密にしておくように念を押した。それからマディーナ周辺の部族に知らせを送り、ラマダーン月にマディーナに集結するように要請した。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカの無血征服を意図し、そのための準備を極秘裏に行っていった。ムスリムがマッカ征服のためにマディーナを出発したと多神教徒たちが知れば、彼らも迎え撃つために必要な手段を講じることが予想され、その結果多くの人命が失われる可能性があった。だがムハンマド（彼の上に平安あれ）は神

聖なマッカに血を流すことなく征服することを望んでいた。それゆえマッカへの進軍は極秘裏に進められていたのである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はクライシュ族に情報が漏れることを防ぐためにマッカへと向かうすべての道を封鎖した。ウマルにその任務が与えられた。教友の一人ハーティブ・ビン・アブー・バルテアは、多神教徒の有力者にマディーナにおける戦闘準備について知らせる手紙を密かに送ろうとした。この出来事は天使ジブリールによってムハンマド（彼の上に平安あれ）に知らされたと様々な文献に記されている。ハーティブが手紙を運ぶために金で雇った女性は、道中アリーたちによって捕えられた。尋問を受けたハーティブは、マッカにいる家族を守るため、クライシュ族の気をひこうとしたのだと答えた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼の謝罪を受け入れ、バドルの戦いに参加していたことを理由に彼を許した。この出来事の後、次のようなクルアーンの言葉が下された。

「あなたがた信仰する者よ、われの敵であり、またあなたがたの敵である者を、友としてはならない。あなたがたに与えられた真理を拒否しているにも拘らず、密に好意を寄せるのか。かれらは、あなたがたの主、アッラーを信仰しているという理由で、使徒とあなたがたを追放したのである。あなたがたは、われの喜びを願いながら、われのために聖戦に出かけていながら、（一方で）かれらに好意を寄せるのか。われはあなたがたの隠すことも、現わすことも知っている。あなたがたの中このようなことをする者は、本当に正しい道から迷い去った者である」[399]

この啓示はすべてのムスリムに与えられた警告でもあった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラ暦八年のラマダーン月の一〇日、西暦六三〇年の一月一日に、アンサールや移住者、周辺の部族と共にマディーナを出発した。また一部の部族も途中でその隊列に加わった。[400] ムハンマド（彼の上に平安あれ）はズバイル・ビン・アッワムを二百人の兵と共に先遣隊として送った。ラマダーン月であったが望む者は断食を解いてもよいとされた。自身もカディードという地方に到達したところで断食を解いた。

イスラーム軍の見張り役の男が、ハワージン族によって雇われたスパイを捕え、預言者ムハンマド（彼の上に平安

あれ）のもとに連行した。尋問を受けたスパイは、ハワージン族が他の部族と共謀し戦いの準備をしていることを白状した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の命令によってハーリド・ビン・ワリードに捕えられていたスパイは、軍がマッル・アル＝ザフラーンに滞在していたとき逃亡した。しかしハーリドによって再度捕えられ、その出来事はハーリドからムハンマド（彼の上に平安あれ）に伝えられた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカに着くまで彼を捕縛しておくようにと指示した。このスパイはマッカ征服の後、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の導きによりイスラームに入信し、その後イスラーム軍の一員としてフナインの戦いに加わり、そしてアウタスの戦いで殉教している。[401]

イスラーム軍は夜半の礼拝の頃に、マッカに近いマッル・アル＝ザフラーンに陣地を敷いた。ここで、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラーム軍の力を誇示するため兵士の数だけの、すなわち一万個のたいまつを焚いた。それを目撃し、近づいてきているのが誰かを知ることもできなかったマッカの多神教徒たちは、狼狽し事態を把握するためにアブー・スフィヤーンと二人の仲間を派遣した。しかし彼らはイスラーム軍の見張りに発見され、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとに連れて来られた。そしてマッカの長であったアブー・スフィヤーンは長い時間を費やし考え抜いた末、ムスリムとなった。

イスラーム軍は四つの部隊に分かれてマッカへと入った。その一つを預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が率い、ハーリド・ビン・ワリード、ズバイル・ビン・アッワーム、そしてカイス・ビン・サアドが残りの部隊を率いた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は全軍にやむを得ない場合を除いて血を流すことを禁じた。彼らは大きな反撃にあうことなく市街地に入った。司令官サアド・ビン・ウバーが、「今日はカアバで戦うことが許されている日だ」と大声で叫んだとき、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼の手から旗を奪い取り、それを息子カイス・ビン・サアドに渡し、「今日は慈悲の日だ」と告げた。[402]

イスラーム軍は南方からマッカに入った部隊を除き反撃を受けることはなかった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は移住者たちと共に、流血の事態を起こすことなくマッカに入ることができたことを喜んでいたが、町の南

マッカ征服の途上イスラーム軍が滞在したマッル・アル＝ザフラーン

マッル・アル＝ザフラーンから出発したイスラーム軍が越えた狭い峠のマッカ側から見た眺め

の方角で白刃が閃いたのを見てたいへん悲しんだ。南方方面の司令官であったハーリド・ビン・ワリードに使者を送り、衝突を終えるようにと命じた。ハーリドはのちに尋問を受け、そのときの衝突が多神教徒側から仕掛けられたものであると説明した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、マッカで家の戸を閉じて中にいる者、武器を放棄する者、ハラーム・モスクかアブー・スフィヤーンの家にいる者の安全は保障される、と宣告した。そして自軍の兵士に負傷者や逃亡者、捕虜の殺害を厳しく禁じた。そこでマッカの人々は家の扉を閉め武器を戸外に捨てた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）がズィー・トゥーワ地区で軍を止めると、人々がその周囲に集まってきた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアッラーがマッカの征服を恵みとして実現させてくださったこと、ムスリムの数が多数であること、そしてアッラーへの謙虚さを示すためにラクダの上で頭を垂れ、「来世での生のみが本当の生である」と述べた。

その後カアバ聖殿の周回を行い、その周囲の偶像を破壊した。カアバの管理者として鍵を預かっていたアブドゥッダール家のウスマーン・ビン・タルハーに使者を送り鍵を持ってこさせ、聖殿の中に入り二ラカートの礼拝を捧げたのである。

昼の礼拝の時間が来ると、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はビラール・ハベシーにカアバ聖殿の屋上でアザーンを唱えさせた。そして礼拝後、人々に呼びかけた。「今、我々があなた方をどのように処遇すると思っていますか」人々は、「私たちは寛大な処置を望んでいます。あなたは兄弟であり、兄弟の息子であられます」と答えた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれに対し、「わが兄弟ヨセフが言ったことを、今日、私もあなた方に言おう。今日、あなた方に咎めはありません。アッラーがあなた方をお許しくださいますように。アッラーは最も慈悲深いお方なのです」[403]と語った。そして唯一神信仰、すなわちアッラーの存在とその唯一性について説いた。アッラーに比類するものはなく、アッラーには何者も配することができないこと、アッラーは約束を守られ、しもべを助けられ、敵を破滅させせられるお方であることを明らかにした。結婚や賠償金に関する法的な説明もいくつか行った。また、イスラーム以前の時代のうぬぼれや祖先を自慢するといった傲慢な振舞いは行われなくなるであろうと語り、すべての人々は

マディーナへの道
預言者ムハマンドが
軍を四つに分けた地点
ズィートゥワ・アザーヒル
イラクへの道
アル＝マアラート墓地
ミナー、ターイフ、ナジドへの道
ジーラーネ
アル＝マアラート
泉
墓地
泉
ケダー
アブー・クバイス山
クアイキァーン山
ジェッダへの道
ハジューン
カアバ
ハンダマ山
アジャード
アル＝リート
マッカの征服
預言者の部隊
ハーリド・ビン・ワリードの部隊
ズバイル・ビン・アッワームの部隊
カイス・ビン・サアドの部隊
イエメンへの道

アーダムの子孫であり、土から創造されたことを明らかにした。「あなた方のうち最も素晴らしい人は畏怖の心を持つ人である」と告げた。マッカがアッラーによって不可侵の土地とされていることを人々に思い起こさせ、信徒は皆兄弟であることを教えた。カアバ聖殿の鍵が再びウスマーン・ビン・タルハーに預けられ、その管理は叔父アッバースに任された。

そのとき、エスレム族のフラーシュ・ビン・ウマイヤは、従来からの血の報復制度に従い、フザイル族のまだイスラームに入信していなかったジュネイディブ・ビン・アデラーを殺害した。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はフラーシュを叱り、その賠償金を支払わせた。翌日の昼の礼拝の後にも、マッカが神聖な土地であることを再度人々に説明した。[404] そして、マッカの征服によりもはや聖遷は終了したことが宣言された。[405]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカの人々のすべてを許すと宣言した。ただし十一人の男たちと六人の女たちは、大きな罪を犯したのでその対象外であるとした。たとえばアブドゥッラー・ビン・サアドは一度イスラームに入信し、マディーナへ聖遷を行い、神の啓示を記録する重要な任務を負った一人であったにもかかわらず、その後イスラームを放棄し、マッカの多神教徒たちのもとへ走った。そして自分が啓示を記録していたときには、多神教徒たちの都合のいいように啓示を改ざんし、彼らの反イスラームの活動を助けたのである。アブー・スフィヤーンの妻ヒンドも、ウフドの戦いで殉教したハムザの肝臓を噛み潰し死者を侮辱していた。しかしこの二人を含む数人はのちに許され六人だけが殺害された。

スハイル・ビン・アムル、サフワン・ビン・ウマイヤ、イクリマ・ビン・アブー・ジァフルといったクライシュ族の有力者たちは許されその命は保障された。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、マッカの人々のうち誰が自分や教友たちに拷問を行ったか、誰が自分を殺す計画を企てていたか、誰がバドルやウフドといった戦いに参加していたか、ということをすべて熟知していた。またベドゥインたちが皆、彼自身とイスラームを無きものにしようとしていたことを知っていた。マッカ征服はそういったムハンマド（彼の上に平安あれ）に敵対していた人々が彼の支配

下に入ったことを意味していた。彼が望みさえすれば、そうした人々を抹殺することも可能であった。彼がちょっとした言葉や仕草でそのことを仄めかせさえすれば、それを実行することができた。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）はそうはしなかった。なぜならムハンマド（彼の上に平安あれ）は敵を味方にかえることを自らの原則としていたからである。彼のこういった行動は、人の心をいかにしてつかむか、寛容とはどのようなものか、ということを示しているのである。

カアバ聖殿とその周辺にあった偶像はことごとく、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の命令によって破壊された。一部は火の中に入れられ燃やされた。人々の家にあった偶像についても破壊するように命じられた。またムハンマド（彼の上に平安あれ）はラマダーン月中に周辺の地域にあった偶像を壊すために、一団を派遣した。偶像の売買、飲酒、豚肉や死肉を食べること、占いをする者に金を支払うことなどが禁じられた。[406]

マッカの征服後、新しくイスラームに入信した人々に対する預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の態度は注目に値するものであった。マッカの人々は決して戦いに敗れ征服された人々のように処遇されることはなかった。それどころか、権利や義務といった点では、彼は勝利したムスリムたちと同等の立場に置かれた。誰も、家や財産、土地を失うことはなく、戦利品として取り上げられることもなかった。[407] イスラーム軍の兵士たちはマッカの人々を攻撃することなく、マッカ征服の夜を「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」、「ラー・イラーハ・イッラーラー（アッラーの他に神はなし）」と唱えたり、カアバ聖殿の周回などをして過ごし、次の朝を迎えた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカの三人の資産家から資金を調達して、お金を必要としている教友たちに分配した。この借金はのちにハワージンの戦いの戦利品によって返済されている。[408]

イスラーム軍はマッカに兵を残すことなく、町の統治を新しくイスラームに入信したアッタブ・ビン・アシードに任せフナインへと出発した。

ここで、ウッザーという偶像を破壊しその後マッカに戻ったハーリド・ビン・ワリードが、ジャジーマ族にイスラー

ムを伝える目的で遣わされたこと、そしてその前後に起こった出来事について簡単に触れておきたい。
ハーリド・ビン・ワリードはウッザーを破壊してマッカに戻った後、シャウワール月に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）によってジャジーマ・ビン・アーミルの一族のもとへ派遣された。戦いのために派遣されたのではなかった。ハーリドは移住者やアンサール、そしてスライム族によって編成された三百五十人の一団を率いてジャジーマ族の拠点であるグマイサに赴いた。ジャジーマの人々は武装して彼らを迎えた。ハーリドは武器を放棄するように求め、彼らもそれに従い、「宗旨を変えた」を意味する「サバーナー」という言葉を唱えた。しかしハーリドは彼らがムスリムになったものとは見なさず、以前イスラームに敵対する部族と同盟を結んでいたことを挙げ彼らから捕虜をとり兵士たちに引き渡し、彼らを殺害するように命じた。次の朝、スライム族は三十人ほどの捕虜を殺害した。だが移住者とアンサールは自分たちの手元にいた捕虜を殺害することはなかった。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの出来事を知り深く悲しみ、ハーリドのとった行動は正しくなかったと指摘した。そしてアリーをジャジーマ族に派遣し、殺害された者への賠償金を支払ったのである。[409]

ｌ フナインーアウタスの戦いとターイフ包囲（ヒジュラ暦八年・西暦六三〇年）

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマッカを征服したことにより、ターイフ周辺に住むハワージン族はサキーフ族と同盟を結び、ムスリムと戦う準備を始めていた。以前にも彼らは、マディーナを出発した預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が自分たちを攻撃するのではないかと思い戦闘態勢をとったことがある。そのとき一人のスパイを派遣したことは先に述べたとおりである。サキーフ族も自分たちの城を守る大砲の作り方を学ぶために、二人の人物をジュラシュに派遣していた。
今日「アル＝シャライの丘」として知られるフナインはマッカの北東、ターイフの南西に位置する。ハワージン族の軍の司令官マーリク・ビン・アウフは三十歳代で、虚栄心が強く教養のない向こう見ずな性格であった。軍の覇気

を高めるために、女性や子供たちや家畜を集め、軍に同行させていた。結果としてハワージン族は部族の存亡をかけて戦うこととなったのである。彼らは著名な詩人ドゥライド・ビン・スンマを、高齢で失明しているにもかかわらず、その経験や知識を活用するために戦場へと同行させた。ドゥライドは女性や子供たちを戦場に連れて行くことに反対したが、その意見は聞き入れられなかった。

一方で預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はフナイン渓谷に集結していた多神教徒たちのもとへ軍を進めることを決めた。一万二千の兵士からなるイスラーム軍のうち二千人は新しくイスラームに入信したクライシュ族の人々であった。八十人ほどのクライシュ族はまだ入信していなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はクライシュ族のサフワン・ビン・ウマイヤによろいや武器を預けていた。[410]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は戦いに先だって教友アブドゥッラー・ビン・アブー・ハドラドを、情報収集のため秘密裏に敵の陣地に派遣した。彼はそこで数日間偵察し、得た情報をムハンマド（彼の上に平安あれ）にもたらした。戦いに赴くとき、兵士たちはこの大軍なら戦に負けるはずはない、と口々に話していた。

敵軍がイスラーム軍に奇襲攻撃を仕掛けてきたフナイン谷につづく道

弓矢部隊や兵士たちの戦闘能力に自信を持っていたハワージン族は、フナイン渓谷に陣地を構えたイスラーム軍に奇襲攻撃を仕掛けてきた。この攻撃にイスラーム軍の先遣部隊は劣勢となり退却を余儀なくされた。それは全軍に大きな影響を与え、イスラーム軍はハワージン族の弓矢部隊の前にパニックに陥った。それでも預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は冷静さを失わず、持ち場を守っていた。アブー・バクル、ウマル、アリー、アッバースとその息子たちといった教友たちも持ち場を離れることはなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の努力とアッバースの大声の呼びかけでムスリムたちは我にかえり反撃を開始した。壊滅状態となったハワージン族は女性や子供を戦場に残したまま逃走した。[411] ムスリム側の戦闘意欲は強く、女性や子供を殺害する者もいた。だがムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれを知り、ただちに女性と子供の殺害を禁じた。[412] ウサイド・ビン・フダイルはそれに対し、「アッラーの使徒よ、彼らは多神教徒の子供たちではないですか」と訴えたが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「あなた方の中の最も尊い人も、かつて多神教徒の子ではなかったか。すべての子供はアッラーのくださった天性のままに生まれる。その親が、子供たちをキリスト教徒やユダヤ教徒にするのだ」と答えたのであった。[413]

　フナインの戦いで多神教徒側は七十人の死者を出したが、イスラーム側は四人の殉教者を出しただけであった。敗れたハワージン族の多くは司令官マーリクと共にターイフに向かった。残りの部隊はもう一度イスラーム軍と戦おうとアウタスに集結していた。

　フナインの戦いでは、六千人の捕虜と二万四千頭のラクダ、四万頭以上の羊、そして銀が戦利品としてムスリムの手に渡った。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこれらの戦利品を、マッカの二十四キロ北東にあるジーラーネに運ぶように命じた。捕虜の中には、ムハンマド(彼の上に平安あれ)の乳兄弟であるシャイマも含まれていた。人々の捕虜に対する態度があまりにも厳しいため、彼女は自分が預言者の乳兄弟であると告げた。しかしムスリムたちはそのことを信じず、彼女をムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとに連れて行った。シャイマは、「ムハンマド（彼の上に平安あれ）よ、私はあなたの乳兄弟です」と訴えた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が、では何か証拠となる

ものがあるかと尋ねると、シャイマは肩に残る傷痕を示し、子供の頃ムハンマド（彼の上に平安あれ）がそこを噛んだのだと言った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその出来事を思い起こし、上着を床に敷いてシャイマをそこに座らせた。そして望むならここにいてもいいし、部族のもとに戻ってもいい、と告げた。彼女は部族のもとに戻ることを選び、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はいくつかの品物を持たせ女を家族のもとに送り返した。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラーム軍の一団をアウタスに派遣し、自らはターイフに向けて出発した。司令官アブー・アーミルは兵を率いてアウタスに行き、ハワージン族の残党を壊滅させた。ハワージン族の司令官であったドゥライドはその戦いで命を落とした。ひざを矢で射抜かれたイスラーム軍の司令官アブー・アーミルは自らの死を覚悟し、自分の代わりに甥のアブー・ムーサーにその任務を与えた。イスラーム軍が勝利をおさめてアウ

フナインの戦いが行われた場所

フナインの戦いで得た戦利品を集めた場所ジーラーネ

タスからマディーナに戻ったとき、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は殉教したアブー・アーミル、そしてその任を継いだアブー・ムーサーのためにドゥアー（祈り）を行った。

フナインの戦いについてはクルアーンでその名称を明示して述べられている。

「アッラーは幾多の戦役、またフナインの（合戦の）日においても、確かにあなたがたを助けられた。その時あなたがたは多勢を頼みにしたが、それは何も役立たず、大地はあのように広いのにあなたがたのためには狭くなって、あなたがたは遂に背を向けて退却した。その後アッラーは、使徒と信徒たちの上にかれの安らぎを下し、またあなたがたには見えなかったが、軍勢を遣わして不信心な者たちを懲罰された。このようにかれは、不信徒に報いられる。更にアッラーは、それらの後、御心に適う者の悔悟を赦された。アッラーは寛容にして慈悲深くあられる」[414]

一方で預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、周囲を堅牢な城壁で囲まれたターイフの町に迫り包囲した。ターイフの人々は城壁を修理し、その内部に一年分に相当するほどの十分な食糧を備えていた。イスラーム軍は大砲を用いて城壁に石を降り注いだ。しかし二メートルもの厚さを持っていたこの城壁は、そのような激しい攻撃でも簡単に崩すことはできなかった。ムスリム側は城壁に接近するためにダッバーバと呼ばれる板と皮でできた防具の中に入っ

て敵の矢から身を守り、城壁に近づきそこに穴を開けようとした。ターイフの兵士たちは城壁の上からダッバーバの上に焼けた鉄を投げつけた。ムスリム側はダッバーバを鉄で覆った。ターイフ側はそれに石を投げて対抗してきた。戦いの推移からターイフが簡単には征服できないこと、サキーフ族への働きかけも時間をかけなければならないことが明らかとなった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は十五日間包囲を続けたのち、ナウファル・ビン・ムワーイヤに相談したところ、彼は、「キツネが巣穴に入っているようなものです。待っていれば捕えることができます。包囲を解いてもあなたに何の支障もないでしょう」という見解を示した。このとき、戦いが禁じられている月が近づいてきた上に、ムスリム側はすでに十四人の殉教者を出していたので、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は包囲を解き、戦利品を留めてあるジーラーネへと移動した。

ズ・アル＝カアダ月の初めに預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はジーラーネに到着した。そして、そこに十三日間滞在し捕虜や戦利品を分配した。戦利品の五分の一を国家の財源とし、残りを戦いで負傷した人々の間で分配した。戦利品の処

フナインの戦いで得た戦利品を集めた場所ジーラーネ（別の角度から）

理が終ったのち、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の乳兄弟の父を含む十四人のハワージン族がムスリムたちの陣地を訪れ、自らの行いを悔いイスラームに入信することにしたこと、乳兄弟が自分たちの部族にいることに免じて許しを請いたいと伝えてきた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は集団礼拝を行った後で、人々にそのことを明示するよう彼らに命じ、彼らもそれを受け入れた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が彼らに、捕虜か戦利品の中から何かを選ぶように言ったところ彼らが捕虜を求めたので、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らの取り分となる捕虜を解放すると告げた。他の移住者やアンサールたちも同じことを行った。一部の部族の長たちはこの決定に異議を唱えたがのちに説得された。[415]このようにして短期間のうちにハワージン族のすべての捕虜が解放されることとなり、彼らは家族のもとに返された。そのときムハンマド（彼の上に平安あれ）は捕虜たちにエジプト綿でつくった白い服コブティーヤを給付した。

戦利品の分配は、ムアッラファーイ・クルブ（心がイスラームに傾いてきている人々）と呼ばれる人々に、その五分の一が分け与えられた。ここでのムアッラファーイ・クルブとはそのほとんどが征服されたばかりのマッカの人々であった。クライシュ族の指導者アブー・スフィヤーンやその息子たちもそこに含まれていた。クルアーンではムアッラファーイ・クルブにもザカートが与えられるとしている。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はフナインの戦いの戦利品を分配するとき、ハワージン族の長であり司令官であったマーリク・ビン・アウフ家の人々には財産を分け与えなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らがターイフでサキーフ族と共にいたことを知っていたからである。フナインの戦いの原因であり、いまだに敵対関係にあるサキーフ族と共にいるマーリクの力を弱めておく必要があった。そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼のもとを訪れていたハワージン族の一団を通しマーリクに連絡を取り、もし彼らがムスリム側に戻ってきてイスラームを受け入れるなら家族と財産を返すこと、それに加えて百頭のラクダも与えると告げた。それを受け入れたマーリクはムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとに来てイスラームに入信した。そして彼には約束のものが与えられた。

こうした預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の対応に大いに感動したマーリクは、入信後に書いた詩でそのことを詠み、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のような人物は見たことも聞いたこともないとつづった。その後、彼はムハンマド（彼の上に平安あれ）の指示に従い一族と共にサキーフ族と戦うようになったのである[416]。この政策によってムハンマド（彼の上に平安あれ）は、恐れを知らないハワージン族の指導者を味方にしただけではなく、かつての同盟者であったサキーフ族と戦わせることに成功している。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はジーラーネでイフラームに着替えウムラ（小巡礼）を行うためにマッカに入った。そして八年前に失意のうちに離れなければならなかった故郷マッカを取り戻した喜びに浸りながら、ウムラを終えマディーナへと旅立っていったのである。

m　多神教徒との関係の最終段階（ヒジュラ暦九年・西暦六三一年）

このようにムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者としての二十三年間、クライシュ族をはじめとする多神教徒たちと戦うことに最も多くの時間を費やした。マッカの征服後、クライシュ族やハワージン族、サキーフ族といったアラビア半島で最も有力な部族がイスラームに入信したことにより、偶像を崇拝する信仰は急速にその影響力を失っていった。しかし多神教徒たちはまだ存在しており、カアバ聖殿を訪れることもできた。カアバ聖殿にウムラやハッジのために訪れる人に危害を与えない、戦いが禁じられている月には戦わないという包括的な条約が存在していたからである。この無期限で包括的な条約の他に、個別で期限付きの条約も存在した。つまり預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラの最初の年以来、マディーナ周辺に住む多神教徒の各部族の不穏な動きを封じ込め、彼らと友好関係を築くために、ダムラ、ムドゥリジュ、グファール、アシュジャ、そしてジュハイナといったアラブの諸部族と条約を結んだ。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はタブーク遠征からマディーナに戻ったのち、アブー・バクルに三百人の

ムスリムと共にマッカにハッジに行くことを命じた。そもそもハッジはこの年（ヒジュラ暦九年・西暦六三一年）に義務とされたのである。この頃多神教徒との間の条約についてクルアーンの悔悟章の二八節が啓示されている。

そこでは、ムスリムたちが多神教徒たちとの間で結んでいた条約が一方的に破棄されたことが述べられている。その章句をマッカを訪れる巡礼者に知らせるためにアリーが派遣された。[417] アブー・バクルの一団に追いついたアリーは、自分が人々に悔悟章を伝えるために遣わされたことを知らせ、彼らに巡礼を続行するようにと告げた。アリーはズ・アル＝ヒッジャ月の一〇日、すなわちイード（祭り）の初日目にミナーに集まった人々に悔悟章の前半の節を読み上げた。そして次のように説いた。「不信心者は天国に行くことはなく、今年以降は誰も多神教徒としてハッジを行うことはできない。誰もカアバ聖殿を裸で周回することはできない。期限の定められていなかった条約は無効となるが、アッラーは四ヵ月の猶予を与えられる。期限の定められている条約はその期限が切れるまでは有効である」

ハッジの任務を終えたアブー・バクルとアリーは共にマディーナに戻った。この最後通牒にはすぐに反応があり、その年ハッジに参加していた多神教徒たちから異議の声が上がった。しかしのちに、イスラーム勢力を叩き潰そうと戦かってきた強大なクライシュ族でさえムスリムとなったのだから、[418] もはや他に道はない、として全員イスラームに入信することとなった。この時点でアラビア半島の偶像を崇拝する信仰は根絶やしとなったのである。カアバ聖殿やハラーム・モスクは預言者イブラーヒームや預言者イスマーイールの定めた掟に適う形で、唯一神を信仰する者だけのものとなったのである。[419]

二　ユダヤ教徒との関係

a　全体的状況

マッカ時代に啓示されたクルアーンの中に、「啓典の民」[420]、あるいは「イブラーヒームやムーサーの民」[421]、さらには「イ

スラエルの息子（ユダヤ民族）」といった言葉が使われていることから、その時代にマッカにユダヤ教徒たちが住んでいたことは明白である。一部のユダヤ教徒はマディーナからマッカへと移住し、そこで住民と一定のかかわりを持っていたことも考えられる。この時代、啓典の民と言われる人々は一般的にムスリムに対し肯定的な態度を取っていた。

マッカの多神教徒たちがユダヤ教徒と一定の結びつきを持っていたことも知られている。ヒジュラ以前のマッカ時代、多神教徒たちは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）について知識を得るため、ナーデル・ビン・ハーリスとウクバ・ビン・アブー・モアイトをマディーナに送り、ムハンマド（彼の上に平安あれ）をどう扱えばいいかユダヤ教徒の有識者に相談している。ユダヤ教徒の知識人は彼らに三つの質問を提示し、それをムハンマド（彼の上に平安あれ）に問うようにと助言した。そして、もし彼がその質問に答えることができれば彼は間違いなく預言者であり、答えることができなければ預言者ではないと伝えたのである。彼らはマッカに帰りムハンマド（彼の上に平安あれ）にその三つの問いを投げかけた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は一日の猶予を求めた。だが十五日後、その問いを説き明かすクルアーンの言葉が啓示されている。[423]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がマディーナに移住したときには、町の住民の半数がユダヤ教徒であった。彼が預言者としての任務を与えられる以前、ユダヤ教徒たちはアウス族とハズラジュ族に、彼らは近く現われるであろう預言者に従い、彼に助けを求めることになるだろうと告げていた。ヒジュラのとき一人のユダヤ教徒が三階建ての建物に登り、地平線の彼方にマディーナへとやってくる一団を見つけ、それが待ちのぞんでいた客であることを大声で告げた。[424] ヒジュラ後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はユダヤ教徒たちに対して寛容な態度で接した。マディーナ条約でも、彼らをウンマ（イスラーム共同体）の一員として認めていた。彼のこうした好意的な態度に接し、ヒジュラ暦一年にはカイヌカー族のアブドゥッラー・ビン・サラームがイスラームに入信している。その後も何人ものユダヤ教徒が様々な時期にイスラームに入信している。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は啓典の民であるユダヤ教徒に対し、クルアーンの教えに従い、「アッラー

以外の何ものも崇拝しない。アッラーに何ものも同等に配しない。あなたがたの中の誰かを神聖視してはいけない」と呼びかけた。[425] 啓示が下されていないことがあればユダヤ教徒のやり方に同意することもあった。礼拝もユダヤ教徒はエルサレムの方角に向けて行っていた。ムスリムが彼らの屠った肉を食べること、ユダヤ教徒の貞節な女性と結婚することも許されていた。イスラエルの子孫（ユダヤ民族）の物語が話され、そのことが問題視されることもなかった。ユダヤ教徒の葬式でも立礼で死者に敬意が払われた。多神教徒の立ち入りが禁じられていたイスラームの礼拝所に、ユダヤ教徒は入ることを許されていた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の彼らに対するこうした措置にもかかわらず、ユダヤ教徒たちはムスリムをイスラームから改宗させるために様々な活動を行った。ときにはクルアーンを風刺し、その教えを否定した。自分たちこそが真の正しい道を見出したのであり、ムハンマド（彼の上に平安あれ）も彼らに従えば真の道に到達することができると言い張った。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が「私はイブラーヒームの民である」と述べたことを根拠に、彼がユダヤ人であり、ウザイルがアッラーの息子であると主張した。もしムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者ならば天から本を降らせること、アッラーがムハンマド（彼の上に平安あれ）と話している様子を見せることなどを要求した。ユダヤ教徒たちはムスリムの存在や彼らが力を持った集団となっていくことが受け入れられなかったのである。

ユダヤ教徒たちは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を中傷することもあった。ザイド・ビン・ルサイトというユダヤ教徒は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のラクダがいなくなったとき、「ムハンマド（彼の上に平安あれ）は天から啓示を受けたと言っているが、自分のラクダがどこにいるかもわからない」とからかった。これに対しムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「私はアッラーが私に啓示してくださったものを知るだけである」[426] と答えている。ユダヤ教徒たちはアウス族とハズラジュ族のかつての対立を思い起こさせ、彼らの間に不和を生じさせようとたくらんだ。[427] 偽信徒たちとも近づき、その対立を再燃させるように彼らをそそのかした。だがその後ユダヤ教徒がマディーナ

から追放されてしまうと偽信徒たちの力はまたたく間に衰えていったのである。クルアーンではユダヤ教徒たちがムハンマド（彼の上に平安あれ）について語っていることや、彼らの預言者に対する態度が数多く伝えられている。
クルアーンは様々な箇所で、イスラエルの民は来世と現世を取引したこと、啓典を改ざんしたこと、アッラーの存在をないがしろにしてしまったこと、彼らが神聖なものとしていた土曜日の戒律を守っていないこと、偽りに耳を傾け禁じられたものを口にしていること、預言者たちは偽証し、その存在を抹殺していること、真実を否定していること、自分たちがアッラーの友であり息子であると主張していること、人々を過度に物惜しみさせていること、ムスリムの最大の敵であることなどについて述べている。ユダヤ教徒たちはクルアーンのこういった指摘に対しさらに態度を硬化させ敵対関係を強めた。このような背景からユダヤ教徒とイスラーム教徒の間では紛争が絶えることがなかった。しかしここで明記しておかなければならないことは、両者の間の様々ないさかいには、ムスリムの側に正当な理由があったということである。にもかかわらず預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ユダヤ教徒との間の約束事が守られないことに対しひとかたならぬ努力を払っていた。

b　カイヌカー族のマディーナ追放（ヒジュラ暦二年・西暦六二四年）

ムスリムとの間の盟約を最初に破棄したのはカイヌカー族であった。[428]彼らはハズラジュ族と同盟関係を結んでいた。バドルの戦いの後、カイヌカー族は影響力を増したムスリムたちをねたむようになっていった。彼らはムスリムたちの勝利をクライシュ族が戦いに長けていなかったためだと見なした。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はカイヌカー族のそのような態度を気に留め始めていた。クルアーンも次のように警告している。「また人々の中あなたに対し裏切る恐れがあるならば、対等の条件で（盟約を）かれらに返せ。本当にアッラーは裏切る者を愛されない」[429]
その後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はカイヌカー族を市場に集め、クライシュ族がバドルの戦いで敗れたことを指摘し、彼らに警告を与えると同時にイスラームへと招いた。しかしカイヌカー族は、クライシュ族は戦

術面で未熟であったが自分たちは戦いに長けていると主張し、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を威嚇した[430]。そして盟約を破棄したのである。

ムスリムの女性がカイヌカー族の市場で嫌がらせを受けたことが、ムスリムとカイヌカー族の衝突の引き金となった。あるときムスリムの女性が貴金属の売買を行っていたカイヌカー族の市場の店を訪れていた。店にいたユダヤ教徒の男がその女性の服のすそを気づかれないようにある場所に引っかけた。それで女性は転倒し肌があらわとなった。それを見たユダヤ教徒たちは大笑いし、女性は恥ずかしさと怒りのあまり叫び声をあげた。そして、その場を通りかかったイスラーム教徒の男がその事情を知り怒りのためにユダヤ教徒の男を殺害したのである。ユダヤ教徒たちは報復としてそのムスリムを殺害した。殺されたそのムスリムの家族はユダヤ教徒たちに対し、ムスリムの助けを求めた。こうして事件は大きくなっていったのである。

カイヌカー族の動きを気に留めていた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ヒジュラ暦二年のシャウワール月の二日、西暦六二四年の三、四月、彼らのもとへと向かった。そして彼らが学校兼裁判所として使っていたベイトゥール・ミドラスの前で、彼らにイスラームへ入信するように説いた。しかしカイヌカー族はよい返事をしなかった。そこに至り戦いが避けられないと見た彼らは、二つの砦に立てこもり戦闘態勢を取った。ムスリム軍はその砦を二週間にわたって包囲した。七百人の兵士を擁していたカイヌカー族だが包囲に恐れをなし、最終的にムハンマド（彼の上に平安あれ）の下す裁定に従うという条件で降服し、砦から出てきた。その際、カイヌカー族のかつての同盟者であり偽信徒たちの指導者でもあったアブドゥッラー・ビン・ウバイは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に彼らを許してほしいと懇願した。だが、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれを聞き入れずカイヌカー族にマディーナから出ていくよう申し渡した。アブドゥッラー・ビン・ウバイは最後までその決定を覆そうと力を尽くしたが、その試みは不成功に終わった[431]。カイヌカー族の人々は家族と共にマディーナを離れ、シリアに近いアズリアートに移住した。そして、彼らが残した多くの武器や財産は戦利品として分配された[432]。

c　ナディール族のマディーナ追放（ヒジュラ暦四年・西暦六二五年）

ナディール族のマディーナ追放について述べる前に、カアブ・ビン・アシュラフの殺害について触れておきたい。ナディール族の詩人であったカアブは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちを常に中傷していた。彼はバドルの戦いでのムスリム側の勝利をどうしても受け入れることができず、「死んだ方がましだ」と憤慨していた。わざわざマッカに足を運び、詩を詠んでクライシュ族を励ましたり、マディーナに戻ってムスリムの女性たちを誹謗中傷していた。エスカレートする彼の言動に、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「カアブ・ビン・アシュラフはアッラーと預言者を侮辱し苦痛を与えている。彼を倒せる者はいないか」[433]と問うた。それに応じてアウス族のムハンマド・ビン・マスララがその役割を引き受けた。そしてカアブを砦の中で殺害したのである。[434]

ナディール族はウフドの戦いのとき多神教徒軍の陣地を訪れ、ムスリム軍と戦う彼らの心を奮い立たせていた。それに加え、彼らは幾度となくムスリム要人の暗殺計画を企てていた。だがその企ては未遂に終っていた。そうしたことから預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らに警告を与えていたが、この時期に起こったある出来事が発端となり、ナディール族とムスリムたちの関係は新たな局面に入ることになる。

アムル・ビン・ウマイヤは、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が保護していた二人の人物を、あることから誤って殺害してしまった。マディーナ条約によるなら、殺された二人の賠償金を支払うにあたりナディール族もそこに加わる必要があった。そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）は、アブー・バクルやウマルをはじめとする教友たちと共にナディール族を訪れた。当初彼らは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の一行を歓待し、賠償金を支払うことにも承諾していた。そして休息を取っていくようにと言った。だが実は彼らは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が教友たちと壁の陰で休息を取っていたとき、屋根から石を落としムハンマド（彼の上に平安あれ）を殺そうと企てた。一部のユダヤ人は、それが条約の破棄を意味すると指摘し、その暗殺計画をやめさせようとしたがうまくいかなかっ

た。彼らが石を用意しているとき、それを察したムハンマド（彼の上に平安あれ）は、何か用事を思い出したかのように立ち上がり、その場を去りマディーナへと向かった。ユダヤ教徒たちは何もなかったかのように振舞っていたが、教友たちはまもなくムハンマド（彼の上に平安あれ）を探し始めた。マディーナから来た旅人が、彼がマディーナへと向かったことを伝えると、教友たちもマディーナへと彼の後を追った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はナディール族が自分を殺害しようとしていたと告げ、彼らを討伐する準備を始めるように命じた。そしてムハンマド・ビン・マスラマを使いとして彼らのもとに送り、裏切り行為を行ったことを突きつけ、彼らに十日以内にマディーナを去るように命じた。ナディール族は移住の準備を始めたが、偽信徒の指導者アブドゥッラー・ビン・ウバイは彼らに、他のアラブの部族やユダヤ教徒があなたたちを支援することを約束するのでムハンマド（彼の上に平安あれ）に抵抗してはどうか、と助言した。さらに、自分の部族や他のアラブの部族をまとめ二千人の兵を興し、自分たちも最後の血の一滴までムスリムたちと戦うとまで言った。ナディール族の長は彼のこの言葉を信用し、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に抵抗する決意を固めた。そして「我々は故郷を離れることはない。あなた方は我々に対して戦いでも何でもやりたいことをすればいい」と通告したのである。

ヒジュラ暦四年のラビーウ・アル＝アウワル月の一八日、西暦六二五年六月二九日、ナディール族の陣地へと軍を進めた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、彼らを包囲する前に戦わずに条約を結ぶことを提案した。だがユダヤ教徒たちはそれを拒否し、ムスリムたちに矢や石を投げつけ始めた。そこでムスリム側は、一つの戦術として、ナディール族の実をつけていないナツメヤシの木を切り始めた。これは攻撃をより容易にするものであった。

ムスリム軍による包囲は十五日間続いた。アブドゥッラー・ビン・ウバイが約束した援軍は来ず、クライザ族からの武器や兵員の援助も来なかったので、ナディール族はマディーナを出る決意を固めた。女性や子供を伴い武器以外のラクダに積めるだけの財産を積み、六百頭のラクダと共に彼らはマディーナを去った。悲しみを隠し、マディーナの市場で明るく振舞ってから出発したのであった。有力者を含む彼らの多くはハイバルに定住し、残りの人々はシリ

アへと向かった。ナディール族の長は一族をハイバルに残し[435]、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と敵対するクライシュ族の戦意を高めようとマッカに赴いた。塹壕の戦いはこうした一連の動きの末に起こったものであった。ナディール族の中でもイスラームを受け入れていた者は追放をまぬがれた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はアンサールたちとも協議の上、ナディール族の土地を移住者と貧しい二人のアンサールに分配した[436]。

クルアーンの集合章はその出来事にちなんで啓示されたものである。この章はナディール族章と呼ばれることもある[437]。この章が下された理由は彼らが条約を破棄したことにあった。この章は、「天にあり地にあるすべてのものは、アッラーを讃える。本当にかれは偉力ならびなく英明であられる」という節で始められている。以降の内容は、次のように要約することができる。ナディール族の追放とムスリム側の勝利がアッラーの許しと援助によって実現したこと、それはムスリムにとってもナディール族にとっても以前から予想されていたことではなかったことを明らかにし、この出来事から教訓を得る必要があるとしている。条約を破り、信仰や道徳を失った集団にとって、追放はこの上なく軽い罰であり、本来こういった集団は現世でも来世でも重い罰を受けることになると明示されている。ナツメヤシの木を切ったことも、アッラーの許しによるものであると述べられている。偽信徒たちのユダヤ教徒に対する支援と約束についても言及され、彼らはユダヤ教徒たちに、「もしあなた方が領土から追放されるなら、我々もあなた方と共に出ていく。あなた方に対立する人々には決して従わない。もし戦うことになれば必ず助ける」と述べていたことが明らかにされている。同時に、もし彼らが追放されたときには、偽信徒たちは共に出ていくことはないこと、そして仮に支援したとしても、すぐに背を向けて逃げるであろうとも述べられている。彼らは外見上は団結しているように見えたとしても、実際はバラバラであると指摘されている[438]。

d　クライザ族事件（ヒジュラ暦五年・西暦六二七年）

カイヌカー族とナディール族が追放されたことにより、塹壕の戦いが終ったとき、マディーナに残っていたユダヤ

教徒はクライザ族だけであった。クライザ族は塹壕の戦いのとき、ナディール族の策略によりムスリム軍を背後から攻撃することになっていた。そのクライザ族の動きはムスリム軍に困難な状況をもたらすものであった。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はその情報を受け、彼らの攻撃を未然に防ぐために四人の使者をクライザ族のもとへと派遣した。彼らはクライザ族の長カアブ・ビン・アサドと会い、そのような背信行為に走らないようにと要請した。仮にそうしたところで、その結果はクライザ族にとって決してよいものとはならないであろうとも告げた。だがカアブはそれに耳を貸さず、使者たちを侮蔑するばかりであった。

クライザ族はそれ以前のナディール族の包囲の際にも、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を背後から攻撃する準備をしていたことがあった。その結果、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は包囲を解除し、クライザ族へと軍を進めることとなった。そのときはクライザ族はナディール族を援護しないという条件の和平案をムハンマド（彼の上に平安あれ）に提案し、それが認められたのである。今回、塹壕の戦いにおいて再びそのような裏切りを行うことは、彼らに宣戦布告する十分な理由となった。なぜならクライザ族の信用は完全に失われていたからである。クライザ族はマディーナにいると危険な存在であった。マディーナから出る許可を与えてもハイバルのイスラームの敵である人々を助けるかもしれなかった。[439]

塹壕の包囲者たちがマディーナを去った翌日、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はクライザ族へと軍を進めた。クライザ族は砦に立てこもって抵抗した。しかし包囲が長引くに連れ彼らは苦境に陥っていった。長であるカアブは部族の男たちに三つの提案を行った。一つ目はイスラームを受け入れること、二つ目は土曜日、つまりムスリム側にとって予想外の日に攻撃を仕掛けること、三つ目は死を覚悟してムスリムたちと戦うことであった。しかし彼らはそのどの提案も受け入れなかった。[440] ムハンマド（彼の上に平安あれ）は重ねてクライザ族の人々をイスラームへと招いたが彼らは拒否し、戦いは始まった。[441]

一部の文献ではクライザ族はかつての同盟者サアド・ビン・ムアーズに従うという形で降伏したと伝えられている。[442]

一方で、よく知られている伝承としては、彼らは包囲が厳しくなったことに耐えかね、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に従うという形で降伏したとされる。かつての同盟者であるアウス族が彼らを許すことをムハンマド（彼の上に平安あれ）に求めたとも記録されている。そして、どちらの伝承においても、結果としてサアド・ビン・ムアーズが新しい統治者に任命されている。[443]塹壕の戦いで負傷したサアドは、預言者モスクの中に張られた天幕の中で、ルファイダ・アル＝アンサーリーヤという女性の教友から手当てを受けた。[444]ロバに乗せられてムハンマド（彼の上に平安あれ）の陣地に連れて来られたサアドは、青年期に達している男を殺し、女と子供を捕虜とし、彼らの財産は戦利品とすることを決めた。この決定がどのようになされたかは、文献には述べられていない。そしてこの決断のあと、預言者ムハンマドはサアドに、あなたはアッラーと預言者の判断によって決断した、と記されている。[445]近代のイスラーム学者ムハンマド・ハミドゥッラーは、このときサアドはユダヤ教の教典に従って決定を下したと指摘している。彼らの教典でユダヤ教徒たちに与えられている敵を罰する権利を、ムスリム側にも適用したとし、「律法」における判断とサアドの決定の間に関係性を見出しているのである。[446]事実、律法は敵に対してもユダヤ教徒たちと同等の権利を与えている。[447]クライザ族のかつての同盟者でもあったサアドは律法についての知識を持っていたと思われる。

その結果、この決定は執行に移された。女たちの中から一人が教友に石を投げつけて殺したという理由で死刑とされた。死刑にされたクライザ族の数は四百人から九百人の間で様々な数が伝えられている。財産や女、子供は戦利品とされナツメヤシの林も分割された。クライザ族との戦いはヒジュラ暦五年（西暦六二七年）に行われた。[448]

クルアーンの連盟章ではその出来事が次のように記されている。

「またかれは、かれら（連合軍）を後援した啓典の民を、それらの砦から追い、その心中に恐怖を投じられた。あなたがたは或る者を殺し、また或る者を捕虜とした。またかれは、かれら（啓典の民）の土地、住宅、財産またあなたがたの未踏の地を、あなたがたに継がせられた。アッラーはすべてのことに全能であられる」[449]

e　ハイバルの征服（ヒジュラ暦七年・西暦六二八年）

クライザ族の事件以後、マディーナでのユダヤ教徒の脅威はほとんどなくなったといえる。だがヒジャーズ地方全体を見るなら、その脅威はまだ終っていなかった。なぜならカイヌカー族やナディール族と同盟関係にある多くのユダヤ教徒たちがハイバルに住んでいたからである。マディーナから追放されたユダヤ教徒の一部もハイバルに定住しており、一部のユダヤ教徒たちがマッカの多神教徒のアラブ人をそそのかして塹壕の戦いの原因をつくりだしたことは先に述べたとおりである。ハイバルのユダヤ教徒たちは、ガタファーン族に一年分のナツメヤシの収穫を対価として共に戦うよう提案した。ガタファーン族は四千の兵士で彼らを援護することになっていた。シリアやイラクへとつながる交易ルートはハイバルを経由しており、ムスリムたちの交易ルートが危険にさらされていた。ハイバルのユダヤ教徒たちの存在はムスリムのキャラバンにとって大きな脅威だったのである。

クライザ族の身に起こったことを知ったハイバルのユダヤ教徒たちは恐れをなし、ムスリムと対決する前に各地のユダヤ教徒と同盟を結ぼうとした。またガタファーン族にも出兵を要請した。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラ暦六年のラマダーン月に情報収集のために一団をハイバルに派遣した。そして情報が正しいことがわかると、ハイバルの長ウサイルを知事として迎えることとした。再びハイバルに一団が送られ、ウサイルはその提案を一度は受け入れ、三十人のユダヤ教徒たちと共にマディーナへ向かって出発した。ところがウサイルは道中で考えを変えたのである。

フダイビーヤ条約は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）にハイバルで日々増していく危機に対処する機会を与えた。この条約によって彼らがハイバルに向かっている間にマッカの人々がマディーナを攻撃する危険が回避されたからである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はフダイビーヤの戦いから戻り、マディーナに一ヵ月とどまった後、ハイバルへの進軍に備えるようムスリムたちに命じた。ハイバルは堅牢な砦を持ち、多くの兵士たちを抱え、征服が困難な立地にあった。したがってこの町の征服には忍耐を強いられることが予想された。それゆえムハンマド（彼の

上に平安あれ）は「聖戦を望む者だけが我々と行動を共にするように」と告げたのである。

イスラーム軍の出発前には、マディーナに残っていたユダヤ教徒たちは支払期限の来ていない借金の返済を求め、ムスリムたちを苦しめていた。[450] マディーナの偽信徒たちはユダヤ教徒と連絡を取り合いムスリム側の戦力について情報を漏らしていた。そして偽信徒の指導者アブドゥッラー・ビン・ウバイはハイバルのユダヤ教徒に、ムスリムたちを恐れることはないが周到な準備をした上で、彼らと雌雄を決する戦いを行うべきであると助言した。

イスラーム軍はヒジュラ暦七年のムハッラム月の下旬頃（西暦六二八年五月）、マディーナを出発した。兵の数は千六百人であった。[451] その数にはエチオピアから来た移住者たちやのちに軍に加わったダウス族は含まれていない。負傷者の治療や食事の支度などムスリムたちを援助するために二十人の女性も軍に加わっていた。こうしたムスリムたちの勢力に対し、ヤークービーという歴史家は二万人、[452] ワーキーディーという歴史家は一万人[453] のユダヤ教徒がハイバルにいたと

している。二万という記録はすこし誇張した数字だと思われる。
イスラーム軍は四日間移動を続けた。アシジャー族の二人が道案内に立った。夜になってハイバルに到着した預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は朝を待つことにした。彼は原則として夜中の奇襲攻撃は行わなかったのである。[454]朝になって田畑に行くために砦から出てきたユダヤ教徒たちは、イスラーム軍を目にして恐れをなして砦に逃げ戻った。マディーナに百五十キロの地点にあるハイバルの町は、ネタート、シック、ケティーバの三つの地区とそれらを分ける城壁から成っていた。
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はネタート地区に陣地を置いた。ここでは矢による戦いが行われた。しかしこの地は戦いに不利であるとして、ムスリムたちはラジーという場所に移った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はユダヤ教徒たちをイスラームに招いた。しかし彼らはそれを拒否し戦う決意を固めていた。ガタファーン族は一年分のナツメヤシの収穫と引き換えに、四千人の兵を率いてユダヤ教徒たちの援護に駆けつけていた。この地にムハンマド（彼の上に平安あれ）が到着する三日前に彼らは砦に入っていた。砦を包囲する前にムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ガタファーン族の長であるウヤイナ・ビン・フスンに使者を送り、ハイバルから手を引くならその地の一年分のナツメヤシの収穫を彼らに譲ると伝えた。同じ提案がファザラ族に対しても行われた。当初、双方共それを拒否したが、包囲されている間に家族が故郷で無防備な状態にあることを考え、まもなく彼らはその地を去っていった。[455]
ウヤイナはハイバル征服の後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を訪れ四千の兵と共に包囲のさ中にハイバルを去ったのだと訴え、戦利品の分け前を求めた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「それは嘘だ」と答えそれを拒否している。[456]
彼らがハイバルを去ったことはユダヤ教徒側の士気を奪った。その頃シマクというユダヤ教徒の男がムスリム側の陣地を訪れ、自分の身の安全を保障してくれるなら、町のどの部分が弱点か教えると申し出てきた。そしてその情報にもとづいて作戦が実行された。こういった出来事の一つ一つがハイバルの征服をより容易なものとしたのである。

まずネタート地区の砦が、続いてシック地区、そしてケティーバ地区の砦が続けざまに落された。最後にカムース城が陥落しハイバルの征服が完了した。この戦いで勇敢な働きを見せたのはアリーであった。

ハイバルのユダヤ教徒たちは九十三人の死者を出した。その中には預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を毒殺しようとしたザイナブの父ハーリスも含まれていた。イスラーム軍は十五人の死者を出しただけであった。[457]

ハイバルで獲得した戦利品の五分の一は、クルアーンの戦利品章で定められている規則に従って預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に分配された。残りの五分の四は兵士たちに分配された。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は金やその他の貴金属を未亡人や貧しい女性たちに与えた。戦利品の中にトーラー（律法）の一部があり、それらは丁重にユダヤ教徒たちの手元に返却された。預言者ムハンマドは条件付きながらハイバルの農家をユダヤ教徒たちに戻した。[458]

ハイバルの征服はマッカの多神教徒たちを不安に落し入れた。しかしアッバースをはじめとするマッカに住むムスリムたちは喜んだ。[459] ハイバルの征服によりアラビア半島におけるユダヤ教徒の政治的な力は急速に衰え、経済的な力も弱体化した。それまでは彼らはムスリムたち

最後のエチオピア移住者たちの帰還ルート

にとって脅威の存在であったが、ハイバルの征服以降はムスリムたちに税を支払う立場となったのである。ハイバルの戦利品とその後の税収でイスラーム国家の経済的な基盤は強固なものとなっていった。

ハイバル征服後、その地に数日間滞在していた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を、ユダヤ教徒の指導者サッラム・ビン・ミシュカムの妻であるザイナブ・ビント・ハーリスが毒殺しようとした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）を招き、羊を屠り、それを焼き料理として提供しようとした。ビシュル・ビン・バラーと共にその場に赴いたムハンマド（彼の上に平安あれ）は、最初の一口で肉に毒が含まれていることに気づき、それを吐き出した。しかしビシュルはムハンマド（彼の上に平安あれ）のそばで吐き出すことは失礼にあたると考え、口にしたものを無理やり飲み込み、命を落としたのである。ザイナブについては殺害されたという記録もあれば、のちに許されたという記録も残っている。[460]

ハイバル征服のとき預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ユダヤ教徒の司令官であったフヤイ・ビン・アフタブの娘サフィーヤを司令官の権利として得た。サフィーヤには、イスラームを受け入れてムハンマド（彼の上に平安あれ）の妻となるか、入信することなく自らの親戚のもとにとどまるかを選択する権利が与えられた。彼女はイスラームを受け入れ預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の妻となった。[461]

その頃、アブー・フライラを含むダウス族とアシャーリー族がハイバルの預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は教友たちと協議の上、彼らにも戦利品の一部を与えた。エチオピアの移住者たちもナジャーシーのもとから二隻の船でハイバルに到着した。そこにはジャーファル・ビン・アブー・ターリブも含まれていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「どちらを喜べばいいのか私にはわからない。ジャーファルが来たことか、ハイバルの征服か」と語り、その喜びを表わした。ハイバルの征服はヒジュラ暦七年のムハッラム月からサファル月にかけて、西暦では六二八年の五月から六月にかけて実現している。[462]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はハイバル征服の後、ワーディ・アル＝クラーへと兵を進めた。この地のユダヤ教徒たちは一日砦に篭り抵抗したがのちに降伏した。彼らもハイバルでユダヤ教徒との間で結んだ条約にもと

づいて降伏を受け入れた。それは一年の収穫物の半分をイスラーム国家に税として納めることになっていた。タイマーに住むユダヤ教徒たちもハイバルやワーディ・アル＝クラーでの状況を知り、人頭税を支払うことを条件に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と条約を結んだ。

ハイバル征服の後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はファダクにも使者を送った。ファダクのユダヤ教徒たちはムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとに使節団を送り、土地の半分と引き換えに和平条約を結ぶよう求めてきた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの申し入れを受け入れファダクの土地の半分を獲得した。[463]

ここで、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のユダヤ教徒との結びつきを総括した上で、それを今日の状況に生かせるように評価してみたい。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はユダヤ教徒たちを、ムスリムと共に暮らすことのできない存在とは決して見なしていなかった。彼の目指すところはユダヤ教徒の存在を完全に否定することでも、イスラームの統治する地域から追放することでもなかった。もしそのような意図があったとしたなら、ハイバルやその周辺のユダヤ教徒たちは完全に排除され追放されていたであろう。しかし実際にそのようなことは行われなかった。ハイバルが征服されたヒジュラ暦七年から、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の死去したヒジュラ暦十一年までの四年間、ムスリムたちとユダヤ教徒は共に平和に暮らしていた。マディーナやアラビア半島の他の地域、特にイエメンにおいても、イスラーム側の保護や庇護のもとユダヤ教徒たちは平和に暮らしていたのである。[464] クライザ族との戦いの十五ヵ月後に行われたハイバルの征服の際には、マディーナのユダヤ教徒十人がムハンマド（彼の上に平安あれ）と行動を共にした。[465] 追放や殺害されたユダヤ教徒たちも、彼らが条約を破棄するまではマディーナでムスリムたちと共に暮らしていた。しかし、彼らはムスリムの強力な敵であった多神教徒たちと同盟を結び、脅威をもたらす存在になり国家の統治や社会の平和を乱す行動をとったためにマディーナから追放もしくは殺害されたのである。ユダヤ教徒たちが人々の生命や財産に脅威を与える存在となったために共に生きることができなくなったのである。もしユダヤ教徒たちが条約を破棄したり戦時法に違反していなければ、マディーナに定住し続けていたことであろう。[466]

三　キリスト教徒との関係

a　全体的状況

ムスリムとキリスト教徒の関係はイスラームの時代が始まった当初のマッカ時代から始まっている。ワラカ・ビン・ナウファルがキリスト教にかかわりを持っていたこと、最初の啓示の後、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がワラカと出会ったこと､そしてムハンマド（彼の上に平安あれ）が自らの身の上に起こったことをワラカに話したこと、統治者や人々がキリスト教徒であったエチオピアにかつてムスリムたちが移住したことがあること、ラービアの息子たちの奴隷であったアッダスがターイフでムハンマド（彼の上に平安あれ）と出会い改宗していることなどはこれまで述べてきたとおりである。

そうしたこと以外にもマッカ時代、多神教徒たちと預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）、ムスリムたちはキリスト教徒であるビザンチンの人々とゾロアスター教徒であったササン朝ペルシアの人々との間の戦いを注視していた。その戦いは次のようなものであった。ササン朝ペルシアは六一一年にアンタキアを、六一四年にはエルサレムを、そして六一九年にはエジプトを占領した。マッカの多神教徒たちは自分たちに近い多くの神を信じるササン朝ペルシアの人々がキリスト教徒であるビザンチンに勝利したことを喜んだ。反対にムスリム側はその結果に落胆した。多神教徒たちは勢いにのり、ゾロアスター教徒のイラン人が啓典の民であるキリスト教徒に勝利したように、自分たちもイスラーム教徒に勝利するであろうと口にするようになっていた。だが、そこでクルアーンのローマ章が啓示され、数年後にはビザンチンが勝利をおさめるであろうことが明らかにされたのである。ムスリムたちはクルアーンのこの吉報をたいへん喜んだが、多神教徒たちはそれを信じなかった。

そんなあるときアブー・バクルと多神教徒のウバイ・ビン・ハラフは口論になり、ビザンチンが九年以内にササン朝に勝利すればウバイがアブー・バクルに百頭のラクダを与えることになった。実際、その数年後、ヘラクレイオス

率いるビザンチン軍がササン朝を撃破した。西暦六二二年から六二七年の間に、ビザンチン軍はアゼルバイジャン、アルメニア、そしてグルジアを占領し、メソポタミアに侵入してきたのである。そして彼らはタブリーズではゾロアスター教の神殿を破壊し、最初の勝利をバドルの戦いの時期に、最後の勝利はフダイビーヤ条約が締結される数ヵ月前に挙げている。ビザンチンがササン朝に勝利したときには、ウバイはすでに死去していた。アブー・バクルは彼の遺産相続人から百頭のラクダを得て、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の命令に従いそれを貧しい人々に分配したのであった。

マディーナには預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が聖遷を行った当時、それほど多くのキリスト教徒がいたわけではなかった。ただ、マディーナにはアブー・アーミル・アル＝ラヒブトという名の、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が「大罪を犯した者」と呼んでいた一人の牧師がいた。この牧師は聖遷ののちマディーナを離れマッカに移住し、そこで多神教徒たちと盟友関係を結び、ウフドの戦いで彼のもとに集まった人々と共にムスリムたちと交戦している。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はフダイビーヤ条約ののち、多くの国家の長に、そして当時キリスト教徒であったビザンチン、エジプト、エチオピアの支配者にも、彼らをイスラームへと招く書簡を送っている。ビザンチンの皇帝ヘラクレイオスはイスラームに関心を抱き、エジプトのムカウクスはムハンマド（彼の上に平安あれ）の使者に友好的な態度で接し様々な贈り物をしている。エチオピアの皇帝はイスラームに入信したとも伝えられている。

さらにムハンマド（彼の上に平安あれ）はハーリス・ビン・ウマイル・アル＝アズディに一通の書簡を託しビザンチン領のバスラに派遣している。ハーリスはムータ到着直後、ビザンチンの知事であったシュラフビル・ビン・アムル・アル＝ガッサーニによって捕えられ殺害された。ハーリスは預言者の使者の中で殺害された唯一の人物となった。その出来事はムハンマド（彼の上に平安あれ）をこの上なく悲しませた。

ビザンチンの人々とムスリムの間で何百年も続くことになる武力衝突はムータの戦いによって始まった。ヒジュラ暦八年のラビーウ・アル＝アウワル月、カアブ・ビン・ウマイル・アル＝ギファーリーらの十五人の一団が、人々をイスラームに導くため、バルカーまで一晩の距離に位置するザートゥ・アトゥラハ地方へと派遣された。しかし一行は弓矢による攻撃を受け、ほぼ全員が殉教したのである。負傷しつつも一命をとりとめたカアブはただ一人マディーナに生還した。この出来事にたいへん心を痛めた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、彼らに軍を差し向けようとしたが、そこの住民が他の地域に避難したことを知り断念した。[467]

b　ムータの戦い（ヒジュラ暦八年・西暦六二九年）

一方で先に述べた殉教者ハーリス・ビン・ウマイルやザートゥ・アトゥラハ地区で殺害されたムスリムたちが受けた法的な権利の侵害に報復するため、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は三千の兵を招集し、その司令官としてザイド・ビン・ハーリサを任命した。彼はまたザイドが戦死した場合はジャーファル・ビン・アブー・ターリブが、ジャーファルも戦死した場合にはアブドゥッラー・ビン・ラワハーが司令官となること、アブドゥッラーも戦死した場合には人々の中から司令官として誰かを選出すること、そして使者のハーリスが殺害された地点まで行軍することを命じた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は軍をサニヤットゥ・アル＝ワダーまで見送り、ムスリムたちに地域の住人たちをイスラームに招くこと、そして彼らがイスラームを受け入れた場合は戦わず、そうでない場合はアッラーに庇護を求め彼らと戦うようにと指示した。[468] さらにムスリムたちに約束は守り、行き過ぎた振舞いをしないこと、子供や女、老人、そして宗教施設に逃げ込んだ者を殺さないこと、ナツメヤシの果樹園を荒らさないこと、木々を切ったり建物を破壊しないことなどを命じた。[469]

イスラーム軍がマディーナを離れ、北方へと移動しているのを知ったシュラフビル・ビン・アムル・アル＝ガッサーニは弟のサドゥースを軍と共に派遣した。そこで起きた戦いによりサドゥースは戦死し、シュラフビルは恐れをなして砦にたてこもった。ムスリムたちはさらに進軍を続けマーンにまで至り、そこに陣営を設けた。その時点でビザン

チン皇帝ヘラクレイオスが、バリー族のマーリク・ビン・ザーフィラを司令官とするバフラー族、ワリー族、バクル族、ラフム族、ジュザーム族といったアラブの各部族からなる十万の軍と共にマーンに到着したとの報告が入った。ムスリムたちはマーンに二日間滞在し、その事態にどう対処すべきか協議を重ねた。一部の者はビザンチンが大軍を送ってきたことを預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に報告し、彼の指示を待って行動すべしと言った。アブドゥッラー・ビン・ラワハーは兵士や武器の多寡は重要ではないと例を挙げて語った。そして戦う必要があること、勝者となるか、殉教者となるかのどちらかであると説いた。その結果、戦うことが決定された。マーンを出発したイスラーム軍は、戦いの場となるムータに向かって進軍し臨戦態勢に入った。

戦闘でザイド・ビン・ハーリサが亡くなったことにより、軍の旗はジャーファル・ビン・アブー・ターリブが掲げた。彼も勇敢に戦ったのち戦死を遂げ、旗はアブドゥッラー・ビン・ラワハーが掲げた。彼も戦死を遂げるとムスリム軍の旗はハーリド・ビン・ワリードが持つこととなった。ハーリドは旗を手にするとすぐに敵に攻撃を仕掛けた。日が暮れかかっていたにもかかわらず、彼がとったこの行動は人々を奮い立たせた。イスラーム陣営の左翼の司令官であったクトゥバ・ビン・カターデは、キリスト教徒のアラブ人司令官マーリク・ビン・ザーフィラを殺害した。ムスリムたちはハーリド・ビン・ワリードの周囲に駆けつけ多くの敵兵を倒した。戦闘は夜になってやっと終息した。

ハーリド・ビン・ワリードは敵軍が数において勝っていることを考慮し、特殊な戦術をとることにした。軍の右側にいた兵士たちを左側に、左側にいた兵士たちを右側に、前にいた兵士たちをうしろに、うしろにいた兵士たちを前に移動させた。それによって、ムスリムたちは敵軍が夜のうちに援軍を得たのだと思うように仕向けたのである。そもそも彼の本当の目的は、敵の闘争心に打撃を加え、その攻撃によって敵を怖気づかせムスリム軍を全滅から救い、無事に帰還させることにあった。敵軍は翌朝、様子の一変したイスラーム軍を見て驚き、大きな打撃を受けた。そこにイスラーム軍は短期決戦を仕掛け、深追いすることなくすぐに退却を始めた。敵軍にはもはやイスラーム軍を追撃する気力は残っていなかった。ハーリドが自分たちを砂漠に誘い込み、そこで戦おうとしているのではないかと疑った。

そうして両軍の距離は開き、イスラーム軍はマディーナへと無事帰還することができた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）とマディーナのムスリムたち、さらには子供たちまでもがわざわざジュルフに出向き彼らを迎えた。だが一部の人たちは彼らを逃亡者たちと呼び冷たく接した。そのためムータの戦いから生還した勇者たちは、自らを逃亡者と恥じるあまり家から出られなくなってしまった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は決して彼らが逃亡者ではないと人々に告げ、彼らをクッラール（退却しては何度も突き進む者）と呼び称えた。そして彼らに使者を送り、彼らが逃亡者ではなくクッラールであることを知らせたのである。[470]

諸文献にはムータの戦いはビザンチン軍の敗北によって終焉したという記述もあれば、[471]ムスリム側の敗北であったと記しているものもある。[472]ただこの戦争は、ハーリド・ビン・ワリードが戦った地域での敵軍の敗北、ムスリム側の出した戦死者が少数であったことからある意味で成功であった。ビザンチン軍は完全に敗北したわけではないが、ムスリムにとっては一つの勝利として決着をみたと考えるべきであろう。そのことはムハンマド（彼の上に平安あれ）が示した評価からも理解できる。

ムータの戦いによってハーリド・ビン・ワリードとムスリムたちは、ビザンチン軍と彼らの戦術や武器を詳しく知ることができた。その経験はその後の遠征に役立つこととなった。さらに、シリアとパレスティナのアラブ人たちはムスリムの信仰の強さと勇敢さを目にし、彼らの存在を認め始めていた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの戦いで、ハーリド・ビン・ワリードに「アッラーの剣」という称号を与えている。[473]

ムスリムたちはこの戦いで、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の親戚たち、イスラームのために重要な仕事を担ってきた人たち、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の親友であるザイド・ビン・ハーリサ、そして一年前にエチオピアから戻ったばかりのいとこジャーファル・ビン・アブー・ターリブ、そして偉大な詩人であったアブドゥッラー・ビン・ラワハーを失った。彼らを失ったことをムハンマド（彼の上に平安あれ）とムスリムたちは嘆き悲しんだ。[474]

c タブーク遠征（ヒジュラ暦九年・西暦六三〇年）

ビザンチンの皇帝やキリスト教徒のアラブ人の支援を得た一部のシリアの商人が、ムスリムと戦う準備を始めたという知らせがマディーナにもたらされた。それを受けて預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、エスラム族、グファール族、ジュハイナ族、アシュジャ族、シュライム族といった他のアラブの部族を加えた三万の軍を組織した。彼はいつもは遠征の目的をはっきりと明かすことはなかったが、そのときには目的がビザンチン軍討伐にあると宣言した。なぜなら道は遠く険しく敵は強大で、加えて天候も暑い時期だったからである。ナツメヤシは樹影を濃くし人々がその木陰でくつろぐことを好む季節であった。その遠征が行われたのはクルアーンの表現を借りるならば「困難な時」であり、そのためこの遠征は「困難な遠征」、その軍隊も「困難な軍隊」と呼ばれた。

次のクルアーンの言葉は、遠征を前にしたムスリムの心象風景をよく表している。

「信仰する者たちよ、あなたがたはどうしたのか。『アッラーの道のために出征せよ。』と言われた時、地に低頭するとは。あなたがたは来世よりも、現世の生活に満足するのか。現世の生活の楽しみは、来世に比べれば微少なものに過ぎない。あなたがたが奮起して出動しないならば、かれは痛ましい懲罰をもって懲しめ、他の民をあなたがたと替えられる。あなたがたは少しもかれを損うことはできない。本当にアッラーはすべてのことに全能であられる。たとえあなたがたがかれ（使徒）を助けず、不信心の者たちが、かれを追放しても、アッラーは必ずかれを助けられる。かれは、ただ一人（の同僚）と、二人で洞窟にいた時、その同僚に向かって『心配してはならない。アッラーはわたしたちと共におられる。』と言ったその時アッラーはかれの安らぎを、かれ（アブー・バクル）に与え、あなたがたには見えないが、（天使の）軍勢でかれを強められた。また不信者たちの言葉を最も低いものになされ、アッラーの御言葉を最も高められた。本当にアッラーは偉力ならびなく英明であられる。あなたがたは奮起して、軽くあるいは重く（備えて）出動しなさい。そしてあなたがたの財産と生命を捧げて、アッラーの道のために奮闘努力しなさい。もしあなたがたが理解するならば、それがあなたがたのために最も良い」[475]

一部の遊牧民は、この遠征に加わらないと宣告してきた。この件に関して啓示されたクルアーンの章句では、彼らがその遠征に加わらないことについて弁解するために預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れたこと、そして遠征に加わらなかったのは適切な行動ではなかったといった趣旨のことが次のように示されている。

「また（遊牧の）アラビア人の中からも、許しを求め（出征免除の）弁解に来た者があった。これらアッラーとその使徒を偽わる者は皆、（ただ家に）居残っていた。これら不信心の者は、やがて痛ましい懲罰を受けるであろう」[476]

同様に八十人の偽信徒たちが来て、実際には正当な理由もないのに偽りの弁解を述べ、遠征に加わらなくてもよいかとたずねた。それに対し許可を与えた預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に次のようなクルアーンの章句が下された。

「あなたがたは奮起して、軽くあるいは重く（備えて）出動しなさい。そしてあなたがたの財産と生命を捧げて、アッラーの道のために奮闘努力しなさい。もしあなたがたが理解するならば、それがあなたがたのために最も良い。もし間近かに利得があり、また征途も短いならば、かれらは必ずあなたに従ったであろう。だがかれらには、道のりが（余りに）遠いと思われた。間もなく、かれらは、アッラーにかけて誓う。『できることなら、あなたがたと一緒に出征したのだが。』かれらは自分の魂を滅ぼす者である。アッラーはかれらが、偽っていることを知っておられる。アッラーはあなた（ムハンマド）を許した。何故あなたは、真実を述べる者が、あなたにはっきりして、うそつきたちがわかる前に、かれら（がその家に留まること）を許したのか」[477]

このクルアーンの悔悟章ではタブーク遠征にまつわる偽信徒の態度や精神状態について言及している節もある。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は豊かなムスリムたちにタブーク遠征のための動物や食べ物を提供してくれるよう要請した。ウスマーンやアッバース・ビン・アブドゥルムッタリブ、アブドゥルラフマン・ビン・アウフのようなムスリムたちは多額の寄付を行った。アブー・バクルは四千ディルヘムの資金を、ウマルは財産の半分を寄付した。最大の寄付はウスマーンによるものであった。彼は自らの資金で軍の三分の一の装備を整えた。[478]

その一方で、涙を誘うような出来事も起きた。タブーク遠征に参加したいのに、貧しさゆえに自らが乗る動物や食べ物を用意することができない教友たちは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に申し出て、自分たちのための動物や食べ物を確保できないかと懇願した。この七人からなる人々は、自分たちの動物を確保することができず遠征に参加できないことがわかるとひどく悲しみ涙を流した。彼らはムスリムたちに「大泣きした人々」として記憶されることとなった。この七人についてはクルアーンの言葉が啓示され、彼らはそのことについて責任を負っていないこと、責任を負わねばならないのは豊かでありながら預言者から参加しなくてよい、という許しを引き出した者たちであることが明らかにされた。[479] こうした彼らの状況は何人かの教友たちを動かした。イブン・ヤーミーン・ビン・ウマイルとアッバース・ビン・アブドゥルムッタリブはそれぞれ二人分の、ウスマーンは残り三人分の動物や食べ物を用意し、彼らのイスラーム軍への参加を実現させたのであった。[480]

イスラーム軍はフザーア族のアルカマという道案内人を得て出発し、マディーナから七百七十八キロの遠方の地にあり、[481] シリアへの途上にあるタブークまで進んだ。そしてそこに陣地を設営した。ヘラクレイオスはそのときフムスにいたので、この遠征でイスラーム軍は敵軍と遭遇しなかったのである。したがって衝突も生じることはなかった。ビザンチン側がムスリムたちに対し軍を準備しているという事実はなく、マディーナにもたらされた知らせは正しくなかったのである。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はダマスカス方面に軍を進めるかどうかについて教友たちと協議した。ウマルは「もし進むようにアッラーから命じられておられるのであれば進むべきでしょう」と述べ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は「もしそのような命令を受けていればあなた方に相談することもなかったであろう」と答えている。それに対しウマルは次のような意見を述べている。「アッラーの使徒よ。ビザンチン側はとても数が多く、またそこには一人のイスラーム教徒も存在しません。あなたは彼らに接近しました。この接近は彼らを恐れさせたことでしょう。それがもし適切であると考えるのであれば、今回は軍を引きあげましょう。あるいは崇高なるアッラーが正しい知らせをもたらしてくださるでしょう」この意見を聞き入れたムハンマド（彼の上に平安あれ）はタブー

クより先には進まなかったのである。

タブーク遠征の折、その周辺の定住地に住む人々がイスラームの支配下に入っている。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、多くのキリスト教徒や少人数のユダヤ教徒が住むジャルバ、そしてアイラ（今日のアカバ）、アズルフ、マクナー、さらにマーンといった地方に一団を送り、彼らをイスラームへと招いた。キリスト教徒やユダヤ教徒の代表者たちはタブークに滞在中のムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとを訪れ、イスラームに入信はしないもののジズヤ（人頭税）を支払い自分たちもイスラーム共同体に属することを認めた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそうした内容を記載した契約文書を彼らと交している。さらにハーリド・ビン・ワリードの指揮のもと四百人の騎兵を戦略上の拠点であるドゥーマ・アル＝ジャンダルへと派遣している。その地でハーリドはキリスト教徒の支配者ウカイディル・ビン・アブドゥルマリクを捕え、ムハンマド（彼の上に平安あれ）のもとに連れてきている。ウカイディルは人頭税を支払うことを受け入れ、それによってその地もイスラーム国家の支配下に入り、ウカイディルはその身柄をドゥーマ・アル＝ジャンダルに戻された。

タブーク遠征を通し、啓典の民との結びつきに重要な意味を持つある点をここで示してみたい。この遠征の前後においてクルアーンの悔悟章のいくつかの節が啓示されている。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はタブーク滞在中に啓典の民たちに送ったイスラームへの招きの書状に悔悟章の第二九節を引用している。それにより啓典の民である人々にイスラーム教徒となることを勧めているのである。招きを受け入れるなら人々はイスラーム教徒となり、もし受け入れない場合は人頭税を支払うことが求められている。人頭税を支払うことを認めれば彼らはイスラーム共同体の一員とされ、その生命、財産、名誉、そして宗教、礼拝施設は国家の庇護を受ける。そして彼らはズィンミー（庇護民）と呼ばれることとなった。

イスラーム軍がマディーナに戻ったとき、人々は喜びのうちにワダーの丘に駆け登り、軍を迎えた。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は礼拝所に入り二ラカートの礼拝を行いそこに腰を下ろした。そこへタブークの遠征に参

加せずマディーナに残った八十人ほどの教友たちが来て一人ずつ許しを乞うた。預言者は彼らの申し立てに耳を傾け、その判断はアッラーに委ねることとした。ただ、遠征に参加しなかったカアブ・ビン・マーリク、ムラーラ・ビン・ラビー、そしてヒラール・ビン・ウマイヤの三人の教友は、遠征に参加しなかった正当な理由を述べることができなかった。その結果、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）やムスリムたちは五十日間彼らとの関係を絶つこととなった。その後彼らを許すという次のようなクルアーンの言葉が啓示された。

「後に残った三人に対しても（またかれは哀れみをかけられた）。大地はこのように広いのだがかれらには狭く感じられ、またその魂も自分を（内面から）狭めるようになった。そしてかれらは、アッラーに縋るほかにはかれ（の懲罰）から免れるすべがないことを悟った。すると（主は）哀れみをかけられ、かれらは悔悟して（かれに）返った。本当にアッラーは度々赦される方、慈悲深い方であられる」[482]

このように、正当な理由なくタブークの遠征に参加しなかったこの三人は、忘れていたとはいえ、預言者の命令に従わず、人々と共に行動しなかったことにより許しが出るまで関係を絶たれることになったのである。

d　ナジュランのキリスト教徒

ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者としての任務を受けた七世紀初頭には、マズハジュ族の支族であるハーリス・ビン・カアブ（バルハーリス）族が暮らしていたナジュラン地方には、多くのキリスト教徒たちが集団で住んでいた。「訪問団の年」として知られるヒジュラ暦九年（西暦六三〇〜六三一年）には、ナジュランのキリスト教徒たちは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）から受け取った書状に応えて集団でマディーナを訪問している。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの書状で彼らをイスラームに招き、もし受け入れない場合は人頭税を支払うこと、それも認めない場合は彼らと戦わざるを得なくなると告げていた。

ナジュランのキリスト教徒たちはその手紙に応じ、十四人の有力者を含む六十人の一団をマディーナへと派遣した。

そこにはナジュランの住民議会の長であるアブドゥルマシーフ、宗教上の指導者であるアブー・ハーリセ、そして交易や政治の統括者であるアル＝アイハムも含まれていた。

ナジュランからの訪問団は午後に預言者モスクに入った。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は教友たちと午後の礼拝を行ったばかりのところであった。キリスト教徒たちは彼らの崇拝行為の時間となったので東を向いて崇拝行為を始めた。一部の教友はそれをやめるようにと言った。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）は彼らの望むとおりにさせ崇拝行為を行うことを許した。そしてナジュランの人々を代表して話をしたアブー・ハーリセとアブドゥルマシーフをイスラームへと導いた。彼らは「私たちはあなた以前にムスリムとなっていた」と語り、それに対しムハンマド（彼の上に平安あれ）は「イスラームを受け入れる上で三つの事柄があなた方を妨げている。それは豚肉を食べていること、十字架を崇めていること、神に息子がいると信じていることだ」と答えた。ナジュランの人々はそれに、「では、イーサー（イエス）の父は誰だというのか」と応じた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの問いに対し、啓示を待つべく沈黙し、すぐさま返事をしなかった。そのとき、イーサーとキリスト教に関することが述べられているイムラーン家章の最初のいくつかの節が啓示された。イーサーについては第五九節で、アーダムの創造を例としてイーサーが父を持たずに誕生したことについての答えが与えられている。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はナジュランからの訪問団にイムラーン家章の五九節から六一節までを詠みあげたのち、彼らに「もしあなた方に語ったことを否定するなら、来なさい、あなた方と互いにムバーハラを行おう」と呼びかけた。ムバーハラとは宗教上の事項で、議論を尽くしても解決することができない場合に、双方のうち正しくない方が神の怒りを受けることになるようにとアッラーに願うことである。ここでのクルアーンの言葉は次のとおりである。

「（イーサーに関する）真実の知識があなたに下された後、もしかれについてあなたと議論する者があれば、言ってやるがいい。『さあ、わたしたちの子孫とあなたがたの子孫、わたしたちの妻たちとあなたがたの妻たち、わたしたち

とあなたがたを一緒に呼んで、アッラーの御怒りがうそつき者の上に下るように祈ろう。』」[483]
預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はファーティマ、ハサン、フサイン、そしてアリーを呼び、ナジュランのキリスト教徒たちと向かい合った。そして彼らにも互いにムバーハラを行おうと呼びかけた。この提案を受け、キリスト教徒たちは彼らの間で問題を検討したいと言ってきた。その結果彼らは、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であると知っており、ムバーハラを行わないことにした。そして自分たちの宗教に留まることを望んでいること、人頭税の支払いを受け入れることを明らかにした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）がこの申し出を受け入れたことから、ラジャブ月に千着、サファル月に千着、年に合計二千着の衣服を供出するという条件で条約が結ばれた。その後、条約を守らない者が出てきたので、ナジュランの人々を統治するためにアブー・ウバイダ・ビン・ジャッラをその地に派遣することとなった。[484]

このように預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代にキリスト教徒たちとの関係が緊迫したことによって、キリスト教徒たちがムスリムの使者や訪問団を殺害するという事態をもたらした。さらにキリスト教徒の住む地域からの進撃の知らせがたびたびもたらされ、マディーナは常に不安を抱えた状況にあった。したがってムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代に北方に対して行われた遠征の目的は、キリスト教徒たちが法律を破ったことへの処罰やキリスト教徒たちの攻撃に対する防衛にあった。実際、ムータ遠征やムハンマド（彼の上に平安あれ）自らが参加したタブーク遠征もそうであったが、北方に居住するキリスト教徒たちにやみくもな攻撃が仕掛けられることは一切なかった。それどころかタブーク遠征では平和的な方法でキリスト教徒の居住地のいくつかがイスラームの統治下に入っている。そしてキリスト教徒たちの安全も保障されたのである。もしムスリム軍が報復を目的としてそれらの地域に遠征していたとすれば、その地域でまた異なる事態が生じていたことであろう。結果として、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のキリスト教徒たちに対する政策は和平を実現することを大前提としていたことがわかる。それはナジュランのキリスト教徒への対応にもよく表れている。[485]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）、最後の日々とその死

一　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の晩年におけるイスラームの布教状況

ヒジュラ暦元年以降、部族単位でのイスラーム入信や戦役や遠征によって、イスラームが支配する地域は少しずつ拡大していった。バドルの戦いまでに起こった戦役や遠征によって、ムスリムたちはマディーナやその周辺、そしてマディーナから紅海に至る地域までを支配するようになった。バドルの戦いと塹壕の戦いの間の時期には、ムスリムの支配地域はマッカの近くにまで至っており、ムスリムはヒジャーズ地方最大の軍事力を持つ大きな集団となっていた。この段階でユダヤ教徒はマディーナから追放されていた。塹壕の戦いの後、ムスタリーク族がイスラームに帰依したことにより、ムスリムたちはヒジャーズの東部を支配下に治め、ハイバルの征服によってマディーナの北方にまで支配地域を広めていった。

ヒジュラ暦八年のマッカ征服により、アラビア半島に住む人々は急速にイスラームに入信していった。またタブーク遠征によってアラビア半島北部のキリスト教徒のアラブ人、そしてユダヤ教徒が住む諸地域がマディーナに従属することになった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はイスラームによる統治を実現するために、アラビア半島全域に軍隊を派遣する必要はなかった。ヒジュラ暦九年、そして一〇年には、アラビア半島の各地から様々な部族がマディーナをしばしば集団で訪れ、それまでイスラームの支配下にはなかった地域の人々もムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であることを受け入れ、彼の支配と勝利を認めるようになった。マディーナへ訪問団を送ったキンダ族、ムラード

族、ハムダーン族といった有力部族の入信によりイエメンが、アズド族の入信によりアンマンが、アブドゥルカユス族、タミーム族、アサド族の入信によりアラビア半島の東部と中央部がイスラームの土地となった。イスラームに入信し、ザカートを支払い、その他の責任も果たしていくことは、マディーナ政権への従属を示す上で十分なことであった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれらの諸地域との間で定期的に交流し、知事や教師、徴税役人などを派遣していった。

二　別れの巡礼（ヒジュラ暦一〇年・西暦六三二年）

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラ暦八年のマッカ征服の後、巡礼の時期を待つことなくマディーナに戻った。マッカ征服以前には、そもそも巡礼は義務とはされていなかった。ヒジュラ暦九年に巡礼は義務とされたが、その年にムハンマド（彼の上に平安あれ）は巡礼を行わず代わりにアブー・バクルを巡礼団の団長としてマッカに派遣した。

ヒジュラ暦一〇年にムハンマド（彼の上に平安あれ）は巡礼の義務を果たしている。彼のこの巡礼は、教友たちとの別れとなり、その後二度とカアバ聖殿を見ることがなかったという意味で、「別れの巡礼」と呼ばれている。ムスリムたちに巡礼の崇拝行為に関するすべての規範を教え、それを実践してみせた巡礼でもあった。巡礼が義務とされてからムハンマド（彼の上に平安あれ）にとって最初の巡礼であったことから「イスラームの巡礼」といった名前もつけられている。しかし彼のこの巡礼は「別れの巡礼」としてのちのち有名となった。最後の巡礼の形式についてはいくつかの異なる伝承がある。一部の伝承では「ハッジ・アル＝タマットゥ」、もしくは「ハッジ・アル＝キラーン」を行ったとされているが、他に「ハッジ・アル＝イフラド」を行いイフラーム（巡礼中の禁忌遵守の状態）に入ったとも伝えられている。[486]

ヒジュラ暦一〇年のズ・アル＝カアダ月に預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は巡礼の準備を始めた。それを知ったムスリムは自分たちも準備を行うことを望んだ。ムハンマド（彼の上に平安あれ）と共に巡礼を行うことを望んだ人々はマディーナに集まってきた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はズ・アル＝カアダ月の二六日、西暦六三二年二月二二日の土曜日に、妻たちや娘のファーティマを連れ、移住者やアンサールたち、その他のアラブの各部族から成る大勢のムスリムたちと共にマディーナを出発した。犠牲として屠るための百頭のラクダも連れていた。一行はズルフライファの地に到着すると、そこで昼の礼拝を行い、同じ日に定められた巡礼のための白い衣服に着替えた。[487] ズフル（昼）の礼拝をマディーナで、アスル（午後）の礼拝をズルフライファで行ったとも言われている。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が最後の巡礼に向かったときのルートは次の通りである。ズルフライファ、バイダー、メラル、ウルクッザビア、ラウハー、アルジュ、スクヤー、アブワー、ジュフファ、ガディーリフム、クダイドゥ、ウスファーン、ガミーム、マッルザフラーン、サリフ、そしてズィー・トゥワーである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ズ・アル＝ヒッジャ月の四日の日曜日にマッカに到着した。まずカアバ聖殿の周回を

アラファトのラフマ山に立つ巡礼者たち

ミナーのテントに滞在する巡礼者たち

行い二ラカートの礼拝を捧げた。そしてサファーとマルワの間を行き来するサーイを行った。[488] 別れの巡礼の間は、アブターフの地に用意された天幕を宿とした。そして木曜日までマッカに滞在した。同日、ミナーに向けて出発し、その地で昼と午後、日没と夜の礼拝を行った。そこで一夜を過ごし、翌朝、礼拝を行ってから太陽が昇るまでそこに滞在した。アラファトのナミーラ地区に天幕を張るように命じ、その後ミナーを出発し、ムズダリファを通り金曜日にアラファトに用意された天幕に到着し、そこを宿とした。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は正午過ぎ、天幕から出てラクダに乗り、アラファト谷の中心部に至った。そしてウラナの谷間で有名な「別れの説教」を行った。一度アザーンを詠ませ、別々にイカーマ（アザーンの後に行われる礼拝の開始を知らせる呼びかけ）を行って正午過ぎと午後の礼拝を同時に行った。その後ラクダに乗ってアラファト山に登った。そしてキブラに向かい、アラファトの野で夜までドゥアー（祈り）をして過ごした。アラファト滞在中、次のようなイスラームの教えを伝える義務を完遂したことを告げるクルアーンの言葉が啓示された。[489]

「今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなた

がたのための教えとして、イスラームを選んだのである」[490]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は日没後、ラクダに乗ってアラファトを後にし、ムズダリファに入った。そして夜の礼拝の時間に、日没の礼拝と夜の礼拝を同時に行った。昼の礼拝のときと同様、一度のアザーンとそれぞれのイカーマが唱えられたのち礼拝は行われた。その夜ムハンマド（彼の上に平安あれ）はムズダリファで過ごした。そして翌朝、つまり土曜日、犠牲祭の一日目の朝の礼拝をムズダリファで行った。小さな石を七つ投げた後、ミナーに向かった。その地で再びラクダに乗ったまま説教を行った。そして準備してきた百頭のラクダのうち六十三頭を、ムハンマド（彼の上に平安あれ）は自らの人生の一年一年になぞらえて屠った。ちなみに残りのラクダはアリーが屠っている。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は屠られた動物の肉をひとかけら食べた後、残りの肉をムスリムたちに分配した。[491]その後頭髪をそり、巡礼の衣服を脱いだ。そしてカアバ聖殿に向かい、周回と正午過ぎの礼拝を行った。その後再度ミナーに戻り、犠牲祭の日々をその地で過ごした。大祭の二日目に、ムスリムたちに三度目の説教を行い、五日目にミナーから再びマッカに戻り、別れの周回を行ったのち、マディーナへと戻った（ヒジュラ暦一〇年ズ・アル＝ヒッジャ月二十九日・西暦六三二年三月二十六日）。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）がズ・アル＝ヒッジャ月の九日、西暦六三二年三月六日の金曜日に、十四万もの人々を前にしてアラファトで行った説教を以下に紹介する。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はジャリール・ビン・アブドゥッラーに命じ人々を静かにさせ、[492]ラビーア・ビン・ウマイヤのような声の大きな者を選んで自らの言葉を繰り返させ、声が遠くまで届くようにして説教を始めた。

感謝はアッラーに対し行われるものです。私たちはそのお方に感謝し、そのお方に助けを求め、そのお方に許しを乞い願い、そのお方に向かわねばなりません。我欲の災いから、行動の邪悪さからアッラーに庇護を求めます。アッラーが誰かを正しい道に導いて下さったのならば、その人が道を逸れることはないでしょう。誰かを誤った道に送られた

ハッジ（大巡礼）のときマッカのマスジド・アル＝ハラームで礼拝に立つ巡礼者たち

マディーナに到着した巡礼者たち

のであれば、その人を正しい道に導ける人は誰もいないでしょう。アッラー以外に神はなく、アッラーは唯一であられること、そのお方に比類するものは存在しないことを私は証言します。そしてムハンマド(彼の上に平安あれ)はアッラーのしもべであり、その使徒であることを証言します。

アッラーのしもべたちよ、最もよく尊い次の言葉で話を始めたい。アッラーを畏れ慎みなさい。そして崇拝行為に励みなさい。だから、人々よ、注意して私の話に耳を傾けなさい。この年の後、私はここであなた方の中に再びいられるかどうかわからないのだから。

人々よ、あなた方の血(人生)、財産、尊厳、誇りは、あなた方がアッラーにお目にかかるその日まで、まさに、この土地(マッカ)、この月(ズ・アル＝ヒッジャ)、この日のように、神聖で尊いものなのです。注意してください。私は伝えましたか。アッラーよ、あなたが証人となってください。

あなた方に託されたものを、正当な所有者に返しなさい。

イスラーム以前の時代に存在した利子はもはや廃止されました。しかしあなた方が貸した元金はあなた方のものです。こうして人を苦しめることもなければ苦しめられることもないでしょう。アッラーは利子の撤廃を決定されたのです。最初に撤回された利子は、アブドゥルムッタリブの息子であり私の叔父であるアッバースの利子です。

またイスラーム以前の時代の血の裁きは撤廃されました。私が撤廃させる最初の血の裁きは、甥のアーミル・ビン・ラビーア・ビン・ハーリス・ビン・アブドゥルムッタリブのものです。イスラーム以前の時代のマッカに関する管理

業務は廃止されました。カアバ聖殿の保全と巡礼者への水の補給を除いて。

故意に人を殺害した場合、自分が行ったのと同じ形で刑を受けます。石による殺害か棒による殺害かはっきりしない場合は百頭のラクダを賠償金として支払うことになります。それ以上のものを要求する人がいれば、それはイスラーム以前の時代の人間です。注意してください。私は伝えることができましたか。アッラーよ、あなたが証人となってください。

人々よ、シャイターン（悪魔）に気を付けなさい。自分にこの国であなた方を崇拝行為に誘い込む力がないことを知っています。だがシャイターンは、自分が仕掛けた日常の些細なことであなた方を悪しき方へと誘惑することを喜ぶのです。

人々よ、ナシー（神聖なハラームの月に、それ以外のもう一つの月をつけ加えること）を適用することは不信心者たちの間において、行き過ぎたものとなりました。不信心者たちは逸脱しているのです。彼らはそのひと月を、ある年には神聖ではない月（すなわちハラームの月ではない普通の月）と見なし、その次の年においてはハラームの月（すなわちハラームの月に含まれる神聖な月）と見なしています。そのねらいは、アッラーがハラームの月であるとされた月が次々と継続していくことを見かけ上維持し、アッラーがハラームの月には含まれないとした月もその中に（すなわち神聖な月の中に）含まれるように見せかけることです。そうすることによって彼らは、アッラーがハラールとされた月をハラームとしようとしているのです。いまの時間（暦）は、アッラーが天と地を創造された日のように戻ることになります。

創造の日に定められたところによるならば月の数は十二です。その中の四つの月がハラームの月です。その四つの月のうち三つの月は連続しています。それは、ズ・アル＝カアダ月、ズ・アル＝ヒッジャ月、ムハッラム月です。残

りのひと月がラジャブ月で、それはジュマーダ・アル＝サーニー月とシャアーバーン月の間に存在します。注意してください、私は伝えることができましたか。アッラーよ、あなたが証人となってください。

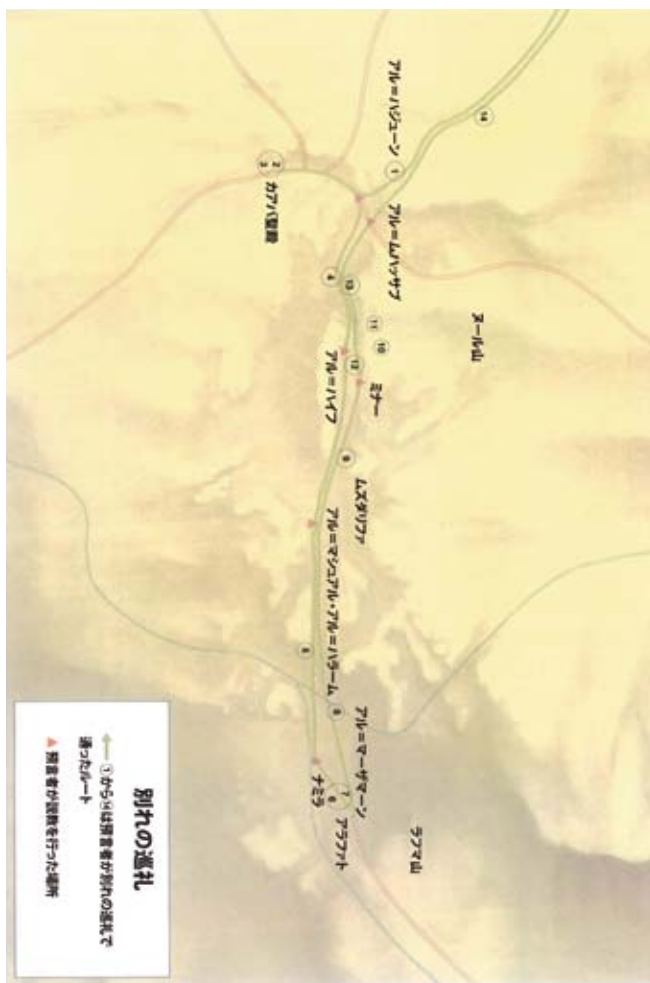
人々よ、あなた方は女性たちに対して権利を持っており、女性たちもあなた方に対して権利を持っています。あなた方が持っている権利とは、彼女たちに不義を働かせず、あなた方の望まない人をあなた方の許可なく家にあげさせないことです。女性たちには最善の態度で接してください。なぜなら彼女たちはあなた方の庇護、保護のもとにいる人々だからです。あなた方は女性たちを、アッラーからの信託として娶ったのです。女性たちへは、アッラーの名において許された道で近づきなさい。女性たちにはアッラーを畏れ謹んで振舞いなさい。最善の態度で接し振舞いなさい。注意してください。私は伝えることができましたか。アッラーよ、あなたが証人となってください。

人々よ、信徒たちは皆兄弟です。人として、その兄弟の財産に手をつけることは、その人の承認を得ない限り許されないことです。注意してください。私は伝えることができましたか。アッラーよ、あなたが証人となってください。

私が去った後、教えへの憎悪へと道を誤り、互いを殺し合うような状況に陥らないでください。注意してください。私は伝えることができましたか。アッラーよ、あなたが証人となってください。人々よ、あなた方の神は唯一であり、あなた方の祖先も同一です。あなた方は皆アーダムの子孫なのです。アーダムは土から創造されました。アッラーのもとでアラブ人はアラブ人でない者に対し、アラブ人でない者はアラブ人に対し、何の優越性も持っていないのです。優越があるとすれば、それは篤信によるものなのです。注意してください。私は伝えることができましたか。アッラーよ、あなたが証人となってください。

今日ここにいる人は、ここにいない人たちに私の言葉を伝えてください。

人々よ、アッラーは確かに、相続人の遺産からの受け取り分を定められました。したがって遺産相続人は、他の相続人の受け取り分を奪うことはできません。遺産のうち、他者のために遺言を残す場合は、残される財産の三分の一以上であってはいけません。子供は、生まれた寝床のある人の子となります。父親以外の誰かに属するものであると主張する者、あるいは自分の主人以外の者を主人とする者に、アッラーと天使とすべての人々の呪いがありますように。このような人の崇拝行為は、義務であるものも、義務でないものも受け入れられないでしょう。そして、あなた方の上に平安がありますように。[493]

別れの説教は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の思い、考え

方、そして生涯にわたる活動の最高点に位置するものである。人が持っている権利と義務を明らかにしたこの説教は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がその三ヵ月後に亡くなったこともあり、のちのちまで大きな影響を及ぼしている。そして、それはムハンマド（彼の上に平安あれ）の遺言と位置づけることもできよう。その内容は、アッラーの唯一性、アッラーへの服従、信託への誠実さ、利子の禁止、生命や財産、名誉の保全、血の裁きの廃止、カアバ聖殿の保全、巡礼者への水の提供を除くイスラーム以前の時代の務めの撤廃、ナシーの廃止、ハラーム月遵守の厳格化、配偶者相互の権利、信徒は互いに兄弟であること、信徒は仲間割れや衝突を避けること、殺人罪や遺産などに関する法的な事柄などである。

この説教は人類すべてを包括する普遍的な教えとなっている。実際預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、その説教をアッラーへの感謝を述べたのち、「人々よ」という言葉で始めている。そのようにして教友たちの注意を喚起しながらも、実はムスリムだけではなくすべての人々に語りかけているのである。そして、人の生命と財産、名誉を神聖にして不可侵のものであると宣言したことは、彼がいかに人の生命や財産、名誉や尊厳を守ることに大きな価値を置いていたかを示すものである。イスラーム以前の時代の血の裁きが廃止されたことを、明確な言葉で告げている。それによって人としての権利や社会的公正さや安全が確保されたのである。対立や憎しみではなく兄弟愛を築こうとしたのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は利子や血の裁きを廃止するにあたり、まず自らの近親者から実践していった。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は人々を導く神が同一であり、同じ母と父の子孫であること、そしてすべての人々は言語、皮膚の色、民族の区別なく等しい存在であると断言している。本来、クルアーンがこの点について示している根本的原則もこのとおりである。それから、家庭の基本となる夫や妻の権利についても言及している。

一言でいうなら、別れの説教において預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、人間にとって不可侵の権利、すなわち生きる権利、財産の権利、居住の権利、社会の平和、平等、遺産、家庭のあり方など多岐にわたる法について語っ

ているのである。

三　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の死の直前の出来事

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が別れの巡礼からマディーナへと戻った後、イエメンではアスワド・アル＝アンシーが自らの所属するアンス族やマズヒジュ族の支援を受け、自分は預言者であると名乗り出ていた。それに異を唱えた知事のシャフル・ビン・バーザーンを殺害し、彼の妻アーザドを無理やり自分の妻とし、その地を支配するようになった。その出来事を知ったムハンマド（彼の上に平安あれ）はアスワドをイスラームに招くために、教友ジャリール・ビン・アブドゥッラーをイエメンに派遣した。だがそれに対するアスワド・アル＝アンシーの答えは否定的なものであった。その後、その地の有力者たちはアスワドの暗殺を企て、妻アーザドの協力もあって彼の殺害に成功した。それは預言者が亡くなる五日前のことで、その知らせがマディーナに届いたのはアブー・バクルの治世に入ってからのことであった。

ヒジュラ暦一〇年、キリスト教徒と多神教徒から成るハニーファ族は、マディーナに一団を送りイスラームを受け入れた。しかしその年の終りに、ハニーファ族のムサイラマという人物がイエメンで自分は預言者であると名乗りを挙げた。彼はハニーファ族の代表者たちと共にマディーナを訪れ、イスラームに入信していた人物であったが、イエメンに戻るや自分は預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）と同じ預言者であると主張するようになったのである。そこでムハンマド（彼の上に平安あれ）はムサイラマに手紙を書き、それをアムル・ビン・ウマイヤに持たせ、再度彼をイスラームへと招いた。ムサイラマはその返事で、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に共に預言者となることを提案し、地上の半分を自分のもの、残りの半分をクライシュ族のものにすると主張した。それに対しムハンマド（彼の上に平安あれ）は再度返事を送り、地上のすべてはアッラーのものであり、アッラーのしもべの中から望む者を自

らの後継者とするであろうと告げている。[494] ムハンマド（彼の上に平安あれ）が亡くなったのはそうしたやりとりの最中のことであった。[495]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラ暦一一年のサファール月（西暦六三二年三月）の下旬、ザイド・ビン・ハーリサとジャーファル・ビン・アブー・ターリブが戦死したムータの戦いの失地回復のためビザンチン帝国への遠征を決めた。そして、遠征軍の司令官に年長の経験豊富な教友たちと共に当時まだ十八、九歳の若者であったウサマ・ビン・ザイドを任命した。[496] ウサマが軍を整えた二日後、ヒジュラ暦一一年、サファール月の二十九日（西暦六三二年五月二十七日）水曜日にムハンマド（彼の上に平安あれ）は病を得たが、翌朝彼の体調は持ち直し自らウサマに軍旗を手渡した。そしていくつかの助言を行った。すなわち、約束を果たすこと、子供たちや女性たちを殺害しないこと、無用な衝突を避けることなどを伝え見送った。ウサマはマディーナ近郊のジュルフという地に司令部を置き兵を集めた。その軍には、アブー・バクル、ウマル、アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラフ、サアド・ビン・アブー・ワッカスといった有力な教友たちがいた。一部の教友はウサマがまだ若く経験も少ないことから、彼は司令官としてふさわしくないのではないかと批判していた。それを耳にしたムハンマド（彼の上に平安あれ）は土曜日にその地の礼拝所に赴き批判に答えた。ウサマを司令官に任命したことでいくつかの異議が彼のもとに届いていること、以前ウサマの父を同じように司令官に任命したときにも同様な異議を唱える者がいたこと、だが彼は司令官にふさわしい行動をとったこと、したがってウサマも司令官にふさわしい行動をとるに違いないと話したのである。[497]

四　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の死

ビザンチンへの遠征を前にして預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の症状が悪化したことから、ウサマはなかなか出発の決断ができずにいた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）には頭痛と高熱の症状が続いていた。だが高熱に

よる発作に苦しんでいたときですら、シリア遠征のことを考えていた。彼は病の中で「アッラーはしもべである私に、この世とアッラーとの出会いのいずれを選ぶか委ねられた。そして私はアッラーとの出会いを選んだのです」と語った。アブー・バクルはこの言葉が意味するところと、そのしもべがムハンマド（彼の上に平安あれ）その人であることを理解し、「我々自身も財産も子供たちもあなたに捧げます」と言って涙を流した。それを見たムハンマド（彼の上に平安あれ）は、「泣くな、アブー・バクルよ。友情と財産を捧げるという点で最も私を助けてくれたのはお前なのだ。ウンマ（イスラーム共同体）の中から親友を一人選ぶとするなら、アブー・バクル、私はお前を選ぶだろう。だがイスラームにおける兄弟愛はもっと尊いものなのだ」と語った。そして、アブー・バクルの扉を除く、預言者モスクの庭に面したすべての扉を閉じるように命じた。なぜならアブー・バクルほどイスラームに貢献した人を私は知らない、とムハンマド（彼の上に平安あれ）はその理由を述べた。[498]

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は病に倒れてからも、体調が良いときには自ら礼拝を導き、体調がすぐれないときには「人々に命じて、礼拝を行わせなさい」と話していた。[499] 礼拝に立つことができないほど症状が悪化したときには、アブー・バクルに礼拝を導くように命じた。アーイシャは父が細やかな心を持ち、クルアーンを読みながら涙を流していること、本来ムハンマド（彼の上に平安あれ）が立つべき場所に自分が立つことに父は耐えられないでいることを訴え、その役割をウマルに与えるようにと求めた。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）は繰り返し、「アブー・バクルに言いなさい、礼拝を導くように」[500] と命じた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が病の床に伏してから、アブー・バクルが少なくとも十七回礼拝を導いたと伝えられている。アーイシャの部屋で最後の日々を過ごしたムハンマド（彼の上に平安あれ）は、ある日の昼過ぎ、症状が若干軽くなったと感じ、アッバースとアリーに助けられて礼拝所に向かった。そのとき、人々は礼拝の最中であったが、アブー・バクルはムハンマド（彼の上に平安あれ）が入ってきたことを知り、礼拝を導く場を彼に譲ろうとした。しかしムハンマド（彼の上に平安あれ）はそのまま礼拝を続けるようにと言い、アブー・バクルのそばで礼拝を捧げたのである。

月曜日、朝の礼拝ののち、アブー・バクルは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の症状が軽くなっていることに気がついた。そこで彼から許可を得て、一旦スンフ地区にある自宅へ帰った。また他の教友たちもそれぞれ仕事に出かけた。ところがその間にムハンマド（彼の上に平安あれ）の症状が急変したのである。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は息を引き取る前、奴隷たちによく振舞い彼らの衣食の世話をして優しい言葉をかけること、そして礼拝を続けるようにと言った。[501] アーイシャが伝えるところによると、彼は死の間際「ラー・イラーハ・イッラッラー（アッラーの他に神はなし）、魂をお返しするとはどのようなことであろうか」と呟き、何とか聞こえる程度の小さな声で「偉大なるわが神と共に」と最後の言葉を発した。[502] ムハンマド（彼の上に平安あれ）は妻アーイシャの腕に抱かれ、ヒジュラ暦一一年ラビーウ・アル＝アウワル月の十四日（西暦六三二年六月八日）月曜日の午前、その魂をアッラーにお返ししたのである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の死はイスラーム教徒たちを深く悲しませた。彼は本当に亡くなったのかと尋ねる人々や、[503] 彼の死が信じられないという人々もいた。ウマルは剣を抜くや、「彼は死んでなどいない、彼が死んだなどと言う者の首ははねてやる」と言い立てた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が亡くなったときスンフ地区の自宅にいたアブー・バクルは、彼の死を耳にしムハンマド（彼の上に平安あれ）のいる部屋に駆けつけた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の顔を見て彼の死を認めたアブー・バクルは、目から涙を流しながら「あなたにすべてを捧げます。アッラーに誓って言いますが、死はもう二度とあなたを訪れないでしょう。運命づけられていた死を、あなたはもう味わったのです。あなたは生きていたときも美しかった、死んでからも美しい」[504] となきがらに語りかけた。そしてアブー・バクルは外に出て、毅然とした態度でムハンマド（彼の上に平安あれ）の死に困惑している人々を落ち着かせた。喚くウマルを黙らせたのち、アッラーへの感謝とムハンマド（彼の上に平安あれ）への祝福祈願を行い、次のように歴史に残る演説を始めた。

「人々よ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）を崇拝する者がいるとすれば彼は知るべきだ、ムハンマド（彼の上に平

安あれ）は亡くなったのである。アッラーを崇拝する者は、彼が生き続け不滅であることを知っている。アッラーは『ムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者にすぎない。彼以前にも多くの預言者たちが遣わされた。彼が死ねば、あるいは殺されれば、あなた方は去っていくのか。誰が去っていこうともアッラーには何の害もない。アッラーは感謝する者に報奨を与えられる』[505]とおっしゃっている」

アブー・バクルのこの言葉は人々を冷静にした。[506]その後、アブー・バクルとウマルは預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の近親者と共に預言者のなきがらのある部屋に入っていった。その折、アンサールたちが後継者を選ぶためにサーイダ族の地に集まっているとの情報がもたらされ、彼らはその地に赴いた。そこでカリフに選ばれたアブー・バクルは翌日、預言者モスクで誓いの言葉を述べた。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）のなきがらを洗ったのはアリーであった。アッバースが息子たちと共に彼を助けた。火曜日の昼近くになって、清められ白布で包まれたなきがらは、家にあった板の寝床に置かれた。ムスリムたちは部屋に入られるだけの数ごとにまとまり男性、女性、子供たちの順で、イマーム（礼拝を導く人）不在のまま葬儀の礼拝を行った。[507]そのとき、ムハンマド（彼

預言者とアブー・バクル、そしてウマルが葬られたラウダ・ムタッハラ

の上に平安あれ）の埋葬場所について意見の不一致が生じた。預言者モスクに埋葬すべきという意見と、墓地に埋葬すべきという意見に分かれたのである。アブー・バクルは、「かつて、『魂を返した預言者たちは亡くなった場所にのみ埋葬される』と話されているのを聞いた」と明かし、その問題を解決した。すなわち、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が亡くなった場所であるアーイシャの部屋に埋葬することに決まったのである。[508] 墓はアブー・タルハー・アル＝アンサールが掘った。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は死の翌日の火曜日に埋葬された。

のちにアブー・バクルやウマルもムハンマド（彼の上に平安あれ）のそばに埋葬された。その墓はキブラの方向に向けられており、アブー・バクルの頭がムハンマド（彼の上に平安あれ）の肩の線に、ウマルの頭がアブー・バクルの肩の線に合わせて埋葬されている。

五　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の遺産

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の遺産について述べる前に、まず彼の生活資金について触れてみたい。彼は子供時代から青年時代までは叔父アブー・ターリブの庇護のもとにあり、家計については主に交易に従事して叔父を助けていた。アブー・ターリブは交易の旅にムハンマド（彼の上に平安あれ）を同行させていたのである。[509]

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は経済的に豊かであった妻ハディージャと結婚した後も、交易に携わっていた。恐らく預言者となってからもマッカで交易を続けていたであろう。クルアーンにおける多神教徒の「これはどうした使徒だ。食べ物を食べ、町を歩き回るとは」[510] という言葉を勘案するなら、彼は布教しながら商取引も行っていたと考えられる。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は預言者としての任務に対しても、また国家の長としての任務に対しても、報酬を一切受け取っていなかった。クルアーンの多くの章では、彼が自らの任務に対し報酬を求めず、実際にそこから報

酬を得ていないことが述べられている。[511] マディーナ時代においても、彼は税金や任意のサダカとして集められた金銭を受け取ることはなかった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は常々、税金や喜捨による収入を受け取ることは、彼やその家族にとって許されたものではないと語っていた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生活資金の概要

ａ　ムハンマド（彼の上に平安あれ）はクルアーンの戦利品章第四一節によると、戦利品のうち五分の一を受け取っていた。このクルアーンの言葉からはアッラーと預言者の受け取り分は五分の一の中の五分の一、すなわち四パーセントとも見なされる。また同じ章句によると、参戦兵士として戦いに参加した兵士たちに分配される分け前も受け取っていた。この他ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、サフィーと呼ばれる、戦利品の分配前に司令官が勝利の証として自ら選んだものを得た。それはときによって一本の剣や一頭の馬、一人の奴隷などであった。[512]

ｂ　ムハンマド（彼の上に平安あれ）は贈り物を認め、自らもそれを受け取っていた。したがって、彼の収入の一端は彼への贈り物や寄付によって成り立っていた。たとえば、ウフドの戦いでムハンマド（彼の上に平安あれ）側について戦ったナディール族のムハイルクというユダヤ教徒は、その戦いで死ぬ前に遺言しムハンマド（彼の上に平安あれ）に七箇所の果樹園を寄付している。[513]

ｃ　平和的な手段によって獲得した非ムスリム地域の土地。たとえばファダクの土地などがそれにあたる。

預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)の物質的な遺産は動産と不動産の二つに分けることができる。動産とは金銭、私有の家財、家畜などである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は病気の際、持っていた七ディルヘムを貧者に分配するように指示している。[514] このことからわかるように、彼は現金としての遺産は残していない。またそれ以前に奴隷たちを解放していたため、死亡時には奴隷も所有していなかった。いつくかの文献は、彼が残したものとして、ラクダ、衣服、指輪、道具類、よろいを挙げている。妻たちが使用していた家財道具はここに含まれないことは確かであろう。

彼が家畜や一部の家財、靴をアリー家に与えたことも記録されている。彼のマント、剣、指輪は国家に遺贈された。

不動産すなわち土地については、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の死後、娘のファーティマをはじめ近親者の何人かがアブー・バクルに彼の遺産として国家からの返却を求めている。それに対しアブー・バクルはムハンマド（彼の上に平安あれ）がかつて、「我々預言者は遺産を残さない。残したものはサダカとなる」[515]と言っていたと告げた。そして、生前彼が管理していた土地は親族に分配せず国が管理し、そこから得られる収益は彼と同じように用いる予定であると伝えた[○516]。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はファダクの土地からあがる収入を家族の支出のために用いるとともに、公的な仕事や旅行者のためにも利用していた。つまりムハンマド（彼の上に平安あれ）は、その土地から利益を得る権利を自分に残すという条件で、それを公の利益のために国に寄付していたのである。彼が所有していた土地はその死後、名実ともに国家のものとされた。アブー・バクルはそこから得られる収入を、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が使ったように用いた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が妻たちと居住していた部屋は、彼の遺言によって妻たちに遺された。これにより彼女たちはそこに住み続けることとなり、彼女たちの死後は土地と同じようにムハンマド（彼の上に平安あれ）のサダカに加えられることとなった[○517]。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）の精神的な遺産は、クルアーンとスンナである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の死後もイスラーム教徒はクルアーンとスンナを守り、そのために大きな努力を払ってきた。この努力の結果として、クルアーンとスンナに記された教えの原則を日々の生活に取り入れ、何百万ページ分にも及ぶクルアーンの版やその解釈書、ハディースの書物群によりクルアーンとスンナを文化的生活の礎としたのである。

六　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のマディーナ時代の教えのまとめ

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のマディーナ時代の活動について述べようとするなら、クルアーンの言葉にその任をゆだねることになる。この時代の教えをよりよく理解するためには、マディーナ時代に下された啓示全体を見てみる必要がある。マディーナで啓示されたクルアーンの章句を見ていくと次のことが明らかになる。マッカ時代に定められた教えの原則や規範はマディーナ時代においても繰り返し指摘され、社会的条件の変化に伴い、ムスリムたちが独自の国家、行政、社会、生活を手にしていくに従い、新たな原則も付け加えられていったのである。唯一神信仰、来世への信仰といった信仰の根本に関する項目については、ヒジュラの後に下った啓示で何度も繰り返し言及され、クルアーンがアッラーの言葉であり、教えへの導きのための源であることが強調されている。そしてクルアーンをよく読みそれに従うことを求めている。またムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であることの正しさについても再三述べられている。

クルアーンでは信教の自由が保証され、特定の宗教を強制されることがないことが示され、イスラームには人の本性を苦しませる強制は何も存在しないことが明らかにされている。また信徒や不信心者、偽信徒の特質が示されている。そして信徒は必要であれば不信心者と共に仕事をすることは可能であるが、彼らを親友にすべきではないとしばしば指摘されている。啓典の民に属する集団との関係、さらに彼らの行いに対する処し方について様々な形の規範が整え定められた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）以前の預言者たちやその民の話が、マディーナでの啓示の章句においても語られている。

崇拝行為は、マディーナ時代においても注意深く取り上げられた項目の一つである。何よりもまず、アッラーに崇拝行為を行うことが命じられている。そして礼拝や喜捨について何度も触れられている。ヒジュラの後、集団で崇拝行為が行われるようになり、金曜礼拝やイード（祭り）、定時の礼拝を合同で行うため、ヒジュラ後すぐに礼拝所の建設が始まっている。マッカ時代に推奨された喜捨はヒジュラ暦二年に義務とされ、この時期から国家によって徴収されるようになり、その使途も明確になった。断食と巡礼もマディーナ時代に義務とされた。信仰と行動が合致するこ

とが望まれ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はそれに関し次のように問いかけている。「人々よ、あなた方はできもしないことをなぜ語っているのですか」[518]

社会的な分野でも、多くの見直しが行われた。たとえば、アッラーのご満悦を得るために孤児の権利の保護、さらには彼らへの支援、物質的・精神的な相互扶助、善行を施すことなどが勧められている。しかし、見せかけのために行われる支援はよしとされていない。信徒たちは皆兄弟であり、[519] さらには人間は皆兄弟であると[520]教えられている。対立や衝突が禁じられる反面、融和と平和が奨励され、人々が一つになり協調していく上でイスラームは大きな役割を果たしていることが明らかにされている。繰り返し善行が命じられ、悪が禁じられ、社会が人々に憎悪や敵意をもたらす要因を取り除くように要請されている。教育活動がより制度的に行われるようになっている。むやみに古いものにしがみつき、新しい考え方に耳を傾けない態度が非難され、理性を働かせて行動することが求められている。

道徳の分野では、美徳がしばしば取り上げられている。信じることと共に正しく生きることもまた、クルアーンの教えの中で重要な位置を占める。忍耐、正しさ、感謝、よい言葉、寛容、信託の尊重、善行、親戚・孤児・隣人・貧しい人々・旅行者・友人の権利を尊重すること、謙虚でいることなどの美徳が奨励され、その実践が命じられている。また、家に入る際の立ち居振舞いをはじめいくつかの礼儀作法が示されている。

公正さはマディーナ時代においても重きが置かれている。たとえば借金、盟約、証言、様々な罪を防ぐための罰則などについて法的な整備がなされたことは、公正さを実現する基礎となったといえる。

美徳が賞賛され模範として示される一方で、悪徳を成す人々が非難されている。からかい、過度な物惜しみ、中傷、裏表のある態度をとること、威張ること、偽善、飲酒、賭博、買春、暴力、不正なもしくは合法でない財産を使うこと、窃盗、本人のいないところで欠点を述べ立てること、嫉妬、悪意を持って判断すること、欠点を探すこと、殺人などといった事柄が非難され、禁じられている。生命や財産、名誉が守られるべきであるとされ、裏切り者に味方しないように命じられている。アッラーが思い上がりうぬぼれた者を愛されないことが明言されている。正しさ、誠実さを手放さ

ないようにと繰り返され、たとえば人が自分のできもしないことを話すことがアッラーの御許においては憎悪で持って迎えられるほどの行為であると告げられている。また知識のないことについて話をしないことが求められている。経済分野においても新たな秩序が与えられた。利子は明白に禁じられ、それに関連する仕事に従事する人々が批判される一方、勤労、孤児や未成年者の財産の保護などが勧められている。

正しく証言すること、お金の貸し借りを記録すること、家庭内の取り決めなど様々な規則が整えられている。国家の維持に関する協議、有能な人材の登用といった基本的な原則も定められている。アッラーと預言者への服従の必要性が示されている。ヒジュラ以降、イスラーム教徒は一つの国家を有しており、そのため祖国を守るという概念が発展させられた。それに関連して平和について言及され、平和が善の実践であり手段であることが示されると同時に、必要上やむなく起こされる戦いについてもいくつかの原則が定められた。そして信徒たちは盟約を守るように奨励されている。このような事柄に関してムハンマド（彼の上に平安あれ）がとった行動については、本書の様々な箇所で説明してきた。そこから読み取れるのは、クルアーンはムハンマド（彼の上に平安あれ）の徳の全体像を示し、彼の行動の原則を明らかにしていることである。事実、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）を最もよく知る家族の人々もまた、同じ面から彼を評価している。アーイシャはある質問に対し、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の徳はクルアーンの徳であると答えている[521]。徳とは広い意味で人の性質やその性向によって現れる行動の全体である、という点を考えるなら、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の道徳と活動はクルアーンの一つの実践であることは明らかである。

終りに

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の生涯と活動、すなわち彼が生きた時代から十四世紀を経た今日の時代まで人々に光を与え、今も与え続けているその行いの一端を、今回の執筆によって示そうと試みた。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は二十三年間の預言者時代を通し、正しく適切な規範を効果的に実践に移していった。偶像崇拝を唯一神信仰へ、圧制を法治へ、敵対関係を兄弟愛へ、衝突を相互扶助へと変化させるべく努力を払い、戦いに代わり平和がもたらされることを目標としていた。彼は正直、親切、信頼、寛容、利他主義、気前のよさといった道徳的な振舞いによって人々の模範となった。逆に、血の裁き、略奪、強奪、暴力、報復、憎悪、飲酒、賭博、窃盗、孤児の財産の横領、嘘、中傷、自己中心主義、嫉妬などといった個人や社会の安寧を乱す行為に立ち向かった。そうすることによって社会生活を送るうえで必要とされる根本的な変革を成し遂げたのである。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は啓示の光に照らされ完成されたその人格をもって、経済、社会、文化、そして道徳の分野においてそうしたことを実践した結果、「無明時代（イスラーム以前の時代）」と定義づけられた時代、すなわち無知、偶像崇拝、部族への固執、抑圧、不正、混沌、統一的政権の不在、不公正、平和や秩序からかけ離れた生活、子供の殺害、野蛮な振舞い、血の裁きといった行動が特徴とされていた一時代を終焉させ、それ代わって平和や安定に満ちたまったく新しい社会をつくり出したのである。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の死後もムスリムたちは、彼の行ったことを知識や思想に照らし合わせ実践し続けた。人々は何世紀にもわたり、ムハンマド（彼の上に平安あれ）から学び続けてきたのである。彼の時代に核が形成された文明の構造を生かし、短期間のうちに独特の文明、すなわちイスラーム文明がつくり出された。イスラーム文明を出現させた要素をつぶさに見ていけば、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の活動が際だっていることに気づくであろう。ムハンマド（彼の上に平安あれ）は学習し知性を磨くことを重視していたが、それはイスラーム世界の

文化及び文化施設の形成や発展のための礎石となった。同様に健康や清潔さへの留意は、イスラーム世界での医療施設や医学の発展をもたらした。社会の相互扶助や助け合い、そして孤児・老人・貧しい人々・障害者を保護する精神は、寄進をもとにした財団や各種社会支援組織の形成を推進する源となった。自らにも他の人にも常に公正さを求めていたことは法にかかわる組織の形成に影響を与えた。労働や生産、商売を人間の営みの根本としていたことはイスラーム世界の経済的な発展の要因となった。家族や親戚との助け合いを大切にしていたことは、家族の絆を確かなものとし、現在においても目にすることができるように、たとえ収入が低くても家族の間で貧しさを支え合う要因となっている。美を称賛する強い思いは、イスラーム美術の誕生をもたらした。非ムスリムに宗教的・法的な自治権を与えその文化的特性を保護することにより、多様な宗教・文化に属する集団が共に生きる最良の模範を示した。またそれは寛容の美徳が広くいきわたる契機となった。このような姿勢は後世のムスリムの模範となっただけでなく、他の文化にとっても一つの模範となった。またムハンマド（彼の上に平安あれ）の生涯や人格、行動はイスラーム世界において多くの作品に取り上げられてきたが、同様に西洋においても文学者や学者、そして統治者によって関心を持たれてきた。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えは、現代においてもその重要性、価値、さらに生き生きとした影響力を保持している。まず何よりもムハンマド（彼の上に平安あれ）の思想と行動は、私たちの日々の暮らしの基盤となっている。つまり幸福な家庭を築くこと、善行を施すこと、貧しい人々や障害者を保護すること、私たちの心の支えとなり、勇気を与えてくれていること、年長者に敬意を払い年少者に愛情を示すこと、商取引において正直であること、兵役の場をムハンマド（彼の上に平安あれ）と共にある場と見なすこと、合法的な手段で利益を手にしようとすること、敬意や愛情に根ざした社会生活を送ることなど、多岐にわたる人生での姿勢や考え方を育む最も重要な源がムハンマド（彼の上に平安あれ）なのである。そしてこの時代に私たちが直面している問題を解決する上でも、彼の生涯から多くの手本を得ることができる。たとえば、人類に害を及ぼす暴力・アルコール・覚せい剤への依存に対処する場合、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の行為が十四世紀もの間イスラーム世界によい影響を与え続け、また現在において

もその重要性と価値は減ずることがない。

かつて預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が提起し、今日その価値が叫ばれているものの一つに人権がある。最も基本的な人権である生命、財産、名誉の保護が近年に至るまで世界の多くの場所で脅かされ、現在でもなおこの状態は続いている。しかし十四世紀前にムハンマド（彼の上に平安あれ）は、あらゆる活動を通じて人間の命、財産、名誉の保護に注意を払っていたのである。

同様なものとして「法の優先」が挙げられる。ムハンマド（彼の上に平安あれ）が法に認めていた重要性に注目するなら、彼が実際に法の優先という原則を尊重し、クルアーンがそれについて定めていることを実践に移していたことが明らかとなる。

「変革の時代」である現代にあって、もっとも変化していくものが技術である。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は防衛戦を含む多くの分野で新しい技術を追求し、それを実現させていた。同時に、技術の発展が強力で道徳的な原則によって管理される必要があることを認識していた。そうでなければ、本来は人類の進歩と幸福を目的として発展させられた技術は、世界や人類の未来を脅かし破滅をもたらし得る。この種の悪影響について知りたければ、今日の世界の諸問題について書かれたいくつかの文章を読めば十分であろう。

さらに現代においてその価値が認識され喫緊の課題となっているもう一つのことは、共に生きる経験である。預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）は、様々な宗教や文化に属する人々が共存することができることを実践して示した。それに関する例は、マディーナ文書やイスラーム教徒とキリスト教徒・ユダヤ教徒との関係について述べた章で挙げている。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えが含んでいる価値観は、普遍的であるという特性を持っている。言い換えるなら、その教えは普遍的な価値観を持っているということである。啓示を通し個人や集団のレベルで実現された公正や寛容といった概念は、全人類を包括し、時代や国により変化することなく、あらゆる場所・集団においていつで

も通用し、どのような環境にあっても行動に反映することができる特性を持っている。彼の教えが普遍的なものであることはクルアーンでも明白に記されている。また、ムハンマド（彼の上に平安あれ）がイスラームを広め、発展させるために行った活動を全体として見るなら、その教えを普遍的なものと考え、その認識に立ってそれを実現していったことが明らかとなる。彼がもたらした教えはその源から普遍的なものである。まず何よりもその教えの源は、万物を創造された崇高なるアッラーなのである。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）は自らが伝えた事柄を率先して実践し、周囲の模範となり、皆が理解できるように広め社会に定着させ、そのことが将来においても人類の道標となるようにした。その普遍性は、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えが最初に自らが属していた社会に向けたものであったという事実とは矛盾しない。その教えの内容は人間の基本的な権利の面でも偏向的なものではなく普遍的である。その実践も普遍性を有するように行われている。つまりその教えは、自分たちの仲間以外を排除することなく全人類を包括することにより、普遍的であるという特性を得ているのである。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えはイスラームの歴史を通し、少数の例外はあったとしても、その影響の元で活動が行われてきた。すなわちその活動が普遍的であることを常に意識しながら実践されてきたのである。たとえば、人やその生命や財産、名誉の保護に与えられていた重要性の影響について見てみよう。それについては、エルサレムにおける二度の征服と一度の占領を比較してみればすぐに理解できる。ウマルは平和的手段によってエルサレムを征服し、非ムスリム住民の生命や財産の保全は、定められた税を払うことによって保証された。しかしこの都市がヒジュラ暦四九二年（西暦一〇九九年）に十字軍によって占領されたときには、ムスリムはすべて殺害された。そしてユダヤ教徒はムスリムを助けたという理由で、避難していたシナゴークとともに焼き殺され、死体は通りにあふれる血の海の中に放置されたのである。これに対し、十字軍の手にあったエルサレムがサラッフディーン・アイユーブによってヒジュラ暦五八三年（西暦一一八七年）に征服されたときには、誰一人の血も流されることはなかった。そして十

字軍の兵士たちは身代金を支払うことで釈放された。この比較の目的は両文明間の違いを明らかにすることではなく、それぞれの教えが定めている事柄の捉え方と実践における差異を示すことにある。

預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がもたらした普遍的な教えが私たち自身、そして現在の世界によって学ばれ、すべての人々がそこから益を得ることができるようにするためには、まずそれらが普遍的な次元で維持されることが必要となる。今日、それらが適切な形で示され、理解され、尊ばれ、生きた文化の一部とされるなら、一体化しつつある世界で私たちは自らの特質をよりよい形で維持することができ、同時に他者が尊んでいるものをよりよく理解できるであろう。そして彼らとより良好な関係を結ぶことができるであろう。一方で、私たち自身やイスラーム世界だけではなく、あらゆる人々がこの教えを必要とし期待もしていることに対しても応えることができるであろう。これは人類の普遍的な安定と救いのための助けとなることを意味する。これを行う際には、全世界の豊かな知的な財産を生かすことも忘れてはいけない。なぜならそもそも預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）もまた、人々が蓄えてきたよいものを活用することを避けてはいなかったからである。

注釈

＊注釈の中で使われている省略記号の意味は次の通りです。

tah.	: 検証	çev.	: 翻訳者
vd.	: 続く	a. mlf.	: 同上の著者
DİA.	: ディヤーナト・イスラーム百科事典	krş.	: 比較検証
İA.	: イスラーム百科事典	Cilt	: 巻
s.	: 頁	Sayı	: 紀要の号数
p.	: 頁	v. dğr.	: 共著
sad.	: 出版編集	sy.	: 紀要の号数
ts.	: 出版日時不詳	a.g.e.	: 同上の文献

1. al-Bakrî, **Mu‘jam Masta‘jam** (البكري ، معجم المستعجم), tah.: Mustafa As-Saqqâ (مصطفى السقا), Beirût 1983, I, 5-16; Philip Hitti, **Siyâsî ve Kültürel İslam Tarihi**, çev. Salih Tuğ, İstanbul 1995, I, 51 vd.; Kudret Büyükcoşkun, "*Arabistan*", **DİA,** III, 248-252.
2. Jurji Zaydan, **al-‘Arab Qabla’l-Islâm** (جورجي زيدان، العرب قبل الاسلام), tah.: Husain Mu’nis (حسين مؤنس), Cairo, 81-97; E. Honigman, "*Nabatîler*", **İA**, IX, 1-3; Neşet Çağatay, **İslam Öncesi Arap Tarihi ve Câhiliye Çağı**, Ankara 1971, s. 40 vd. ; Hitti, I, 105-112.
3. Jurji Zaydan, **al-‘Arab** (جورجي زيدان، العرب), p. 98-108; Fr. Buhl, "*Tedmür*", **İA**, XII/1, 113; Hitti, I, 113-118.
4. Jurji Zaydan, **al-‘Arab** (جورجي زيدان، العرب), p. 207-220; J. Schleifer, "*Gassânîler*", **İA**, IV, 718 vd.; Hitti, I, 118-125; Mustafa Fayda, "*Cebele b. Eyhem*", **DİA,** VII, 184-185; Ahmet Ağırakça, "*Gassânîler*", **DİA,** XII, 397-398.
5. Jurji Zaydan, **al-‘Arab** (جورجي زيدان، العرب), p. 221-241; Fr. Buhl, "*Hîre*", **İA**, V/1, 536-537; Hitti, I, 123-128; Hüseyin Ali ed-Dakûkî, "*Hîre*", **DİA,** XVIII, 123-124.
6. Jurji Zaydan, **al-‘Arab** (جورجي زيدان، العرب), p. 130-135; Çağatay, s.10-13.
7. Jurji Zaydan, **al-‘Arab** (جورجي زيدان، العرب), p. 136-140; Çağatay, s.14-17.
8. 聖クルアーン第 85 章 4-8 節.
9. Ibn Hishâm, **as-Sîratu’n-Nabawiyyah** (ابن هشام ، السيرة النبوية), tah.: Mustafa As-Saqqâ (مصطفى السقا), Cairo 1955, I, 35-72; Jurji Zaydan, (جورجي زيدان،), p. 141-151; Jawâd ‘Alî, **al-Mufassal fî Târîkhi’l-‘Arab Qabla’l-Islam** (جواد علي ، المفصل في تاريخ العرب قبل الإسلام), Baghdâd 1993, II, 510-599; Çağatay, s. 17 vd.; Hüseyin Algül, "*Himyerîler*", **DİA,** XVIII, 62-63.
10. 聖クルアーン第 105 章 1-5 節.
11. Azraqî, **Akhbâru Makkah** (ازرقي ، أخبار مكة), Makkah, 1352, 1357; Ibn Habîb, **al-Munammaq fî Akhbâri Quraish** (ابن حبيب ، المنمق في أخبار قريش), tah.: Khurshid Ahmad Fâriq (خرشد أحمد فارق), Haydarâbâd 1964; Jurji Zaydan, **al-‘Arab** (جورجي زيدان، العرب), p. 275-280; Jawâd ‘Alî (جواد علي), IV, 5-127; W. M. Watt, "*Kuraysh*", **Eİ2**, V, 434-435; Mustafa Fayda, **Halid b. Velid**, İstanbul 1990, s. 21 vd.; İbrahim Sarıçam, **Emevî-Hâşimî İlişkileri**, Ankara 1997, s. 33-68.
12. Jawâd ‘Alî (جواد علي), IV, 128-142.
13. Jawâd ‘Alî (جواد علي), IV, 142-157.

14. Şemseddin Günaltay, **İslam Öncesi Araplar ve Dinleri**, sad. M. Mahfuz Söylemez-Mustafa Hizmetli, Ankara 1997, s.35 vd.; Hakkı Dursun Yıldız, "*Arap*", **DİA,** III, 273; Abû Shuhbah, **as-Sîratu'n-Nabawiyyah fî Da'wi'l-Qur'âni wa's-Sunnah** (أبو شهبة ، السيرة النبوية في دعو القرآن و السنة), Beirût 1988, I, 47-48.

15. Mustafa Fayda, "*Ebnâ*", **DİA,** X, 78-79.

16. Ibn Khaldun, **Kitâbu'l-'Ibar** (ابن خلدون ، كتاب العبر), Beirût 1979, I, 101 vd.; Jawâd 'Alî (جواد علي), IV, 271 vd.; Mustafa Fayda, "*Bedevî*", **DİA,** V, 311-316.

17. Jawâd 'Alî (جواد علي), IV, 343 vd.; V, 108 vd.; İbrahim Sarıçam, "*İslam'ın Doğuşunun Tarihî Şartları*", **İslam ve Demokrasi**, Ankara 1998, s. 14 .

18. Maidânî, **Majma'u'l-Amsâl** (ميداني ، مجمع الأمثال), tah.: Muhammad Abu'l-Fadl Ibrâhîm (محمد ابو الفضل ابراهيم), Cairo 1978-1979, III, 373-375.

19. Al-Bukhârî, **Sahîhu'l-Bukhârî** (البخاري ، صحيح البخاري), İstanbul 1981, VIII, 59; Maidânî (ميداني), III, 375.

20. Jawâd 'Alî (جواد علي), IV, 392-398; Ahmed Ateş, "*Asabiyet*", **İA**, I, 663; Mustafa Çağrıcı, "*Asabiyet*", **DİA,** I, 453-454.

21. Jawâd 'Alî (جواد علي), IV, 341-387; Bijâwî and his coworkers, **Ayyâmu'l-'Arab fi'l-Jâhiliyyah** (بجاوي و اصحابه ، ايام العرب في الجاهلية), Egypt, çeşitli yerler; Mehmet Ali Kapar, "*Eyyâmü'l-Arab*", **DİA,** XII, 14-16.

22. 聖クルアーン第 9 章 37 節; Ibn Hishâm, (ابن هشام), II, 604.

23. Ibn Habîb, **al-Mukhabbar** (ابن حبيب ، المخبر), p. 237; Abû Shuhbah (أبو شهبة), I, 94-97.

24. Ibn Qutaibah, **ash-Shi'ru wa'sh-Shu'arâ** (ابن قتيبة ، الشعر و الشعراء), tah. Mufîd Qumaihâ and Nuaim Zarzûr (مفيد قميحي و نعيم زرزور), Beirût 1985; Jurji Zaydan, **Târîkhu Adabi'l-Lugha al-'Arabiyyah,** (جورجي زيدان، تاريخ ادب اللغة العربية), Cairo 1936, I, 156-157; Tâhâ Husain, **Fi'l-Adabi'l-Jâhilî** (طه حسين ، في الأدب الجاهلي), Cairo 1927, p. 366-371; Ahmad Zaki Safwat, **Jamharatu Khutabi'l-'Arab** (احمد زكي صفوت ، جمهرة خطب العرب), I, Cairo 1962; Shawqî Daif, **Târîkhu'l-Adabi'l-'Arabî** (شوقي ضيف ، تاريخ الأدب العربي), I, Cairo ts.; Hüseyin Elmalı, "*Hitâbet*"(Arap Edebiyatı), **DİA,** XVIII, 158.

25. 聖クルアーン第 106 章 1-5 節.

26. 聖クルアーン第 29 章 67 節.

27. Hamidullah, "*el-Îlâf veya İslam'dan önce Mekke'nin İktisâdî-Diplomatik Münasebetleri*", çev. İsmail Cerrahoğlu, **A.Ü. İlahiyat Fakültesi Dergisi**, IX, Ankara 1961, s. 213-222; Abdülkerim Özaydın, "*Arap*", **DİA,** III, 322-324; Abû Shuhbah (ابو شهبة), I, 98-102.

28. Günaltay, s. 86-89

29. Günaltay, s. 89-94.

30. 聖クルアーン第 2 章 62 節; 聖クルアーン第 5 章 69 節.

31. 聖クルアーン第 22 章 17 節.

32. 参照: Şinasi Gündüz, **Sâbiîler-Son Gnostikler**, Ankara 1999.

33. 聖クルアーン第 53 章 49 節.

34. İbnü'l-Kelbî, **Putlar Kitabı**, çev. Beyza Düşüngen, Ankara 1969, s. 39.

35. 聖クルアーン第 53 章 19-20 節.

36. İbnü'l-Kelbî, s. 27-28, 36.

37. Ömer Faruk Harman, “*Hübel*”, **DİA,** XVIII, 445.

38. 聖クルアーン第 71 章 23 節.

39. 聖クルアーン第 34 章 41 節.

40. 聖クルアーン第 37 章 158 節.

41. 聖クルアーン第 6 章 100 節.

42. 聖クルアーン第 21 章 26 節.

43. 聖クルアーン第 39 章 38 節.

44. 聖クルアーン第 29 章 63 節.

45. 聖クルアーン第 39 章 3 節.

46. İbnü'l-Kelbî, s. 40.

47. Abû Shuhbah (ابو شهبة), I, 70-78.

48. Ibn Habîb, **al-Mukhabbar** (المخبر ، ابن حبيب), p. 171-172; Mas‘ûdî, **Murûju’z-Zahab wa Ma‘âdinu’l-Jawhar** (مروج الذهب ومعادن الجوهر ، مسعودي), tah. Muhammad M. Abdu’l-Hamîd (محمد م. عبد الحميد), Cairo 1964, I, 69-75; al-Âlûsî, **Bulûghu’l-Arab** (بلوغ الأرب ، الآلوسي), Beirût ts. II, 244-282; Jawâd ‘Alî (جواد علي), IV, 128-142; Günaltay, s. 79-83; Çağatay, s. 158-169; Şaban Kuzgun, **İslam Kaynaklarına Göre Hz. İbrahim ve Haniflik**, Ankara 1985; a. mlf., “*Hanîf*”, **DİA,** XVI, 33-39; Mustafa Çağrıcı, “Arap”, **DİA,** III, 316-321.

49. Ibnu’l-Kalbî, **Jamharatu’n-Nasab** (جمهرة النسب ، ابن الكلبي), tah.: Abdussattâr Ahmad Farrâj (عبد الستار احمد فراج), Cairo 1983, I, 91-93; Ibn Hishâm, (ابن هشام), I, 136-137; Ibn Sa‘ad **at-Tabaqâtu’l-Kubrâ** (الطبقات الكبري ، ابن سعد), Beirût 1985, I, 75-81; al-Balâdhurî, **Ansâbu’l-Ashrâf** (انصاب الأشراف ، البلاذري), tah.: Muhammad Hamidullah (محمد حميد الله), Cairo 1959, I, 60-61, 63-64; İbrahim Sarıçam, “*Hâşim*”, **DİA,** XVI, 405-406.

50. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 137 vd.; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 81-94; at-Tabarî, **Târîkhu’l-Umam wa’l-Mulûk** (تاريخ الامم والملوك ، الطبري), tah.: Muhammad Abu’l-Fadl Ibrahîm (محمد ابو الفضل ابراهيم), Beirût ts. II, 246-251; H. Ahmet Sezikli, “*Abdülmuttalib*”, **DİA,** I, 272-273.

51. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 108-109; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 88 vd., 151-158; Bekir Topaloğlu, “*Abdullah*”, **DİA,** I, 75-76.

52. この点に関する詳細については以下を参照のこと: Ibnu’l-Kalbî, **Jamharah** (ابن الكلبي ، جمهرة), I, 96-147; Zubairî, **Kitâbu Nasabi Quraish** (كتاب نسب قريش ، زبيري), tah.: Évariste Lévi-Provençal (لافي بروفنسال), Cairo 1951, p. 14-91; Ibn Hazm, **Jamharatu Ansâbi’l-‘Arab** (ابن حزم ، جمهرة انصاب العرب), tah.: ‘Abdu’s-Salâm, M. Hârûn (عبد السلام م. هارون), Cairo 1962, p. 14-72; İbrahim Sarıçam-Mustafa Öz “*Hâşim*” (Benî Hâşim), **DİA,** XVI, 403-405.

53. Ibn Ishâq, **As-Sîrah** (السيرة ، ابن اسحاق), tah.: Muhammad Hamîdullah (محمد حميد الله), Konya 1981, p. 19-28; Ziriklî, **A’lâmu’n-Nisâ** (اعلام النساء ، زركلي), Beirût ts., I, 18; Bekir Topaloğlu, “*Amine*”, **DİA,** II, 63-64.

54. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 100; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 96.

55. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 100-101; Ibn Sayyidi’n-Nâs, **‘Uyûnu’l-Athar fî Funûni’l-Maghâzî wa’s-Siyar** (عيون الأثر في فنون المغازي و السير ، ابن سيد الناس) tah.: Muhammad al-‘Iyd al-Khatrâwî and his coworkers (محمد العيد الخطراوي و اصحابه), Beirût 1992, I, 81.

56. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 103.

57. Ibnu’l-Athîr, **Usd** (أسد ، ابن الأثير), I, 21.

58. ash-Shâmî, **Subulu'l-Hudâ wa'r-Rashâd** (الشامي ، سبل الهدي و الرشاد), tah.: Mustafa Abdu'l-Wâhid (مصطفي عبد الواحد), Cairo 1993, I, 506.

59. Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 169; Ibn Duraid, **Al-Ishtiqâq** (ابن دريد ، الأشتقاق), tah.: Abdu's-Salâm M. Hârûn (عبد السلام م. هارون), Baghdâd 1979, s. 8 vd.; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 88-89; ash-Shâmî (الشامي), I, 503 vd.

60. ムハンマド（彼の上に平安あれ）はマッカ時代、乳母のスワイバのことを常に気にかけ何かと援助していた。ハディージャも彼女に食べ物を分け与えていた。ハディージャはアブー・ラハブにスワイバを自分に譲り渡してくれるように申し出たが、アブー・ラハブはそれを認めなかった。しかしアブー・ラハブはヒジュラののち彼女を解放した。ムハンマド（彼の上に平安あれ）はヒジュラの七年後に亡くなるまでスワイバの生活を支え、彼女の面倒を見続けた。スワイバがイスラームに入信していたかどうかについてはいくつかの意見がある。(参照: Ibnu'l-Athîr, **Usdu'l-Ghâbah fî Ma'rifati's-Sahâbah** (ابن الأثير ، أسد الغابة في معرفة الصحابة), Cairo 1970, VII, 21; Ibn Hajar, **al-Isâbah fî Tamyîzi's-Sahâbah** (ابن حجر ، الإصابة في تمييز الصحابة), Beirût 1940, IV, 250).

61. Ibn Ishâq (ابن اسحاق), 25-28; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 162-167; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 108-117; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 90-97; al-Maqrîzî, **Imtâ'u'l-Asmâ'** (المقريزي ، إمتاع الأسماء), tah.: Mahmûd Muhammad Shâkir (محمود محمد شاكر), Cairo ts., s. 5-7; Hüseyin Algül, "*Hâris b. Abdüluzzâ*", **DİA,** 16-194-195; Asrî Çubukçu, "*Halîme*", **DİA,** 15-338.

62. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 167; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 113.

63. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 164 vd.

64. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 166-167.

65. At-Tirmidhî (الترمذي), V, 442-443.

66. Hamdi Yazır, **Hak Dini Kur'an Dili**, İstanbul ts., VIII, 5919.

67. この点に関する詳細については以下を参照のこと: Bünyamin Erul, "*Hz. Peygamber'in Risalet Öncesi Hayatına Farklı Bir Yaklaşım*", **Diyanet İlmi Dergi, Peygamberimiz Hz. Muhammed (Özel Sayı)**, Ankara 2001, s. 360 vd.

68. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 94.

69. Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 116.

70. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 168-169; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 119.

71. Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 119.

72. Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 119-120; VIII, 222.

73. Ibn Ishâq (ابن اسحاق), s. 53-55; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 180-183; Ibn Sa 'ad(ابن سعد), I, 153-155; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 96-97; At-Tirmidhî, **Sunan** (الترمذي ، سنن), Istanbul 1981, V, 590; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 105-108.

74. Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 108; Mustafa Fayda, "*Bahîrâ*", **DİA,** IV, 486.

75. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 184-187; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 126-127; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 113; Hüseyin Algül, "*Ficâr*", **DİA,** XIII, 52-53.

76. Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 128-129; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 114.

77. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 134;及び : Ibn Hanbal (ابن حنبل), I, 190. この点に関する詳細については以下を参照のこと: Nadir Özkuyumcu, "*Hilf*", **DİA,** XVIII, 29-30. ムハンマド（彼の上に平安あれ）がイスラーム以前の一部の慣習を守るための提携に同意したこと(Ibn Hanbal (ابن حنبل), I, 190, 317) あるいはその慣習を評価し、ためらうことなくそのことを条文とし

て条約の中に盛り込んだことは、ムスリムが他の宗教の人々とも防衛、改革、災害の防止などのために協調し、そうした目的で設立した組織に加わることに何の差し障りもなかったことを物語っている。

78. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 8.

79. Ibn Ishâq (ابن اسحاق), s. 59; at-Tabarî (الطبري), II, 280.

80. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 131; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 117.

81. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 131.

82. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 182-187; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 129-134.

83. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 236; at-Tabarî (الطبري), II, 313.

84. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), VIII, 17; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 98-99; M. Yaşar Kandemir, “*Hatice*”, **DİA,** XVI, 465-466.

85. Ahmad at-Tâjî, **Sîratu’n-Nabiyyi’l-‘Arabî** (احمد التاجي ، السيرة النبي العربي), Cairo 1978, I, 17.

86. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 192-197; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 145-147; さらに参照 : at-Tabarî (الطبري), II, 277-290; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 121-122.

87. As-Suyûtî, **al-Jâmi‘u’s-Saghîr** (السيوطي ، الجامع الصغير), I-II, Beirût 1990, I, 25; al-‘Ajlûnî, **Kashfu’l-Khafâ’** (العجلوني ، كشف الخفاء), Beirût 1352, I, 70. ムハンマド（彼の上に平安あれ）のこの言葉は、様々な部族の方言をどのように理解しているのかと尋ねられたことに対する答えとして伝えられている。この「育む」という言葉は、アッラーがムハンマド（彼の上に平安あれ）に教えられた、知識を授けられた、能力を与えられたという意味で用いられている。また別の伝承によると、ムハンマド（彼の上に平安あれ）はこの言葉に加え、アッラーは私に崇高な徳を備えるよう命じられた、と語っている。したがってこのハディースは、高い徳と並び、正しい言葉遣い、文化、言語、要するに文学的な素養のことについても触れている。(参照：al-‘Ajlûnî (العجلوني), I, 70-71).

88. Ibn Hanbal, **Musnad** (ابن حنبل ، مسند), Istanbul 1982, IV, 197.

89. 聖クルアーン第 29 章 48 節.

90. W. Montgomery Watt, **Hz. Muhammed'in Mekke'si**, çev. Mehmet Akif Ersin, Ankara 1995, s. 96. トルコで最もよく知られている東洋学者の一人であるワットは、その研究の中でイスラームが有する様々な価値を尊重し、客観的かつ中立の立場で研究に臨み、ことに近年の研究ではイスラームに対して否定的な見解を取らないようにしていた。

91. ムハンマド（彼の上に平安あれ）の文盲についての詳細は以下を参照のこと: Ahmet Önkal, “*Hz. Peygamber'in Ümmîliği*”, **SÜİF Dergisi**, 1986, sy. 2, s. 249-260.

92. 聖クルアーン第 36 章 69 節.

93. 著名なドイツの作家ゲーテは、詩人と預言者との違いを次のように要約している。「預言者と詩人との違いを比喩的ではあるが明確に説明してみよう。両者とも唯一の神アッラーから細やかな心、そして力を得ている。しかし詩人は自らに与えられたインスピレーションを享楽のうちに費やし、名誉や栄光、快楽に満ちた暮らしを求める。彼らは思考と想像力をめぐらせるが、永遠なるものを示そうという目的はあまり持っていない。それに対し預言者には定められた目的がある。その目的に到達するためにごく些細に映ることでさえ無駄にすることはない。神の定めを人々に知らしめるため、一つのしるしだけで人々を集めることができる」(Bayram Yılmaz, **Goethe ve İslamiyet**, Konya 1991, s. 95).

94. 聖クルアーン第 42 章 52 節.

95. Ibn Hanbal (ابن حنبل), II, 334, 357; III, 466; IV, 141; As-Suyûtî, (السيوطي), I, 245.

96. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 167.

97. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 125-126; Ibn Hanbal (ابن حنبل), III, 96; al-Bukhârî (البخاري), III, 48; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 112; ash-Shâmî (الشامي), II, 211.

98. 聖クルアーン第 43 章 31 節.

99. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 156; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 116.

100. Ibnu’l-Athîr, **Usd** (ابن الأثير ، أسد), II, 317; Ibn Hajar, **al-Isâbah** (ابن حجر ، الإصابة), III, 213.

101. ヌール山（ヒラー山とも呼ばれる）は、周囲の山々よりも鋭く高い。そのため遠くからも望むことができる。頂上に登ることは困難である。山はむきだしの、滑りやすい岩でできている。今はところどころに登りやすいように足場が設けられているが、登り下りするときにはよく注意しなければならない。かつてはヌール山への登山はより困難であったであろう。この山のマッカ側に位置する洞窟は、頂上から２０メートル下ったところにある。それは洞窟と呼ばれているが、実際には積み重なった岩の間にできた空間である。この空間は人が中で立っても頭が天井につかないほど高く、横になることができるほどの奥行きと幅がある。洞窟は山に垂直に生じている奥まった部分、という形ではなく、マッカに面した山の端に位置する空間である。洞窟の前面は山の北側にあり、その形は日除けのテラスを思い起こさせる。洞窟は避難場所というよりは瞑想するのに適しており、そこからカアバ聖殿を望め、周囲を一望できる場所となっている。Krş. Fuat Günel, “*Hira*”, **DİA**, XVIII, 121-122.

102. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 94; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 104.

103. 聖クルアーン第 96 章 1-5 節.

104. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 195; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 104.

105. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 238.

106. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 233-239; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 190-197; al-Bukhârî (البخاري), I, 2 vd.; at-Tabarî (الطبري), II, 298 vd.; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar fî Ihtisâri’l-Maghâzî wa’s-Siyar** (ابن عبد البر ، الدرر في اختصار المغازي و السير), tah.: Shawqî Daif (شوقي ضيف), Cairo 1966, p. 31-33; Zebîdî, **Sahîh-i Buhârî Muhtasarı Tecrîd-i Sarîh Tercemesi**, çev. Ahmed Nâim-Kâmil Miras, Ankara 1980, I, 3 vd.

107. 聖クルアーン第 74 章 1-5 節.

108. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 199; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 116; at-Tabarî (الطبري), II, 318, 322.

109. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 112-113; at-Tabarî (الطبري), II, 313.

110. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 250 vd. 及び : at-Tabarî (الطبري), II, 317.

111. İbrahim Sarıçam, **Hz. Ebû Bekir**, Ankara 1996, s. 13-14.

112. 聖クルアーン第 26 章 214 節.

113. 聖クルアーン第 15 章 94 節.

114. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 200.

115. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 216.

116. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 238.

117. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 199; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 116; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 36.

118. 聖クルアーン第 21 章 98-100 節.

119. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 199; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 115.

120. 聖クルアーン第 16 章 103 節.

121. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 393.

122. 聖クルアーン第 16 章 103 節.

123. 聖クルアーン第 44 章 13 節.

124. 聖クルアーン第 21 章 5 節.

125. 聖クルアーン第 6 章 7 節.

126. 聖クルアーン第 25 章 4 節.

127. 聖クルアーン第 25 章 5 節.

128. 聖クルアーン第 10 章 38-39 節; 聖クルアーン第 11 章 13 節; 聖クルアーン第 17 章 88 節.

129. 聖クルアーン第 52 章 29 節; 聖クルアーン第 68 章 2 節.

130. マッカ時代に多神教徒たちがイスラーム教徒に対して行った迫害については以下を参照のこと：Ibn Ishâq (ابن اسحاق), s. 169-177; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 156-198; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 41-43.

131. at-Tabarî (الطبري), II, 333.

132. Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 43; krş. at-Tabarî (الطبري), II, 333.

133. al-Balâdhurî (البلاذري), s. 122.

134. マッカ時代、ムハンマド（彼の上に平安あれ）に対立した多神教徒たちの主だった人物については以下を参照のこと：al-Balâdhurî (البلاذري), I, s. 125 vd.; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 44-47.

135. Ibn Habîb, **al-Mukhabbar** (ابن حبيب ، المخبر), s. 160.

136. Ibn Sa'ad (ابن سعد), IV, 241; Muslim (مسلم), I, 593-594.

137. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 382-385; Ibn Sa'ad (ابن سعد), IV, 237-240

138. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 265-266; 及び : at-Tabarî (الطبري), II, 323 vd.

139. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 266-277; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 201-203; at-Tabarî (الطبري), II, 326-327.

140. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 293-295.

141. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 362; at-Tabarî (الطبري), II, 337.

142. 聖クルアーン第 109 章 1-6 節.

143. 聖クルアーン第 29 章 17 節.

144. 聖クルアーン第 10 章 18 節; 聖クルアーン第 25 章 55 節.

145. 聖クルアーン第 21 章 98 節.

146. 聖クルアーン第 28 章 57 節.

147. 聖クルアーン第 28 章 57 節.

148. 聖クルアーン第 5 章 104 節.

149. Maxime Rodinson, **Hazreti Muhammed**, çev. Attila Tokatlı, İstanbul 1994, s. 90. フランス人の東洋学者マキシム・ロディンソンは、自らが育った環境と身につけた思考方法からなる先入観により様々な出来事を誤って解釈し、反イスラーム勢力の言葉に価値を置き、彼らに敬意を払い、さらにはイスラームに対して抱く反感を正当なものと見なしている。ムハン

マド（彼の上に平安あれ）の活動を叙述するにあたってときに嘲るような表現を用いている。一方で、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の知性、冷静さ、信頼性、そしてバランスのとれた振舞いについて触れ、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が周囲の人々から敬意を得ている人物であること、生涯を通して決断を下すときには熟考していたこと、公共の仕事も個人的な仕事も巧みに進めていたこと、必要とあれば待つことも撤退することもできる人物であったこと、外交交渉に長けていたこと、開かれた広い視野を持って物事を論理的に判断していたことなどを指摘し、彼の人柄やメッセージを評価していることもまた事実である。なお、本書の最後の部分では、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の実践したことが１４世紀にわたり、いかに世界に影響を与え続けてきたかを要約している。

150. 聖クルアーン第 45 章 24 節.
151. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 316.
152. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 72.
153. 聖クルアーン第 43 章 31-32 節.
154. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 291-292; Ibn Habîb, **al-Munammaq** (ابن حبيب ، المنمق), s. 339-340; at-Tabarî (الطبري), II, 333-334.
155. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 342-350.
156. Ibn Ishâq (ابن اسحاق), s. 154-159,194 vd.; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 321 vd.; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 204-205; at-Tabarî (الطبري), II, 329 vd.
157. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 206.
158. 聖クルアーン第 53 章 19-20 節.
159. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 205-206; at-Tabarî (الطبري), II, 337-343.
160. その一例として以下を参照のこと: Dozy, **Târîh-i İslâmiyet**, çev. Abdullah Cevdet, Mısır 1908, s. 72.
161. Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 215; Ahmet Hamdi Akseki, “*Hâtemü'l-Enbiyâ Hakkında En Çirkin Bir İsnâdın Reddiyesi*”, sadeleştiren: M. Hayri Kırbaşoğlu, **İslamî Araştırmalar Dergisi**, Cilt 6, Sayı 2, s. 125-141 ve Cilt 6, Sayı 3, s. 199-207. İsmail Cerrahoğlu, “*Garânîk Meselesinin İstismarcıları*”, **A.Ü. İlahiyat Fakültesi Dergisi**, XXIV, Ankara 1981; Hüseyin Hatemi, **Şeytan Ayetleri**, İstanbul 1989; Sabri Hizmetli, “*Garânik Meselesi Üzerine*”, **İslamî Araştırmalar Dergisi**, Cilt 3, Sayı 2, s. 40-58, Ankara 1989.
162. 断食がヒジュラ暦２年に義務とされたことを考慮するなら、この断食に関する発言は、後世の伝承者によってつけ加えられた可能性が高い。
163. Ibn Ishâq (ابن اسحاق), s. 195-196; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 336.
164. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 207-208.
165. Ibn Ishâq (ابن اسحاق), s. 139-140; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 230-232; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 222.
166. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 350-354; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 52; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 25.
167. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 373-377; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 208-210; at-Tabarî (الطبري), II, 335-336.
168. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 337.
169. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 211.

170. Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 232.

171. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 420; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 237; at-Tabarî (الطبري), II, 345; krş. Hamidullah, **İslam Peygamberi**, çev. Salih Tuğ, İstanbul 1981, I, 126.

172. Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 63.

173. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 381, 419-422; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 210-212; at-Tabarî (الطبري), II, 344-348.

174. İsrâ ve Mi'rac hakkında bk.: Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 396-408; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 213-216; al-Bukhârî (البخاري), I, 91-93; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 255-257; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 29-30.

175. イブン・アブディルベルはこのときの会合で条約が結ばれたと記録している。(参照: **Ad-Durar** (الدرر), s. 68).

176. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 35.

177. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 428-467; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 219-223; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 239 vd.; at-Tabarî (الطبري), II, 353-368; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 67-74; Ahmet Önkal, "*Akabe Bîatları*", **DİA,** II, 211.

178. 聖クルアーン第 79 章 27-28 節.

179. al-Bukhârî (البخاري), VI,101.

180. 聖クルアーン第 41 章 53 節.

181. 聖クルアーン第 94 章 7-8 節.

182. 聖クルアーン第 28 章 77 節.

183. 聖クルアーン第 55 章 60 節.

184. 聖クルアーン第 41 章 34 節.

185. 聖クルアーン第 53 章 38 節; 聖クルアーン第 35 章 18 節.

186. 聖クルアーン第 17 章 100 節.

187. 聖クルアーン第 80 章 17 節.

188. 聖クルアーン第 100 章 8 節.

189. 聖クルアーン第 68 章 11-13 節.

190. 聖クルアーン第 43 章 17 節.

191. 聖クルアーン第 16 章 57-59 節.

192. 聖クルアーン第 7 章 42 節.

193. 聖クルアーン第 39 章 14 節.

194. 聖クルアーン第 70 章 29 節.

195. 聖クルアーン第 70 章 32 節.

196. 聖クルアーン第 42 章 38-39 節.

197. 聖クルアーン第 46 章 15 節; 聖クルアーン第 31 章 14-15 節; 聖クルアーン第 29 章 8 節; 聖クルアーン第 17 章 23-25 節.

198. 聖クルアーン第 51 章 19 節.

199. 聖クルアーン第 19 章 14 節.

200. 聖クルアーン第 25 章 63 節.

201. 聖クルアーン第 25 章 72 節.

202. 聖クルアーン第 25 章 67 節.

203. 聖クルアーン第 68 章 24-25 節.

204. 聖クルアーン第 25 章 68 節.

205. 聖クルアーン第 17 章 18 節.

206. 聖クルアーン第 70 章 5 節; 聖クルアーン第 38 章 17 節; 聖クルアーン第 50 章 39 節; 聖クルアーン第 20 章 130 節.

207. 聖クルアーン第 89 章 1-14 節; 聖クルアーン第 50 章 12-14 節; Mehmet Paçacı, **İslâm Dininin Temel Kaynakları, (Kur'ân)**, Eskişehir, 1999, 205.

208. 聖クルアーン第 29 章 26 節; 聖クルアーン第 11 章 81 節; 聖クルアーン第 15 章 65 節; 聖クルアーン第 20 章 77 節.

209. 聖クルアーン第 6 章 6 節.

210. 聖クルアーン第 36 章 3-4 節.

211. 聖クルアーン第 7 章 158 節.

212. 聖クルアーン第 27 章 77 節.

213. 聖クルアーン第 42 章 38 節.

214. 聖クルアーン第 3 章 159 節.

215. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 226; at-Tabarî (الطبري), II, 369.

216. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 227; at-Tabarî (الطبري), II, 370.

217. 聖クルアーン第 8 章 30 節.

218. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 223.

219. 聖クルアーン第 9 章 40 節.

220. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 228-229; Ibn Hanbal (ابن حنبل), I, 348; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 260-261.

221. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 235-236.

222. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 230-231.

223. 聖クルアーン第 28 章 85 節.

224. この点に関する詳細については以下を参照のこと: Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 480-500; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 227-238; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 259-268; at-Tabarî (الطبري), II, 383; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 75-87; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 286-314; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 38-48; **Diyanet Dergisi Hicret Özel Sayısı**, Ankara 1991; Ahmet Önkal, “*Hicret*”, **DİA,** XVII, 458-462.

225. W. Montgomery Watt, **Hz. Muhammed'in Mekke'si**, s. 183.

226. İslam öncesinde Medine için bk. Eyüp Sabri Paşa, **Mir’ât-ı Medîne**, İstanbul 1304, s. 293 vd.; Jurji Zaydan, **al-‘Arab** (جورجي زيدان، العرب), s. 280-282; Fr. Buhl, “*Medine*”, **İA**, VII, 459-471; Jawâd ‘Alî (جواد علي), IV, 128-142; Neşet Çağatay, s. 94-98.

227. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 239-241; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 316.

228. Nusret Çam, **İslam'da Sanat Resim ve Mimari**, Ankara 1994, s. 153.

229. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 349 vd.

230. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 269-270; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 315-316; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 49.

231. Ali İzzetbegoviç, **Doğu ve Batı Arasında İslam**, çev. Salih Şaban, İstanbul 1993, s. 243.

232. 初期イスラームの時代、モスクは宗教的、政治的、社会的、さらに学問的な機能を果たす施設であった。そして歳月を重ねるうちに宗教的な目的以外のためには、モスク以外の場が割り当てられるようになった。たとえばセルジューク朝の時代には神学校がつくられ教育活動はそこで行われるようになった。それはムスリムの人口の増加による様々な必要性に対応した変容であった。

233. Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 241-244; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 271.

234. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 273.

235. Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 88; Ahmed Güner, "*Asr-ı Saadette Camiler/Mescitler ve Fonksiyonları*", **Bütün Yönleriyle Asr-ı Saadette İslâm**, IV, 254-226.

236. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 272-273.

237. この点に関する詳細については以下を参照のこと: Akif Köten, "*Asr-ı Saadette Suffa Ashabı*", **Bütün Yönleriyle Asr-ı Saadette İslâm**, IV, 381-416.

238. Ibn Habîb, **al-Mukhabbar** (ابن حبيب ، المخبر), s. 70; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 92; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 321.

239. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 429.

240. 聖クルアーン第 3 章 103 節.

241. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 271.

242. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 504-507; Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 238-239; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 88-92; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 321-326; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 49-50.

243. Zebîdî, VII, 73-78.

244. 聖クルアーン第 8 章 75 節.

245. Ibn Sa'ad (ابن سعد), III, 126, 174, 216, 244.

246. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 270.

247. Muhammed Hamidullah, **İslam Peygamberi**, I, 206.

248. Frantz Buhl, "*Muhammed*", **İA**, VIII, 462. デンマーク人の研究家フランツ・ブヒ（１８５０－１９３２）は、当時の東洋学者の例にもれずムハンマド（彼の上に平安あれ）に対し否定的な見方や固定観念、先入観を持って研究活動に従事していた。だがこの記述に見られるようにわずかではあるが客観的な研究を行っていたことは評価できる。

249. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 501-504; Hamidullah, **İslam Peygamberi**, I, 220-229; Salih Tuğ, **İslam Ülkelerinde Anayasa Hareketleri**, İstanbul 1969, s. 30-47.

250. M. Tayyib Okiç, "*İslamiyette İlk Nüfus Sayımı*" **A.Ü. İlahiyat Fakültesi Dergisi**, cilt: VII, Ankara 1960, s. 11-12.

251. Ibn Hanbal (ابن حنبل), IV, 43.

252. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 271-272; at-Tabarî (الطبري), II, 400.

253. Ibn Sa'ad (ابن سعد), I, 248-249.

254. Ali İzzetbegoviç, s. 144.

255. 聖クルアーン第 46 章 35 節; 聖クルアーン第 73 章 10 節.

256. 聖クルアーン第 2 章 208 節.

257. 聖クルアーン第 8 章 61 節.

258. 聖クルアーン第 4 章 94 節.

259. 聖クルアーン第 30 章 30 節.

260. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 581; at-Tabarî (الطبري), III, 115; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 320.

261. 聖クルアーン第 22 章 39-40 節.

262. Hamidullah, **Hz. Peygamber'in Savaşları**, s. 21. しかし、２０世紀を通して世界各地で起きた世界大戦、地域的な紛争や内戦で１億を超える人々が亡くなっており、その犠牲者の大半は一般市民である。政治イデオロギーや独裁的な権力が引き起こした殺戮で命を失った人々の数も１億人にのぼる。こうした事実に鑑みるなら、２０世紀初頭から今日までに起きた戦争で殺された人々の数は、有史以来の時代から１９００年に至るまでの間の戦争犠牲者の数をはるかに上回っている。(参照: Ramazan Özey, **Günümüz Dünya Sorunları**, İstanbul 2001, s. 121, 123.).

263. 戦争の数やその名称については以下を参照のこと: Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 608-609; Ibn Habîb, **al-Mukhabbar** (ابن حبيب ، المخبر), s. 110 vd.; at-Tabarî (الطبري), III, 152-154.

264. 聖クルアーン第 8 章 41 節.

265. 聖クルアーン第 2 章 217 節.

266. al-Wâqidî, **Kitâbu'l-Maghâzî** (الواقدي ، كتاب المغازي), tah.: Marsden Jones, Beirût 1966, I, 13-19; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 601-606; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 10-11; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 359-362; Seriyyelerin sayısı ve adları için ayrıca bk. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 609; Ibn Habîb, **al-Mukhabbar** (ابن حبيب ، المخبر), s. 116 vd.; at-Tabarî (الطبري), III, 154-159.

267. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 287.

268. al-Wâqidî (الواقدي), I, 19; at-Tabarî (الطبري), II, 478; al-Maqrîzî (المقريزي), I, 62.

269. Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 21; Ibn Hanbal (ابن حنبل), I, 411; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 384.

270. al-Wâqidî (الواقدي), I, 47; Ibn Hanbal (ابن حنبل), III, 454.

271. al-Wâqidî (الواقدي), I, 43-44; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 618-619.

272. 参照 : al-Wâqidî (الواقدي), I, 63 vd.

273. 聖クルアーン第 8 章 42 節.

274. al-Wâqidî (الواقدي), I, 52-53; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 616-617; at-Tabarî (الطبري), II, 423, 436-437; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 104; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 77.

275. al-Wâqidî (الواقدي), I, 53-54; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 620; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 293; at-Tabarî (الطبري), II, 440; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 105.

276. al-Wâqidî (الواقدي), I, 61; at-Tabarî (الطبري), II, 441.

277. Ibn Hanbal (ابن حنبل), V, 395.

278. al-Wâqidî (الواقدي), I, 61; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 292; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 82.

279. al-Wâqidî (الواقدي), I, 59, 67, 81; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 627; at-Tabarî (الطبري), II, 447.

280. Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 17.

281. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 619.

282. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), IV, 9-11.

283. İrfan Aycan, “*Ebü'l-Bahterî*”, **DİA,** X, 296.

284. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 22, 26.

285. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 652-653; at-Tabarî (الطبري), II, 468.

286. al-Wâqidî (الواقدي), I, 110-111; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 660.

287. al-Wâqidî (الواقدي), I, 105, 117.

288. al-Wâqidî (الواقدي), I, 107; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 649; スハイル・ビン・アムルはマッカ征服のときにムスリムになった。ムハンマド（彼の上に平安あれ）の死に際して混乱が生じたとき、マッカの住民はイスラームの教えを捨てることはなかったが内紛が起こった。さらに、マッカの知事アッターブ・ビン・アシードも恐れをなして姿を消した。このときシュハイル・ビン・アムルは演説を行い、人々を落ち着かせた。彼は次のように語っている。「私は知っている。このイスラームの教えは、太陽が昇り沈みを繰り返している限り続いていく。あなた方の中から現れたこの人物、アブー・スフィヤーンがあなた方を欺くことがないように。私が知っているこの事実を彼も知っている。しかしハーシム家への嫉妬が彼の心を閉ざしてしまったのだ。私はクライシュ族の中で、陸路と海路双方の乗り物を最も多く所有している者だ。あなた方の教えの長に従いなさい。あなた方のザカートをその人に支払いなさい」スハイルのこの言葉が伝わったとき、ウマルは彼についてムハンマド（彼の上に平安あれ）が語っていた言葉を思い出し、「誓って言うが、あなたはアッラーの使徒です」と言った。

289. al-Wâqidî (الواقدي), I, 139; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 650; Zubairî, (زبيري), 126-127; at-Tabarî (الطبري), II, 466-467.

290. al-Wâqidî (الواقدي), I, 119; at-Tabarî (الطبري), I, 461.

291. al-Wâqidî (الواقدي), I, 106.

292. al-Wâqidî (الواقدي), I, 99; at-Tabarî (الطبري), II, 458-459.

293. 聖クルアーン第 8 章 41 節.

294. al-Wâqidî (الواقدي), I, 103.

295. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 643-644.

296. al-Wâqidî (الواقدي), I, 117.

297. 聖クルアーン第 3 章 123-124 節.

298. 聖クルアーン第 8 章 9-12, 17 節; この件に関する伝承については以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), I, 78-79; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 633-634.

299. 聖クルアーン第 3 章 41 節.

300. 聖クルアーン第 8 章 5 節.

301. 聖クルアーン第 8 章 7 節.

302. 聖クルアーン第 3 章 11, 17 節.

303. al -Wâqidî (الواقدي), I, 53; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 15; at-Tabarî (الطبري), II, 439; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 78.

304. 聖クルアーン第 3 章 43, 44, 47, 49 節.

305. 聖クルアーン第 3 章 67-68, 70-71 節.

306. 聖クルアーン第 3 章 41, 69 節.

307. 聖クルアーン第 3 章 13 節.

308. 聖クルアーン第 44 章 16 節; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 17.

309. バドルの戦いがクルアーンでどのように取り上げられているかについては以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), I, 131-138; Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 666-677; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 60-61; Ömer Özsoy-İlhami Güler, **Konularına göre Kur'an**, Ankara 1996, s. 666-672.

310. Frantz Buhl, "*Muhammed*", **İA**, VIII, 464.

311. al-Wâqidî (الواقدي), I, 120-121.

312. 聖クルアーン第 3 章 123 節.

313. al-Bukhârî (البخاري), V, 9. ウマルがカリフのときに行っていた会議では、バドルの戦いに参加した人々に特別の優先権を与えていた。高名な作家イブン・サアド（ヒジュラ暦２３０年、西暦８４４年没）はバドルの戦いに加わった人々のために彼の著作に独立した一章を割いている。イブン・サアドによるなら、徳という観点から５つに分類される教友のうち最も上位にあるのはバドルの戦いに加わった人々である。

314. al-Wâqidî (الواقدي), I, 181-182; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 44-46; at-Tabarî (الطبري), II, 483-485.

315. al-Wâqidî (الواقدي), I, 182-184.

316. al-Wâqidî (الواقدي), I, 193-196; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 34-35; al-Balâdhurî (البلاذري), s. 311; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), I, 404.

317. al-Wâqidî (الواقدي), I, 196-197; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 35-36; Bakrî (بكري), I, 228; Ahmet Önkal, "*Bahran Gazvesi*", IV, 491.

318. al-Wâqidî (الواقدي), I, 197-198; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 50-51; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 36; at-Tabarî (الطبري), II, 492-493; Asri Çubukçu, "*Furât b. Hayyân*", **DİA,** XIII, 218.

319. al-Wâqidî (الواقدي), I,203-205; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 314.

320. al-Wâqidî (الواقدي), I, 206-207.

321. al-Wâqidî (الواقدي), I, 207-208.

322. al-Wâqidî (الواقدي), I, 210-211.

323. al-Wâqidî (الواقدي), I, 213.

324. al-Wâqidî (الواقدي), I, 216; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 66; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 316.

325. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 118.

326. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 64.

327. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 65; at-Tabarî (الطبري), II, 507.

328. al-Wâqidî (الواقدي), I, 244-245; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 80; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 45; at-Tabarî (الطبري) II, 515.

329. al-Wâqidî (الواقدي), I, 246.

330. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 73.

331. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 138.

332. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 87.

333. al-Wâqidî (الواقدي), I, 296-298; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 47-48; at-Tabarî (الطبري), II, 526-527.

334. Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 38.

335. al-Wâqidî (الواقدي), I, 290, 332; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 95-96; at-Tabarî (الطبري), II, 528-529.

336. 聖クルアーン第 16 章 126 節.

337. at-Tabarî (الطبري), II, 529.

338. 聖クルアーン第 8 章 36 節.

339. 聖クルアーン第 3 章 121 節.

340. 聖クルアーン第 3 章 122 節.

341. 聖クルアーン第 3 章 140 節.

342. 聖クルアーン第 3 章 153 節.

343. 聖クルアーン第 3 章 154 節.

344. 聖クルアーン第 3 章 155 節.

345. 聖クルアーン第 3 章 165 節.

346. 聖クルアーン第 3 章 144 節.

347. 聖クルアーン第 3 章 166 節.

348. ウフドの戦いがクルアーンでどのように取り上げられているかについては以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), I, 319-329; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 106 vd.; Ömer Özsoy-İlhami Güler, s. 672-675.

349. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 165-166.

350. ウフドの戦いに関する詳細については以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), I, 199-334; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 36-48; イブン・サアドのウフドの戦いについての見解は、ワーキーディーの見解の要約である。したがってこの戦いに関する注釈にその文献を示す必要性は感じなかった。Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 60-168; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 311-338; at-Tabarî (الطبري), II, 499-533; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 145-157; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 113-170.

351. al-Wâqidî (الواقدي), I, 334-340; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 101-105; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 48-49; İbrahim Sarıçam, “*Hamrâülesed Gazvesi*”, **DİA,** XV, 498.

352. al-Wâqidî (الواقدي), I, 340-346; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 50.

353. al-Wâqidî (الواقدي), I, 346-353; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 183-186; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 51-53; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 161-164; Ahmet Önkal, “Bi’r-i Maûne”, **DİA,** 195-196.

354. al-Wâqidî (الواقدي), I, 353-362; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 55-56; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 174-178; M. Yaşar Kandemir, “*Hubeyb b. Adî*”, **DİA,** XVIII, 266-267.

355. al-Wâqidî (الواقدي), II, 444-445; at-Tabarî (الطبري), II, 566.

356. Hamidullah, **Hz. Peygamber'in Savaşları**, s. 137

357. al-Wâqidî (الواقدي), II, 446.

358. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), VI, 83.

359. 聖クルアーン第 33 章 10 節.

360. al-Wâqidî (الواقدي), II, 444.

361. al-Wâqidî (الواقدي), II, 472-473; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 233.

362. al-Wâqidî (الواقدي), II, 474; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 234.

363. al-Wâqidî (الواقدي), II, 455.

364. al-Wâqidî (الواقدي), II, 456.

365. at-Tabarî (الطبري), II, 570-572.

366. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 223; at-Tabarî (الطبري), II, 573.

367. al-Wâqidî (الواقدي), II, 477 vd. ; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 246; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 223; at-Tabarî (الطبري), II, 573.

368. al-Wâqidî (الواقدي), II, 480 vd.; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 229.

369. 聖クルアーン第 33 章 9 節.

370. 聖クルアーン第 33 章 9-10 節.

371. 聖クルアーン第 33 章 12-13 節.

372. 聖クルアーン第 33 章 25-26 節; 塹壕の戦いがクルアーンでどのように取り上げられているかについては以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), II, 494-495; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 245 vd. ; Ömer Özsoy-İlhami Güler, s. 675-677.

373. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 243-246; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 169-177.

374. al-Wâqidî (الواقدي), II, 495-496.

375. al-Wâqidî (الواقدي), II, 550-551. Mustafa Ağırman, “*Gamre seferi*”, **DİA,** XIII,341-342.

376. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 86.

377. al-Wâqidî (الواقدي), II, 535-537; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 279-281; al-Balâdhurî (البلاذري), I 348; at-Tabarî (الطبري), II, 595; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 185-186; ‘Âtiq bin Ghaith al-Balâdî, **Ma‘âlimu Makkah at-Târikhiyyah wa’l-Athariyyah** (عاتق بن غيث البلادي ، معالم مكة التارخية و الأثرية), Makkah 1980, s.205-207.

378. al-Wâqidî (الواقدي), II, 537-549; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 281-289; al-Balâdhurî (البلاذري), I 348-349; at-Tabarî (الطبري), II, 592-604; Hüseyin Algül, “*Gabe gazvesi*”, **DİA,** XIII, 267-268.

379. al-Wâqidî (الواقدي), II, 551-552; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 85-86.

380. その詳細と分析については以下を参照のこと: Mehmet Apaydın, **Resûlullah’ın Günlüğü**, İstanbul 1995, s. 120.

381. al-Wâqidî (الواقدي), I, 407.

382. al-Wâqidî (الواقدي), I, 404 vd.; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 289-296; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 341-342; at-Tabarî (الطبري), II, 604-610; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 188-191;

383. al-Wâqidî (الواقدي), II, 415; Ibn Hanbal (ابن حنبل), III, 392-393; al-Bukhârî (البخاري), IV, 160.

384. al-Wâqidî (الواقدي), II, 580.

385. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 300.

386. 聖クルアーン第 24 章 11-21 節.

387. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 302; Ibn Hanbal (ابن حنبل), VI, 194-198; at-Tabarî (الطبري), II, 610-619; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 139-148; Mustafa Fayda, “*Aişe*”, **DİA,** II, 201-205.

388. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 306;

389. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 314;

390. at-Tabarî (الطبري), II, 631-632;

391. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 316; at-Tabarî (الطبري), II, 633;

392. al-Wâqidî (الواقدي), II, 624.

393. Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 172.

394. ウムラ遠征、ルドゥワン条約、フダイビーヤ条約がクルアーンでどのように取り上げられているかについては以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), II, 618, 624; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 320, 322; Emin Işık, "*Feth Sûresi*" **DİA,** XII, 456-457; Ömer Özsoy, İlhami Güler, s. 679-680.

395. at-Tabarî (الطبري), II, 638; ウムラ遠征、ルドゥワン条約、フダイビーヤ条約については以下も参照のこと: Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 95-105; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 349-352; at-Tabarî (الطبري), II, 620-638; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 191-196; Hamidullah, "*Hudeybiye Antlaşması*", **DİA**, XVIII, 297-299.

396. Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 120-123.

397. al-Wâqidî (الواقدي), II, 769-774; Ibn Hanbal (ابن حنبل), IV, 203-204.

398. al-Wâqidî (الواقدي), II, 786-787.

399. 聖クルアーン第 60 章 1 節.

400. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 363-364.

401. al-Wâqidî (الواقدي), II, 805-806.

402. Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 232.

403. 聖クルアーン第 12 章 92 節.

404. al-Wâqidî (الواقدي), I, 844-845.

405. Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 142.

406. al-Wâqidî (الواقدي), II, 864-865.

407. Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 143.

408. al-Wâqidî (الواقدي), II, 863

409. al-Wâqidî (الواقدي), III, 875-884; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 147-148; Abdülkerim Özaydın, "*Cezîme b. Amir*", **DİA,** VII, 508 .

410. al-Wâqidî (الواقدي), II, 889-890.

411. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 449; at-Tabarî (الطبري), III, 77.

412. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 458; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 151

413. al-Wâqidî (الواقدي), II, 904-905.

414. 聖クルアーン第 9 章 25-27 節.

415. al-Wâqidî (الواقدي), III, 952.

416. al-Wâqidî (الواقدي), III, 954-955; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 491.

417. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 545; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 383.

418. at-Tabarî (الطبري), III, 123.

419. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 543-546; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 168-169; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 383; Mustafa Fayda, "*Hz. Peygamber'in müşrik Araplara karşı siyasetinin son safhası*", Ebedî Risalet Sempozyumu, İzmir ts., I, 121-126.

420. 聖クルアーン第 74 章 31 節; 聖クルアーン第 29 章 46 節.

421. 聖クルアーン第 87 章 18-19 節.

422. 聖クルアーン第 26 章 192-197 節; 聖クルアーン第 46 章 10 節.

423. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 300 vd.

424. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 547.

425. 聖クルアーン第 3 章 64 節.

426. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 527; at-Tabarî (الطبري), III, 106.

427. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 555.

428. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 47.

429. 聖クルアーン第 8 章 58 節.

430. Ibn Hishâm (ابن هشام), I, 552.

431. al-Wâqidî (الواقدي), I, 178; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 48-49.

432. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 29-30; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 308-309.

433. Abû Dâwûd (ابو داود), III, 211.

434. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 51-58; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 31-34.

435. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 181.

436. al-Wâqidî (الواقدي), I, 363-383; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 57-59; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 190-203; at-Tabarî (الطبري), II, 550-555; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 178-183.

437. al-Bukhârî (البخاري), VI, 58.

438. ナディール家がマディーナから追放されたことがクルアーンでどのように取り上げられているかについては以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), I, 380-383; Emin Işık, “*Haşr Sûresi*”, **DİA,** XVI, 424-426.

439. Maxime Rodinson, s.165.

440. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 237.

441. ‘Abdu’r-Razzâq, **al-Musannaf** (عبد الرزاق ، المصنف), Lebanon 1970-1972, V, 216.

442. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 240; at-Tabarî (الطبري), II, 583.

443. al-Wâqidî (الواقدي), II, 509-510; at-Tabarî (الطبري), II, 586.

444. ムハンマド（彼の上に平安あれ）の時代、さらにイスラームののちの時代においても、女性たちが傷病者の手当の任務に当たっていたとされている。マキシム・ロディンソンはルファイダと自らの文化圏に属する女性、すなわち１９世紀に生き一時トルコでも奉仕を行った有名なイギリス人の看護婦ナイチンゲールとの間に相似点を見出し、ルファイダを次のように表現している。「この時代のフローレンス・ナイチンゲール、ルファイダ・・・」(参照： Maxime Rodinson, s. 165).

445. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 247; at-Tabarî (الطبري), II, 587, 588.

446. Hamidullah, **Hz. Peygamber'in Savaşları**, çev. Salih Tuğ, İstanbul 1981, s. 210.

447. Tesniye, 20/13-14.

448. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 233- 245; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 74-78; al-Balâdhurî (البلاذري), I, 347-348; at-Tabarî (الطبري), II, 581-593; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), 178-182; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), II,103-113.

449.　聖クルアーン第 33 章 26-27 節.

450.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 634 vd.

451.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 689.

452.　Ya’qûbî, **Târîkhu’l-Ya’qûbî** (يعقوبي ، تاريخ اليعقوبي), Beirût ts., II, 56.

453.　al-Wâqidî (الواقدي), I, 634, 637, 642.

454.　Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 329.

455.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 950-952; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 230.

456.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 676.

457.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 700

458.　Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 337.

459.　Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 347.

460.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 677-678; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 337-338.

461.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 707.

462.　ハイバルの征服とそれに関連するイスラームの発展についての詳細は以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), II, 633-721; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 106-117; at-Tabarî (الطبري), III, 9-20.

463.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 706-707; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 343.

464.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 634-635.

465.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 684.

466.　ムハンマド（彼の上に平安あれ）のユダヤ教徒に対する振舞いの説明に続き、この１４００年にわたるイスラームの歴史を通してイスラーム教徒とユダヤ教徒との間で発展してきた関係について簡単に述べてみよう。イスラームが登場した時代から２０世紀の半ばまでユダヤ教徒は、長きにわたってキリスト教世界からの弾圧や迫害にさらされてきた。それに対しイスラーム教徒は彼らに対し寛容で友好的な態度を示してきた。たとえばキリスト教徒のビザンチン帝国からの暴力や迫害にさらされていたシリアのユダヤ教徒たちは、イスラームによるシリア征服の際、イスラーム教徒の征服者たちを救援者と見なし、彼らを援助していた。またユダヤ教徒たちは安住の地を求めヨーロッパから北アフリカやオスマン朝の地に移住してきていた。そして、ムラトⅡ世の時代から本格的にトルコに定住するようになっていった。それはオスマン朝の最後の時期まで続いた。結論として、イスラーム教徒、ことにトルコ・イスラーム世界は歴史を通してユダヤ教徒たちに寛容であったこと、キリスト教世界の脅威から彼らを保護してきたことは注目に値する。

467.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 752-753.

468.　ムハンマド（彼の上に平安あれ）がイスラーム軍をムータに派遣したとき、子供たちと一般市民を保護するよう命じたことは注目すべき重要なことである。何よりもまずこの命令は、子供たちが殺されていたイスラーム以前の時代の直後に、子供の権利を最初に掲げた生命の保障を含んでいるものである。同時に、啓典の民の住む地域に軍を派遣する際にこの指令を出したことにも重要な意義がある。それは明らかにムハンマド（彼の上に平安あれ）の中に民族や宗教の区別なく子供の生命を保護しようとの考えがあったことを示している。しかし２００１年の現在、この１０年間で戦争によって世界各地で２００万人もの子供の命が失われ、６００万人の子供が傷つき、重い障害を負っている。(参照: Ramazan Özey, **Günümüz Dünya Sorunları**, İstanbul 2001, s. 123.).

469.　al-Wâqidî (الواقدي), II, 757-758.

470. al-Wâqidî (الواقدي), II, 765.

471. Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 130.

472. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 349.

473. ムータ戦争については以下を参照のこと: Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 373-389; Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 128-130; al-Bukhârî (البخاري), V, 86-88; at-Tabarî (الطبري), III, 36-42; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), 209-210; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 208-213.

474. al-Wâqidî (الواقدي), II, 766; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 381.

475. 聖クルアーン第 9 章 38-41 節.

476. 聖クルアーン第 9 章 90 節.

477. 聖クルアーン第 9 章 41-43 節.

478. al-Wâqidî (الواقدي), III, 991.

479. 聖クルアーン第 9 章 92-93 節.

480. al-Wâqidî (الواقدي), III, 993-995; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 518-519.

481. M. Muhammad Hasan Shurrâb, **al-Ma'âlimu'l-Athîrah fi's-Sunnah wa's-Sîrah** (محمد حسن شراب ، المعالم الاثيرة في السنة و السيرة), Beirût 1991, s. 69.

482. 聖クルアーン第 9 章 118 節. クルアーンの悔悟章のタブーク遠征に関する章句の訳とその意味するところを記し、その他の章句については取り上げていない。タブーク遠征がクルアーンでどのように取り上げられているかについての詳細は下記の作品を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), III, 1060-1076; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 489; İlhami Güler-Ömer Özsoy, s, 683-686. Tebük seferi hakkında geniş bilgi için verdiğimiz kaynaklar dışında ayrıca Bk.: Ibn Sa'ad (ابن سعد), II, 165-168; al-Bukhârî (البخاري), V, 128-136; at-Tabarî (الطبري), III, 100-111; Ibn 'Abdi'l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 238-246; Ibn Sayyidi'n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 292-305; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 445-488.

483. 聖クルアーン第 3 章 61 節.

484. al-Bukhârî (البخاري), V, 120; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 502; Mustafa Fayda, "*Hz. Muhammed'in Necranlı Hristiyanlarla görüşmesi ve mübâhele*", **A.Ü. İslam İlimleri Enstitüsü Dergisi**, II, s. 143-149, Ankara 1975.

485. 正統４カリフの時代以降の征服により、イスラームはキリスト教徒が支配していた地域にも広まった。この時期の征服はイラク、シリア、エジプトで見られたように、戦争よりも平和的手段によるものであった。しかしキリスト教徒の側から見れば、それは軍事的な敗北を意味した。それに対し彼らはまず言論による、次に十字軍による軍事攻撃をイスラーム世界へ加えてきた。だがキリスト教社会はこの一連の攻撃で何も成果を手にすることはなかった。逆にイスラーム教徒のトルコ人はヨーロッパの内陸にまで進出した。その後、キリスト教徒はイスラーム、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）、イスラーム教徒に対して以前より比較的穏健に対処するようになり、ことにオリエント文明の研究が行われるようになるとイスラームに対しより公正な定義づけや評価を下すようになった。一方イスラーム教徒は彼らの統治下にあったキリスト教徒たちに対し、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が行っていた普遍的原則に従って接した。彼らの生命や財産を保護すると同時に、宗教的、法的、経済的および文化的な自由を認めたのである。キリスト教徒側のイスラームやイスラーム教徒に対する否定的な見方は、お互いに過去を清算し相互理解のための誠実な努力を定めた、２０世紀の半ば過ぎの第２バチカン公会議（１９６２～１９６５）まで続くこととなる。

486. al-Wâqidî (الواقدي), III, 1092; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 173.

487. al-Wâqidî (الواقدي), III, 1089.

488. Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 360-361.

489. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 524.

490. 聖クルアーン第 5 章 3 節.

491. Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 268.

492. at-Tabarî (الطبري), III, 151.

493. 最後の巡礼と別れの説教については以下を参照のこと: al-Wâqidî (الواقدي), III, 1088-1116; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 601 vd.; Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 172-189; at-Tabarî (الطبري), III, 148 vd.; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 259-268; Ibn Sayyidi’n-Nâs (ابن سيد الناس), II, 359-368; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 510 vd.; 別れの説教については、原文に近い諸文献も参考にしつつ、ムハンマド・ハミドゥッラーの対訳文を基本に、一部を平易な表現とした。これについては以下を参照のこと: **al-Wathâiqu’s-Siyâsiyyah** (الوثائق السياسية), s. 360 vd. ; **İslam Peygamberi**, I, 298-301.

494. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 600-601; at-Tabarî (الطبري), III, 146-147.

495. ムサイラマはムハンマド（彼の上に平安あれ）の死後、アブー・バクルの時代にハーリド・ビン・ワリードを司令官とするイスラーム軍により殺害された。

496. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 189 vd.

497. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 249, 250; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 650.

498. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 227; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 649.

499. al-Maqrîzî (المقريزي), s. 542.

500. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 218, 219 vd.; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 652.

501. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 254; Ibn Hanbal (ابن حنبل), III, 117.

502. Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 271; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 457.

503. Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 653.

504. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 265-266.

505. 聖クルアーン第 3 章 144 節.

506. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 268 vd.; Ibn Hishâm (ابن هشام), II, 655-656.

507. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 290, 291.

508. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 292-293; al-Maqrîzî (المقريزي), s. 548-549.

509. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 120.

510. 聖クルアーン第 25 章 7 節.

511. 聖クルアーン第 12 章 104 節; 聖クルアーン第 68 章 146 節.

512. al-Balâdhurî (البلاذري), I, 342.

513. al-Wâqidî (الواقدي), I, 262-263; Ibn ‘Abdi’l-Barr, **Ad-Durar** (ابن عبد البر ، الدرر), s. 151.

514. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 237-239.

515. al-Bukhârî (البخاري), IV, 42. 取り上げた文献に記されたいくつかの伝承によれば、ムハンマド（彼の上に平安あれ）の遺産を求めるためファーティマがアッバースと共にアブー・バ

クルに会いに行ったこと(al-Bukhârî (البخاري), VII, 3; Muslim (مسلم), II, 1381); ムハンマド（彼の上に平安あれ）の妻たちが遺産要求のためにウスマーンを介してアブー・バクルに遺産を要求しようとしたこと、そしてアブー・バクルが彼女たちに「私たち預言者は遺産を残さない、残したものはサダカとなる」と語っていたことを思い起こさせたこと (Muslim (مسلم), II, 1379);アリーとアッバースがカリフのウマルに遺産の返還を訴えたが、カリフもまた前述のムハンマド（彼の上に平安あれ）の言葉を示し、アブー・バクルも同様のことを行ったことを思い起こさせたこと(al-Bukhârî (البخاري), VII, 3-4) など、様々な話が伝えられている。さらにアブー・フライラとアーイシャもムハンマド（彼の上に平安あれ）のこの言葉を伝えている。(al-Bukhârî (البخاري), VII, 3; Muslim (مسلم), 1383). この事柄についてはさらに多くの伝承が存在する。ただ、伝承者や遺産の要求者、要求された時期がそれぞれに異なっているとはいえ、それらの伝承はみな、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が遺産に関してその言葉を語っていたという点では一致している。

516. Ibn Sa‘ad (ابن سعد), II, 314, 315, 316.

517. ムハンマド（彼の上に平安あれ）の収入、生計、遺産に関する詳細については以下を参照のこと: Ibn Sa‘ad (ابن سعد), I, 314-317; Celal Yeniçeri, “*Asr-ı Saadette Hz. Peygamber'in ve Ailesinin Geçimi*”, **Bütün Yönleriyle Asr-ı Saadette İslam**, I, 311-364, İstanbul 1995.

518. 聖クルアーン第 61 章 2 節.

519. 聖クルアーン第 49 章 10 節.

520. 聖クルアーン第 49 章 13 節.

521. Muslim (مسلم), II, 513.

聖ムハンマド　その普遍的教え　Vol.1

二〇一一年六月三〇日　初版発行

著　者　イブラーヒム・サルチャム

発行者　宗教法人
東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ　©2011
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfi

〒一五一―〇〇六五
東京都渋谷区大山町一―十九
電話（〇三）五七九〇―〇七六〇
FAX（〇三）五七九〇―七八二二
http://tokyocamii.org
info@tokyocamii.org

東京ジャーミイの出版物

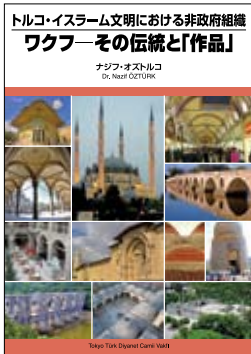
イスラーム
正しい理解のために

世界三大宗教、16億の信者を持つ宗教でありながらイスラームほど誤解されている宗教はないであろう。この本では、信仰、崇拝行為、イスラームの社会生活の3部構成でイスラームの教えがわかりやすく説明され、日本の方々にお勧めのイスラームの入門書となっている。また本文中には、クルアーンの章句の中の天地創造の話が美しい風景写真とともに紹介されている。

無料

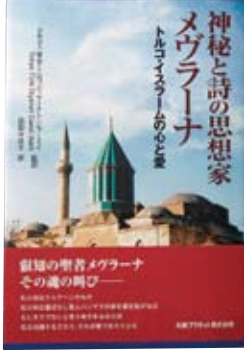
トルコ・イスラーム文明における非政府組織
ワクフ―その伝統と作品

イスラームは分かち合うことを強く勧めている。善行と助け合いの精神を体現する民主的非政府組織ワクフは、それを代表する組織である。この本では、オスマン帝国の皇帝から官僚、そして一般の人々に至るまで、競い合うようにしながらお金を拠出し、ワクフという形で、礼拝堂、学校、病院、公衆浴場、隊商宿、図書館、橋、道路、上水道などをつくってきた話が紹介されている。現代の非政府組織NGOやNPOなどと比較して読んでみると大変おもしろい。

トルコ・イスラーム文明における非政府組織
ワクフ―その伝統と「作品」
ナジフ・オズトルコ
Dr. Nazif ÖZTÜRK
Tokyo Türk Diyanet Camii Vakfı

無料

神秘と詩の思想家メヴラーナ

トルコ・イスラームの心と愛

13世紀のアナトリアを生きたメヴラーナは、マドラサ（学舎）の学者、モスクの伝導者であり、家庭においては良き夫、模範的な父であり、6万以上の詩句を残した詩人、神秘主義者、その他ありとあらゆる形容によって思い起こされる人物である。この本では、何世紀にもわたって世界中の人々に愛と真理の水を分け与えつづけているメヴラーナの生涯とその作品（詩）を紹介している。トルコ・イスラームの心にふれることができる一冊である。

定価 2,000円

ハーイ

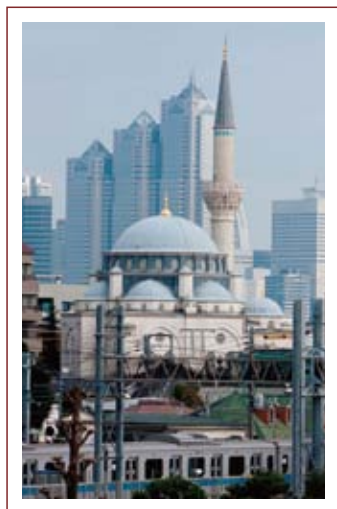
（アニメーション、DVD）

このアニメーションは、無人島でガゼルによって育てられ、一度も人を見たことのない少年ハーイの物語。ハーイは大きくなるに従って、自分が周囲の生き物たちとずいぶん違っていることに気がつく。そのひとつが、彼は考えることができるということであった。脚本は、アンダルスの思想家イブニ・ツファイルのハーイ・ビン・ヤクザンという小説をもとにしている。

定価 1,000円

ISBN978-4-9905876-0-4

C0014 ¥800E

定価（本体800円＋税）

**時代を超えすべての人々に語りかける
預言者の教え**

ムハンマド（彼の上に平安あれ）の教えが含んでいる価値観は、普遍的であるという特性を持っている。言い換えるなら、その教えは普遍的な価値を持っているということである。啓示を通し個人や集団のレベルで実現された公正さや寛容さといった概念は、全人類を包括し、時代や国により変化することなく、あらゆる場所・集団においていつでも通用し、どのような環境にあっても行動に反映することができる特性を持っている。